

みんなくりポジトリ

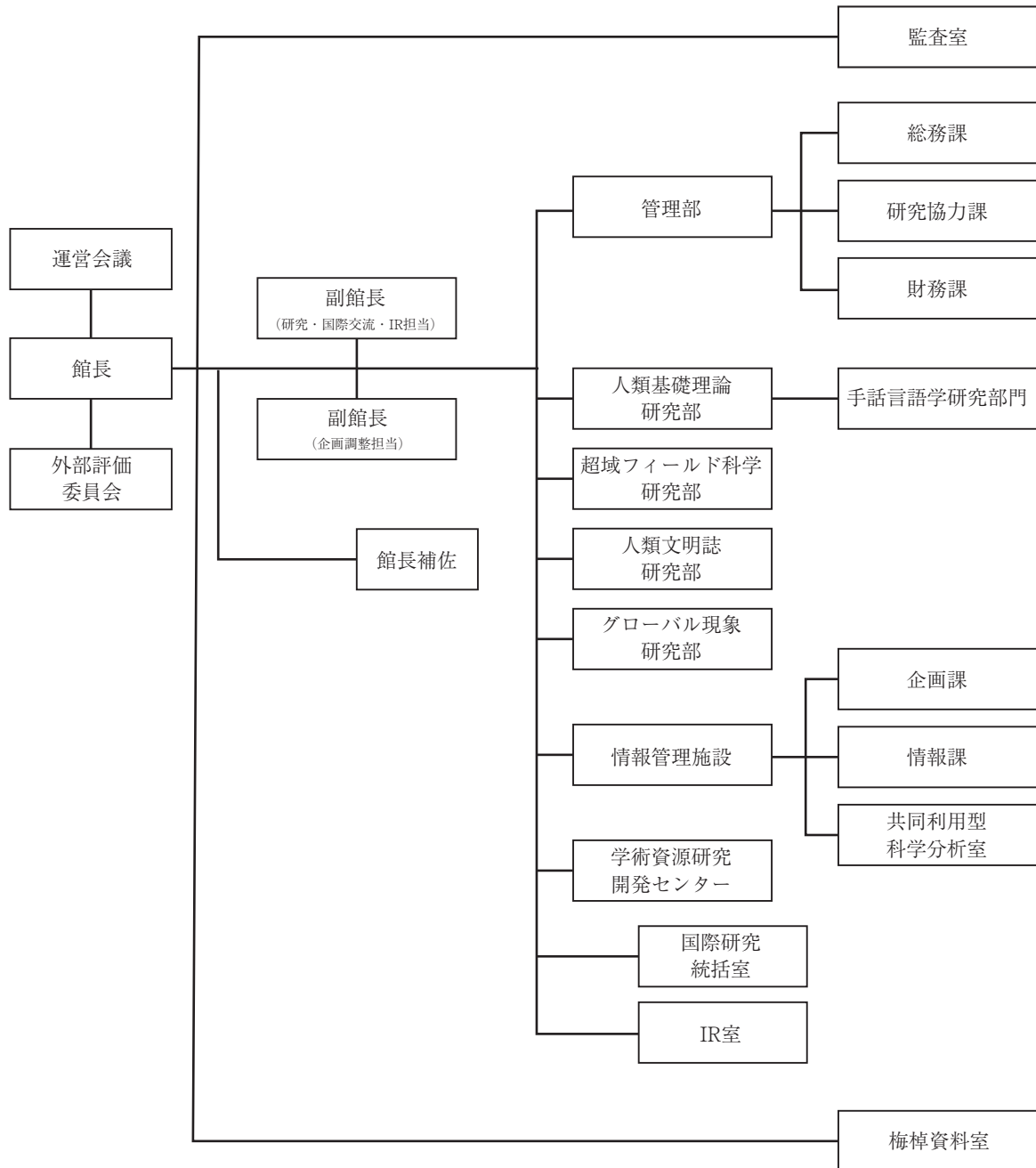
国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

1. 組織

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2021-09-10 キーワード: 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009835

1 組織

組織構成図 (2021年3月31日現在)



運営組織 (2021年3月31日現在)

●運営会議

窪田幸子	神戸大学大学院国際文化学研究科教授 *2
栗本英世	大阪大学副学長*1
後藤 明	南山大学人文学部教授*2*3
佐野千絵	東京文化財研究所名誉研究員*3
出口 顕	島根大学副学長*2
富沢壽勇	静岡県立大学国際関係学部特任教授*1
豊田由貴夫	立教大学名誉教授*1
松田素二	京都大学大学院文学研究科教授*2
山梨俊夫	国立国際美術館長
飯田 卓	人類文明誌研究部長*1*2*3
樫永真佐夫	総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長／超域フィールド科学研究部教授*1
關 雄二	副館長（企画調整担当）*1
園田直子	人類基礎理論研究部長*1*3
野林厚志	学術資源研究開発センター長*1*2*3
林 勲男	超域フィールド科学研究部長*1*3
平井京之介	副館長（研究・国際交流・IR 担当）*1*2
三尾 稔	グローバル現象研究部長*1*2*3

注) *1 人事委員会委員
*2 共同利用委員会委員
*3 研究倫理委員会委員

●外部評価委員会

安達 淳	国立情報学研究所副所長
池田博之	東洋テック株式会社代表取締役社長
田中雅一	国際ファッション専門職大学副学長
堀井良殷	公益財団法人関西・大阪21世紀協会顧問
水沢 勉	神奈川県立近代美術館長
武藤めぐみ	独立行政法人国際協力機構 JICA 緒方研究所前副所長
山極壽一	京都大学前総長
山本真鳥	法政大学経済学部教授

館内運営組織 (2021年3月31日現在)

●部長会議

●館内各種委員会

自己点検・評価委員会	大学院委員会
創設五十周年記念事業推進委員会	情報運営会議
福利厚生委員会	文化資源運営会議
安全衛生委員会	国際研修博物館学コース運営委員会
ハラスメント防止委員会	施設マネジメント委員会
広報企画会議	危機管理委員会
特別研究運営会議	大規模災害復興支援委員会
刊行物審査委員会	国際研究統括室会議
研究出版委員会	フォーラム型情報ミュージアム委員会
知的財産委員会	研究資料共同利用委員会
地域研究拠点運営委員会	

現員 (2021年3月31日現在)

区 分	館長	教授	准教授	助教	事務職員・技術職員	計
館長	1					1
管理部					30	30
情報管理施設					19	19
監査室					1	1
研究部		20(1)	21	1(1)		42(2)
学術資源研究開発センター		3	4	2		9
客員 (国内)		12	7			19
客員 (国外)*		2	1			3
計	1	37(1)	33	3(1)	50	124(2)

注) () は特任研究員の人数を外数で示す
注) 客員 (国外)* は、のべ人数

歴代館長・名誉教授 (2021年3月31日現在)

●歴代館長

初 代／梅棹忠夫 (故人)	1974年 6 月～1993年 3 月
第 2 代／佐々木高明 (故人)	1993年 4 月～1997年 3 月
第 3 代／石毛直道	1997年 4 月～2003年 3 月
第 4 代／松園萬亀雄	2003年 4 月～2009年 3 月
第 5 代／須藤健一	2009年 4 月～2017年 3 月
第 6 代／吉田憲司	2017年 4 月～

●名誉教授

祖父江孝男(故人)	1984年 4 月 1 日	森田恒之	2002年 4 月 1 日	八杉佳穂	2015年 4 月 1 日
岩田慶治(故人)	1985年 4 月 1 日	石毛直道	2003年 4 月 1 日	朝倉敏夫	2016年 4 月 1 日
加藤九祚(故人)	1986年 4 月 1 日	栗田靖之	2003年 4 月 1 日	佐々木史郎	2016年 4 月 1 日
伊藤幹治(故人)	1988年 4 月 1 日	杉田繁治	2003年 4 月 1 日	杉本良男	2016年 4 月 1 日
中村俊亀智(故人)	1988年 4 月 1 日	熊倉功夫	2004年 4 月 1 日	須藤健一	2017年 4 月 1 日
君島久子	1989年 4 月 1 日	立川武藏	2004年 4 月 1 日	竹沢尚一郎	2017年 4 月 1 日
和田祐一(故人)	1990年 4 月 1 日	田邊繁治	2004年 4 月 1 日	塚田誠之	2017年 4 月 1 日
垂水 稔(故人)	1991年 4 月 1 日	藤井龍彦	2004年 4 月 1 日	印東道子	2018年 4 月 1 日
杉本尚次	1992年 4 月 1 日	山田睦男(故人)	2004年 4 月 1 日	横山廣子	2018年 4 月 1 日
梅棹忠夫(故人)	1993年 4 月 1 日	江口一久(故人)	2005年 4 月 1 日	寺田吉孝	2020年 4 月 1 日
大給近達(故人)	1993年 4 月 1 日	大塚和義	2005年 4 月 1 日		
片倉素子(故人)	1993年 4 月 1 日	松原正毅	2005年 4 月 1 日		
竹村卓二(故人)	1994年 4 月 1 日	石森秀三	2006年 4 月 1 日		
周 達生(故人)	1995年 4 月 1 日	野村雅一(故人)	2006年 4 月 1 日		
松澤員子	1995年 4 月 1 日	大森康宏	2007年 4 月 1 日		
大丸 弘(故人)	1996年 4 月 1 日	山本紀夫	2007年 4 月 1 日		
友枝啓泰(故人)	1996年 4 月 1 日	松園萬亀雄	2009年 4 月 1 日		
藤井知昭	1996年 4 月 1 日	松山利夫	2010年 4 月 1 日		
佐々木高明(故人)	1997年 4 月 1 日	長野泰彦	2011年 4 月 1 日		
杉村 棟	1997年 4 月 1 日	秋道智彌	2012年 4 月 1 日		
和田正平	1998年 4 月 1 日	中牧弘允	2012年 4 月 1 日		
清水昭俊	2000年 4 月 1 日	小林繁樹	2014年 4 月 1 日		
黒田悦子	2001年 4 月 1 日	田村克己	2014年 4 月 1 日		
崎山 理	2001年 4 月 1 日	吉本 忍	2014年 4 月 1 日		
端 信行	2001年 4 月 1 日	久保正敏	2015年 4 月 1 日		
小山修三	2002年 4 月 1 日	庄司博史	2015年 4 月 1 日		

研究部教員の紹介 (2021年3月31日現在)

組織図に基づく現員一覧

館長		吉田憲司		
副館長(企画調整担当)		關 雄二		
副館長(研究・国際交流・IR担当)		平井京之介		
研究部	職名・研究部門	教授	准教授	助教
人類基礎理論研究部	研究部長	園田直子		
	第一超域	日高真吾 福岡正太	末森 薫	
	第二超域		岡田恵美 川瀬 慈 吉岡 乾	
	第三超域	出口正之	菊澤律子 丸川雄三	
附置	日本財団助成 手話言語学	※飯泉菜穂子	菊澤律子(併)	※相良啓子
超域フィールド科学研究部	研究部長	林 勲男		
	第一超域	櫻永真佐夫 韓 敏	太田心平 島村一平 奈良雅史	
	第二超域		菅瀬晶子 松尾瑞穂	
	第三超域	宇田川妙子 ピーター・J・マシウス	新免光比呂	
人類文明誌研究部	研究部長	飯田 卓		
	第一超域		卯田宗平 小野林太郎 寺村裕史 藤本透子	
	第二超域	池谷和信	上羽陽子	
	第三超域	齋藤 晃 鈴木 紀 關 雄二(副館長)		
グローバル現象研究部	研究部長	三尾 稔		
	第一超域	信田敏宏 平井京之介(副館長)	河合洋尚 廣瀬浩二郎	
	第二超域	西尾哲夫	相島葉月 鈴木英明 三島禎子	
	第三超域	鈴木七美 森 明子		
学術資源研究開発センター	センター長	野林厚志		
	第一超域	笹原亮二	齋藤玲子	諸 昭喜
	第二超域	山中由里子	南 真木人	
	第三超域	岸上伸啓(併)	伊藤敦規 丹羽典生	八木百合子
	人文知コミュニケーター			※神野知恵(併)
国際研究統括室		平井京之介(室長)(併) 齋藤 晃(兼務) 韓 敏(兼務) 福岡正太(兼務)	卯田宗平(兼務) 鈴木英明(兼務) 丹羽典生(兼務)	

※は特任研究員を示す。

吉田憲司 [よしだ けんじ] ————— 館長

1955年生。【学歴】京都大学文学部哲学科美学美術史学専攻卒（1980）、大阪大学大学院文学研究科芸術学専攻博士前期課程修了（1983）、大阪大学大学院文学研究科芸術学専攻博士後期課程単位取得退学（1987）【職歴】大阪大学文学部美学科研究生（1980）、ザンビア大学アフリカ研究所共同研究員（1984）、大阪大学文学部助手（1987）、国立民族学博物館助手（1988）、国立民族学博物館助教授（1992）、総合研究大学院大学文化科学研究科助教授併任（1993）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科教授（2000）、国立民族学博物館博物館民族学研究部教授（2000）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2004）、国立民族学博物館文化資源研究センターセンター長（2006）、放送大学客員教授（2010）、国立民族学博物館副館長（2015）、国立民族学博物館館長（2017）【学位】学術博士（大阪大学大学院文学研究科 1989）、文学修士（大阪大学大学院文学研究科 1983）【専攻・専門】博物館人類学、文化人類学【所属学会】日本文化人類学会、日本アフリカ学会、民族芸術学会、王立人類学協会（Royal Anthropological Institute イギリス）、アフリカ学会美術協議会（The Arts Council of the African Studies Association アメリカ）

【主要業績】

[単著]

吉田憲司

2014 『宗教の始原を求めて——南部アフリカ聖霊教会の人びと』東京：岩波書店。

1999 『文化の「発見」——驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』東京：岩波書店。

1992 『仮面の森——アフリカ・チェワ社会における仮面結社、憑霊、邪術』東京：講談社。

【受賞歴】

2004 第1回木村重信民族芸術学会賞

2000 第22回サントリー学芸賞（芸術・文学部門）

1993 日本アフリカ学会研究奨励賞

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

文化の創造・継承と表象に関する博物館人類学的研究

・研究の目的、内容

文化の創造と継承、そしてその表象における博物館・美術館の役割に改めて注目が集まっている。文化の創造と継承の過程をいかに追跡し、いかなる形で自文化と異文化を含む文化の表象に結び付けていくのか。その作業に、博物館・美術館はいかなる形で関与するのか。本研究は、文化の研究と表象の課題を改めて検証し、問題点を洗い出すとともに、その将来に向けての新たな可能性を実践的に考究することを目的としている。

さらに、本格実施の2年目に当たる、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型）『学術研究支援基盤形成』研究基盤リソース支援プログラム「地域研究画像デジタルライブラリ」の構築を通じて、国内に所蔵される世界各地の自然と文化の記録画像の集積と共有化の作業を積極的に支援する。

・成果

本年度は新型コロナウイルス感染症の拡大のため、海外での現地調査はまったく実施できず、これまでに蓄積した南部アフリカ、ザンビアのチェワ社会およびンゴニ社会における文化の伝統とその創造的継承の実態についての現地調査の成果の取りまとめに注力し、とくに博物館建設を介した伝統的首長制度の再構築のプロセスを検証した。

2000年以降の世界の博物館の動向に関する研究成果を踏まえて、広範囲な読者を対象とした博物館学の啓発書の刊行の準備をする一方、民博の所蔵する世界の仮面をもとに、世界の無形文化遺産の創造的継承のありかたを総覧する刊行物の編集を進めた。

「地域研究画像デジタルライブラリ」については、年度内に2次にわたる募集を実施し、応募30件中、計19件のプロジェクトを対象にデータの集積・共有化・公開の支援をおこなった。

◎出版物による業績

〔論文〕

吉田憲司

- 2020 「ICOM 京都大会を振り返る——成果と課題」『別冊博物館研究「ICOM 京都大会2019特集」』55：46-50。
- 2020 「チュワ マラヴィと呼ばれた王国の末裔たち」島田周平・大山修一編『ザンビアを知るための55章』pp.112-116, 東京：明石書店。
- 2020 「コラム 9 チュワ社会の仮面結社ニヤウ」島田周平・大山修一編『ザンビアを知るための55章』pp.117-119, 東京：明石書店。

〔分担執筆〕

吉田憲司

- 2021 「世界の仮面と出会う」酒井忠康・他31名編『美術1』pp.56-57, 東京：光村図書出版株式会社。
- 2021 「世界の仮面と出会う」酒井忠康・他31名編『美術1 中学校美術学習指導書1 朱書編』pp.60-63, 東京：光村図書出版株式会社。

〔その他〕

吉田憲司

- 2020 「新しいトーテムポールの制作」『美術の窓』39(459)：118。
- 2020 「生誕100年 没後10年 現代を射る 梅棹忠夫の目」『産経新聞』5月15日。
- 2020 「とらのもん往来」『文部科学情報 週刊文教ニュース』6月15日。
- 2020 「人類学と博物館 これまでとこれから」『じんるいけん Booklet 南山大学人類学研究所設立70周年記念シンポジウム講演録 人類学と博物館 民族誌資料をどう研究するのか?』6：11-26。
- 2020 「関西のミカタ 大阪は歴史ある文化都市」『日本経済新聞』9月30日夕刊。
- 2020 「交遊抄 アフリカの学友」『日本経済新聞』10月7日。
- 2020 「生きる力を育む造形・美術教育」『教育美術』81(11)：23。
- 2021 「なぜ日本人は『仮面のヒーロー』が好き?」『朝日新聞 GLOBE+』2月7日。

Clifford, J., A. Ito, R. Saito, K. Yoshida, I. Hayashi, and T. Iida

- 2020 International Symposium "Future of the Museum: An Anthropological Perspective". *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 45(1): 115-176.

Yoshida, K.

- 2020 Globalization and Migration-Introduction-. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 50: 1-2.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2020年9月13日 「'70大阪万博から'25大阪・関西万博へ」2020年度北大阪ミュージアム・ネットワークシンポジウム 北大阪のミュージアムで万博を考える『大阪でEXPOを考えるⅢ——大阪万博50年』国立民族学博物館
- 2021年1月27日 「まなごしの交錯——『Self and Other アジアとヨーロッパの肖像』展・再訪」東アジア「間文化」第5回研究会、オンライン開催

・広報・社会連携活動

- 2020年9月5日 「対談 知的生産のフロンティアの原点——探検家 梅棹忠夫を語る」第500回記念国立民族学博物館友の会講演会・梅棹忠夫生誕100年記念対談、国立民族学博物館
- 2020年12月14日 「ポストコロナの社会——文明の転換点における未来への視座」『第16回選択する未来2.0』内閣府、オンライン開催
- 2021年1月1日 「感染症と文明——現下のコロナ禍に思う」オンラインレクチャー、国立民族学博物館友の会
- 2021年1月23日 「文明の転換点とポストコロナの社会」梅棹忠夫生誕100年記念連続講座『梅棹忠夫の「人類の未来」からの対話——ニューノーマル時代の羅針盤』梅棹忠夫生誕100年記念連続講座実行委員会主催、京都人類学研究会（近衛ロンド）・ロンドクレアント共催、オンライン開催
- 2021年1月31日 「ちょっといい話」ABCラジオ
- 2021年2月28日 スピーカー、小原真史トークプログラムシリーズ③ トークイベント『博覧会・博物館と人間の展示』(KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭 2021 SPRING)、京都国際舞台芸術祭実行委員会、オンライン開催

2021年3月7日 「ちょっといい話」ABC ラジオ

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B）））「人類学における芸術研究の刷新——イメージ人類学の創成に向けた国際共同研究基盤の強化」研究代表者

◎社会活動・館外活動

- ・他の機関から委嘱された委員など

独立行政法人 国立文化財機構施設長選考委員会委員、公益財団法人2025年日本国際博覧会協会シニアアドバイザー、ICOM日本委員会副委員長、独立行政法人日本学術振興会大学の世界展開力強化事業プログラム委員会専門委員、独立行政法人国立文化財機構アジア太平洋無形文化遺産研究センター理事、公益財団法人教育美術振興会第55回教育美術・佐武賞 ゲスト選考委員、公益財団法人京都服飾文化研究財団評議員、日本民族藝術学会会長、公益財団法人大阪府文化財センター評議員、African Arts (UCLA) Consulting Editor、Museum International (ICOM) Editorial Board Member、公益財団法人大阪ユニセフ協会理事、公益財団法人日本博物館協会参与、彩都（国際文化公園都市）建設推進協議会特別委員、日本展示学会評議員、関西サイエンス・フォーラム理事

- ・他大学の客員、非常勤講師

浙江大学客員教授、放送大学客員教授

關 雄二 [せき ゆうじ] ————— 副館長（企画調整担当）、人類文明誌研究部教授

1956年生。【学歴】東京大学教養学部教養学科文化人類学分科卒（1979）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1982）、東京大学大学院社会学研究科博士課程退学（1983）【職歴】東京大学教養学部助手（1983）、東京大学総合研究資料館助手（1986）、天理大学国際文化学部助教授（1995）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1999）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2004）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2005）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授部長（2007）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2009）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2016）、国立民族学博物館民族文化研究部研究部長（2016）、国立民族学博物館人類文明誌研究部教授（2017）、国立民族学博物館副館長（2017）【学位】社会学修士（東京大学大学院 1982）【専攻・専門】アンデス考古学、文化人類学 古代アンデス文明の形成過程、現代ペルーの文化行政、考古学と国民国家形成、世界遺産と国別の文化遺産との相互関係【所属学会】日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会、古代アメリカ学会、Society for American Archaeology、Institute of Andean Studies

【主要業績】

[単著]

関 雄二

2010 『アンデスの考古学 改訂版』東京：同成社。

2006 『古代アンデス——権力の考古学』京都：京都大学学術出版会。

[編著]

関 雄二編

2017 『アンデス文明 神殿から読み取る権力の世界』京都：臨川書店。

【受賞歴】

2020 文化庁長官表彰（文化庁）

2019 カハマルカ州名誉勲章（ペルー・カハマルカ州）

2019 アントニオ・ギジェルモ・ウレロ大学名誉博士号（アントニオ・ギジェルモ・ウレロ大学）

2016 外務大臣表彰

2015 ペルー文化功労者表彰

2008 濱田青陵賞

2008 科学分野の功績に対する表彰（ペルー国立サン・マルコス大学）

2008 クントゥル・ワシ賞（ペルー文化庁カハマルカ支局）

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

古代アンデスにおける権力生成過程の研究

・研究の目的、内容

南米の太平洋沿岸部、とくに今日のペルー共和国を中心に成立した古代アンデス文明に焦点をあて、権力の形成について理論的な解釈を行う。具体的には、ペルー北部山中パコパンパ遺跡を調査し、文明の基礎が築かれた形成期（B.C.2500～紀元前後）における経済やイデオロギーの様相を検出する。

なお上記の調査部分は、科学研究費（基盤研究（A））および平和中島財団国際学術研究助成をあてる予定である。

・成果

予定していたペルーにおける発掘調査は新型コロナウイルス感染症の拡大により、中止を余儀なくされたが、これまでの研究のまとめを行い、それらの成果を以下に示すような形で公開した。

『ラテンアメリカ文化事典』に加えて論文3本を出版。

研究発表としては、10月に CONADEA (Coordinadora Nacional de Estudiantes de Arqueología) 主催のシンポジウム Ciclo de conferencias magistrales (Tema: Arquitectura Monumental Prehispánica) で 'Pacopampa: 14 años de investigación y conservación del centro ceremonial formativo' (オンライン開催)、およびシンポジウム「社会進化の比較考古学」実行委員会主催のシンポジウムで「権力分析の異なる位相——アンデス文明初期における威信財と社会的記憶」(オンライン開催)を、12月にシンポジウム Arqueología del valle de Lambayeque で 'Repensando el impacto cultural de la sierra norte en la costa norte peruana durante la época prehispánica' (オンライン開催)を、2月に金沢大学超然プロジェクト「古代文明の学際研究の世界的拠点形成」主催のオンライン・シンポジウム「世界の古代文明をめぐる最新調査研究」で「科学分析から見たアンデス文明初期の神殿の変貌」(オンライン開催)を発表した。

また、11月には文化庁主催の2020年度文化財行政講座で「社会的記憶と無形遺産の導入——南米ペルー高地での有形遺産保護の試み」の講演を行ったほか、3月には民博の連続ウェブ研究会「文化遺産実践における身体とモノ——集合的健忘に抗するための文化伝達 第4回 学術活動をとおした継承」で Daniel D. Saucedo Segami と共同で 'A Bridge between the Past and the Present: Cultural Heritage as a Mean to Build Social Memory in Peru (過去と現在の架け橋——ペルーにおける社会的記憶構築の手段としての文化遺産)' (オンライン)を、3月には徳島県・一般財団法人自治総合センター主催の鳥居龍蔵生誕150周年記念 国際シンポジウム「鳥居龍蔵と現代社会——その学問と資料の意義を問う」で「アンデス考古学の視点から」を発表した。

◎出版物による業績

[共編]

ラテンアメリカ文化事典編集委員会編 ([編集委員長] 関 雄二 [編集幹事] 齋藤 晃、鈴木 紀、村上勇介、八木百合子 [編集委員] 井口欣也、岡田裕成、窪田 暁、佐々木直美、渋下 賢、清水達也、杓谷茂樹、田島久歳、ダニエル・ダンテ・サウセド・セガミ、鼓 宗、細谷広美、山脇千賀子、若林大我)

2021 『ラテンアメリカ文化事典』東京：丸善出版。

[分担執筆]

関 雄二

2020 「鳥居龍蔵とアンデス文明との出会い」徳島県立鳥居龍蔵記念館・鳥居龍蔵を語る会編『鳥居龍蔵の学問と世界』pp.203-226, 京都：思文閣出版。

[論文]

関 雄二

2021 「南米ペルー考古学との出会い——ナショナリズムを超えた文明史観」徳島県立鳥居龍蔵記念博物館編『鳥居龍蔵生誕150周年記念国際シンポジウム「鳥居龍蔵と現代社会」講演要旨集』pp.42-47, 徳島：徳島県立鳥居龍蔵記念博物館。

Seki, Y. and D. S. Segami

2020 Relacionando el patrimonio cultural material e inmaterial para su uso y protección en la sierra norte del Perú. *Acta Hispanica* 2020 (Supplementum II): 737-746. [査読有]

Nagaoka, T., Y. Seki, M. O. Livia, and D. M. Chocano

2020 Depressed Skull Fracture at Pacopampa in the Peru's Northern Highlands in the Late Caji-

marca Period. *Anthropological Science* 128(2): 83-87. [査読有]

[その他]

関 雄二

- 2021 「古代文明研究と現代社会——人間とモノの関係を巡る思索」『ラテンアメリカ時報』1433：65-67。
- 2021 「ラテンアメリカの文化領域と古代文化」ラテンアメリカ文化事典編集委員会編『ラテンアメリカ文化事典』pp.6-7, 東京：丸善出版。
- 2021 「文化遺産への国際協力」ラテンアメリカ文化事典編集委員会編『ラテンアメリカ文化事典』pp.626-627, 東京：丸善出版。
- 2021 「コロナ禍にある村からの便り」『チャスキ（アンデス文明研究会会報）』61-62：3。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2021年3月7日 'A Bridge between the Past and the Present: Cultural Heritage as a Mean to Build Social Memory in Peru(過去と現在の架け橋——ペルーにおける社会的記憶構築の手段としての文化遺産): 連続ウェブ研究会『文化遺産実践における身体とモノ——集合的健忘に抗するための文化伝達 第4回 学術活動をととした継承』オンライン開催

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2020年10月10日 'Pacopampa: 14años de investigación y conservación del centro ceremonial formativo.' Ciclo de conferencias magistrales (Tema: Arquitectura Monumental Prehispánica), オンライン開催
- 2020年10月11日 「権力分析の異なる位相——アンデス文明初期における威信財と社会的記憶」シンポジウム『社会進化の比較考古学』オンライン開催
- 2020年11月20日 「社会的記憶と無形遺産の導入——南米ペルー高地での有形遺産保護の試み」2020年度文化財行政講座、文化庁
- 2020年12月2日 'Repensando el impacto cultural de la sierra norte en la costa norte peruana durante la época prehispánica, Arqueología del valle de Lambayeque.' オンライン開催
- 2021年2月28日 「科学分析から見たアンデス文明初期の神殿の変貌」金沢大学超然プロジェクト「古代文明の学際研究の世界的拠点形成」オンライン・シンポジウム『世界の古代文明をめぐる最新調査研究』オンライン開催
- 2021年3月21日 「アンデス考古学の視点から」鳥居龍蔵生誕150周年記念 国際シンポジウム『鳥居龍蔵と現代社会——その学問と資料の意義を問う』徳島県立21世紀館イベントホール

・広報・社会連携活動

- 2020年8月28日 「アンデス文明におけるミイラ——古代での意味、現代社会での意味」池田市教育委員会、池田市中央公民館
- 2020年9月29日 「アンデスの文化遺産をめぐる問題——盗掘の実態」阪神シニアカレッジ
- 2020年9月29日 「マチュ・ピチュの発見と出土品の行方」阪神シニアカレッジ
- 2020年10月16日 「アンデス先住民と文化遺産——インカをめぐる葛藤」阪神シニアカレッジ
- 2020年10月16日 「アンデス文明の神殿を掘る」阪神シニアカレッジ
- 2020年12月19日 「ペルー北部地域の形成期の全体像」アンデス文明研究会、オンライン開催
- 2021年1月23日 「アンデスの世界・神殿のひみつオンライン（南米のペルー）」ワークショップ『2020世界旅オンライン たんけんたい⑨』マナラボ環境と平和の学びデザイン（京都府受託事業）、オンライン開催

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（2人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「先住民の視点からグローバル・スタディーズを再構築する領域横断研究」（研究代表者：池田光穂（大阪大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「総合資料学にもとづく古代アンデス文明の社会統合の解明」（研究代表者：鶴澤和宏）研究分担者、科学研究費（基盤研究（A））「社会的記憶の

観点からみたアンデス文明史の再構築」研究代表者、金沢大学戦略的研究推進プログラム超然プロジェクト「古代文明の学際的研究の世界的拠点形成」（研究代表者：河合 望）プロジェクト担当者

・民間の奨学金及び助成金からのプロジェクト

公益財団法人平和中島財団 2020（令和2）年度国際学術研究助成「アンデス文明における饗宴と複合社会の成立に関する基礎研究」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

日本学術会議連携会員、日本ユネスコ国内委員会文化・コミュニケーション小委員会調査委員、ペルーカトリカ大学 PUCP 編集委員、公益財団法人高梨学術奨励基金選考委員、金沢大学国際文化資源学研究所センターアドバイザー、文化遺産国際協力コンソーシアム副会長、文化遺産国際協力コンソーシアム運営委員会委員、文化遺産国際協力コンソーシアム企画分科会委員、文化遺産国際協力コンソーシアム中南米分科会長、アンデス文明研究会顧問

平井京之介 [ひらい きょうのすけ]——副館長（研究・国際交流・IR 担当）、グローバル現象研究部教授

【学歴】東北大学文学部社会学科社会学専攻卒（1988）、ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ人類学部社会人類学修士課程修了（1992）、ロンドン大学ロンドン経済政治学院人類学部博士課程修了（1998）【職歴】国立民族学博物館第一研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（2001）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2013）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部教授（2017）、国立民族学博物館人類文明誌研究部部長（2018）、国立民族学博物館グローバル現象研究部教授（2019）、国立民族学博物館副館長（2019）【学位】Ph.D.（ロンドン大学ロンドン経済政治学院人類学部 1998）、M.Sc.（ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ人類学部 1992）【専攻・専門】社会人類学 水俣病被害者支援運動の人類学的研究、タイのコミュニティ博物館についての人類学的研究【所属学会】日本文化人類学会、The Royal Anthropological Institute

【主要業績】

[単著]

平井京之介

2011 『村から工場へ——東南アジア女性の近代化経験』東京：NTT 出版。

[編著]

平井京之介編

2012 『実践としてのコミュニティ——移動・国家・運動』京都：京都大学学術出版会。

Hirai, K. (ed.)

2015 *Social Movements and the Production of Knowledge: Body, Practice and Society in East Asia* (Senri Ethnological Studies 91). Osaka: National Museum of Ethnology.

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

ポスト紛争期の水俣における「負の遺産」の生成過程に関する博物館人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、熊本県水俣市において、水俣病という悲惨な出来事を伝える場所やモノがいかにして「負の遺産」として保存されるようになったか、水俣病紛争が沈静化した現在の水俣社会においてそれらはどのような役割を果たしているかを明らかにすることである。本研究では、①水俣病被害者が運動のなかで収集してきたモノや記録が1990年代以降になって、いかにして「遺産」と認識されるようになったか、②行政がどのような経緯でそれらを「負の遺産」として保存・活用するようになったか、③「負の遺産」は社会においてどのような役割をもつか、を解明することを具体的な研究目的とする。なお、当研究に関わる現地調査においては、自身が代表を務める科学研究費（基盤研究（C））を利用する。

・成果

本年度は、新型コロナウイルス感染拡大により、予定していた、水俣病に関わる「負の遺産」の保存・活用の

実態とその歴史的経緯を把握する現地調査を実施することができなかった。そのため、執行予定だった科学研究費（基盤研究（C））を来年度に繰り越すとともに、これまでに収集した水俣病センター相思社についての聞き取りデータおよび文献資料を分析し、水俣病センター相思社が1980年代後半にいかにして水俣病歴史考証館という展示施設を設立することになったのかについての経緯をまとめ、「考証館運動の生成——水俣病運動界の変容と相思社」として『国立民族学博物館研究報告』45巻4号に発表した。また、国立民族学博物館共同研究会「博物館における持続可能な資料管理および環境整備——保存科学の視点から」において、「手作り資料館の持続不可能な資料管理——水俣病歴史考証館の事例から」というタイトルで、水俣病歴史考証館の資料管理の現状について報告した（3月12日）。

◎出版物による業績

[論文]

平井京之介

2021 「考証館運動の生成——水俣病運動界の変容と相思社」『国立民族学博物館研究報告』45(4)：575-654。

[査読有]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2021年3月12日 「手作り資料館の持続不可能な資料管理——水俣病歴史考証館の事例から」『博物館における持続可能な資料管理および環境整備——保存科学の視点から』国立民族学博物館

・みんぱくゼミナール

2020年11月21日 「ミュージアムが社会を変える——水俣の遺産」第504回みんぱくゼミナール

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（4人）、副指導教員（1人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「ポスト紛争期の水俣における『負の遺産』の生成過程に関する博物館人類学的研究」研究代表者

人類基礎理論研究部

園田直子 [そのだ なおこ]——部長（併）教授

【学歴】 Université de Paris I (Panthéon-Sorbonne) パリ第1大学文学部美術史と考古学・美術史卒（1980）、Université de Paris I (Panthéon-Sorbonne) パリ第1大学/U. E. R Art et Archéologie/ Maîtrise des Sciences et Techniques: Conservation et restauration des oeuvres d'art, des sites et objets archéologiques et ethnologiques 修士課程修了（1982）、Ecole du Louvre エコール・ド・ルーブル卒（1983）、Université de Paris I (Panthéon-Sorbonne) パリ第1大学/Histoire de l'art 美術史博士課程修了（1987）【職歴】 Direction des Musées de France/Laboratoire de recherche des musées de France/アメリカ・ゲッティ財団との共同プロジェクト研究員（1987）、Direction des Musées de France/Service de restauration des peintures des musées nationaux/assistante scientifique（1989）、国立歴史民俗博物館助手（1991）、国立民族学博物館第5研究部助手（1993）、国立民族学博物館第5研究部助教授（1997）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1999）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授（2004）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2007）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2016）、国立民族学博物館民族社会研究部研究部長（2016）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部教授（2017）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部研究部長（2017）【学位】 博士（美術史） Doctorat de 3ème cycle en Histoire de l'art (Université de Paris I (Panthéon-Sorbonne) パリ第1大学 1987)、科学技術修士 Maîtrise des Sciences et Techniques - Spécialité: Conservation et restauration des oeuvres d'art, des sites et objets archéologiques et ethnologiques (Université de Paris I (Panthéon-Sorbonne) パリ第1大学 1982)、文学士 Licence es Lettres (Université de Paris I (Panthéon-Sorbonne) パリ第1大学 1980)【専攻・専門】 保存科学【所属学会】 ICOM (国際博物館会議)、IIC (国際文化財保存学会)、IIC-Japan (国際文化財

保存学会日本支部)、文化財保存修復学会

【主要業績】

[編著]

Sonoda, N. (ed.)

2016 *New Horizons for Asian Museums and Museology*. Singapore: Springer.

園田直子編

2010 『紙と本の保存科学 (第2版)』東京: 岩田書院。

[学位論文]

園田直子

1987 *Identification des matériaux synthétiques dans les peintures fines pour artistes par pyrolyse couplée avec la chromatographie en phase gazeuse. Application à l'étude de quelques tableaux d'art contemporain*, Thèse de Doctorat de 3ème cycle, Université de Paris I, Panthéon-Sorbonne.

【受賞歴】

2019 文化財保存修復学会第13回学会賞

2010 文化財保存修復学会第4回業績賞

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

民族資料の総合的資料管理

・研究の目的、内容

本館では、民族資料を対象に、総合的見地から資料管理を実践している。収蔵庫再編成は、単なる狭隘化対策ではなく、保存科学研究と連動した持続的な資料管理活動の一環と位置づけ、小型・中型の資料に関しては特別収蔵庫〈毛皮〉〈絨毯〉〈漆器〉および第3収蔵庫、大型の資料に関しては第1収蔵庫、船に関しては多機能資料保管庫、それぞれの収蔵庫再編成で収納・保管方法のプロトタイプを確立してきた。本年度は、収納・保管方法のプロトタイプが完成していない衣類収蔵庫での調査を継続し、対応策を検討する。平行して、IPM(総合的有害生物管理)の考えかたのもと、博物館環境調査をはじめとする予防保存活動、防虫・殺虫処理の検証と条件改良をおこなう。

・成果

本館では2004年度より、研究者の安全や調査・閲覧しやすさに留意しつつ、資料にとって安全な配架・収納を目的に、収蔵庫再編成を計画的に進めている。2018年の大阪府北部を震源とした地震は、本館が15年以上継続実施している収蔵庫再編成の方法論を検証し、再考する機会となった。2020年の文化財保存修復学会では、収蔵什器の安全性と、資料の収納・保管方法の改善に関する発表をおこなった。収蔵什器の安全対策強化として実施したのは、二段重ねの収蔵棚の連結作業と、マップケースの引き出し飛び出し防止のための安全バンド装着である。また、転倒の被害が集中した、土人形類とカチナ人形に関しては、それぞれの大きさ、重量、形態をもとに収納・保管方法を改善した。いくつかのカチナ人形に関しては、アメリカ先住民の研究者の助言を受け、カルチャル・センシティブティへの配慮から、個別に保存箱を製作するとともに、収蔵庫内でも人の目にふれにくい場所に別置する措置をとった。本館の経験に関連の研究機関、研究者と共有することで、博物館等にとって防災・減災だけでなく、喫緊の課題である収蔵スペース不足に対しても有用な具体的事例を提供することができた。なお、同学会は、新型コロナウイルス感染症の影響により、現地開催は中止となり、電子媒体による発表となった。

博物館環境調査をはじめとする予防保存活動としては、年4回実施している生物生息調査の結果をもとに、展示場および収蔵庫での防虫・殺虫処理の計画をたてた。また、新型コロナウイルス感染症の拡大防止対策として、展示場での外気の取り入れを最大限にしているところから、毎日、展示場・収蔵庫等の温湿度データを確認する体制をとり、博物館環境の適切な維持につとめた。同時に、実測データをもとに、換気量の増加が室内環境に与える影響の検証、分析を進めた。

◎出版物による業績

[その他]

河村友佳子・日高真吾・園田直子・末森 薫・橋本沙知・和高智美・桂田峰男

2020 「滋賀県米原市所在の壽山組山倉における温湿度環境の調査」『文化財保存修復学会第42回大会研究発表集 (PDF データ)』 pp.446-449。[査読有]

橋本沙知・園田直子・日高真吾・末森 薫・河村友佳子・柴切弥生・西澤昌樹・和高智美

2020 「性能や調湿条件の異なる展示ケース内の温湿度環境——国立民族学博物館の事例より」『文化財保存修復学会第42回大会研究発表集 (PDF データ)』 pp.256-259。[査読有]

末森 薫・正垣雅子・高林弘実・張 梁・園田直子・日高真吾

2020 「敦煌莫高窟に描かれた規則性を備える千仏図の再現」『文化財保存修復学会第42回大会研究発表集 (PDF データ)』 pp.214-217。[査読有]

日高真吾・園田直子・末森 薫・河村友佳子・橋本沙知・和高智美

2020 「3D スキャナーで製作した複製品の活用事例——ユニヴァーサル・ミュージアムの実現を目指して」『文化財保存修復学会第42回大会研究発表集 (PDF データ)』 pp.266-269。[査読有]

岡山隆之・田中祐輝・小瀬亮太・金 海蘭・園田直子

2020 「微細セルロースファイバー小型塗工機の試作と劣化した酸性紙への適用効果」『文化財保存修復学会第42回大会研究発表集 (PDF データ)』 pp.86-89。[査読有]

園田直子・日高真吾・末森 薫・河村友佳子・橋本沙知・西澤昌樹・和高智美

2020 「国立民族学博物館における収蔵庫の防災・減災対策——2018年の大阪府北部地震を受けて」『文化財保存修復学会第42回大会研究発表集 (PDF データ)』 pp.298-301。[査読有]

和高智美・日高真吾・園田直子・河村友佳子・橋本沙知・中村晋也・早川晃示・石樽康彦・和田光生・柿本雅美

2020 「大津祭曳山『郭巨山』の妻人形、童子人形の修理事例」『文化財保存修復学会第42回大会研究発表集 (PDF データ)』 pp.182-185。[査読有]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2021年3月12日 「AD-Strips を用いたフィルム調査——国立民族学博物館の事例からの考察」『博物館における持続可能な資料管理および環境整備——保存科学の視点から』国立民族学博物館

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

テーマシリーズ講義「民族資料の収蔵庫再編成」

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「セルロースナノファイバー塗工法による脆弱化した酸性紙資料の大量強化処理の開発」研究代表者、科学研究費（基盤研究（B））「教育資源・観光資源としての地域文化遺産の活用と保存」（研究代表者：日高真吾）研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「再現模写・仮想空間構築による敦煌莫高窟千仏図が有する規則的描写の複合的評価」（研究代表者：末森 薫）研究分担者、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型）『学術研究支援基盤形成』）「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」（研究代表者：吉田憲司）研究支援分担者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

読売新聞大阪本社読売あをによし賞選考委員、愛知芸術文化センター愛知県美術館美術館専門委員会委員、公益財団法人文化財虫菌害研究所文化財 IPM コーディネータ委員会委員、国立歴史民俗博物館資料保存環境検討委員会委員

出口正之 [でぐち まさゆき] ————— 教授

1955年生。【学歴】大阪大学人間科学部人間科学科卒（1979）【職歴】ジョーンズ・ホプキンス大学国際フィランソロピー研究員（1991）、財団法人サントリー文化財団事務局長（1992）、総合研究大学院大学教育研究交流センター教

授（1995）、国立民族学博物館民族学研究開発センター教授（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2004）、内閣府公益認定等委員会委員（2010）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2013）、総合研究大学院大学教授（2014）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部教授（2017）【専攻・専門】NPO、メセナ、フィランソロピー、ボランティア、言政学【所属学会】国際NPO・NGO学会（ISTR=International Society for Third Sector Research）、米国NPO学会（ARNOVA=The Association for Research on Nonprofit Organizations and Voluntary Action）、非営利法人研究学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[著書]

出口正之

1993 『フィランソロピー』東京：丸善出版。

[共編]

Vinken, H., Y. Nishimura, B. L. J. White, and M. Deguchi (eds.)

2010 *Civic Engagement in Contemporary Japan*. New York, Dordrecht, Heidelberg and London: Springer.

本間正明・出口正之編

1996 『ボランティア革命』東京：東洋経済新報社。

【受賞歴】

1995 ESP 大来佐武郎賞

1988 東洋経済高橋亀吉賞最優秀賞

1988 日経産業新聞15周年記念論文最優秀賞

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

トランスフォーマティブな非営利研究／新型コロナウイルス災厄時代におけるサイバー空間のフィールドワーク

・研究の目的、内容

トランスフォーマティブな非営利研究は、科学研究費（挑戦的研究（開拓））「個別文化の標準化問題に関する文化人類学と会計学の学際的共同研究」を中心とした研究である。新しい分野の研究に積極的に挑戦して行く。あわせて、「民都・大阪」フィランソロピー会議議長として、「ビジネスセントリズム」に基づかない文化人類学的な視点により、本研究の成果として、地域社会貢献の実績を積んでいく。研究は、Shore & Wright (1999) が主張する「地理的フィールド」ではない「社会的かつ政治的空間としてのフィールド」を研究対象としたものであり、実際の政策に適用していくことによって一層の研究を深めていった。

昨年度からは、21世紀社会の新現象である「サイバー空間」もShore & Wrightのいう「フィールド」として捉えることで、萌芽的に「サイバー空間」のフィールドワークにも挑戦し、ネット上の収集を行う。特に、新型コロナウイルスの影響で、人と人が接することができなくなっていることから、どのような文化の変化（例えば、儀礼や文化・芸術）が起こりうるのかを考察した。また、研究会なども積極的にネットを活用したものに挑戦した。

・成果

科学研究費（挑戦的研究（開拓））「個別文化の標準化問題に関する文化人類学と会計学の学際的共同研究」及び共同研究「人類学と会計学の融合」の成果として以下を出版。

[書籍]

出口正之・藤井秀樹編『会計学と人類学のトランスフォーマティブ研究』清水弘文堂書房

日本フィランソロピー協会編『共感革命 フィランソロピーは進化する』中央公論事業出版

[雑誌論文]

出口正之

2020/12/15 「フランスの『公益の増進の徹底した改革』と日本の『失われた10年』」『公益・一般法人』（1020）：32. 全国公益法人協会。

出口正之

2020/09/10 「公益法人税制優遇のルビンの壺現象——価値的多様性と手段的多様性への干渉」『非営利法人研究学会誌』22：1-14。東京：公益社団法人非営利法人研究学会。

出口正之

2020/04/15 「地方・国・海外から見た公益認定制度」『公益・一般法人』(1006)：39-45。全国公益法人協会。

出口正之

2020/04/01 「公益法人制度に対する世間の誤解」『公益・一般法人』(1005)：18-28。全国公益法人協会。

[口頭発表]

出口正之

2020/08/28 「【ガイダンス】言政学とは何か。COVID-19の中でのオンライン国際シンポジウム開催にあたって」東アジアの非営利組織をめぐる法・会計・文化——普遍性と個別性、オンライン

出口正之

2020/08/28 「中国・台湾・日本の公益法人をめぐる制度改革」東アジアの非営利組織をめぐる法・会計・文化——普遍性と個別性、オンライン

久保秀雄・出口正之

2020/09/26 「公益法人の財務三基準のシステム論的理解」公益社団法人非営利法人研究学会第24回全国大会、オンライン

出口正之

2020/09/26 「相違説に基づく非営利会計の本質と国際標準化」公益社団法人非営利法人研究学会第24回全国大会、オンライン

[報告書]

「民都・大阪」フィランソロピー会議報告書

[動画]

YouTube

トランスフォーマティブ研究とは何か 2021年2月10日

<https://youtu.be/iWbT9j3K7Ck>

『会計学と人類学のトランスフォーマティブ研究』のブック・ローンチ・ビデオ第二弾大阪バージョン

2021年3月2日

<https://youtu.be/SAFBoVUYOyw>

◎出版物による業績

[編著]

出口正之・藤井秀樹編

2021 『会計学と人類学のトランスフォーマティブ研究』東京：清水弘文堂書房。[査読有]

[分担執筆]

出口正之

2021 「フィランソロピーの過去・現在・未来」日本フィランソロピー協会編『共感革命——フィランソロピーは進化する』pp.132-161。東京：中央公論事業出版。

[論文]

出口正之

2020 「公益法人制度に対する世間の誤解」『公益・一般法人』1005：18-28。

2020 「地方・国・海外から見た公益認定制度」『公益・一般法人』1006：39-45。

2020 「公益法人税制優遇のルビンの壺現象——価値的多様性と手段的多様性への干渉」『非営利法人研究学会誌』22：1-14。

2020 「フランスの『公益の増進の徹底した改革』と日本の『失われた10年』」『公益・一般法人』1020：32。

[その他]

出口正之

2020 「寄付探訪⑨ 感染症とフィランソロピー」『フィランソロピー』397：24。

2020 「より冷静で確実な情報の提供を」『公益・一般法人』1006：4-8。

- 2020 「寄付探訪⑩ フィランソロピー元年」『フィランソロピー』398：21。
 2020 「寄付探訪⑪ ベルリンの壁の崩壊と世界的広がり」『フィランソロピー』400：21。
 2020 「非営利会計の国際的な標準化の議論に幅広い参加を」『公益・一般法人』1018：1。
 2020 「それぞれの法人でぜひ理事会等の機関の役割について議論を」『公益・一般法人』1006：7-11。
 2020 「寄付探訪⑫ 阪神淡路大震災の影響」『フィランソロピー』401：25。
 2021 「寄付探訪⑬ NPO法の成立と用語の混乱」『フィランソロピー』402：20。
 2021 「実効性を持たせるために理事会でしっかりと議論を」『公益・一般法人』1022：8-15。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2020年8月28日 「【ガイダンス】言政学とは何か。COVID-19の中でのオンライン国際シンポジウム開催にあたって」館長リーダーシップ国際シンポジウム『東アジアの非営利組織をめぐる法・会計・文化——普遍性と個別性』オンライン開催
 2020年8月28日 「中国・台湾・日本の公益法人をめぐる制度改革」館長リーダーシップ国際シンポジウム『東アジアの非営利組織をめぐる法・会計・文化——普遍性と個別性』オンライン開催

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2020年9月26日 「公益法人の財務三基準のシステム論的理解」公益社団法人非営利法人研究学会第24回全国大会、オンライン開催
 2020年9月26日 「相違説に基づく非営利会計の本質と国際標準化」公益社団法人非営利法人研究学会第24回全国大会、オンライン開催

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
 科学研究費（挑戦的研究（開拓））「個別文化の標準化問題に関する文化人類学と会計学の学際的共同研究」研究代表者

日高真吾 [ひだか しんご] ————— 教授

1971年生。【学歴】東海大学文学部史学科日本史学専攻卒（1994）【職歴】（財）元興寺文化財研究所研究員（1994）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（2002）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター助手（2004）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2008）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部准教授（2017）【学位】文学博士（東海大学 2005）【専攻・専門】保存科学、保存修復【所属学会】文化財保存修復学会、日本文化財科学会、日本民具学会

【主要業績】

[単著]

日高真吾

- 2015 『災害と文化財——ある文化財科学者の視点から』大阪：千里文化財団。
 2008 『女乗物——その発生経緯と装飾性』平塚：東海大学出版会。

[編著]

日高真吾編

- 2012 『記憶をつなぐ——津波被害と文化遺産』大阪：千里文化財団。

【受賞歴】

- 2016 文化財保存修復学会 業績賞
 2009 日本文化財科学会第4回ポスター賞
 2008 文化財保存修復学会第2回奨励賞

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

地域文化の再発見とその表象システムの構築

・研究の目的、内容

本研究では、グローバル化や災害を原因として大きな変貌を遂げている地域社会において、どのように文化が継承され、新たな文化が構築されているのかについて調査・研究をおこなう。さらに、地域社会の動向に対して人間文化研究がいかに貢献しうるかを考察することを研究の主眼とする。

この研究からは、①豊かな地域社会の創生に向け、災害時における地域文化の重要性の提示、②博物館を積極的に活用し、平常時に地域住民の意識が希薄となっている地域文化の大切さを住民自身が感じることができるプログラムの策定、③地域の文化を発掘し、その実践活動を検証する人間文化研究の新たなモデルの構築、④研究成果を地域において活用するための、地域と研究者の結節点の発見を目指す。

なお、本研究を進めるにあたっては、人間文化研究機構基幹プロジェクト「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」（研究代表者：日高真吾）および、科学研究費（基盤研究（B））「教育資源・観光資源としての地域文化遺産の活用と保存」（研究代表者：日高真吾）の研究プロジェクトと関連づけながら実施する。

・成果

2020年度は、①豊かな地域社会の創生に向け、災害時における地域文化の重要性の提示について、特別展「復興を支える地域の文化——3.11から10年」を2021年3月4日から5月18にかけて開催した。②博物館を積極的に活用し、平常時に地域住民の意識が希薄となっている地域文化の大切さを住民自身が感じることができるプログラムの策定では、枚方市旧田中家鋳物民俗資料館と共同して、教育バック「地域文化の宝箱」シリーズの「枚方の鋳物づくりと昔の暮らし」を製作し、来年度から本格運用をおこなう準備を整えた。③地域の文化を発掘し、その実践活動を検証する人間文化研究の新たなモデルの構築では、2021年度に公開シンポジウム「多角的な視点からとらえる地域の文化——博物館における研究の可視化・高度化」を開催する準備を進めた。また、④研究成果を地域において活用するための、地域と研究者の結節点の発見を目指す点では、昨年度におこなった京都造形芸術大学での連続講座「民俗文化財の保存・活用入門」の成果をもとに、日高真吾編『継承される地域文化——災害復興から社会創発へ』を刊行した。また、昨年度開催した国際フォーラム「地域文化を活用する——地域振興、地域活性に果たす地域文化の役割」のブックレットを刊行した。

以上の研究は、人間文化研究機構基幹プロジェクト「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」（研究代表者：日高真吾）および、科学研究費（基盤研究（B））「教育資源・観光資源としての地域文化遺産の活用と保存」（研究代表者：日高真吾）の研究プロジェクトと関連づけながら実施した。

ただし、当初研究計画であった、教育キット「地域文化の宝箱」の村上市の学校での本格運用や台北芸術大学との協定のもと、災害復興における博物館の役割をテーマとした国際フォーラムの開催は、新型コロナウイルス感染症拡大により、実施が実現できなかった。

◎出版物による業績

〔編著〕

日高真吾・黄 貞燕編

2021 『地域文化を活用する——地域振興、地域活性に果たす役割』大阪：大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立民族学博物館日高真吾研究室。

日高真吾編

2021 『復興を支える地域の文化——3.11から10年』大阪：国立民族学博物館。

2021 『継承される地域文化——災害復興から社会創発へ』京都：臨川書店。〔査読有〕

〔論文〕

日高真吾

2020 「フォーラム型ミュージアム『時代玩具コレクションデータベース』について」近畿民具学会編『近畿民具』42：33-43。

2020 Museum Management Thinking from an Environmental Perspective: Examples of Undertakings at the National Museum of Ethnology. In A. Nobayashi and S. Simon (eds.) *Environmental Teachings for the Anthropocene: Indigenous Peoples and Museums in the Western Pacific* (Senri Ethnological Studies 103), pp.137-164. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

2020 「地域文化の活用を目指して」『民具研究』161：43-54。

[その他]

日高真吾

2020 「スマートフォンで展示場を歩く」『月刊みんぱく』44(9)：16-17。

2021 「特別展『復興を支える地域の文化——3.11から10年』」『美術の窓』450：177。

2021 「東日本大震災から10年——地域文化の継承を目指して」特集「地域の記憶と向き合う」『月刊みんぱく』45(3)：2-3。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・展示

2021年3月4日～5月18日 「復興を支える地域の文化——3.11から10年」国立民族学博物館

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「セルロースナノファイバー塗工法による脆弱化した酸性紙資料の大量強化処理の開発」（研究代表者：園田直子）研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「教育資源・観光資源としての地域文化遺産の活用と保存」研究代表者、国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「時代玩具コレクションの公開プロジェクト」研究代表者、人間文化研究機構広域連携型「地域における歴史文化研究拠点の構築」（研究代表者：小池淳一）メンバー、人間文化研究機構広域連携型「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」研究代表者

福岡正太 [ふくおか しょうた]—————教授

1962年生。【学歴】東京藝術大学音楽学部楽理科卒（1986）、東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程修了（1991）、東京藝術大学大学院博士課程単位取得退学（1994）【職歴】国立民族学博物館第2研究部助手（1994）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（1998）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2004）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部准教授（2017）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部教授（2020）【学位】芸術学修士（東京藝術大学大学院 1991）【専攻・専門】民族音楽学、東南アジアとくにインドネシア西ジャワのスダ伝統音楽についての研究【所属学会】東洋音楽学会、日本音楽学会、日本ポピュラー音楽学会、国際伝統音楽学会（International Council for Traditional Music）、民族芸術学会、日本民俗音楽学会

【主要業績】

[論文]

福岡正太

2003 「音楽からみた『インドネシア民族』の形成」端信行編『民族の二〇世紀』（二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容9）pp.144-160, 東京：ドメス出版。

2003 「小泉文夫の日本伝統音楽研究——民族音楽学研究の出発点として」『国立民族学博物館研究報告』28(2)：257-295。

Fukuoka, S.

2003 Gamelan Degung: Traditional Music in Contemporary West Java. In S. Yamashita and J. S. Eades (eds.) *Globalization in Southeast Asia: Local, National, and Transnational Perspectives*, pp. 95-110. New York and Oxford: Berghahn Books.

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

映像音響メディアが伝統的音楽芸能に与える影響に関する研究

・研究の目的、内容

音声および映像の記録技術は、音楽芸能の学術的な記録および分析の手段として、重要な役割を果たしてきた。民族音楽学の誕生と展開は、映像音響メディアの存在を抜きにして論じることにはできない。一方、20世紀を通

じて、映像音響メディアは、人々が音楽芸能を楽しむ媒体として普及定着し、メディアの変化発展が音楽芸能の展開に大きな影響を及ぼすようになった。さらに、近年、手軽なビデオ撮影機器の普及とネット技術の発展により、音楽芸能にかかわる関係者が自ら映像を作成して公開することが普通になり、映像は音楽芸能の上演や伝承そして創造に不可欠なものとして組み込まれつつある。こうした状況の中、研究機関等にとって、音楽芸能の関連資料を伝承や創造にも活用可能な形でアーカイブ化することが課題となっている。本研究は、様々な位相における音楽芸能と映像音響および情報メディアの結びつきについて明らかにすることを目的としている。

具体的には、①20世紀のアジアにおいて、レコードやラジオなどのメディアおよび博物館や学校などの近代的制度が音楽にもたらした変化を明らかにする研究に取り組む。民博が所蔵する日本コロムビアレーベルの外地録音金属原盤資料等に基づき、1930年代前後の東アジアの音楽交流のあり方について検討する。また、科学研究費（基盤研究（B））「東南アジアの現代芸術におけるラーマーヤナの多面的意味に関する研究」（研究代表者：福岡まどか）により、インドネシア芸能の発展とメディアや近代的制度とのかかわりについて研究を進める。②国立民族学博物館が所蔵する音楽関連資料を例に、音楽芸能の伝承や創造への活用を前提とした関連資料のアーカイブ化の諸問題について明らかにする。楽器資料に関するフォーラム型情報ミュージアム「世界の音楽と楽器」を活用し、通文化的な広がりをもつ双方向的データベースにより、楽器に関する学術的な知識の蓄積と活用の可能性を探る。また、「東洋音楽学会調査記録」資料を精査し、1950年代から80年代ころにおこなわれた日本の民俗音楽調査のあり方と意義を明らかにするとともに、調査資料を現在の音楽芸能の伝承や創造に生かすための諸条件を探る。③科学研究費（基盤研究（C））「島嶼社会における芸能伝承の課題——対話と発見の場としての映像を活用したアプローチ」（研究代表者：福岡正太）により鹿児島県徳之島および三島村の芸能を例として、芸能の映像記録を音楽芸能の関係者と記録者との相互関係を築くメディアとして位置づけ、映像記録が音楽芸能の上演や伝承に与える影響について研究する。

・成果

①20世紀前半のインドネシアのラジオ放送により伝統的な音楽にどのような変化がもたらされたのかについて12月にマレーシアのサンウェイ大学がオンラインで開催したInter-Asia Popular Music Studies Conferenceにおいて、“The ‘modern’ in Sundanese music broadcast over the radio in the 1930s and 1940s” と題した研究発表をおこない、近日出版予定の同会議の報告書に論文を寄稿した。また、科学研究費（基盤研究（B））「東南アジアの現代芸術におけるラーマーヤナの多面的意味に関する研究」（研究代表者：福岡まどか）の成果として、民博の東南アジア展示におけるラーマーヤナ表象の変化について、編集中の英文論文集に論文を寄稿した。②民博の研究アーカイブズ資料・映像音響資料精査プロジェクトにて、民博が所蔵する東洋音楽学会調査記録資料の一部をなすべき五島列島民俗音楽調査資料（山口修大阪大学名誉教授所蔵）について、本館と東洋音楽学会のあいだの研究協定に基づき、寄贈受入を前提として精査をおこなった。近日中に同資料の寄贈受入申請をおこなう予定である。③科学研究費（基盤研究（C））「島嶼社会における芸能伝承の課題——対話と発見の場としての映像を活用したアプローチ」（研究代表者：福岡正太）の成果に基づき、共同研究「音楽する身体間の相互作用を捉える——ミュージッキングの学際的研究」（研究代表者：野澤豊一）の成果論文集に、「行為としての民俗芸能の映像記録とその活用」を寄稿した（出版準備中）。

◎出版物による業績

[その他]

福岡正太

2020 「異文化の音楽をまなぶ」『月刊みんぱく』44(7)：10-11。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年12月4日 “The “Modern” in Sundanese Music Broadcast over the Radio in the 1930s and 1940s.” 7th Inter-Asia Popular Music Studies Conference (IAPMS), Department of Film & Performing Arts, Sunway University, Selangor, Malaysia, オンライン開催

・広報・社会連携活動

2020年8月8日 「国立民族学博物館における芸能の映像記録作成と活用」『日本とアジアの伝統音楽・芸能のためのアートマネジメント人材育成——「伝統×伝統」、「伝統×現代」、「伝統×地域」のクロスオーバーによる新たな価値の創出を目指して』東京音楽大学附属民族音楽研究所、オンライン開催

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（4人）、副指導教員（1人）

・大学院ゼミでの活動

テーマシリーズ講義「レコードに聴く東アジアの音楽交流」

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「島嶼社会における芸能伝承の課題——対話と発見の場としての映像を活用したアプローチ」研究代表者、科学研究費（基盤研究（B））「東南アジアの現代芸術におけるラーマーヤナの多元的意味に関する研究」（研究代表者：福岡まどか）研究分担者、国立民族学博物館特別研究「パフォーマンス・アーツと積極の共生」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他大学の客員、非常勤講師

広島市立大学「音楽人類学Ⅱ」（集中講義）、広島市立大学「音楽人類学Ⅰ」（集中講義）

・その他の社会活動・館外活動

東洋音楽学会会長理事、日本民俗音楽学会理事

岡田恵美 [おかだ えみ] ————— 准教授

【学歴】 東京藝術大学大学院音楽研究科音楽学専攻博士課程修了（2010）**【職歴】** 東京藝術大学音楽学部楽理科教育研究助手（2010-2011）、琉球大学教育学部専任講師（2012-2016）、琉球大学教育学部准教授（2017-2019）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部准教授（2020）**【学位】** 博士（文学）（東京藝術大学大学院 2010）**【専攻・専門】** 音楽民族学、南アジア研究

【主要業績】

[単著]

岡田恵美

2016 『インド鍵盤楽器考——ハルモニウムと電子キーボードの普及にみる楽器のグローバル化とローカル文化の再編』広島：溪水社

[分担執筆]

岡田恵美

2021 「第5章 インド北東部ナガランド州にみるローカリティの再創造——ポピュラー音楽振興政策とフェスを通して『つながる』ナガの若者たち」松川恭子・寺田吉孝編『世界を環流する〈インド〉——グローバル化のなかで変容する南アジア芸能の人類学的研究』pp.160-185, 東京：青弓社。[査読有]

[論文]

岡田恵美

2020 「八重山諸島・黒島の正月綱引き『世引き（ユーピキ）』——ローカリティの再生と歌の伝承問題を考える」『民族芸術学会誌 arts/』36：186-195。

【受賞歴】

2017 第6回日本南アジア学会賞

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

インド北東部におけるポリフォニーと歌唱文化に関する音楽民族学研究

・研究の目的、内容

ミャンマーと国境を接するインド北東部ナガランド州とマニプル州には、モンゴロイド系の山岳民族「ナガ」が暮らす。ナガの居住区は、第二次世界大戦中にはインパール作戦の戦地となり、戦後は独立闘争が激化し、インド軍による軍事弾圧はナガ社会を半世紀以上苦しめた。2011年に両州への外国人の入域規制が緩和されたことを契機に、ナガランド州で調査を実施したところ、南アジアにおいて極めて稀な合唱様式の民謡や労働歌が伝承されていることが明らかとなった。

本研究の第一の目的は、マニプル州に暮らすナガの民謡の音楽的構造や社会文化的脈絡を調査・分析し、ナガ社会における歌の機能と協働性について解明することである。今年度は、マニプル州の中でもナガの人口の多いマオ、マラム集落を対象とした現地調査を実施する。情報提供者の許諾を得た上で、民謡の実践や教習・伝承の場を録音・撮影し、民謡やその伝承に対する世代間の意識を考察するため、幅広い年齢層にインタビューも行う。(科学研究費(基盤研究(C))「南アジアのポリフォニー民謡に関する音楽民族学研究——インド・マニプル州ナガを中心に」)

また第二の研究目的は、ナガランド州南部に伝承される「リ」と呼ばれるポリフォニーの民謡を対象として、その記録保存と教育資源化を現地研究者と共同で推進することである。具体的には、3集落で現地調査を実施し、調査で得た音源・映像から民謡のレパートリーを緻密に採譜した上で、詩型・歌詞の現代語訳や隠喩法に関する分析、またポリフォニックな構造や協和音を生むメカニズムについて解明する。(平和中島財団・アジア地域重点学術研究助成「インド北東部・山岳民族チャケサン・ナガの伝統歌唱文化『リ(Li)』の記録保存と教育資源化」)

・成果

今年度は、新型コロナウイルス感染症の世界的流行によって、当初予定していたマニプル州に居住するナガの民謡の実践や教習・伝承の場の録音・撮影といった現地調査が不可能であった。またナガランド州南部に伝承されるポリフォニーの民謡の記録保存と教育資源化をめぐる、現地研究者との共同調査・研究に関しても、現地調査ができない状態の中で、十分に推進することが困難であった。

上記のような状況に伴い、今年度はこれまでの調査で得た録音資料の分析を中心に進めた。その結果、研究成果に関しては、10月にオンラインで開催された国際学会「第10回伝統ポリフォニー国際シンポジウム」で口頭発表を行ったほか、国内の学会・研究会等でも本研究に関連する3件の発表・報告を行った。また、1月には分担執筆した『世界を環流する〈インド〉——グローバリゼーションのなかで変容する南アジア芸能の人類学的研究』(松川恭子・寺田吉孝編、青弓社、2021年、第5章担当)(科学研究費での研究と関連)が出版された。その他にも、国際学会から依頼された会報記事や、月刊みんぱく等の国内の雑誌記事においても、本研究に関連する報告を行っている。

◎出版物による業績

[分担執筆]

岡田恵美

2021 「第5章 インド北東部ナガランド州にみるローカリティの再創造——ポピュラー音楽振興政策とフェスを通して『つながる』ナガの若者たち」松川恭子・寺田吉孝編『世界を環流する〈インド〉——グローバリゼーションのなかで変容する南アジア芸能の人類学的研究』pp.160-185, 東京: 青弓社。[査読有]

[論文]

Okada, E.

2021 Polyphonic Singing of Chakhesang Naga tribe in India. *The IRCTP Bulletin* 29: 19-20.

[その他]

岡田恵美

2020 「世界の島嶼をつなぎ共振する音楽」『みんぱく e-news』230: 巻頭コラム。

2020 「多言語の国——インドの教室にて」『月刊みんぱく』44(10): 20。

2021 「編んで着飾る男たち」『月刊みんぱく』45(1): 14-15。

2021 「旅・いろいろ地球人 沖縄の年中行事と歌① 旧正月の綱引き」『毎日新聞』2月6日夕刊。

2021 「旅・いろいろ地球人 沖縄の年中行事と歌② 消えゆく伝統歌唱」『毎日新聞』2月13日夕刊。

2021 「旅・いろいろ地球人 沖縄の年中行事と歌③ 海人と糸満ハーレー」『毎日新聞』2月20日夕刊。

2021 「旅・いろいろ地球人 沖縄の年中行事と歌④ ハーレー歌再び」『毎日新聞』2月27日夕刊。

2021 「名門校か、公立校か? 教育の権利法が生んだ歪み」『月刊みんぱく』45(3): 18-19。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機構の連携研究会での報告

2020年7月11日 「無形文化の観光資源化と復興のプロセス——インド北東部ナガランド州の芸能祭に着目して」2020年度MINDAS「音楽・芸能」班第1回研究会、オンライン開催

・民博研究懇談会

2020年12月9日 「共に歌う山の民ナガ——インド北東部ナガランド州の音楽文化にみる特殊性」

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年10月20日 'Traditional Polyphonic Singing Culture and Interpersonal Cooperativeness of Chakhesang Naga, an Ethnic Minority in Northeast India.' 10th Anniversary International Symposium on Traditional Polyphony, オンライン開催

2021年3月6日 「インド北東部ナガランド州の歌唱文化にみる特殊性——なぜポリフォニーなのか？」第288回東洋音楽学会西日本支部例会、オンライン開催

・展示

2021年3月25日 「音楽展示チャルメラ」改修

・広報・社会連携活動

2021年2月8日 「Music or Musicking? (大学共同利用：大阪産業大学学生に向けた民博での講義)」国立民族学博物館

・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

2020年10月 「みんぱっく（インドのサリーとクルター）への追加資料2点および教材資料の作成」

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（2人）

・大学院ゼミでの活動

テーマシリーズ講義「『音楽民族学』分類・属性・グローカリゼーションを考える——インドの鍵盤楽器を事例に」

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「独立後のインド音楽世界を文化資源化する知の統合研究」（研究代表者：田中多佳子）研究分担者、科学研究費（基盤研究（C））「南アジアのポリフォニー民謡に関する音楽民族学研究——インド・マニプル州ナガを中心に」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究国立民族学博物館拠点（MINDAS）」（拠点代表者：三尾 稔）拠点構成員

・民間の奨学金及び助成金からのプロジェクト

平和中島財団・アジア地域重点学術研究助成「インド北東部・山岳民族チャケサン・ナガの伝統歌唱文化『リ(Li)』の記録保存と教育資源化」研究代表者

川瀬 慈 [かわせ いつし] ————— 准教授

1977年生。【学歴】立命館大学文学部卒（2001）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程修了（2010）【職歴】日本学術振興会特別研究員PD/京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科（2007）、日本学術振興会海外特別研究員/マンチェスター大学グラナダ映像人類学センター（2010）、メケレ大学 Abba Gorgoryos Guest Professor（2011）、SIC-Sound Image Culture 客員講師（2011）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教（2012）、ハンブルグ大学アジア・アフリカ研究所 Hiob Ludolf Guest Professor（2013）、プレーメン大学人類学・文化調査学部客員教授（2014）、山東大学人類学科客員教授（2016）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部准教授（2017）【学位】博士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 2010）、修士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科 2007）【専攻・専門】アフリカ地域研究、映像人類学、民族誌映画制作【所属学会】日本映像民俗学の会、日本文化人類学会、日本アフリカ学会、日本ナイル・エチオピア学会、英国王立人類学協会

【主要業績】

[単著]

川瀬 慈

2018 『ストリートの精霊たち』京都：世界思想社。

[編著]

川瀬 慈編

2019 『あふりこ——フィクションの重奏／遍在するアフリカ』東京：新曜社。

[論文]

Kawase, I.

2017 ETHNOGRAPHIC FILMMAKING IN ETHIOPIA, the Approach and the Film Reception. In S. Dinslage and S. Thubauville (eds.) *Seeking out wise old men: Six decades of Ethiopian Studies at the Frobenius Institute revisited* (Studien zur Kulturkunde 131), pp.75-86. Berlin: Reimer-Verlag.

【受賞歴】

2019 第6回鉄犬ヘテロトピア文学賞、受賞対象作：川瀬慈著『ストリートの精霊たち』（世界思想社、2018）

2013 第19回日本ナイル・エチオピア学会高島賞

2008 最も革新的な映画賞、サルデーニャ国際民族誌映画祭、受賞対象作：Room 11, Ethiopia Hotel

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

コミュニケーションを媒介し生成する民族誌映画の研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、自身の映画制作や上映活動を事例に、コミュニケーションによって生成する人類学的な映像実践を示すことにある。民族誌映画においては、観察型、解説型の映画様式が重視され、制作中の撮影者・被写体間の相互作用や、映画を視聴する幅広いアクターの役割が軽視される傾向にあった。そのようななか本研究では、民族誌映画を固定的で完結した表象としてではなく、視聴する人々とのたえまない相互作用のなかに位置づけ、その相互作用が、研究の新たな展開を生成させる創発的な営みであることを自身の民族誌映画制作の実践や上映を基軸に提示し、論文としても発表する。

・成果

2020年度は研究課題に関する複数の著作を執筆し、発表することができた。代表的な刊行物としては、科学研究費（基盤研究（C））「アフリカの無形文化を対象にした民族誌映画の制作による応用映像人類学的研究」に関連する成果である単著『エチオピア高原の吟遊詩人 うたに生きる者たち』（音楽之友社）が挙げられる。本書では、エチオピア北部の地域社会において音楽・芸能を生業とする職能集団の活動の歴史の変遷から、当集団を対象にした映像記録の方法論をめぐる報告者による創意工夫、さらに完成した記録作品が各国で巻き起こした議論について報告した。本書にはQRコードを付し、報告者が制作した4本の民族誌映画作品と書籍を連動させる試みを行った。大阪の映画館シネヌーボーにおいて9月に開催された東京ドキュメンタリー映画祭 in 大阪においては、アフリカ無形文化をテーマに報告者が制作した3本の民族誌映画を発表した。さらに研究集会The Image Making from Africa—Perspectives from Visual Anthropology—を主宰者として企画し、東京外国語大学や日本アフリカ学会の協力のもと、2020年6月と2021年3月にオンラインで開催した。本会では、マリ、カメルーン、エチオピアの映像人類学者、映像作家とともに彼ら／彼女たちが制作した研究映像を視聴し「人類学的な映像記録とは何か？」について議論を行った。アフリカと日本の映像人類学者の建設的な研究交流を今後も継続し深めていく予定である。

◎出版物による業績

[単著]

川瀬 慈

2020 『エチオピア高原の吟遊詩人——うたに生きるものたち』東京：音楽之友社。

2021 『叡智の鳥』東京：tobmac / インスクリプト。

[分担執筆]

川瀬 慈

2020 「民族誌映画」artscape 編集部編『artscape アートスケープ』現代美術用語辞典 ver.2.0, 東京: DNP Art Communications。

2021 「エチオピアの酸味」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.546-547, 東京: 丸善出版。

ウスビ・サコ, 和崎春日, 鈴木裕之, 川瀬 慈

2020 「現代アフリカ・カルチャーの現在地」ウスビ・サコ, 清水貴夫編『現代アフリカ文化の今——15の視点から、その現在地を探る』pp.12-40, 京都: 青幻舎。

[その他]

川瀬 慈

2020 「バー・マレブ」『Subsequence』3: 19。

2020 「コロナ時代の民族誌映画祭」『月刊みんぱく』44(12): 18-19。

2021 「このごろ通信 先客の歩行」『毎日新聞』1月4日夕刊。

2021 「このごろ通信 曾祖父とヒル」『毎日新聞』1月18日夕刊。

2021 「このごろ通信 むめり」『毎日新聞』1月25日夕刊。

2021 「このごろ通信 鳥の歌声の旅」『毎日新聞』2月1日夕刊。

2021 「このごろ通信 標」『毎日新聞』2月8日夕刊。

2021 「このごろ通信 伝承」『毎日新聞』2月15日夕刊。

2021 「このごろ通信 さずかる」『毎日新聞』2月22日夕刊。

2021 「このごろ通信 写す」『毎日新聞』3月1日夕刊。

2021 「このごろ通信 私の中の野生」『毎日新聞』3月8日夕刊。

2021 「このごろ通信 牛の聴力」『毎日新聞』3月15日夕刊。

2021 「このごろ通信 海と浜のあわい」『毎日新聞』3月22日夕刊。

2021 「このごろ通信 土に還る」『毎日新聞』3月29日夕刊。

◎映像音響メディアによる業績

・DVD・CDなどの制作・監修

川瀬 慈 監修

2021 『みんぱく映像民族誌 第38集 アシェンダ! ——エチオピア北部地域社会の女性のお祭り』(日本語、アムハラ語、ティグライ語・38分)

◎口頭発表・展示・その他の業績

・民博研究懇談会

2021年3月10日 「映像話法の方法論」

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年12月21日 「アフリカ無形文化の記録をめぐる課題——エチオピア音楽・芸能の映像人類学研究の事例より」文化遺産国際協力コンソーシアム第15回アフリカ分科会、オンライン開催

・研究講演

2020年7月12日 「蝕のイメージ、創発のコロナ、グローヴのアフリカ」本屋ルヌガンガ

2020年11月11日 「歌を通して世界を多層的に読み替える」一般社団法人エチオピア・アートクラブ、オンラインとのハイブリッド開催

2020年11月21日 「映像話法の理論と実践」(Tokyo Art Research Lab 東京プロジェクトスタディ) アーツカウンスル東京、アーツ千代田 3331

2020年12月16日 「芸能から世界を多層的に見つめる——映像人類学からの考察1」NHK文化センター京都、オンライン開催

2021年1月11日 「芸能から世界を多層的に見つめる——映像人類学からの考察2」NHK文化センター京都、オンライン開催

2021年2月14日 「マタギと人類学者——自然と社会の〈距離〉を考える」第51回マルチスピーシーズ人類学研究会、マルチスピーシーズ人類学研究会、オンラインとのハイブリッド開催

2021年2月15日 「言葉の鳥はどこまで飛べるか」明治大学理工学部批評理論研究室、オンライン開催

2021年2月17日 「芸能から世界を多層的に見つめる——映像人類学からの考察3」NHK文化センター京都、オンライン開催

・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

2020年9月1日 「東京ドキュメンタリー映画祭 in 大阪 民族誌映画・川瀬 慈作品集」neoneo編集室、シアターセブン

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

「地域文化学基礎演習 I」、「地域文化学基礎演習 II」、「比較文化学基礎演習 I」、「比較文化学基礎演習 II」

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「アフリカの無形文化を対象にした民族誌映画の制作による応用映像人類学的研究」研究代表者、文化庁2020年度大学における文化芸術推進事業「今を生きる人々と育む地域芸能の未来——『保存』から『持続可能性』への転換を志向する場の形成と人材育成」（研究代表者：向井大策（沖縄県立芸術大学））メンバー

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

International Society for Ethnology and Folklore (SIEF) Selection Committee, Film Program, the 15th Congress of the SIEF 2021, Helsinki, International Union of Anthropological and Ethnological Sciences (IUAES) Scientific Committee, IUAES 2021 Congress in Yucatán (México), The 15th German International Ethnographic Film Festival, Jury, The Intercultural Institute of Comparative Music Studies (IISMC), Giorgio Cini Foundation, Jury, Carpitella Fellowship 2020、公益社団法人全日本郷土芸能協会世界無形文化遺産フェスティバル2020招聘団体選考委員、日本文化人類学会第28・29期日本文化人類学会学会誌編集委員

◎学会の開催

2020年6月26日 “The Image-making from Africa, Part 1-Perspectives from Visual Anthropology-”, Anthrofilm Laboratory, オンライン開催

2021年3月16日 “The Image-making from Africa, Part 2-Perspectives from Visual Anthropology-”, Anthrofilm Laboratory, オンライン開催

菊澤律子 [きくさわ りつこ]——— 准教授

1967年生。【学歴】 東京大学文学部文科三類言語学専修課程卒（1990）、東京大学大学院人文科学研究科言語学専攻修士課程修了（1993）、東京大学大学院人文科学研究科言語学専攻博士課程退学（1995）、ハワイ大学大学院言語学部言語学専攻博士課程修了（2000）【職歴】 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手（1995）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授（2000）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2005）、総合研究大学院大学人文科学研究科准教授（2006）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部准教授（2017）【学位】 Ph. D. (Linguistics)（ハワイ大学2000）、文学修士（言語学）（東京大学 1993）【専攻・専門】 言語学、音声言語と手話言語の対照言語学、記述言語学、歴史（比較）言語学、言語類型論、オーストロネシア語族、歴史（比較）統語論、フィジー語諸方言、マラガシ語諸方言、オセアニアの先史研究、ヒトの移動誌、動植物のドメスティケーション、文化接触・文化交流、言語情報と地理情報システム（GIS）【所属学会】 日本言語学会、日本オセアニア学会、Association of Linguistic Typology、Australian Linguistic Society、日本歴史言語学会、The Philological Society (UK)、日本展示学会、International Society for Historical Linguistics、日本手話学会、Sign Language Linguistics Society、関西言語学会

【主要業績】

[単著]

Kikusawa, R.

2003 *Proto Central Pacific Ergativity: Its Reconstruction and Development in the Fijian, Rotuman and*

Polynesian Languages. Canberra: Pacific Linguistics.

[編著]

Kikusawa, R. and L. A. Reid (eds.)

2013 *Historical Linguistics, 2011: Selected papers from the 20th International Conference on Historical Linguistics, Osaka, 25-30 July 2011* (Current Issues in Linguistic Theory 326). Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

[論文]

Kikusawa, R. and K. A. Adelaar

2014 Malagasy Personal Pronouns: A Lexical History. *Oceanic Linguistics* 53(2): 480-516.

【受賞歴】

2015 2014年度学融合推進センター公開研究報告会学融合推進センター賞

2014 2013年度学融合推進センター公開研究報告会学融合推進センター賞

2009 ラルフ・チカト・ホンダ優秀研究者賞

2008 第4回日本学術振興会賞

2005 第4回日本オセアニア学会賞

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

フィジー諸言語の発達史研究における地理情報システム (GIS) の応用

・研究の目的、内容

科学研究費 (国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化 (B))) の三年度目として、フィジー語諸方言データの地理情報システム (GIS) 化の成果を活用し、言語情報とその地理情報を組み合わせることで、引き続き、当該言語の史の変遷についてどのような研究ができるのか、その手法の研究を行う。

GISは近年、考古学や歴史学等の人文科学系分野にも応用されるようになり、成果をあげているが、言語データへの適用は限られている。その理由のひとつに、言語データはその分布域の特定が難しく、そもそも地図上にデータを落とすことが困難であることに加え、その手続きを踏むことの利点が見えにくいことがあげられる。特に、言語データの比較がマクロレベルで行われる場合には、地理情報・地形情報と言語との結びつきはゆるやかであり、人間の目でみて分析することができた。ところが、近年、現地調査による詳細なデータが報告されるに従い、ミクロレベルでの比較再建が必要となってきた。言語は、垂直伝播と水平伝播が入り組んで発達するが、今のところ、これらを組み合わせて動的な史の変遷の模様を解明するツールはない。これを、地面情報を媒介とし、音対応、語彙や文法現象の共有・非共有といった言語情報と、地形や行政や文化にかかわる区域を組み合わせた分析を可能にすることで、新しい研究手法に結び付けられる可能性があると考えている。昨年度ウェブ上で稼働するベータ版を完成したことから、データのギャップが明らかになった。今年度はそれらのさらなる整備を最優先に進めつつ、ウェブ版をも利用しながら研究手法に関するさらなる検討を進め、合わせて理論的な裏付けについても取り組む。また、国際共同研究、学際共同研究の一例として、課題や解決法について発生の都度、報告をまとめること、また、地図として成果物の博物館展示への応用や社会還元の方法などについても検討することで、学界および社会貢献にも結び付ける。

・成果

今年度はコロナ禍の影響で個人レベルでもチームレベルでも、予定を立てるのが難しかったため、基礎データの整備を進めた。フィジー諸方言 GIS データとして完成公開したβ版 (<https://arcgis/1my5L5>) を見直し、抜けや不統一な部分の整備を行った。また、構築段階で得られなかったデータの追加を行った。さらに、このシステムに手書きの地図を取り込む手法を検討し、2021年度にスタートできるよう準備を進めた。

◎出版物による業績

[論文]

Kikusawa, R.

2020 Conducting Syntactic Reconstruction of Languages with No Written Records. In E. Luján, J. Barðdal and S. Guildea (eds.) *Reconstruction Syntactic* (Brill's Studies in Historical Linguistics 11), pp.108-161. Leiden: Brill. [査読有]

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（2人）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「手話翻訳システム構築を目指した手話対話における文単位の認定」（研究代表者：坊農真弓（国立情報学研究所）研究分担者、科学研究費（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B）））「時空間を融合する——GISと数理モデルを用いた新たな言語変化へのアプローチ」研究代表者、科学研究費（基盤研究（C））「日本手話、台湾手話、韓国手話における語と意味の歴史変化の解明」（研究代表者：相良啓子）研究分担者

- ・民間の奨学金及び助成金からのプロジェクト

日本財団助成金「手話言語学研究部門の設置および手話言語学事業の推進」研究代表者

◎社会活動・館外活動

- ・他の機関から委嘱された委員など

Virtual Conference: Language, Communication and Education 学術評価委員、Scientific Committee member、日本言語学会常任委員、大阪大学2017-2019年度全学教育リレー講義「手話の世界と世界の手話言語入門」コーディネーター、Brill's Studies in Historical Linguistics 編集顧問委員、Journal of Historical Linguistics 編集顧問委員、Journal of Historical Syntax 編集顧問委員、International Society for Historical Linguistics (ISHL) 国際歴史言語学会理事

丸川雄三 [まるかわ ゆうぞう] ————— 准教授

【学歴】 東京工業大学理学部応用物理学科卒（1996）、東京工業大学大学院理工学研究科地球惑星科学専攻修士課程修了（1998）、東京工業大学大学院情報理工学研究科計算工学専攻博士課程単位取得退学（2001）【職歴】 東京工業大学精密工学研究所助手（2001）、科学技術振興機構CREST研究員（2003）、国立情報学研究所高野明彦研究室特任助手（2004）、人間文化研究機構本部プロジェクト研究員（2006）、国立情報学研究所連想情報学研究開発センター特任助手（2006）、国立情報学研究所連想情報学研究開発センター特任准教授（2007）、国際日本文化研究センター文化資料研究企画室准教授（2012）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2013）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部准教授（2017）【学位】 博士（工学）（東京工業大学大学院 2003）、修士（理学）（東京工業大学大学院 1998）【専攻・専門】 文化財情報発信、連想情報学【所属学会】 アート・ドキュメンテーション学会

【主要業績】

[論文]

丸川雄三

2018 「美術関係資料アーカイブズにおける情報管理発信システムの研究」『アート・ドキュメンテーション研究』25：3-17。[査読有]

2017 「ミュージアムの情報発信力を高める文化遺産オンラインの活用法」『情報の科学と技術』67(12)：628-632。[査読有]

丸川雄三・阿辺川武

2010 「横断的連想検索サービス『想——IMAGINE』——データベース連携が拓く新たな可能性」『情報管理』53(4)：198-204。

【受賞歴】

2011 文部科学大臣表彰科学技術賞（理解増進部門）

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

- ・研究課題

連想情報学に基づく文化財情報発信に関する研究

- ・研究の目的、内容

連想情報学とは、情報システムを、データと利用者を含む統合的な「場」として扱う考え方であり、発信対象の特性に応じた情報発信手法を主な研究対象としている。本研究課題においては、このうち文化財情報を対象に、データ処理技術および情報検索技術、ユーザインタフェースなどの研究開発を行う。

2020年度は、文化庁の「文化遺産オンライン」、国立映画アーカイブの「日本アニメーション映画クラシックス」、奈良国立博物館の「法隆寺金堂壁画写真ガラス原板」デジタルビューアなど、これまで国立情報学研究所高野明彦研究室と共同で進めてきた文化財情報の活用と発信に関する研究を継続して進める。あわせて美術情報分野を中心とする制作者データベースとその発信環境の研究開発を実施する。この研究は科学研究費（基盤研究（B））「ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合」（研究代表者：丸川雄三）の助成を受け実施してきたものであるが、研究成果をふまえ今年度も継続して研究を進める。

- ・成果

連想情報学に基づく文化財情報発信に関する研究として、国立情報学研究所と文化庁が共同で運営する文化財ポータルサイト「文化遺産オンライン」の開発に参画し、サイトリニューアルのための企画と構成を進めた。この研究に関連して、2020年11月に刊行された書籍『アートシーンを支える』（デジタルアーカイブ・ベーシック4：勉誠出版）に「文化遺産オンライン試験公開版の構築」が掲載された。またデジタル技術を活用した展示場情報発信の研究として、国立情報学研究所と奈良国立博物館の共同研究に参画し、2020年7月22日に一般公開されたウェブサイト「法隆寺金堂壁画写真ガラス原板デジタルビューア」の制作取りまとめをおこなった。美術情報分野の情報統合手法の研究については、ウェブサイト「『みづゑ』の世界」の公開に向けた準備を進め、成果の一部を2020年10月に東京文化財研究所で開催された研究会で発表した。その他に研究資料の情報を公開するための研究に取り組み、成果の一部を2020年5月に刊行された学会誌『アート・ドキュメンテーション研究』で公表した。

- ◎出版物による業績

[分担執筆]

丸川雄三

2020 「文化遺産オンライン試験公開版の構築」高野明彦監修・嘉村哲郎責任編集『アートシーンを支える』（デジタルアーカイブ・ベーシック4）pp.233-248, 東京：勉誠出版。[査読有]

[論文]

丸川雄三

2020 「研究資料デジタルアーカイブズの活用におけるウェブシステムの研究——身装画像データベース公開用ウェブAPIの設計と詳細」『アート・ドキュメンテーション研究』27・28：62-74。

- ◎口頭発表・展示・その他の業績

- ・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2020年5月17日 「データベースと編集機能を用いた写真整理の支援」DiPLAS公開セミナー『埋もれた写真を掘り起こす——データベースを用いた整理術の開発と応用』オンライン開催

- ・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年6月27日 「デジタルアーカイブズの活用研究——テーマ型情報展示で広がる学びの可能性」アート・ドキュメンテーション学会シンポジウム『芸術文化資源デジタル・アーカイブの国際的共同利用——オンライン環境での知的生産システムとそのツール』オンライン開催

2020年6月28日 「文化財デジタルアーカイブズの持続可能な発信環境の研究——文化遺産オンライン試験公開版の負荷分散システムを例に」第31回アート・ドキュメンテーション学会年次大会、オンライン開催

2020年10月8日 「近代美術研究における関係資料の発信と活用」東京文化財研究所文化財情報資料部2020年度第4回研究会、東京文化財研究所

- ・展示

2020年9月3日～12月1日 「梅棹忠夫生誕100年記念企画展『知的生産のフロンティア』」国立民族学博物館

- ・みんなくウィークエンド・サロン

2020年9月27日 「デジタル技術でみる『梅棹忠夫アーカイブズ』」第571回みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

1979年生。【学歴】東京外国語大学外国語学部ウルドゥー語学科卒（2003）、東京外国語大学大学院地域文化研究科アジア第三専攻博士前期課程修了（2007）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程単位取得退学（2012）【職歴】国立国語研究所言語対照研究系プロジェクト奨励研究員（2013）、日本学術振興会特別研究員PD（2013）、東京外国語大学世界教養プログラム非常勤講師（2013）、国立民族学博物館民族社会研究部助教（2014）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部助教（2017）、神戸大学国際教養教育院非常勤講師（2017）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部准教授（2019）【学位】博士（学術）（東京外国語大学 2012）、修士（言語学）（東京外国語大学 2007）【専攻・専門】言語学 記述言語学、ブルシャスキー語、ドマーキ語、カティ語、南アジア（パキスタン）研究【所属学会】日本言語学会、日本南アジア学会、Societas Linguistica Europaea

【主要業績】

[論文]

吉岡 乾

2020 「ブルシャスキー語の名詞修飾表現」ブラシャント・バルデシ，堀江薫編『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』pp.515-534，東京：ひつじ書房。[査読有]

Yoshioka, N.

2019 The Decay and Reconstruction of Nominal Classes in Srinagar Burushaski. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 44(2): 239-254. [査読有]

2017 Nominal Echo-Formations in Northern Pakistan. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 41(2): 109-125. [査読有]

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

北パキスタン諸言語の記述言語学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、系統的孤立語であるブルシャスキー語、北パキスタンの消滅の危機に瀕した言語であるドマーキ語を中心にしつつ、カティ語、カラーシャ語、コワール語、シナー語、パシトー語、カシミリー語といった周辺言語も併せて、現地調査によって得られたデータを基に言語記述をしていくことを目的とする。

・成果

世界的な COVID-19の流行に伴い、2020年度は現地調査に赴くことが適わなかった。

研究の成果として、1月にカティ語に関連したジャーナル論文（英語）を発表した。ブルシャスキー語に関する論文（日本語）を寄稿した名詞修飾表現に関する論文集が5月に刊行された。フィールド言語学と多様性に関するシンポジウムでの基調講演を1本、その他、様々な研究会での発表を行った。

◎出版物による業績

[分担執筆]

吉岡 乾

2021 「味の表現」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.522-523，東京：丸善出版。

2021 「南アジア地域の食文化——パキスタン」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.586-588，東京：丸善出版。

[論文]

吉岡 乾

2020 「ブルシャスキー語の名詞修飾表現」ブラシャント・バルデシ，堀江 薫編『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』pp.515-534，東京：ひつじ書房。[査読有]

Yoshioka, N.

2021 Nominal Echo Formations in Kati: In the Context of Languages of Northern Pakistan. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 45(3): 429-440. [査読有]

[その他]

吉岡 乾

2020 「熱帯雨林での死——辛抱強く、迷い多く、しかし一種の愛情を込めて、綴る」『週刊読書人』4月10日。

2020 「どうしてなお、現地へ調査に行き続けるのか」『じんぶん堂』(<https://book.asahi.com/jinbun/article/13488640>)。

2020 「時代を読む、ラベルも読む」『LOCKET』4:30-31。

2020 「口ずさみたい世界の幸せな言葉」『PHP スペシャル』265:50-55。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機構の連携研究会での報告

2020年11月23日 「パキスタン北部における味覚認識の言語人類学的論攷」アジアにおける「エコヘルス」研究の新展開、国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年9月22日 「多様さとフィールド言語学」『フィールド言語学とフィールド言語学者のダイバーシティ』北海道大学

2020年10月10日 ‘Stop Series in South Asia.’ アジア・アフリカ地理言語学研究2020年度第1回研究会、オンライン開催

・みんぱくウィークエンド・サロン

2021年3月14日 「今日からは話せない！ ブルシャスキー語門前講座」第589回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1人）、特別共同利用研究員の研究指導教員（1人）

・大学院ゼミでの活動

「地域文化学基礎演習Ⅰ」、「地域文化学基礎演習Ⅱ」、「比較文化学基礎演習Ⅰ」、「比較文化学基礎演習Ⅱ」、テーマシリーズ講義「言語をフィールドワークする」

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B）））「時空間を融合する——GISと数理モデルを用いた新たな言語変化へのアプローチ」（研究代表者：菊澤律子）研究分担者、人間文化研究機構広域連携型「文明社会における食の布置」（研究代表者：野林厚志）メンバー、国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」（研究代表者：窪蘭晴夫）メンバー、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「『アルタイ型』言語に関する類型的研究（2）」（研究代表者：児倉徳和）メンバー、「アジア・アフリカ地理言語学研究」（研究代表者：遠藤光暁）メンバー、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究国立民族学博物館拠点（MINDAS）」（拠点代表者：三尾 稔）拠点構成員

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

National University of Modern Languages, Islamabad (Pakistan) 博士論文外国人審査委員 (foreign evaluator/thesis examiner)

末森 薫 [すえもり かおる]————— 助教

1980年生。【学歴】国際基督教大学教養学部人文科学科卒（2004）、筑波大学大学院芸術研究科世界遺産専攻修士課程修了（2006）、筑波大学大学院人間総合科学研究科世界文化遺産学専攻博士課程単位取得退学（2009）【職歴】国立文化財機構東京文化財研究所文化遺産国際協力センター客員研究員（2009）、国際協力機構大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト専門家（保存修復研修計画）（2010）、国立民族学博物館文化資源研究センター機関研究員（2014）、日本学術振興会特別研究員DC（2015）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部外来研究員（2017）、関西大学国際文化財・文化研究センターポスト・ドクトラル・フェロー（2017）、日本学術振興会特別研究員PD（2017）、

国立民族学博物館学術資源研究開発センター機関研究員（2018）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部助教（2020）国立民族学博物館グローバル現象研究部機関研究員（2020）【学位】博士（学術）（筑波大学大学院人間総合科学研究科 2018）、修士（学術）（筑波大学大学院 2006）【専攻・専門】文化財保存科学、中国仏教美術史、文化遺産学【所属学会】文化財保存修復学会、日本中国考古学会、日本文化財科学科、東アジア文化遺産保存学会、国際文化財保存学会（International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works）

【主要業績】

[著書]

末森 薫

2020 『敦煌莫高窟と千仏図——規則性がつくる宗教空間』京都：法蔵館。

[共編]

吹田 浩・末森 薫・肥後時彦・東濱直希・尼崎弥生・太田壺成・川崎智也編

2018 『国際的な文化遺産の保存・活用に関する総合的研究』大阪：関西大学国際文化財・文化研究センター。

[論文]

Sonoda, N., S. Hidaka, and K. Suemori

2018 Continuous Efforts over 10 Years for Storage Re-organization at the National Museum of Ethnology, Japan. *Preventive Conservation: The State of the Art, The International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works (IIC) 2018 Turin Congress Preprints* (Studies in Conservation) 63(1): 234-241.

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

光学的手法を用いた博物館資料の調査方法の開発

・研究の目的、内容

近年、LEDの開発が進み、さまざまな波長特性を持つ光源が入手できるようになってきた。また、画像化する機器も日々進化している。光源および画像化機器などを用いた光学調査法は、目では捉えられていない情報を可視化するなど、博物館の資料を調査する上で有効である。本研究では、博物館の現場において簡易に使用することのできる光学調査法の開発を進める。

本年度は、資料保存の観点から、カビ発生の早期発見に資する光学調査法の開発を進めた。具体的には、カビの発生が見られる資料を対象に、さまざまな光源を用いた光学撮影、デジタルカメラ・デジタル顕微鏡を用いた高倍率画像撮影、資料から採取したカビのプレパラートの作成・透過画像撮影をおこなった。また、絵画資料などが有する彩色情報の可視化を目的として、さまざまな波長特性を有する光源を用いた光学撮影、ハイパースペクトル画像撮影を実施した。

・成果

カビが付着した資料を対象として、さまざまな光源を用いた光学撮影をおこなった結果、近紫外光や青色LEDを用いた撮影画像がカビの発生分布の可視化に有効であることを確認した。また、カビかどうか疑わしい物質を確認する場合、デジタルカメラのマクロモードで撮影した画像によりある程度の判別が行えることが確認された。また、高倍率画像はクリーニング後におけるカビの付着状況の確認をおこなうのに有用であった。本成果の一部について、民博共同研究「博物館における持続可能な資料管理および環境整備——保存科学の視点から」（研究代表者：園田直子）の成果物に掲載予定である。

本館の共同利用型科学分析室において実施した、滋賀県有形文化財「馬見岡綿向神社祭礼渡御図絵馬」を対象とする調査では、撮影と画像処理の方法を工夫することにより、修復前後における画面状態の差異などを可視化した。本成果については、文化財保存修復学会第43回大会（2021年度、紙上開催）で発表をおこなう。また、科学研究費（基盤研究（B））「再現模写・仮想空間構築による敦煌莫高窟千仏壁画が有する規則的描写の複合的評価」の助成を受けた研究では、彩色を再現した敦煌莫高窟の千仏壁画のハイパースペクトル画像を取得するとともに、光源を選択できる輝度変化プログラムを作成し、特性の異なる光源で照射したときの見え方の差異を擬似的に可視化した。本成果については、日本文化財科学会第38回大会（2021年9月、オンライン開催）で発表をおこなう。

その他、これまでにおこなってきた光学撮影調査に関する成果について、特別展「復興を支える地域の文化

——3.11から10年」(2021年3月4日～5月18日)のパネルおよび図録、分担執筆した書籍『継承される地域文化 災害復興から社会創発へ』(日高真吾編、臨川書店、2021年3月)にまとめた。

◎出版物による業績

[分担執筆]

末森 薫

- 2021 「光学撮影が明らかにした地域文化」国立民族学博物館編『復興を支える地域文化——3.11から10年』pp.77-81, 大阪：国立民族学博物館。
- 2021 「新潟県十日町市で発見された越後縮『御召縮』関連資料の解説支援」日高真吾・黄 貞燕編『地域文化を活用する——地域振興、地域活性に果たす役割』pp.143-158, 大阪：大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立民族学博物館日高真吾研究室。
- 2021 「民俗文化財の光学撮影調査」日高真吾編『継承される地域文化——災害復興から社会創発へ』pp.210-223, 京都：臨川書店。[査読有]

[論文]

末森 薫

- 2020 「敦煌莫高窟初唐窟に描かれた千仏図の研究」『鹿島美術研究年報別冊』37：427-437。
- 2020 「敦煌莫高窟北周時代の石窟空空間構成——解析図案展示的方向性」『芸術学界』24：103-153。[査読有]
- Liu, C., K. Suemori, Q. Li, Y. He, F. Wang, H. Kang
2020 Deterioration Caused by A New Support Layer Bonded with Epoxy Adhesive to the Mural Paintings at Fengguo Temple in Yixian, Liaoning, China. *Studies in Conservation* 65(P1): 187-191. [査読有]

[その他]

末森 薫

- 2021 「シルクロードに生きた人びとの歴史ものがたり」『月刊みんぱく』45(1)：18-19。
- 2021 「特別展『復興を支える地域の文化——3.11から10年』——十日町で発見された包紙文書」『みんぱく e-news』237：巻頭コラム。
- 2021 「天水麦積山石窟東崖面の造営年代の再考——建築遺構を手掛かりとして」『日本中国考古学会2020年度大会 予稿集』pp.111-120。
- 末森 薫・正垣雅子・高林弘実・張 梁・園田直子・日高真吾
2020 「敦煌莫高窟に描かれた規則性を備える千仏図の再現」『文化財保存修復学会第42回大会研究発表集』pp.214-217。
- 末森 薫・劉 成・王 琚・劉 逸堃・安室喜弘
2020 「中国義県・奉国寺大雄殿に描かれた壁画のハイパースペクトル画像解析」『日本文化財科学会第37回大会研究発表要旨集』pp.310-311。
- 園田直子・日高真吾・末森 薫・河村友佳子・橋本沙知・西澤昌樹・和高智美
2020 「国立民族学博物館における収蔵庫の防災・減災対策——2018年の大阪府北部地震を受けて」『文化財保存修復学会第42回大会研究発表集』pp.298-301。
- 日高真吾・園田直子・末森 薫・河村友佳子・橋本沙知・和高智美
2020 「3Dスキャナーで製作した複製品の活用事例——ユニヴァーサル・ミュージアムの実現を目指して」『文化財保存修復学会第42回大会研究発表集』pp.266-269。
- 河村友佳子・日高真吾・園田直子・末森 薫・橋本沙知・和高智美・桂田峰男
2020 「滋賀県米原市所在の壽山組山倉における温湿度環境の調査」『文化財保存修復学会第42回大会研究発表集』pp.446-449。
- 橋本沙知・園田直子・日高真吾・末森 薫・河村友佳子・柴切弥生・西澤昌樹・和高智美
2020 「性能や調湿条件の異なる展示ケース内の温湿度環境——国立民族学博物館の事例より」『文化財保存修復学会第42回大会研究発表集』pp.256-259。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2020年7月10日 「3Dスキャナーで制作した複製品の活用事例——ユニヴァーサル・ミュージアムの実現を目指して」文化財保存修復学会第42回大会

- 2020年7月10日 「国立民族学博物館における収蔵庫の防災・減災対策——2018年の大阪北部地震を受けて」文化財保存修復学会第42回大会
- 2020年7月10日 「性能や調湿条件の異なる展示ケース内の温湿度環境——国立民族学博物館の事例より」文化財保存修復学会第42回大会
- 2020年7月10日 「敦煌莫高窟に描かれた規則性を備える千仏画の再現」文化財保存修復学会第42回大会
- 2020年7月10日 「滋賀県米原市所在の壽山組山倉における温湿度環境の調査」文化財保存修復学会第42回大会
- 2020年9月5日 「中国義県・奉国寺大雄殿に描かれた壁画のハイパースペクトル画像解析」日本文化財科学会第37回大会、オンライン開催
- 2020年11月2日 'Deterioration Caused by a New Support Layer Bonded with Epoxy Adhesive to the Mural Paintings at Fengguo Temple in Yixian, Liaoning, China.' The International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works (IIC) 2020 Edinburgh Congress, Edinburgh, Scotland
- 2021年1月9日 「天水麦積山石窟東崖面の造営年代の再考——建築遺構を手掛かりとして」日本中国考古学会2020年度大会、オンライン発表
- 2021年1月28日 「博物館における文化遺産活用のためのICT」第25回関西大学先端科学技術シンポジウム、オンライン開催

・展示

2021年3月4日～5月18日 「復興を支える地域の文化——3.11から10年」国立民族学博物館

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「再現模写・仮想空間構築による敦煌莫高窟千仏図が有する規則的描写の複合的評価」研究代表者、科学研究費（基盤研究（B））「セルロースナノファイバー塗工法による脆弱化した酸性紙資料の大量強化処理の開発」（研究代表者：園田直子）研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「教育資源・観光資源としての地域文化遺産の活用と保存」（研究代表者：日高真吾）研究分担者、人間文化研究機構広域連携型「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」メンバー、関西大学先端科学技術推進機構「文化遺産の修復、維持管理のためのICT技術研究グループ」メンバー

飯泉 菜穂子 [いづみ なおこ]——— 特任教授

【学歴】早稲田大学法学部卒（1985）、お茶の水女子大学家政学研究科修士課程修了（1989）【職歴】日本アイビーエム株式会社入社（本社人事部）（1989）、NHK 手話ニュースキャスター（1990）、フリーランス手話通訳、手話講師（1993）、学校法人大東学園・世田谷福祉専門学校手話通訳学科および手話通訳専攻学科学科長（2002）、国立民族学博物館先端人類科学研究部特任准教授（2016）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部特任教授（2017）【学位】家政学修士（お茶の水女子大学、1989）【専攻・専門】手話通訳論、手話通訳養成【所属学会】日本通訳翻訳学会、日本手話通訳士協会、全国手話通訳問題研究会

【主要業績】

[著書]

飯泉 菜穂子

2013 「手話通訳士専門養成機関（世田谷福祉専門学校）における養成について」『手話通訳士試験の在り方等に関する検討会』pp.64-72。

[共著]

小谷 眞男・下城 史江・飯泉 菜穂子

2011 「新しいレバラルーツとしての日本手話 お茶の水女子大学における『手話学入門』導入の経験から」『手話学研究』20：19-38。

[映像教材]

飯泉 菜穂子

1995 『DVD で学ぶ手話入門講座』<http://www.hj.sanno.ac.jp/ps/course/4092>（構成、テキスト・スクリプト執筆、演出、ナビゲーターとしての出演）産業能率大学通信教育講座。

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

学術手話通訳者養成の実践とカリキュラムの検討および検証

相良啓子 [さがら けいこ] ————— 特任助教

【学歴】 筑波大学大学院教育研究科障害児教育専攻修士課程修了（1999）、英国セントラル・ランカシャー大学国際手話ろう文化学研究所大学院 MPhil 修士課程修了（2014）【職歴】 株式会社 JTB 首都圏新橋支店営業三課バリアフリーツアー推進担当（2002）、英国セントラル・ランカシャー大学国際手話ろう文化学研究所研究官（2010）、国立民族学博物館プロジェクト研究員（2014）、国立民族学博物館特任助教（2016）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部特任助教（2017）【学位】 手話言語学修士（M. Phil.）（セントラル・ランカシャー大学国際手話言語学・ろう者学研究所（iSLanDS）2014）、修士（筑波大学大学院教育研究科障害児教育専攻 1999）【専攻・専門】 手話言語学類型論・聴覚障害児教育【所属学会】 日本手話学会、日本言語学会、日本歴史言語学会、社会言語科学会

【主要業績】

[編著]

Zeshan, U. and K. Sagara (eds.)

2016 *Semantic Fields in Sign Languages: Colour, Kinship and Quantification*. Berlin: Mouton de Gruyter & Nijmegen: Ishara Press.

[論文]

Sagara, K. and U. Zeshan

2016 A Comparative Typological Study. In U. Zeshan, and K. Sagara (eds.) *Semantic Fields in Sign Languages: Colour, Kinship and Quantification*, pp.3-37. Berlin: Mouton de Gruyter & Nijmegen: Ishara Press.

Nonaka, A., K. Mesh, and K. Sagara

2015 Signed Names in Japanese Sign Language: Linguistic and Cultural Analyses. *Sign Languages Studies* 16(1): 57-85.

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本手話、台湾手話、韓国手話における語と意味の歴史変化の解明

・研究の目的、内容

本研究の目的は、歴史的に関連がある日本手話、台湾手話、韓国手話（日本手話ファミリー）の語や表現における意味および用法の変化を明らかにし、これら3つの手話言語における史の変遷を体系的に示すことである。本研究は、4年度計画の3年目に入る。まず、1年目に作成したデータを、Global Signbankに登録して基盤データを作成する。次に、対象となる語の音韻および形態の情報を記述し検索することを可能とする。これによって、同じ形の語がもつ言語的特徴を横断的に抽出できるようにする。同時に、意味・概念の変化についてのデータ収集の準備に取りかかる。データ収集の構想が整った後、3手話それぞれについて、80才以上と30代から40代の話者、それぞれ2組ずつの会話を通して、文脈による語彙の使い方や意味の違いに焦点をあてたデータの収集を行う。言語変化を知る手がかりとして、言語のバリエーションを分析する重要性が知られており、歴史的に関連があるといわれている地域および日本統治時代を生きた話者に協力を得られる地域を対象として調査を行う。本年は、東京と大阪の他、熊本など、語の意味の変化についての記録がある変種も含めて収集する。

・成果

本年度は、Global Signbankへの登録作業を進め、日本手話203語、台湾手話180語、韓国手話119語、計502語を登録した。登録した語彙は、親族表現、数詞表現、地域による表現の違いがある語彙、表現は同じだが各言語によって意味に違いがあると思われる語彙とした。コロナ禍において、本年度はフィールド調査を行うことができなかったが、これまでに収集した語彙の整理を行い、一部論文にまとめた。

2020年7月に発刊された *Macro and micro-social variation in Asia-Pacific sign languages* 第6巻第1号に、

“Variation in the numeral system of Japanese Sign Language and Taiwan Sign Language: A comparative sociolinguistics study” が掲載された。9月には、イギリスのセントラルランカシャー大学で行われた第28回日本語／韓国言語学会（JK28）にて、“Sign Language in Japan, South Korea and Taiwan” について、オンラインによる招待講演を行った。次年度は、文脈による語彙の使い方や意味の違いに焦点をあてたデータの収集を行い、更なる分析を深めていきたい。

◎出版物による業績

[論文]

Sagara, K. and N. Palfreyman

2020 Variation in the Numeral System of Japanese Sign Language and Taiwan Sign Language: A Comparative Sociolinguistics Study. In N. Palfreyman(ed.) *Macro and micro-social variation in Asia-Pacific sign languages*, pp.119-150. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

Nonaka, A., J. Ann, and K. Sagara

2020 Linguistic and cultural design features of sign language in Japan. *Visible Language* 54(1-2): 30-65. [査読有]

超域フィールド科学研究部

林 勲男 [はやし いさお] 部長（併）教授

【学歴】立教大学文学部史学科卒（1980）、立教大学大学院文学研究科地理学修士課程修了（1983）、一橋大学大学院社会学研究科地域社会研究専攻博士課程単位取得退学（1992）【職歴】シドニー大学人類学科客員研究員（1992）、国立民族学博物館第4研究部助手（1994）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科准教授（2001）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2012）、国立民族学博物館人類文明誌研究部教授（2017）、国立民族学博物館人類文明誌研究部研究部長（2017）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授（2018）、総合研究大学院大学文化科学研究科教授（2018）、国立民族学博物館学術資源研究開発センターセンター長（2018）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部教授（2019）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部研究部長（2019）【学位】文学修士（立教大学大学院文学研究科 1983）【専攻・専門】社会人類学 パプアニューギニアにおける社会組織と世界観に関する研究、オセアニア近代史の人類学的研究、自然災害への対応に関する人類学的研究【所属学会】日本文化人類学会、日本オセアニア学会、地域安全学会、日本災害復興学会、The International Union of Anthropology and Ethnological Sciences (IUAES)、Japan Anthropology Workshop (JAWS)

【主要業績】

[編著]

林 勲男編

2016 『災害文化の継承と創造』京都：臨川書店。

2010 『自然災害と復興支援』（みんぱく実践人類学シリーズ9）東京：明石書店。

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

災害の想起における媒体の役割——遺構・モニュメント・語り継ぎ

・研究の目的、内容

大規模災害の被災地では、遺構や遺物の保存・公開、モニュメントの建立、被災体験の語り継ぎなどによって、被災経験を後世に継承していかうとの活動が生まれる。その一方で、こうした活動は、被災の苦悩や悲痛さを喚起するものとして、反対もしくは距離を置く人びとも存在する。本研究は、大規模災害の集合的記憶を、物を介して保存・伝承（物象化）したり、言葉により語り継いだりしていく（物語化）活動をプロセスとして、それぞれの地域社会の動態の中で捉える。今年度は、記憶と物質性と語りの関係について先行研究を整理するとともに、東日本大震災の被災地と元禄地震津波の被災地で現地調査を予定している。調査には、科学研究費（基

盤研究 (A)「災害の想起における媒体の役割——遺構・モニュメント・語り継ぎ」(研究代表者: 林 勲男)を当てる。

・成果

千葉県房総半島太平洋岸での元禄地震津波に関わる石碑等の調査に基づき、民博の「寺社・石碑データベース」に新たなデータを記載するとともに、特別展「復興を支える地域の文化——3.11から10年」の図録に「和歌山における津波の記憶」を、調査データの一部を利用して寄稿した。2021年2月刊行の *Journal of Disaster Research (JDR)* Vol.16に、石原凌河との共著論文 'The Role of the "Mediator" in Sustainable Preservation and Utilization of Disaster Remains' (査読付き) が掲載された。また、2021年2月23日に開催された災害語り継ぎ研究会にて、2020年1月開催の世界災害語り継ぎフォーラムの成果である DRI 調査研究レポート2020-01『2020世界災害語り継ぎフォーラム——災害の記憶をつなぐ』と上記の *Journal of Disaster Research* の特集号に関するレビューを発表した。

◎出版物による業績

[論文]

林 勲男

2021 「和歌山における津波の記憶——和歌山県日神社『津波警告板』と濱口梧陵の功績」日高真吾編『復興を支える地域の文化——3.11から10年』pp.102-108, 大阪: 国立民族学博物館。

Hayashi, I.

2020 Introduction. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 45(1): 115-118. [査読有]

2021 The Role of the "Mediator" in Sustainable Preservation and Utilization of Disaster Remains —Report from the 2020International Forum on Telling Live Lessons from Disasters. *Journal of Disaster Research* 16(2): 176-181. [査読有]

[その他]

林 勲男

2021 「民博による郷土芸能の支援——仰山流笹崎鹿踊りの支援を中心に」『復興を支える地域の文化』pp.26-28, 大阪: 国立民族学博物館。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年12月6日 「被災地における民俗芸能の役割とそれへの支援——脆弱性とレジリエンスから考える」総研大文化フォーラム2020、シンポジウムテーマ『災いから考える文化のレジリエンス』オンラインとのハイブリッド開催

2021年2月23日 「2020世界災害語り継ぎフォーラムを振り返って」災害語り継ぎ研究会、オンラインとのハイブリッド開催

・展示

2021年3月4日～5月18日 「復興を支える地域の文化」国立民族学博物館

・広報・社会連携活動

2021年3月6日 「災害を後世に伝える——記録・供養・教訓」第510回国立民族学博物館友の会講演会、千里文化財団、オンライン開催

◎調査活動

・国内調査

2020年7月17日～7月20日—千葉県房総半島東海岸 (2011年東日本大震災及び過去の災害における津波被害と記録化に関する調査)

2020年10月22日～10月26日—千葉県房総半島太平洋沿岸 (元禄地震津波災害の石碑に関する調査)

2020年10月29日～11月2日—福島県浜通り (2011年東日本大震災に関する展示施設の視察)

2021年3月11日～3月14日—福島県会津若松市 (福島県立博物館にて開催中の企画展「震災遺産を考える——次の10年へつなぐために」視察と意見交換)

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費 (基盤研究 (A))「大規模災害に関する集合的記憶の物象化・物語化と防災教育」研究代表者、国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム「マイクロネシア文化資料のフォーラム型データベースの構築——

宇田川妙子 [うだがわ たえこ]——教授

1960年生。【学歴】 東京大学教養学部教養学科第一卒 (1982)、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了 (1984)、東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退学 (1990) 【職歴】 東京大学教養学部助手 (1990)、中部大学国際関係学部講師 (1992)、中部大学国際関係学部助教授 (1995)、金沢大学文学部助教授 (1998)、国立民族学博物館民族文化研究部准教授 (2002)、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部准教授 (2017)、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部教授 (2018) 【学位】 社会学修士 (東京大学大学院社会学研究科 1984) 【専攻・専門】 文化人類学 イタリアおよびヨーロッパ地域の人類学的研究、ジェンダーとセクシャリティ研究、ヨーロッパ近代をめぐる問題群 【所属学会】 日本文化人類学会、日本女性学会

【主要業績】

[単著]

宇田川妙子

2015 『城壁内からみるイタリア——ジェンダーを問い直す』 京都：臨川書店。

[共編]

宇田川妙子・中谷文美編

2016 『仕事の人類学——労働中心主義の向こうへ』 京都：世界思想社。

2007 『ジェンダー人類学を読む——地域別・テーマ別基本文献レビュー』 京都：世界思想社。

【2020年度の活動報告】

◎各研究

・研究課題

公共性と親密性の再検討と再編

・研究の目的、内容

本研究は、近年さらなる注目を浴びている公共性と親密性(私性)という概念を、理論的に再検討していくことによって、生産的な意味での再編・陶冶につなげていくことを目的とする。具体的には、まずは、これまでの社会科学理論等における両概念の変遷や背景、多様性などを探っていく一方で、個別事例としてはイタリア社会を取り上げて、公共性と親密性という概念・構図が孕む限界や可能性を考察しながら、この概念図式のさらなる再編を試みていくつもりである。今年度は、近年研究を重ねている食という観点からの調査研究をさらに進展させ、イタリアの事例を中心としながらも他との比較にもとづく考察へと発展させていく。

・成果

本年度は、昨年度同様、食の場面に着目して、イタリア以外の事例との比較を念頭に置きながら、グローバル化における公私の関係の再編に関する研究を行った。なお、その関心をさらに広げ、共同研究「戦争・帝国主義と食の変容——食と国家の関係を再考する」を代表者として組織し、研究会を開始した。

刊行物による主な成果は以下の通りである。

[刊行物]

*編著

2021 野林厚志、宇田川妙子、河合洋尚、濱田信吾 他編 『世界の食文化百科事典』 丸善出版。

*分担執筆

2021 「缶詰」、「消費と生産の提携」、「インターネットと食」、「イタリア料理」 野林、宇田川、河合、濱田他編 『世界の食文化百科事典』 丸善出版 (それぞれ、190-191頁、502-503頁、508-509頁、564-565頁)。

*その他

2020 「イタリアの若者たちはなぜ日本食が好きなのか」『vesta』(119)：16-17、味の素食の文化センター。「変化するイタリアの食 (1) ——グローバル化の波 (旅・いろいろ地球人)」、「変化するイタリアの食 (2) ——コロナ禍の共食 (旅・いろいろ地球人)」、「変化するイタリアの食 (3) ——日本食と若者たち (旅・いろいろ地球人)」『毎日新聞 (夕刊)』、「変化するイタリアの食 (4) ——#家で調理する (旅・いろいろ地球人)」、いずれも『毎日新聞 (夕刊)』12月5日、12日、19日、26日。

2021 「イタリアの日本食ブームの背後にあるもの」『月刊みんぱく』(2021.03)：10-11。

◎出版物による業績

[編著]

野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編

2021 『世界の食文化百科事典』東京：丸善出版。

[分担執筆]

宇田川妙子

2021 「缶詰」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.190-191, 東京：丸善出版。

2021 「消費と生産の提携」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.502-503, 東京：丸善出版。

2021 「インターネットと食」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.508-509, 東京：丸善出版。

2021 「イタリア料理」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.564-565, 東京：丸善出版。

[その他]

宇田川妙子

2020 「イタリアの若者たちはなぜ日本食が好きなのか」『vesta』119：16-17。

2020 「旅・いろいろ地球人 変化するイタリアの食① グローバル化の波」『毎日新聞』12月5日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 変化するイタリアの食② コロナ禍の共食」『毎日新聞』12月12日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 変化するイタリアの食③ 日本食と若者たち」『毎日新聞』12月19日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 変化するイタリアの食④ #家で調理する」『毎日新聞』12月26日夕刊。

2021 「イタリアの日本食ブームの背後にあるもの」『月刊みんぱく』45(3)：10-11。

2021 「戦争と食の多様な関係」『民博通信 Online』3：12-13。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2020年11月5日 「イタリアのパン・小麦から考える『主食』」『食生活から考える持続可能な社会——「主食」の形成と展開』オンラインとのハイブリッド開催

・広報・社会連携活動

2021年1月31日 「食とは何か——イタリアの日常生活から考える」吹田歴史文化まちづくり協会主催オンライン事業民博夜話イタリア編、吹田歴史文化まちづくりセンター浜屋敷

2021年2月1日 「世界のカーニバル 夢幻の街に仮面は輝き——イタリア・ベネチア スタジオゲスト」NHKBS プレミアムカフェ

2021年2月8日 「世界のカーニバル 地中海に春が来た！——フランス・ニース スタジオゲスト」NHKBS プレミアムカフェ

2021年2月15日 「世界の祭 炎のプリマベラ——スペイン バレンシアの火祭り スタジオゲスト」NHKBS プレミアムカフェ

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（2人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（挑戦的研究（開拓））「個別文化の標準化問題に関する文化人類学と会計学の学際的共同研究」（研究代表者：出口正之）研究分担者

樫永真佐夫 [かしなが まさお] ————— 教授

1971年生。【学歴】早稲田大学第一文学部日本文学専修卒（1994）、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻修士課程修了（1997）、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻（文化人類学コース）博士課程単位取得退学（2001）【職歴】日本学術振興会特別研究員（1997）、ベトナム民族学博物館客員研究員（1997）、放送大学学園非常勤講師（1999）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（2001）、国立民族学博物館民族社会研究部助教（2007）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2008）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2010）、総合研究大学院大学准教授併任（2012）、総合研究大学院大学教授併任（2016）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2016）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部教授（2017）【学位】学術博士（東京大学 2006）、学術修士（東京大学 1997）【専攻・専門】文化人類学（東南アジアにおけるタイ系民族の民族誌的研究）【所属学会】日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

樫永真佐夫

2013 『黒タイ歌謡「ソン・チュー・ソン・サオ」——村のくらしと恋』東京：雄山閣。

2011 『黒タイ年代記——「タイ・プー・サク」』東京：雄山閣。

2009 『ベトナムの祖先祭祀——家霊簿と系譜認識をめぐる民族誌』東京：風響社。

【受賞歴】

2010 第6回日本学術振興会賞

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

ベトナムにおける黒タイ文字と文書／東南アジアにおけるボクシングの文化人類学

・研究の目的、内容

ベトナム西北地方からラオス北部にかけて居住している盆地民、黒タイ（ベトナムではターイの地方集団として分類）の伝統文化の継承に焦点を当てた現地調査と文献調査に基づく民族誌的研究を継続する。

とくに黒タイ文化の独自性が近代以降にどのように構築され、現在に至るまでどのように継承されてきたのかを視野に入れつつ、黒タイの「伝統」を考察する。

・成果

・『世界の食文化百科事典』（丸善出版）の「調理場」の項目その他を執筆し、編集委員として作業にも携わり刊行した。

・19世紀後半にインドシナを探検したパヴィイ使節団による収集資料の文献調査で得た、白タイ文字と黒タイ文字の文字資料に関する歴史民族学的な研究成果を『国立民族学博物館研究報告』45巻2号に論文「ベトナムにおける黒タイ文字の創成について」として発表した。

・そのほかの業績として、ベトナムでの現地調査のことを綴ったエッセイを4回連載（『毎日新聞』の「旅・いろいろ地球人」コーナー）したほか、ベトナムの慣用句に関するエッセイ（『あすなる』所収）、溪流釣りに関するエッセイ（『月刊みんぱく』5月号）、緊急事態宣言下における生活を綴った日記（左右社編集部編『仕事本 わたしたちの緊急事態日記』所収）を発表した。

◎出版物による業績

[分担執筆]

樫永真佐夫

2020 「文化人類学」左右社編集部編『仕事本 わたしたちの緊急事態日記』pp.286-291, 東京：左右社。

2021 「調理場」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.196-197, 東京：丸善出版。
[査読有]

2021 「東南アジア地域の食文化」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』p.591, 東京：丸

善出版。

[論文]

樫永真佐夫

2020 「ベトナムにおける黒タイ文字の創成について」『国立民族学博物館研究報告』45(2)：183-235。[査読有]

[その他]

樫永真佐夫

2020 「溪流の魚と人」特集「釣り」『月刊みんぱく』44(5)：7-8。

2020 「旅・いろいろ地球人 調査は想定外だらけ① 血まみれの調査者」『毎日新聞』6月6日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 調査は想定外だらけ② 公安との友情の行方」『毎日新聞』6月13日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 調査は想定外だらけ③ ばい菌ヤローめ！」『毎日新聞』6月20日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 調査は想定外だらけ④ 仕上げは道路工事」『毎日新聞』6月27日夕刊。

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1人）

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「海域アジアにおける人類の海洋適応と物質文化——東南アジア資料を中心に」（研究代表者：小野林太郎）メンバー

韓 敏 [ハン ミン]————— 教授

1960年生。【学歴】中国吉林大学外国語学部日本語科卒（1983）、中国吉林大学大学院外国文学言語研究科日本文学専攻修士課程修了（1986）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻修士課程修了（1989）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程修了（1993）【職歴】武蔵大学人文学部非常勤講師（1992）、東京大学教養学部客員研究員（1994）、東洋英和女学院大学社会科学部専任講師（1995）、東洋英和女学院大学社会科学部助教授（1998）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科准教授（2001）、Harvard University Fairbank Center for East Asian Research Visiting Scholar（2002）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科教授（2011）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2011）、国立民族学博物館民族社会研究部研究部長（2012）、人間文化研究機構国立民族学博物館運営会議委員（2012）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部教授（2017）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部研究部長（2017）、人間文化機構国立民族学博物館運営会議委員（2017）【学位】学術博士（文化人類学）（東京大学大学院総合文化研究科 1993）、学術修士（文化人類学）（東京大学大学院総合文化研究科 1989）、文学修士（中国吉林大学大学院外国文学・言語研究科 1986）【専攻・専門】社会、歴史と象徴に関する人類学的研究【所属学会】日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

韓 敏

2015 『大地の民に学ぶ 激動する故郷、中国』（フィールドワーク選書18）京都：臨川書店。

Han, M.

2001 *Social Change and Continuity in a Village in Northern Anhui, China: A Response to Revolution and Reform* (Senri Ethnological Studies 58). Osaka: National Museum of Ethnology.

[編著]

韓 敏編

2009 『革命の実践と表象——現代中国への人類学的アプローチ』東京：風響社。

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

社会、歴史と象徴に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、近代社会における社会記憶と歴史の資源化に焦点を当て、人類学の視点から国家と社会の多様な関係性を考察する。

具体的に昨年度に引き続き、人間文化研究機構北東アジア地域研究（代表者：池谷和信）の分担者として、中国北部のシボ族における歴史と文化の資源化の動態について論文執筆を行う。

また、本館の共同研究「グローバル時代における寛容性／非寛容性をめぐるナラティブ・ポリティクス」（研究代表者：山 泰幸）の分担者として、中国社会における寛容性／非寛容性をめぐるナラティブ・ポリティクスについて考察する。本館の共同研究「社会・文化人類学における中国研究の理論的定位置——12のテーマをめぐる再検討と再評価」（研究代表者：河合洋尚）の分担者として、中国の人類学会史について考える。

最後に、2019年3月1日に本館において開催された学術潮流フォーラムⅡ 超域フィールド科学研究部・国際シンポジウム「歴史のロジックと構想力——世界のフィールドから」の成果をまとめる。

・成果

具体的な成果物として以下のものがある。

- ・人間文化研究機構北東アジア地域研究（代表者：池谷和信）の分担者として、中国社会における毛沢東をめぐる社会記憶に関する論文執筆をした。
- ・「疫病に立ち向かう精神力、地域の絆という文化による免疫力」というエッセイを執筆し、『京都新聞』2021年元旦特集に掲載された。
- ・「婚姻と食」が『世界の食文化百科事典』（丸善出版）に掲載された。
- ・2018年度に超域フィールド科学研究部が主催した国際シンポジウム「歴史のロジックと構想力——世界のフィールドから」の成果を英語論文集にまとめ、出版委員会に提出した。現在、査読者からのコメントに基づいて、修正しているところである。

◎出版物による業績

[分担執筆]

韓 敏

2021 「婚姻と食」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.326-327, 東京：丸善出版。

[その他]

韓 敏

2021 「疫病に立ち向かう精神力、地域の絆という文化による免疫力」（2021年1月 文化人メッセージ——次世代へ、美しい日本を）『京都新聞』1日1日。

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（3人）

・大学院ゼミでの活動

「地域文化学演習Ⅰ」、「地域文化学演習Ⅱ」、「比較文化学演習Ⅰ」、「比較文化学演習Ⅱ」

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

国立民族学博物館共同研究「グローバル時代における『寛容性／非寛容性』をめぐるナラティブ・ポリティクス」（研究代表者：山 泰幸）メンバー、国立民族学博物館共同研究「社会・文化人類学における中国研究の理論的定位置——12のテーマをめぐる再検討と再評価」（研究代表者：河合洋尚）メンバー、国立民族学博物館特別研究「コロナ禍における文化の免疫系としてのローカル文化の検証——東アジアを中心に」（研究代表者：島村一平）メンバー、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究拠点」（拠点代表者：池谷和信）拠点構成員

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

立命館大学食総合研究センター研究メンバー、International Journal of Tourism Anthropology (IJTA) 編集委員会委員

MATTHEWS, Peter Joseph [マシウス、ピーター・ジョセフ]————— 教授

1959年生。【学歴】オークランド大学生物科学部人類科学部植物学卒（1981）、オークランド大学大学院生物科学植物学修士課程修了（1984）、オーストラリア国立大学大学院先史考古学遺伝学博士課程修了（1990）【職歴】科学技術庁（STA）、農林水産省野菜・観賞用植物・茶業試験場（NIVOT）客員研究員（1990）、オーストラリア国立大学客員研究員、国立民族学博物館 客員研究員を経て、大阪へ（1991-1992）、日本学術振興会客員研究員（京都大学理学部植物分類学研究室）（1993）、フリーランス・エディター、京都（1994）、国立民族学博物館助手（1995）、国立民族学博物館助教授（1999）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2015）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部教授（2017）【学位】先史学・遺伝学博士（オーストラリア国立大学大学院 1990）、理学修士（オークランド大学大学院 1984）【専攻・専門】民族植物学、先史学【所属学会】Society for Economic Botany、Indo-Pacific Prehistory Association、International Aroid Society、European Association of Science Editors、World Archaeology Congress、Royal Society of New Zealand

【主要業績】

[単著]

Matthews, P. J.

2014 *On the Trail of Taro: An Exploration of Natural and Cultural History* (Senri Ethnological Studies 88). Osaka: National Museum of Ethnology.

[編著]

Spriggs, M., D. Addison, and P. J. Matthews (eds.)

2012 *Irrigated Taro (Colocasia esculenta) in the Indo-Pacific: Biological, Social and Historical Perspectives* (Senri Ethnological Studies 78). Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Ahmed, I., P. J. Matthews, P. J. Biggs, M. Naeem, P. A. McLenachan, and P. J. Lockhart

2013 Identification of Chloroplast Genome Loci Suitable for High-Resolution Phylogeographic Studies of *Colocasia esculenta* (L.) Schott (Araceae) and Closely Related Taxa. *Molecular Ecology Resources* 13(5): 929-937.

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

(i) *Mapping Genetic Diversity in Taro to Test Domestication Theories*. This project is financially supported by the *Japan Society for the Promotion of Science* (JSPS Kakenhi No. 17H04614). Project period: 1st April 2017 - 31st March 2021. (as Principle Investigator)

(ii) *Plant genetic resources and related traditional knowledge in semi-autonomous ethnic minority areas with political and geographic isolation*. JSPS Kakenhi No. 17H01682. Project leader: Dr K. Watanabe, Tsukuba University. (to FY 2020)

(iii) *The Archaeology of Boundaries* supported by Toshiba International Foundation (TIFO). Project leader: S. Aki, Cooperative Research Fellow, Univ. Tokyo. Project period 2020-2021.

・研究の目的、内容

The main focus for 2020 was analysis and reporting of previous field observations and DNA sequences obtained from populations of wild taro species (*Colocasia* spp). Related publications are noted below. Due to the ongoing pandemic, my participation in the project *The Archaeology of Boundaries* was limited to providing advice for continued work by the project leader.

・成果

See publications.

◎出版物による業績

[分担執筆]

マシウス、ピーター・ジョゼフ

2021 「オセアニア地域の食文化」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.550-551, 東京：丸善出版。

[論文]

Ahmed, I., P. J. Lockhart, E. M. G. Agoo, K.W. Naing, D. V. Nguyen, D. K. Medhi, and P. J. Matthews
2020 Evolutionary Origins of Taro (*Colocasia Esculenta*) in Southeast Asia. *Ecology and Evolution* 10 (23): 13530-13543. DOI: 10.1002/ece3.6958[査読有]

Abdullah, C. L. Henriquez, F. Mehmood, A. Hayat, A. Sammad, S. Waseem, M. T. Waheed, P. J. Matthews, T. B. Croat, P. Pocza, and I. Ahmed

2021 Chloroplast Genome Evolution in the *Dracunculus* Clade (Aroideae, Araceae). *Genomics* 113(1): 183-192. DOI: 10.1016/j.ygeno.2020.12.06[査読有]

Matthews, P. J. and M.E. Ghanem

2021 Perception gaps that may explain the status of taro (*Colocasia esculenta*) as an “orphan crop”. *Plants People Planet* 3: 99-112. DOI: 10.1002/ppp3.10155 [査読有]

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「政治的及び地理的に隔離された少数民族独自生存圏での植物遺伝資源及び伝統知の賦存」（研究代表者：渡邊和男（筑波大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「東南アジアにおけるサトイモの遺伝的多様性のマッピングによる栽培化モデルの検証」研究代表者

太田心平 [おおた しんぺい] ————— 准教授

1975年生。【学歴】大阪大学人間科学部人間科学科社会学専修卒（1998）、大阪大学大学院人間科学研究科人間学専攻博士前期課程修了（2000）、ソウル大学大学院人類学科博士課程単位取得退学（2003）、大阪大学大学院人間科学研究科人間学専攻博士後期課程修了（2007）【職歴】文部科学省アジア諸国等派遣留学生（2000）、（韓国）ソウル大学社会文化研究院比較文化研究所研究員（2003）、（韓国）暎園大学歴史・哲学部非常勤講師（2003）、（韓国）ソウル女子大学教養教育部非常勤講師（2003）、日本学術振興会特別研究員（PD）（2004）、京都産業大学文化学部非常勤講師（2004）、天理大学国際文化学部非常勤講師（2005）、大阪大学大学院人間科学研究科特任助手（2005）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教（2007）、同志社大学社会学部嘱託講師（2007）、大阪大学大学院人間科学研究科招へい研究員（2007）、神奈川大学国際常民文化研究機構共同研究者（2009）、国立民族学博物館研究戦略センター助教（2010）、宮崎公立大学人文学部非常勤講師（2010）、（米国）アメリカ自然史博物館人類学部門上級研究員（2011）、国立民族学博物館民族社会研究部助教（2012）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2013）、総合研究大学院大学文化科学研究科准教授（2014）、大阪大学大学院人間科学研究科非常勤講師（2014）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部准教授（2017）【学位】博士（人間科学）（大阪大学 2007）、修士（人間科学）（大阪大学 2000）【専攻・専門】北東アジア研究、博物館学、社会文化人類学【所属学会】日本文化人類学会、韓国文化人類学会（韓国）、Association for Asian Studies（米国）、韓国・朝鮮文化研究会、American Anthropological Association（米国）

【主要業績】

[分担執筆]

太田心平

2012 「国家と民族に背いて——アイデンティティの生き苦しさ、韓国を去りゆく人びと」太田好信編『政治的アイデンティティの人類学——21世紀の権力変容と民主化にむけて』pp.304-336, 京都：昭和堂。

[論文]

오타 심페이

2006 「료한: 일본에서의 한국문화 표상양식에 관한 지식인류학적 연구」 『한국문화인류학』 39(2): 85-128.
[査読有]

Ota, S. C.

2015 Collection or Plunder: The Vanishing Sweet Memories of South Korea's Democracy Movement. In K. Hirai (ed.) *Social Movements and the Production of Knowledge: Body, Practice, and Society in East Asia* (Senri Ethnological Studies 91), pp.79-193. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

【2020年度の活動報告】

◎各個人研究

・研究課題

韓国・朝鮮における社会文化の統合性と多様性

・研究の目的、内容

韓国・朝鮮の社会は民族的な均質性が高く、その文化も統合的に捉えられている傾向が強い。しかし、社会の表面に色々な対立項が看守できるように、韓国・朝鮮の社会には多様性が秘められている。この研究の目的は、韓国・朝鮮の事例をもとに、社会文化の統合性と多様性の両立状況がいかに可能であり、それによりもたらされる緊張状態がいかに文化変容の原動力となっているのかを明らかにすることにある。

この期間には、この研究に2つの柱を立て、両側面から研究を推進した。

第1の柱は、1980年代以降の政治文化を対象としたもので、韓国の社会文化が、「民主化」とその前後の過程において、どのようなマクロ—ミクロ双対性をもっていたのか、その一貫性と非連続性を明らかにするものである。こうした分野の研究は、大きな物語としてのイデオロギーと、小さな物語としての民衆世界という二項対立で論じられてきたが、この研究はそういった先行研究の蓄積を脱構築しようとしてきた。この期間には、これまでに公刊した研究成果を整理しなおしつつ、新しい関連研究とつきあわせて再検討し、総括する作業を進めた。この推進のため、人間文化研究機構の地域研究推進事業である北東アジア地域研究プロジェクトの資金を使用することを予定していたが、新型インフルエンザの蔓延にともない外国旅行がかなわなかったため、資金を使用する活動はおこなわなかった。

第2の柱は、韓国・朝鮮の社会文化が、世界の博物館展示としていかに編成されるか、そのメカニズムを明らかにするものである。この分野を遂行するため、科学研究費（基盤研究（C））「民俗誌と統計解析の手法による博物館員の働きがいと職業意欲の解明」を受託し、米国のアメリカ自然史博物館人類学部門の上級研究員を兼業した。ただこれについても、外国旅行の規制と、世界の博物館の活動の一時的な急変（展示場の閉鎖や在宅勤務）により、現地調査や調査紙調査がかなわず、文献調査やチーム内での調査計画策定と理論的準備に時間を使うこととなった。

・成果

新型コロナウイルスの蔓延が年度始めの想定以上に深刻なものとなったため、この期間の研究内容は計画時点から大きく変わらざるをえなかった。その結果、研究成果の公刊も最小限の分量となった。

研究成果の公刊の核となったのは、これまで日本語か韓国語で公刊してきた論文や分担執筆物を、それぞれ出版した後に学術界の研究動向、および出版後にえられたデータや知見も含めたうえで、3本の英語論文としたことである。これらは、すべて特集としてそれぞれの編者に受理され、年度終わりの時点では編者による確認作業、ないし査読者のコメントをへた後の修正をおこなっている段階にある。

他方、計画の時点で想定していなかった活動として、新型コロナウイルスの蔓延に関する研究活動もおこなった。この成果の一部は、韓国文化人類学会が主催したウェブセミナーにて、ラウンドテーブル「コロナ時代の人類学」に参加することで発表した。発表は韓国語でおこない、題目は日本語に訳すと「コロナ時代に人類学の市場価値を再考する」だった。

◎出版物による業績

[分担執筆]

太田心平

2021 「ジャンクフード」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・櫻永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.100-101, 東京:丸善出版。

2021 「朝鮮半島の食文化」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・檜永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.598-603, 東京：丸善出版。

[その他]

太田心平

2020 「特集『多文化』化する日本の外食」『vesta』118：2-49。

2020 「『パラサイト』の成功を呼んだ難解な作品——『ゲエムル——漢江の怪物』」『月刊みんぱく』44(6)：18-19。

2020 「食文化の真正さ——比較対象としての日本の韓国料理」『vesta』119：30-34。

アレックス・デ=ヴァート著, 太田心平訳

2020 「食の都の小さな秘宝」『vesta』117：26-27。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年12月4日 「코로나 시대에 인류학의 시장가치를 다시 생각해보다」코로나 19 시대의 인류학：온라인 라운드테이블, 온라인開催

・研究講演

2020年8月18日 「嗜好品の歴史」日本タバコ産業株式会社・株式会社リバネス開催JT オンラインセミナー『嗜好品5.0 その定義から未来へ』

2020年9月20日 「人は嗜好品を介して何を交換するか」嗜好品文化研究会主催『第18回嗜好品文化フォーラム』都ホテル京都八条

2020年9月20日 「総合討論『嗜好品のビジネス』」嗜好品文化研究会主催『第18回嗜好品文化フォーラム』都ホテル京都八条

・広報・社会連携活動

2021年2月3日 「世界の中の東アジア（1/2）——移民の生活から考える」大阪府高齢者大学校「現代社会を考える科」

2021年2月10日 「世界の中の東アジア（2/2）——韓国の多文化社会化」大阪府高齢者大学校「現代社会を考える科」

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「民族誌と統計解析の手法による博物館職員の働きがいと職業意欲の解明」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究拠点」（拠点代表者：池谷和信）拠点構成員

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

株式会社 CDI 嗜好品文化研究会メンバー、韓国文化人類學會海外理事、味の素食の文化研究所責任編集委員

島村一平 [しまむら いっぺい] ————— 准教授

【学歴】早稲田大学法学部卒（1993）、モンゴル国立大学大学院社会学研究科民族学専攻修士課程修了（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻博士後期課程単位取得退学（2004）【職歴】株式会社クリエイティブネクサステレビ番組制作部アシスタント・ディレクター、ディレクター（1993）、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員（2004）、滋賀県立大学人間文化学部専任講師（2005）、滋賀県立大学人間文化学部准教授（2013）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部准教授（2020）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2020）【学位】博士（文学）（総合研究大学院大学 2010）、民族学修士（モンゴル国立大学大学院 1998）【専攻・専門】文化人類学・モンゴル研究【所属学会】日本文化人類学会、日本モンゴル学会、International Association for Mongol Studies、International Society for Academic Research on Shamanism、日本ポピュラー音楽学会

【主要業績】

[単著]

島村一平

2021 『ヒップホップ・モンゴリア——韻がつむぐ人類学』東京：青土社。

2011 『増殖するシャーマン——モンゴル・ブリアートのシャーマニズムとエスニシティ』横浜：春風社。[査読有]

Shimamura, I.

2014 *The Roots Seekers: Shamanism and Ethnicity among the Mongol-Buryats*. Yokohama: Shumpusha. [査読有]

【受賞歴】

2016 総研大科学者賞（総合研究大学院大学）

2014 滋賀県立大学優秀職員賞（滋賀県立大学）

2014 大同生命地域研究奨励賞（大同生命国際文化基金）

2013 地域研究コンソーシアム賞（地域研究コンソーシアム）

2013 日本学術振興会賞（日本学術振興会）

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

モンゴル仏教のグローバル実践に関する学際・国際的地域研究

・研究の目的、内容

本研究は、同名の科学研究費（基盤研究（A））「モンゴル仏教のグローバル実践に関する学際・国際的地域研究」（研究代表者：島村一平）の研究の一環として推進していくものである。

モンゴル仏教は、現在モンゴルのみならずインド、中国、アメリカなどを舞台にグローバルに展開されている。こうしたモンゴル仏教の実践を、特に「転生活仏」誕生のポリティクスに焦点を当ててその実践の実態明らかにすることを目的とする。モンゴル仏教はチベット仏教に属しながらも独自の経典や呪術的な宗教実践を生み出してきた。かつて清朝時代モンゴル高原には清朝公認・非公認の転生活仏が数十人いたが、こうした転生活仏が現在、次々と誕生している。そもそも活仏はインドのダライラマ法王の認定を必要とするが、モンゴルのローカルなポリティクスが深く関わっている。そこで従来の神秘主義的な説明とは異なる活仏誕生の現実を学際的（現在・歴史・他宗教との関わり）国際的（多拠点調査）に明らかにしていく。

・成果

本年度は、科学研究費（基盤研究（A））の最終年であったが、コロナ禍により研究の大幅な変更を迫られた。調査や国際会議ができなくなったが、その代わりに執筆活動に勤しんだ。

例えば、研究分担者として参加してきた科学研究費（基盤研究（B））「モンゴルをとりまくエスノスケープとアイデンティティの重層的動態に関する実証的研究」（研究代表者：滝澤克彦）において研究をすすめてきたヒップホップに関する研究が、単著『ヒップホップ・モンゴリア——韻が紡ぐ人類学』として結実した。このヒップホップはシャーマニズムや仏教とも関わっており、自身の科学研究費（基盤研究（A））の成果でもある。またスイス・アジア学会の紀要に社会主義時代のモンゴルにおける仏教実践にかかる論文が掲載された。筑摩書房の『世界哲学史』シリーズに原稿を依頼され、モンゴルの仏教とシャーマニズムについて書いたのも重要な成果だ。それから北海道立北方民族学博物館の図録に「文化の免疫系」に焦点を当てたシャーマニズム論を執筆した。そのほか、エッセイをいくつか執筆した。

◎出版物による業績

[単著]

島村一平

2021 『ヒップホップ・モンゴリア——韻がつむぐ人類学』東京：青土社。

[分担執筆]

島村一平

2020 「モンゴル仏教とシャーマニズム」伊藤邦武・山内志朗・中島隆博・納富信留編『世界哲学史 別巻——未来を開く』pp.355-365, 東京：筑摩書房。

[論文]

島村一平

- 2020 「学びなおしの5冊・モンゴル、あるいはコロナ渦の中でモンゴルを考える」 芹沢一也編『a シノドス』(275) 5月15日。
- 2020 「『文化の免疫システム』としてのシャーマニズム——シベリア・モンゴルにおける狩猟・牧畜世界と現代をつなぐ」『北で生きるよすが——北方民族の世界観』(北海道立北方民族博物館第35回特別展図録) pp.51-62, 網走:北海道立北方民族博物館。

Shimamura, I.

- 2020 *Magicalized Socialism: An Anthropological Study on the Magical Practices of a Secularized Reincarnated Lama in Socialist Mongolia. Asiatische Studien - Études Asiatiques* 73(4): 799-829. [査読有]

[その他]

島村一平

- 2020 「先生、僕にはアブガイが3人いるんだよ」『月刊みんぱく』44(11): 20。
- 2021 「旅・いろいろ地球人 モンゴル草原奇譚① 呪術師に弟子入り上」『毎日新聞』1月9日夕刊。
- 2021 「旅・いろいろ地球人 モンゴル草原奇譚② 呪術師に弟子入り下」『毎日新聞』1月16日夕刊。
- 2021 「旅・いろいろ地球人 モンゴル草原奇譚③ わらう月夜の狼」『毎日新聞』1月23日夕刊。
- 2021 「旅・いろいろ地球人 モンゴル草原奇譚④ 大シャーマンの最期」『毎日新聞』1月30日夕刊。
- 2021 「モンゴルがヒップホップ大国だという件」『みんぱく e-news』236: 巻頭コラム。
- 2021 「木を編まぬモンゴル——草原のバスケットリー文化のありか」『月刊みんぱく』45(3): 14-15。

◎映像音響メディアによる業績

・TV・ラジオ番組などの制作・監修

島村一平 監修・出演

- 2021年3月9日 「〈アジアン・ミュージック・ジャンクション〉モンゴルヒップホップ特集 by 島村一平さん」『アフター6ジャンクション』TBSラジオ

・広報・社会連携活動

- 2020年11月14日 「呪術として生き残った仏教——社会主義期における世俗化・仏教実践・還俗ラマ」第506回 国立民族学博物館友の会講演会、国立民族学博物館

◎大学院教育

・博士論文審査委員 (総研大に限る)

博士論文審査委員 (2件)

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費 (基盤研究 (A)) 「モンゴル仏教のグローバル実践に関する学際・国際的地域研究」研究代表者、科学研究費 (基盤研究 (B)) 「モンゴルをとりまくエスノスケープとアイデンティティの重層的動態に関する実証的研究」(研究代表者: 滝澤克彦) 研究分担者、国立民族学博物館特別研究「コロナ禍における文化の免疫系としてのローカル文化の検証——東アジアを中心に」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

滋賀県立大学大学院 人間文化学研究科修士論文の審査委員 (2件)

・他大学の客員、非常勤講師

滋賀県立大学「比較宗教論」、滋賀県立大学「アジア文化論C『モンゴル』」、滋賀県立大学「文化人類学概論A」、滋賀県立大学「研究演習」、滋賀県立大学大学院「国際文化論特別演習」

新免光比呂 [しんめん みつひろ]

准教授

1959年生。【学歴】早稲田大学政治経済学部政治学科卒 (1983)、東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了 (1986)、東京大学大学院人文科学研究科博士課程満期退学 (1992) 【職歴】帝京大学非常勤講師 (1992)、横浜国立大学非常勤講師 (1992)、東方研究会専任研究員 (1992)、国立民族学博物館第三研究部助手 (1993)、国立民族学博

物館民族社会研究部助教授（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2002）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2004）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部准教授（2017）【学位】博士（文学）（筑波大学大学院 2019）、文学修士（東京大学大学院人文科学研究科 1986）【専攻・専門】宗教学・東欧研究【所属学会】東方研究会

【主要業績】

[单著]

新免光比呂

2000 『祈りと祝祭の国——ルーマニアの宗教文化』京都：淡交社。

[共著]

新免光比呂・保坂俊司・頼住光子

1998 『比較宗教への途3 人間の文化と神秘主義』東京：北樹出版。

[論文]

新免光比呂

1999 「社会主義国家ルーマニアにおける民族と宗教——民族表象の操作と民衆」『国立民族学博物館研究報告』24(1)：1-42。

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

コンスタンティン・ノイカの思想とその影響

・研究の目的、内容

コンスタンティン・ノイカは、大戦間期にルーマニアのファシズム運動に関与したことで戦後の社会主義体制下では排除の対象となった思想家である。しかし、その独創的な思想によって、弾圧下での苦しい体験を経てリチュエヌたち後継者たちを育てた。ルーマニア知識人の戦略、教育思想、権力との関わり方などについてノイカを通して考察した。

・成果

研究の成果の一部は「戦間期ルーマニアの知識人と歴史表象」（平藤喜久子編『ファシズムと聖なるもの／古代的なるもの』所収、2020年4月24日発行）として発表された。

◎出版物による業績

[分担執筆]

新免光比呂

2020 「戦間期ルーマニアの知識人と歴史表象」平藤喜久子編『ファシズムと聖なるもの／古代的なるもの』pp.170-196, 札幌：北海道大学出版会。

菅瀬晶子 [すがせ あきこ] ————— 准教授

【学歴】東京外国語大学外国語学部アラビア語学科卒（1995）、東京外国語大学大学院地域文化研究科アジア第三専攻博士前期課程修了（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻博士後期課程修了（2006）【職歴】総合研究大学院大学葉山高等研究センター上級研究員（2006）、日本女子大学文学部史学科非常勤講師（2006）、日本女子大学文学部史学科非常勤講師（2008）、日本女子大学文学部史学科非常勤講師（2008）、総合研究大学院大学学融合推進センター特別研究員（2010）、大阪大学外国語学部非常勤講師（2010）、神奈川大学経営学部非常勤講師（2010）、共立女子大学国際学部非常勤講師（2010）、国立民族学博物館民族社会研究部助教（2011）、滋賀県立大学非常勤講師（2012）、神戸女子大学非常勤講師（2015）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2016）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部准教授（2017）【学位】博士（文学）（総合研究大学院大学 2006）、修士（学術）（東京外国語大学大学院 1999）【専攻・専門】文化人類学・中東地域研究（パレスチナ・イスラエルを中心とした、東地中海地域アラビア語圏）【所属学会】日本中東学会、日本文化人類学会、京都ユダヤ思想学会

【主要業績】

[単著]

菅瀬晶子

- 2012 『豊穡と共生への祈り——パレスチナ・イスラエルにおける聖者アル・ハディル崇敬』（民族紛争の背景に関する地政学的研究19）大阪：大阪大学世界言語研究センター。
- 2010 『イスラームを知る6 新月の夜も十字架は輝く——中東のキリスト教徒』東京：山川出版社。
- 2009 『イスラエルのアラブ人キリスト教徒——その社会とアイデンティティ』広島：溪水社。

【受賞歴】

- 2006 長倉研究奨励賞
2006 総研大研究賞

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東地中海アラブ諸国における宗教的アイデンティティの表象

・研究の目的、内容

20世紀前半、歴史的パレスチナで活躍したナジブ・ナッサーらアラブ・ナショナリストの活動について調査する。宗教をこえたナショナル・アイデンティティの創出の過程をあきらかにするとともに、キリスト教徒としての宗教的アイデンティティが、彼らの執筆活動に与えた影響をさぐる。また、平行して彼らがおもな活動の場としていたアラビア語紙に寄稿していた中東系ユダヤ教徒に注目し、アラビア語によるアラブ・ナショナリズムとシオニズムの議論とその影響を調査する。

・成果

20世紀前半の歴史的パレスチナにおける、キリスト教徒が主導するアラブ・ナショナリズムについては、英語論文(In the Midst of the Chaos: Christian Arab Nationalists of Historical Palestine in early 20th Century)を執筆した。本論文は現在編纂中のSES *“The Logic and Conception of History: Cross-Field Approaches from around the World”* の一部として発表される予定である。

ほかに、編集委員として関わった『世界の食文化百科事典』、執筆者として参加した『沙漠学事典』、『中東・オリエント文化事典』が、いずれも丸善出版より刊行された。

◎出版物による業績

[編著]

野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編

2021 『世界の食文化百科事典』東京：丸善出版。

[分担執筆]

菅瀬晶子

2020 「キリスト教」日本沙漠学会編『沙漠学事典』pp.184-185, 東京：丸善出版。

2020 「ギリシャ語とギリシア系の人々」鈴木 薫・近藤二郎・赤堀雅幸編『中東・オリエント文化事典』pp.128-129, 東京：丸善出版。

2021 「収穫祭」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.318-319, 東京：丸善出版。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・みんぱくウィークエンド・サロン

2020年8月30日 「コーヒーと西アジア、そして日本」第585回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「国立民族学博物館現代中東地域研究拠点」（拠点代表者：西尾哲夫）拠点構成員

奈良雅史 [なら まさし] 准教授

【学歴】筑波大学大学院人文社会科学研究科歴史・人類学専攻博士課程修了（2014）【職歴】北海道大学メディア・コミュニケーション研究院助教（2015）、北海道大学メディア・コミュニケーション研究院准教授（2017）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部准教授（2019）【学位】博士（文学）（筑波大学大学院人文社会科学研究科2014）【専攻・専門】文化人類学【所属学会】日本文化人類学会、「宗教と社会」学会、The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences (IUAES)、The East Asian Society for the Scientific Study of Religion (EASSSR)

【主要業績】

[単著]

奈良雅史

2016 『現代中国の〈イスラーム運動〉——生きにくさを生きる回族の民族誌』東京：風響社。

[共編]

西川克之・岡本亮輔・奈良雅史編

2019 『フィールドから読み解く観光文化学——「体験」を「研究」にする16章』京都：ミネルヴァ書房。

澤井充生・奈良雅史編

2015 『「周縁」を生きる少数民族——現代中国の国民統合をめぐるポリティクス』東京：勉誠出版。

【受賞歴】

- 2020 2020年度教育啓蒙著作賞（観光学術学会）
- 2018 平成29年度教育研究総長表彰（研究部門）（北海道大学）
- 2017 第12回国際宗教研究所賞（国際宗教研究所）
- 2017 第12回日本文化人類学会奨励賞（日本文化人類学会）

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

宗教と移動に関する人類学的研究：現代中国における回族の事例から

・研究の目的、内容

本研究は、中国内陸部から中国沿岸部にアラビア語通訳として出稼ぎに行く、回族と呼ばれるムスリム・マイノリティの動きに焦点を当て、中国政府による「一带一路」構想の推進に伴う中国とイスラーム諸国との間の経済交流の促進が人々の移動の活発化をもたらし、イスラーム復興を促進してきたプロセスを明らかにすることを目的とする。本研究は、研究代表者を務める科学研究費（若手研究）「宗教と移動をめぐる人類学的研究——現代中国の越境的ムスリム・ネットワーク」を中心として実施する。

本研究では以上の目的を達成するため、回族と呼ばれるムスリム・マイノリティの出身地におけるイスラーム復興の状況と沿岸部への出稼ぎの実態を明らかにする。本年度はこれらの地域における現地調査を通じて、宗教活動に大きく影響する中国共産党の宗教政策、および出稼ぎに影響する中国共産党の経済政策の実施状況についても明らかにするとともに、出稼ぎ先でのトランスナショナルなムスリム・コミュニティの実態とそこでの宗教実践のあり方を明らかにする。

・成果

研究代表者を務める科学研究費（若手研究）「宗教と移動をめぐる人類学的研究——現代中国の越境的ムスリム・ネットワーク」の成果の一部として、流動性が高まる現代社会におけるモノとメディアの働きに焦点を当てた共編著『モノとメディアの人類学』（ナカニシヤ出版）を刊行した。加えて、同じく科学研究費（若手研究）の成果の一部として、中国におけるトランスナショナルなムスリム・コミュニティに焦点を当てた論文を『中国の国内移動——内なる他者との邂逅』（川口幸大・堀江未央編、京都大学学術出版会）に寄稿した。加えて、研究分担者として加わっていた、昨年度に終了した科学研究費（基盤研究（B））「東アジアにおける拡張現実時代の観光に関する研究」の成果論集『いま私たちをつなぐもの——拡張現実時代の観光とメディア』（山田義裕・岡本亮輔編、弘文堂）にメディア状況の変化と移動の活発化との関係について論じた論文を寄稿した。これらを含む当該研究による成果は以下になる。

◎出版物による業績

[編著]

藤野陽平・奈良雅史・近藤秋編

2021 『モノとメディアの人類学』京都：ナカニシヤ出版。

[分担執筆]

奈良雅史

2020 「国家をかわす——現代中国における回族のインフォーマルな宗教活動」櫻井義秀編『中国・台湾・香港の現代宗教——政教関係と宗教政策』pp.113-142, 東京：明石書店。

2020 「出稼ぎ先は『小さな国連』——浙江省義烏市に暮らすムスリムたち」川口幸大・堀江未央編『中国の国内移動——内なる他者との邂逅』pp.91-123, 京都：京都大学学術出版会。

2021 「アルコール排斥の多義性と風紀の形成——現代中国における回族の実践と国家による宗教管理」高尾賢一郎・後藤絵美・小柳敦史編『宗教と風紀——「聖なる規範」から読み解く現代』pp.64-83, 東京：岩波書店。

2021 「分裂とつながり——現代中国におけるムスリム・コミュニティの変容と生誕祭の活発化」山田義裕・岡本亮輔編『いま私たちをつなぐもの——拡張現実時代の観光とメディア』pp.216-235, 東京：弘文堂。

2021 「ヴァーチャルとリアルのもつれ合い——中国雲南省昆明市におけるムスリム・コミュニティの変容」藤野陽平・奈良雅史・近藤秋編『モノとメディアの人類学』pp.141-155, 京都：ナカニシヤ出版。

[その他]

奈良雅史

2020 「油の香り——中国」『みんなく e-news』226：巻頭コラム。

2020 「現代中国におけるイスラーム復興と他者の包摂」（論）『中外日報』7月20日。

2020 「旅・いろいろ地球人 中国ムスリムと食① 通り抜け禁止」『毎日新聞』8月1日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 中国ムスリムと食② 庶民の味」『毎日新聞』8月8日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 中国ムスリムと食③ 板ばさみ」『毎日新聞』8月15日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 中国ムスリムと食④ 断食の快味」『毎日新聞』8月22日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 中国ムスリムと食⑤ 共食の現在」『毎日新聞』8月29日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2020年11月1日 「中国における宗教の人類学——成立宗教を中心とした研究動向」『社会・文化人類学における中国研究の理論的定位置——12のテーマをめぐる再検討と再評価』オンラインとのハイブリッド開催

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年9月19日 「非イスラーム世界のイスラーム——中国におけるムスリムの宗教性と民族性をめぐって」『2020年度中東☆イスラーム教育セミナー』オンライン開催

・みんなくゼミナール

2020年8月15日 「出稼ぎ先は『小さな国連』——国際貿易都市・浙江省義烏市に暮らすムスリムたち」第501回みんなくゼミナール

・みんなくウィークエンド・サロン

2020年8月9日 「中国におけるハラールフード」第568回ウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1人）、副指導教員（1人）

・大学院ゼミでの活動

「地域文化学特論Ⅰ」

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文予備審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「中国ムスリムの超国家・超民族的ネットワークの構築と多文化共生圏の創出に関する研究」（研究代表者：木村 自（立教大学））研究分担者、科学研究費（若手研究）「宗教と移動をめぐる人類学的研究：現代中国の越境的ムスリム・ネットワーク」研究代表者、国立民族学博物館共同研究「グローバル化時代における『観光化／脱——観光化』のダイナミズムに関する研究」（研究代表者：東 賢太郎（名古屋大学））メンバー、国立民族学博物館共同研究「社会・文化人類学における中国研究の理論的定位置——12のテーマをめぐる再検討と再評価」（研究代表者：河合洋尚）メンバー、国立民族学博物館特別研究「グローバル地域研究と地球社会の認知地図——わたしたちはいかに世界を共創するのか？」（研究代表者：西尾哲夫）メンバー、国立民族学博物館共同研究「不確実性のなかでオルタナティブなコミュニティを問う——モノ、制度、身体のからみあい」（研究代表者：森 明子）メンバー

- ・民間の奨学金及び助成金からのプロジェクト

植松東アジア研究基金「エスニシティと多文化共生をめぐる人類学的研究——台湾ムスリム・コミュニティの事例から」研究代表者、The Chiang Ching-kuo Foundation for International Scholarly Exchange Conference and Seminar Grants 「Beyond Piety and Impiety: Ambiguous Practices of Sino-Muslims in Historical and Contemporary Asia」研究代表者

◎社会活動・館外活動

- ・他の機関から委嘱された委員など

北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院博士論文審査委員、日本文化人類学会 Japanese Review of Cultural Anthropology 編集委員、日本文化人類学会代議員、日本文化人類学会『文化人類学』編集委員

- ・他大学の客員、非常勤講師

筑波大学大学院人文社会ビジネス科学学術院人文社会科学研究群「宗教の人類学」（集中講義）、三重大学人文学部「中国地域の民族と宗教」（集中講義）

松尾瑞穂 [まつお みずほ] ————— 准教授

【学歴】 南山大学文学部人類学科卒（1999）、名古屋大学大学院国際開発研究科国際協力専攻博士前期課程修了（2002）、総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻博士後期課程単位取得退学（2007）**【職歴】** 日本学術振興会特別研究員（PD）（2007）、新潟国際情報大学情報文化学部情報文化学科講師（2010）、新潟国際情報大学情報文化学部情報文化学科准教授（2013）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2014）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部准教授（2017）**【学位】** 文学博士（総合研究大学院大学文化科学研究科 2008）、学術修士（名古屋大学大学院国際開発研究科 2002）**【専攻・専門】** 文化人類学、ジェンダー医療人類学、南アジア研究**【所属学会】** 日本文化人類学会、日本南アジア学会、日本宗教学会、宗教と社会学会

【主要業績】

[単著]

松尾瑞穂

2013 『インドにおける代理出産の文化論——出産の商品化のゆくえ』 京都：風響社。

2013 『ジェンダーとリプロダクションの人類学——インド農村社会の不妊を生きる女性たち』 東京：昭和堂。

[論文]

Matsuo, M.

2021 Imagined and Unimagined Relatedness: A Child of 'One's Own' in Third Party Reproduction in India. *Contemporary South Asia* 29(1): 10-23. [査読有]

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

- ・研究課題

南アジアにおける混血の歴史的展開に関する研究

・研究の目的、内容

本研究は、南アジアにおける「混血」(mixed race)をめぐる歴史的な言説や諸実践を検討することを通して、集団の差異と同定のメカニズムを明らかにすることを目的とする。その際に注目するのは、広い意味でのサブスタンス(身体構成物)である。このサブスタンスの共有がいかに関と集団のカテゴリーの同定や差異を形成するのかについて、血液、母乳、精液といった、南アジア社会における伝統的なサブスタンス概念と、卵子、精子のような配偶子や遺伝子といった新しいサブスタンス概念との比較に注目する。そして、それが人種のような集団の差異の「自然化」や「実体化」に作用するメカニズムを考察することも目的である。

本研究が具体的に対象とするのは、インドにおいて「アングロ・インディアン」、スリランカで「バーガー」と呼ばれる、植民地期に西洋人男性と現地人女性の間に生まれた「混血」集団である。彼ら／彼女らの定義や法的ステータスは歴史的に変遷してきたが、白人／非白人、植民者／被植民者の境界を不安定化させる存在として、植民地政府によって問題視されてきた。アングロ・インディアンとバーガーは多くの類似性を持つが、しかし、同じ英連邦植民地でも、インドとセイロン(スリランカ)の白人と非白人の間の混血集団のたどった道には差異がみられる。今年度は予備的段階として両集団の歴史的な形成過程を検討するとともに、現代の動向について概要をつかみ、今後の分析に向けて全体像を把握することを目指す。

・成果

本研究は主に科学研究費(国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(A))「遺伝子化時代の社会集団のカテゴリー化と差異化——インドにおける血と遺伝子を中心に」)の資金を活用し、インド、スリランカでの調査と資料収集、エジンバラ大学での在外研究を行うことを予定していたが、コロナ禍で海外渡航・出張がすべてキャンセルまたは延期となり、計画に大幅な変更が生じた。その一方で、南アジアにおける白人と現地人の混血や、人種概念に関する先行研究の動向をまとめるなど、学説的な検討を行った。また、人類学におけるサブスタンスの概念と研究史をまとめ、編集予定の『サブスタンスの人類学の展望』(仮)の序論を執筆するとともに、インドにおける第三者が関与する生殖医療、とくに代理出産と提供胚の利用を、南アジアのサブスタンス—コード論と接合させて考察を行った英語論文を執筆した。2020年度に開催した現代南アジア地域研究事業の国際シンポジウムの成果論集を編纂中であり、その序論と分担章を執筆したほか、刊行に向けて準備を進めた。これらの編集論集や論文は、来年度以降に刊行される予定である。

海外調査は実行できなかったが、オンラインで開催された国際学会(Annual Meeting of the Society for Social Studies of Science EASST/4S)、シンポジウム、研究会等に参加して研究発表を実施した。

共同研究に関しては、民博共同研究「人類学を自然化する」(研究代表者:中川 敏)や「月経をめぐる国際開発の影響の比較研究——ジェンダーおよび医療化の視点から」(研究代表者:新本万理子)のメンバーとして、研究会やシンポジウム、JICAとの共同研究会等において研究発表を行った。また、人間文化研究機構地域研究推進事業「現代南アジア地域研究」(MINDAS)において、松尾がリーダーを務める「社会変動と親密圏」班の運営を行った。あわせて、現代南アジア地域研究事業の成果論集として編集中の『南アジアの新しい風』(三尾 稔編)に論文を寄稿した。さらに、科学研究費(基盤研究(B))「アジアにおける出生前検査と障害をめぐる実証的研究」(研究代表者:白井千晶)の分担者として、インターネットを用いた日本、インド、シンガポール、フィリピン、タイ、ミャンマー、台湾の7か国比較調査に参加した。

また、研究成果としては、インドにおける第三者が関与する生殖医療における親子関係の構築について論じた研究論文“Imagined and Unimagined Relatedness: A Child of ‘One’s Own’ in Third Party Reproduction in India”がContemporary South Asia誌に掲載された。さらに、学術論集に2本、教科書に2本の分担執筆を行ったほか、『月刊みんぱく』などの一般誌に寄稿した。

◎出版物による業績

[分担執筆]

松尾瑞穂

2020 「ジェンダー——政治化される身体」石坂晋哉・宇根義巳・舟橋健太編『ようこそ南アジア世界へ——地域研究のすすめ』pp.179-197, 京都:昭和堂。

2020 「呪術が禁止されるとき——インドにおける合理主義運動がもたらす迷信としての呪術」川田牧人・白川千尋・飯田 卓編『現代世界の呪術——文化人類学的探究』pp.109-135, 横浜:春風社。[査読有]

2021 「生殖医療をめぐる治療の線引きとジェンダー」飯田淳子・錦織 宏編『医師・医学生のための人類学・社会学——臨床症例/事例で学ぶ』pp.114-121, 京都:ナカニシヤ出版。

2021 「日常世界における被傷性——リプロダクションの管理としての人工妊娠中絶」田中雅一・石井美

保・山本達也編『インド・剥き出しの世界』pp.32-58, 横浜: 春風社。

[論文]

Matsuo, M.

2021 Imagined and Unimagined Relatedness: A Child of 'One's Own' in Third Party Reproduction in India. *Contemporary South Asia* 29(1): 10-23. [査読有]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2020年10月18日 「信仰と迷信の差異化」『文化人類学を自然化する』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年8月19日 'Making and Unmaking of Relations through Third Party ARTs in India.' "Annual Meeting of the Society for Social Studies of Science EASST/4S 2020", オンラインとのハイブリッド開催

2020年9月19日 「インド農村社会における不妊とその苦悩への対処法——信念/効果に注目して」第8回多文化医療研究会、オンライン開催

2021年3月21日 「脱魔術化の見果てぬ夢——インドの合理主義運動と信念の腑分け」第119回現代人類学研究会、オンライン開催

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員 (1人)

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費 (国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化)) 「インドにおける集団範疇の差異化と同定——血と遺伝子を中心に」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究 国立民族学博物館拠点 (MINDAS)」(拠点代表者: 三尾 稔) 拠点構成員

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

日本南アジア学会常務理事、日本文化人類学会『文化人類学』編集委員

人類文明誌研究部

飯田 卓 [いいだ たく]————— 部長 (併) 教授

1969年生。【学歴】北海道大学理III系 (生物学系) 文学部へ移行 (1990)、北海道大学文学部行動科学科卒 (1992)、京都大学大学院人間・環境学研究科人間・環境学専攻修士課程修了 (1994)、京都大学大学院人間・環境学研究科人間・環境学専攻博士後期課程研究指導認定退学 (1999) 【職歴】日本学術振興会特別研究員 (DC1) (1994)、日本学術振興会特別研究員 (PD) (1999)、国立民族学博物館民族文化研究部助手 (2000)、国立民族学博物館研究戦略センター助手 (2006)、国立民族学博物館研究戦略センター助教 (2007)、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授 (2008)、総合研究大学院大学文化科学研究科 比較文化学専攻准教授 (2012)、国立民族学博物館民族社会研究部准教授 (2012)、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授 (2013)、国立民族学博物館学術資源研究開発センター准教授 (2017)、総合研究大学院大学文化科学研究科 比較文化学専攻教授 (2018)、国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授 (2018)、国立民族学博物館人類文明誌研究部教授 (2019)、国立民族学博物館人類文明誌研究部研究部長 (2020) 【学位】博士 (人間・環境学) (京都大学 2000)、修士 (人間・環境学) (京都大学 1994) 【専攻・専門】生態人類学、漁撈社会、技術と知識、物質文化、視覚メディア、文化遺産、日本人類学史 【所属学会】生態人類学会、日本アフリカ学会、日本文化人類学会、地域漁業学会、日本島嶼学会、環境社会学会、Association of Critical Heritage Studies

【主要業績】

[単著]

飯田 卓

2014 『身をもって知る技法——マダガスカル漁師に学ぶ』京都：臨川書店。

2008 『海を生きる技術と知識の民族誌——マダガスカル漁撈社会の生態人類学』京都：世界思想社。

[編著]

飯田 卓編

2019 『財団法人日本民族学協会附属民俗学博物館（保谷民博）関係人名の研究』（国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム資料集 1）大阪：国立民族学博物館。

【受賞歴】

2010 第22回 日本アフリカ学会学術研究奨励賞（日本アフリカ学会）

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

両大戦期間における日本とフランスの学術交流——とくに人類学と民族学、民俗学に着目して

・研究の目的、内容

1920年代から1930年代にかけて日本からフランスに留学した松本信廣および岡本太郎、山田吉彦（きだみのる）、同じ時期にフランスから日本に来て研究をおこなったエミール・ガスパルドヌおよびアンドレ・ルロワ＝グランに着目し、ドイツやイギリスとの関係を過度に重視して記述されてきた日本民族学史をあらたな観点から描きなおすことを目的とする。

なお、この研究は、中生勝美を研究代表とする科学研究費（基盤研究（B））「ファシズム期における日独伊のナショナリズムとインテリジェンスの人類学史」の分担金を用いて遂行する。

・成果

フランスの複数の文書館と日本に所在するフランス極東学院でアーカイブズ調査やインタビュー調査をおこなう予定だったが、新型コロナウイルス感染症の流行が収まらず、これらの調査を限定的にしか実施しえていない。また、このテーマに関わって始まるはずだった論文集編纂も、他の執筆者の調査の遅れに配慮して滞っている。

しかし、実施期間中に文献調査を進めることができ、1920年代から1930年代にかけての日本の大学を中心とする知的活動の状況をかなり把握することができた。この当時、ヨーロッパでは植民地経営の安定化により考古学的な発掘調査が盛んになっており、日本の研究者たちはその動きに同調あるいは対抗しようと一方では発掘調査やフィールドワークを盛んにおこない、他方ではヨーロッパの研究成果を日本に輸入するよう努めていた。人類学や民俗学の動向も、こうした動きとの関わりで考察する必要がある。

今年度は、予定していた成果論文の執筆に着手できなかったが、論文集刊行のスケジュールに合わせて補足調査と論文執筆をおこない、場合によっては民博研究報告などの媒体を通して、しかるべきタイミングで研究成果を発表する。

◎出版物による業績

[編著]

野林厚志（編集委員長）・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編

2021 『世界の食文化百科事典』東京：丸善出版。

川田牧人・白川千尋・飯田 卓編

2020 『現代世界の呪術——文化人類学的探究』横浜：春風社。

[論文]

飯田 卓

2020 「財団法人日本民族学協会（1942年～1964年）と附属民族学博物館（1937年～1962年）——アーカイブズ資料をとおしてその性格をふり返る」『文化人類学』85(2)：336-345。[査読有]

Clifford, J., A. Ito, R. Saito, K. Yoshida, I. Hayashi, and T. Iida

2020 International Symposium “Future of the Museum: An Anthropological Perspective”. *Bulletin of*

National Museum of Ethnology 45(1): 115-176.[査読有]

[分担執筆]

飯田 卓

- 2020 「経験されざるものを知る——マダガスカル漁撈民ヴェズにおける霊と呪術のリアリティ」川田牧人・白川千尋・飯田卓編『現代世界の呪術——文化人類学的探究』pp.437-465, 東京: 春風社。
- 2021 「遺産化する地域料理」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・櫻永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.636-641, 東京: 丸善出版。
- 2021 「メディアの物質的基盤——とりわけ映像メディアに着目して」藤野陽平・奈良雅史・近藤秋編『モノとメディアの人類学』pp.219-231, 京都: ナカニシヤ出版。

[その他]

飯田 卓

- 2020 「未来に開かれた記憶装置——梅棹アーカイブズと梅棹資料室」『季刊民族学』172: 40-47。
- 2020 「書評: 坂野徹著『〈島〉の科学者——パラオ熱帯生物研究所と帝国日本の南洋研究』勁草書房、2019」『島嶼研究』21(2): 179-180。
- 2020 「編集後記」『文化人類学』85(3): 576-577。
- Iida, T.
2020 UMESAO Tadao's 100th Anniversary: The Front-runner of Intellectual Production. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 51: 12.

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

飯田卓・端信行監修

2021 『王の祭り——仮面の王国マンコン、カメルーン高地』（日本語・61分）

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年8月26日 'Local Values of Heritage in Africa: Swinging between the Universal and Local, as Well as the Tangible and Intangible.' "ACHS Fifth Biennial Conference 2020", University of London College, London, United Kingdom. オンライン開催

2020年8月26日 'Re-embedding Museum Objects into Local Communicative Networks.' "ACHS Fifth Biennial Conference 2020", University College London, London, United Kingdom. オンライン開催

2021年3月21日 「探索と推論の限界心理学——アフォーダンス理論と関連性理論の架橋」第119回現代人類学研究会「文化人類学を自然化する」東京大学、オンライン開催

・展示

2020年4月23日～6月23日 「知的生産のフロンティア」国立民族学博物館

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（2人）

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「朝鮮海出漁の歴史とその文化的影響の研究——イワシをめぐる韓国の民俗変化」（研究代表者：松田陸彦（国立歴史民俗博物館））連携研究者、科学研究費（基盤研究（B））「東南アジアにおけるサトイモの遺伝的多様性のマッピングによる栽培化モデルの検証」（研究代表者：Peter Matthews）連携研究者、科学研究費（基盤研究（S））「『アフリカ潜在力』と現代世界の困難の克服——人類の未来を展望する総合的地域研究」（研究代表者：松田素二（京都大学））連携研究者、科学研究費（基盤研究（B））「文化遺産の『社会的ふるまい』に関する応用人類学的研究——東部アフリカを事例に」研究代表者、科学研究費（基盤研究（B））「バスケットリーをめぐる植物生態と民族技術の文化人類学的研究」（研究代表者：上羽陽子）研究分

担者、科学研究費（基盤研究（B））「ファシズム期における日独伊のナショナリズムとインテリジェンスに関する人類学史」（研究代表者：中生勝美（桜美林大学））研究分担者、国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「アフリカ資料の多言語双方向データベースの構築」研究代表者、国立民族学博物館共同研究「人類学／民俗学の学知と国民国家の関係——20世紀前半のナショナリズムとインテリジェンス」（研究代表者：中生勝美（桜美林大学））メンバー、国立民族学博物館共同研究「文化人類学を自然化する」（研究代表者：中川 敏（大学大学））メンバー、人間文化研究機構広域連携型「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」（研究代表者：日高真吾）メンバー

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

日本アフリカ学会理事、文部科学省・日本ユネスコ国内委員会「民間ユネスコ活動助成のための補助事業」審査委員、日本文化人類学会理事、文化遺産国際協力コンソーシアム企画分科会委員、文化遺産国際協力コンソーシアム運営委員会委員、京都大学東南アジア研究所 CIRAS センター（京都大学地域研究情報統合センター）共同研究課題選考委員、文化遺産国際協力コンソーシアムアフリカ分科会委員、マダガスカル研究懇談会世話役

・他大学の客員、非常勤講師

神戸大学大学院国際文化学研究所「文化情報リテラシー特殊講義」（集中講義）

池谷和信 [いけや かずのぶ] ————— 教授

1958年生。【学歴】東北大学理学部地球科学系卒（1981）、筑波大学大学院環境科学研究科修士課程修了（1983）、東北大学大学院理学研究科博士課程単位取得退学（1990）【職歴】北海道大学文学部附属北方文化研究施設文化人類学部門助手（1990）、国立民族学博物館第一研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族社会研究部人類環境部門助教授（1998）、総合研究大学院大学先導科学研究科生命体科学専攻助教授（1999）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2007）、国立民族学博物館民族文化研究部研究部長（2015）、国立民族学博物館人類文明誌研究部教授（2017）【学位】理学博士（東北大学大学院理学研究科 2003）【専攻・専門】環境人類学・人文地理学・地球学・生き物文化誌学、世界の狩猟採集文化、家畜文化の研究、植民地時代における民族社会の変容に関する研究、地球環境問題および地球環境史に関する研究【所属学会】日本文化人類学会、日本アフリカ学会、日本地理学会、日本沙漠学会、人文地理学会、日本人類学会、日本熱帯生態学会、日本民俗学会、生き物文化誌学会、ヒトと動物の関係学会、国際人類学民族学連合（IUAES）、アメリカ人類学会（American Anthropological Association）、日本動物考古学会、東北地理学会、日本養豚学会、環境社会学会、比較文明学会、生態人類学会

【主要業績】

[単著]

池谷和信

- 2014 『人間にとってスイカとは何か——カラハリ狩猟民と考える』（フィールドワーク選書5）京都：臨川書店。
- 2003 『山菜採りの社会誌——資源利用とテリトリー』仙台：東北大学出版会。
- 2002 『国家のなかでの狩猟採集民——カラハリ・サンにおける生業活動の歴史民族誌』（国立民族学博物館研究叢書4）大阪：国立民族学博物館。

【受賞歴】

- 2007 日本地理学会優秀賞
- 1998 日本アフリカ学会研究奨励賞

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

狩猟採集民と隣人との関係に関する歴史人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、人類文明誌研究の一環として、「狩猟採集民と隣人との関係に関する歴史の変容を把握すること」が目的である。これまでの狩猟採集民の歴史研究においては、植民地以前や先史時代の狩猟採集民と隣人とのか

かわり方が不明瞭であった。本研究では、狩猟採集民と隣人とのかわりに注目して過去100年を超える時間のなかでの変容と持続を把握することが目的である。このため、アフリカ南部のカラハリ砂漠での地域研究を軸にして、西アジアのヨルダン地域、東南アジアの大陸部、シベリア北東部、南米・アマゾンにおける先史から現在までの狩猟採集民の歴史を復元することを計画している。

・成果

上記の研究テーマに関して以下のような成果を提示することができた。

1) 研究会報告：

① 2020年5月16日、パレオアジアの新学術領域の研究会において研究報告をした。また、演題は、「狩猟採集民と隣接集団との関係——共生、融合、同化」である。

② 2020年12月20日、パレオアジアの新学術領域の研究会において研究報告をした。また、演題は、「シベリアにおける狩猟採集民の環境適応について——『ヤナ狩猟民』の実像を探る」である。

2) 1) の成果をもとに、第12回の国際狩猟採集民会議の研究成果としてSESに論文集として刊行した。*Hunter-Gatherers in Asia: From Prehistory to the Present*. (Senri Ethnological Studies No.106) (with Y. Nishiaki (eds.), Osaka: National Museum of Ethnology, 2021年3月)

◎出版物による業績

[編著]

池谷和信編

2021 『食の文明論——ホモ・サピエンス史から探る』（フォーラム 人間の食）東京：農山漁村文化協会。
Ikeya, K. and Y. Nishiaki (eds.)

2021 *Hunter-Gatherers in Asia: From Prehistory to the Present* (Senri Ethnological Studies 106).
Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

[論文]

池谷和信・高木 仁

2020 「ウミガメの文化誌——日本から世界へ」『BIOSTORY』33：8-13。

2020 「ウミガメと人の共存にむけて」『BIOSTORY』33：58-59。

池谷和信

2020 「世界のハンターと動物」『ヒトと動物の関係学会』56：11-16。

2021 「狩猟採集民の食——先史から現在まで」池谷和信編『食の文明論——ホモ・サピエンス史から探る』（フォーラム 人間の食）pp.43-69, 東京：農山漁村文化協会。

2021 「地球・食・文明」池谷和信編『食の文明論——ホモ・サピエンス史から探る』（フォーラム 人間の食）pp.9-31, 東京：農山漁村文化協会。

2021 「現代文明と食」池谷和信編『食の文明論——ホモ・サピエンス史から探る』（フォーラム 人間の食）pp.413-422, 東京：農山漁村文化協会。

佐藤靖明・池谷和信

2020 「人類とバナナ」『BIOSTORY』34：6-11。

2020 「総括 バナナからみた地球——『3つの波』の人類誌」『BIOSTORY』34：32-33。

Yatsuka, H. and K. Ikeya

2020 Farming practices among African Hunter-Gatherers: Diversifying without Loss of the Past. In G. Hyden, K. Sugimura and T. Tsuruta (eds.) *Rethinking African Agriculture: How Non-Agrarian Factors Shape Peasant Livelihoods*, pp.49-63. London and New York: Routledge. [査読有]

Ihara, Y., K. Ikeya, A. Nobayashi, and Y. Kaifu

2020 A Demographic Test of Accidental Versus Intentional Island Colonization by Pleistocene Humans. *Journal of Human Evolution* 145: 102839. [査読有]

Ikeya, K.

2020 History of Human Culture Reflected in Beads: the Bead Research Framework. *Archivio per l'Antropologia e la Etnologia* CL: 171-183. [査読有]

Nakai, S. and K. Ikeya

2021 Sedentarism and the Continuity of the Relationship between Hunter-gatherers and Farmers in Thailand. In K. Ikeya and Y. Nishiaki (eds.) *Hunter-Gatherers in Asia: From Prehistory to the Present* (Senri Ethnological Studies 106), pp.181 - 194, Osaka: National Museum of Ethnology.

[査読有]

Ikeya, K. and P. Chumpol

- 2021 The Dispersal of Prehistoric Hunter-gatherers and the Roles/Materials of Beads: An Ethno-archaeological Approach. *Hunter-Gatherers in Asia: From Prehistory to the Present* (Senri Ethnological Studies 106), pp.93-107, Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

Ikeya, K. and Y. Nishiaki

- 2021 Introduction: Cultural Diversity among Asian Hunter-gatherers. In K. Ikeya and Y. Nishiaki (eds.) *Hunter-Gatherers in Asia: From Prehistory to the Present* (Senri Ethnological Studies 106), pp.1-25. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

[その他]

池谷和信

- 2020 「ビーズに秘められた可能性⑨ 石」『Bead Art』33：64-67。
2020 「食と農の未来——佐々木高明の見た最後の焼畑」特集「拡がる写真データベース」『月刊みんぱく』44(7)：6-7。
2020 「ビーズに秘められた可能性⑩ 植物」『Bead Art』34：70-73。
2020 「狩猟採集と現代」総合討論『ヒトと動物の関係学会誌』56：42-59。
2020 「岩絵 アフリカ」日本沙漠学会編『沙漠学事典』pp.246-247, 東京：丸善出版。
2020 「食 狩猟採集民——アフリカ」日本沙漠学会編『沙漠学事典』pp.228-229, 東京：丸善出版。
2020 「アマゾンにおけるペッカーリーと人とのかわり方——生態人類学の視点」『出ユーラシア・プロジェクト第2集2019年研究活動報告「出ユーラシアの統合的人類史学——文明創出メカニズムの解明」』pp.66-67。
2020 「営みにさぐる『ヒトらしさ』」『季刊民族学』44(4)：95-98。
2020 「森の民の知恵——バスケットリーの起源をさぐる」『月刊みんぱく』44(11)：14-15。
2020 「ヒトと動物の関係学の新たな地平——学会のあり方から考える」『ヒトと動物の関係学の新たな地平——学会のあり方から考える 12月号』57：6-7。
2021 「コメント」『羊飼いと風船(映画プログラム)』p.24, 東京：ピターズエンド。
2021 「特集 生き物と現代文明」『季刊民族学』175：3。
2021 「人類と生き物からみた現代文明」『季刊民族学』175：4-13。
2021 「狩猟採集民とは何か?——人類史からのまなざし」『時空旅人』61：22-27。
2021 「あとがき」池谷和信編『食の文明論——ホモ・サピエンス史から探る』(フォーラム 人間の食) pp.433-435, 東京：農山漁村文化協会。
2021 「時空をまたぐ食の世界——まえがきに代えて」池谷和信編『食の文明論——ホモ・サピエンス史から探る』(フォーラム 人間の食) pp.1-2, 東京：農山漁村文化協会。
2021 「地図で見る『地球の食』」池谷和信編『食の文明論——ホモ・サピエンス史から探る』(フォーラム 人間の食) pp.425-432, 東京：農山漁村文化協会。
2021 「五木村での『佐々木高明の見た焼畑』展」『民博通信 Online』3：4-5。

篠田謙一・池谷和信

- 2020 「ヒトってなんだ??——ホモ・サピエンスの誕生から文化の獲得まで」『季刊民族学』174：99-103。

森枝卓士・池谷和信

- 2021 「写真で見る『地球の食』」池谷和信編『食の文明論——ホモ・サピエンス史から探る』(フォーラム 人間の食) pp.32-40, 東京：農山漁村文化協会。

Ikeya, K.

- 2021 Slash-and-Burn Cultivation Viewed by SASAKI Komei: From Itsuki Mura to the World. *MIN-PAKU Anthropology Newsletter* 51: 14.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2020年11月28日 「コメント」2020年度みんぱく若手研究者奨励セミナー『危機対応をめぐる文化のデザイン——人類の知と技を問いなおす』国立民族学博物館

・共同研究会での報告

- 2020年9月11日 「フロンティア空間の発見と消失——乾燥帯アフリカの事例」『統治のフロンティア空間をめ

ぐる人類学——国家・資本・住民の関係を考察する』オンライン開催

- 2020年11月28日 「ソマリランドにおける人の移動、ものの移動」『人類史における移動概念の再構築——「自由」と「不自由」の相克に注目して』国立民族学博物館
- 2021年3月6日 「狩猟採集民の葬送とは——人類史的アプローチ」『島世界における葬送の人類学——東南アジア・東アジア・オセアニアの時空間比較』国立民族学博物館
- ・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告
- 2020年5月16日 「狩猟採集民と隣接集団との関係——共生、融合、同化」パレオアジア文化史学第9回研究大会『新人と新人的文化の拡散ルート——遺伝学からの示唆と考古学からの示唆』オンライン開催
- 2020年8月22日 「コメント」『出ユーラシアの統合的人類史学——文明創出メカニズムの解明』第3回全体会議『人類史構築のための比較研究』オンライン開催
- 2020年10月17日 「趣旨説明——佐々木高明氏の写真の意味すること」「佐々木高明の見た焼畑——五木村から世界へ」関連企画第1回公開セミナー『人びとのくらしと焼き畑——日本文化の多様性を探る』国立民族学博物館、ヒストリアテラス五木谷
- 2020年10月25日 「趣旨説明——村の『歴史』を再考する」「佐々木高明の見た焼畑——五木村から世界へ」関連企画第2回公開セミナー『焼畑は、いつ、どのように始まったのか？——稲作以前の農民像を探る』国立民族学博物館、ヒストリアテラス五木谷
- 2020年10月31日 「キリンとラクダ——アフリカの先住民の世界」第79回例会『先住民例会』国立民族学博物館
- 2020年10月31日 「趣旨説明」生き物文化誌学会第79回例会『先住民例会』国立民族学博物館
- 2020年11月1日 「趣旨説明——焼畑、ミュージアム、地域振興」「佐々木高明の見た焼畑——五木村から世界へ」関連企画第3回公開セミナー『佐々木高明の焼畑写真から見た五木村——博物館の新たな役割を探る』国立民族学博物館、ヒストリアテラス五木谷
- 2020年11月3日 「コメント」日本地理学会2020年秋季学術大会シンポジウムS2『総合的学問領域としての地理学の成果と展望』オンライン開催
- 2020年11月15日 「趣旨説明——五木村の焼畑からみた食と農」「佐々木高明の見た焼畑——五木村から世界へ」関連企画第4回公開セミナー『焼畑、在来作物、地域社会——現代社会における食と農のあり方を考える——』国立民族学博物館、ヒストリアテラス五木谷
- 2020年11月21日 「趣旨説明」第38回比較文明学会大会『「いのち」をめぐる文明的課題の解決に向けて』、シンポジウムI『生き物をめぐって現代文明を考える』国立民族学博物館
- 2020年12月12日 「趣旨説明——焼き畑からみた地球の未来」「佐々木高明の見た焼畑——五木村から世界へ」関連企画公開セミナー・特別編『焼き畑からみた地球の未来』国立民族学博物館、ヒストリアテラス五木谷
- 2020年12月12日 増野高司・池谷和信「地球環境問題とアマゾンの焼畑」「佐々木高明の見た焼畑——五木村から世界へ」関連企画公開セミナー・特別編『焼き畑からみた地球の未来』国立民族学博物館、ヒストリアテラス五木谷
- 2020年12月20日 「シベリアにおける狩猟採集民の環境適応について——『ヤナ狩猟民』の実像を探る」パレオアジア文化史学第10回研究大会、オンライン開催
- 2021年2月20日 「人為的な植生改変と狩猟・採集との関わりについて——狩猟採集民の民族誌の事例から」第35回考古学研究会東海例会『愛鷹山麓の後期旧石器時代前半期における狩猟活動と植生改変』オンライン開催
- 2021年3月19日 'Slash-and-burn Agriculture and Millet Cultivation in Postwar Japan.' CJS-JSPS Symposium-Agroecology, Sustainable Food Production and Satoyama: Contributions of Japanese Case Studies to the Discussion of Traditional Ecological Knowledge and Environmental Conservation, Institute of East Asian Studies, University of California, Berkeley, オンライン開催
- ・展示
- 2020年10月3日～12月13日 熊本県五木村ヒストリアテラス五木谷・国立民族学博物館・五木村共催展「佐々木高明の見た焼畑——五木村から世界へ」実行委員

◎調査活動

・国内調査

- 2020年9月26日～27日——熊本県五木村（焼畑に関する調査）
- 2020年10月2日～4日——熊本県五木村（焼畑に関する調査）
- 2020年10月16日～18日——熊本県五木村（焼畑に関する調査）
- 2020年10月24日～26日——熊本県五木村（焼畑に関する調査）
- 2020年10月31日～11月2日——熊本県五木村（焼畑に関する調査）
- 2020年11月13日～16日——熊本県五木村（焼畑に関する調査）
- 2020年12月11日～13日——熊本県五木村（焼畑に関する調査）
- 2020年11月7日～8日——福井県福井市（焼畑に関する資料収集）
- 2021年3月7日～8日——北海道白老町（先史時代のビーズに関する資料収集）
- 2021年3月26日～28日——北海道函館市苫小牧（先史時代のビーズに関する資料収集）
- 2021年3月21日～24日——沖縄県石垣島・西表島（狩猟採集に関する研究資料収集）
- 2021年3月30日～31日——東京大学（狩猟採集に関する研究資料収集）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（3人）、副指導教員（1人）

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文予備審査委員（2件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「装飾文化からみたアフリカ史の再構築に関する研究」研究代表者、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」（研究代表者：野林厚志）研究分担者、科学研究費（基盤研究（A））「ポスト古代ゲノム解読期における家畜化概念のヒューマンアニマルボンドの学融合刷新」（研究代表者：遠藤秀紀（東京大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（A））「資源利用行動から探る新人社会の基盤形成史——レヴァント地方乾燥域の考古科学研究」（研究代表者：門脇誠二（名古屋大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（A））「20世紀中期以降における焼畑と熱帯林の変容メカニズムの地域間比較研究」（研究代表者：佐藤廉也（大阪大学））、科学研究費（基盤研究（B））「東南アジアにおける里芋の遺伝的多様性のマッピングによる栽培化モデルの検証」（研究代表者：Peter Matthews）研究分担者、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「民族誌調査に基づくニッチ構築メカニズムの解明」（研究代表者：大西秀之（同志社女子大学））連携研究者、民博共同研究会「食生活から考える持続可能な社会——『主食』形成と展開」共同研究員（研究代表者：野林厚志）、民博共同研究会「島世界における葬送の人類学——東南アジア・東アジア・オセアニアの時空間比較」共同研究員（研究代表者：小野林太郎）民博共同研究会「人類史における移動概念の再構築——『自由』と『不自由』の相克に注目して」共同研究員（研究代表者：鈴木英明）民博共同研究会「統治のフロンティア空間をめぐる人類学——国家・資本・住民の関係を考察する」共同研究員（研究代表者：佐川 徹）、国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「データベース『焼畑の世界——佐々木高明のまなざし』」の国際化と学際研究の展開」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型北東アジア地域研究「自然環境と文化・文明の構造」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

Nomadic Peoples 編集委員、*Tribes and Tribals (India)* 編集委員、生き物文化誌学会会長、ヒトと動物の関係学会理事、北海道立北方民族博物館研究協力員、家畜資源研究会理事、総合地球環境学研究所運営会議員、コスモス国際賞選考専門委員会委員、味の素食の文化フォーラム会員、味の素食の文化センター研究助成選考委員、九州国立博物館買取評価委員

◎学会の開催

2020年10月31日 生き物文化誌学会「第79回例会『先住民例会』」国立民族学博物館

2020年11月21日～23日 比較文明学会大会「『いのち』をめぐる文明的課題の解決に向けて」国立民族学博物館

齋藤 晃 [さいとう あきら] 教授

【学歴】京都大学文学部フランス語学フランス文学専攻卒（1988）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻修士課程修了（1991）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程単位取得退学（1994）【職歴】国立民族学博物館第四研究部助手（1996）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（1998）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（2003）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2006）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2007）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2014）、国立民族学博物館人類文明誌研究部教授（2017）【学位】学術修士（東京大学大学院総合文化研究科 1991）【専攻・専門】文化人類学、ラテンアメリカ研究【所属学会】日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会

【主要業績】

[単著]

齋藤 晃

1993 『魂の征服——アンデスにおける改宗の政治学』東京：平凡社。

[共著]

岡田裕成・齋藤 晃

2007 『南米キリスト教美術とコロニアリズム』名古屋：名古屋大学出版会。

[編著]

齋藤 晃編

2020 『宣教と適応——グローバル・ミッションの近世』名古屋：名古屋大学出版会。

【受賞歴】

2018 大同生命地域研究奨励賞（公益財団法人大同生命国際文化基金）

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

植民地期アンデスにおける副王トレドの総集住化の総合的研究

・研究の目的、内容

1570年代、スペイン統治下のアンデスにおいて、世界史上希有な社会工学実験が実施された。第5代ペルー副王フランシスコ・デ・トレドの命令により、かつてのインカ帝国の中核地域で約150万の先住民が基盤目状に整然と区画された1千以上の町に強制移住させられた。総集住化と呼ばれるこの政策は、在来の居住形態、社会組織、権力関係、アイデンティティを大きく変えたといわれているが、その内実には不明な点が多い。本研究では、人文情報学のツールを活用して、副王トレドの総集住化の全体像の解明を目指す。なお、本研究は、科学研究費（基盤研究（A））「アンデスにおける植民地的近代——副王トレドの総集住化の総合的研究」（研究代表者：齋藤 晃）の一環として実施される。

・成果

科学研究費による国際共同研究のメンバーと共著で、人文情報学の道具と方法を歴史学研究へ応用することの有効性と問題点を論じた日本語論文を執筆し、『歴史学研究』に掲載された。また、同共同研究の主要な成果として刊行を予定している英語論集の執筆・編集作業を進めた。

◎出版物による業績

[編著]

ラテンアメリカ文化事典編集委員会編（[編集委員長] 関 雄二 [編集幹事] 齋藤 晃、鈴木 紀、村上勇介、八木百合子 [編集委員] 井口欣也、岡田裕成、窪田 暁、佐々木直美、渋谷 賢、清水達也、杓谷茂樹、田島久歳、ダニエル・ダンテ・サウセド・セガミ、鼓 宗、細谷広美、山脇千賀子、若林大我）

2021 『ラテンアメリカ文化事典』東京：丸善出版。

[論文]

齋藤 晃・近藤康久・溝田のぞみ・小山朋子

2020 「アンデス植民地史への人文情報学的アプローチ——先住民の総集住化の事例」『歴史学研究』1000：

32-38。[査読有]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・研究講演

2020年8月1日 「福音以前の祖先の救済——キリシタン時代の日本」第503回国立民族学博物館友の会講演会、国立民族学博物館

・みんなくウィークエンド・サロン

2020年7月12日 「アマゾンのゴムブーム」第567回ウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「近代ヒスパニック世界における文書ネットワークの成立・展開・変容（衰退）過程の究明」（研究代表者：吉江貴文（広島市立大学））研究分担者

鈴木 紀 [すずき もとひ] ————— 教授

1959年生。【学歴】東京大学教養学部教養学科卒（1982）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1985）、東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退学（1991）【職歴】国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2007）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2013）、国立民族学博物館人類文明誌研究部准教授（2017）、国立民族学博物館人類文明誌研究部教授（2019）【学位】社会学修士（東京大学大学院 1985）【専攻・専門】開発人類学・ラテンアメリカ文化論 開発援助プロジェクト評価、フェアトレード、マヤ・ユカテコ民族の社会変化、先住民文化の比較展示学【所属学会】日本文化人類学会、国際開発学会、日本ラテンアメリカ学会、古代アメリカ学会

【主要業績】

[編著]

鈴木 紀・滝村卓司編

2013 『国際開発と協働——NGOの役割とジェンダーの視点』（みんなく実践人類学シリーズ8）東京：明石書店。

[論文]

鈴木 紀

2014 「開発」山下晋司編『公共人類学』pp.69-84, 東京：東京大学出版会。

2011 「開発人類学の展開」佐藤 寛・藤掛洋子編『開発援助と人類学——冷戦・蜜月・パートナーシップ』pp.45-66, 東京：明石書店。

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

博物館におけるラテンアメリカの先住民文化展示の比較研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、ラテンアメリカの先住民文化に関する博物館展示の特徴を解明することである。ラテンアメリカを中心とする博物館は先住民文化をさまざまな形で展示しているが、それらの間にはどのような差異と共通性があるのだろうか、そしてその理由はなんだろうか。本研究では、①先スペイン期起源の文化伝統、②植民地時代以降の外来文化の影響、③各博物館の政治、経済的関心3要素に着目して、博物館展示を比較する。この研究のために、2020年度は、2014年度から2018年度にかけて実施した科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「植民地時代から現代の中南米の先住民文化」（研究代表者：鈴木 紀）で収集した100余りの博物館の展示資料を活用する。また本研究を次年度以降も発展させるために、2020年度後半には科学研究費、民間の研究助成金などに応募する。

・成果

研究成果は、以下の出版物の形で発表した。

- 1) 鈴木 紀 2021 「博物館でラテンアメリカの先住民文化の意味を考える」『月刊みんぱく』45(1)：10-11. 吹田：国立民族学博物館。
- 2) 鈴木 紀 2021 「古代文明と国家形成」『ラテンアメリカ文化事典』pp.18-19. 東京：丸善出版。
- 3) 鈴木 紀 2021 「博物館における文化の見せ方」『ラテンアメリカ文化事典』pp.290-291. 東京：丸善出版。

1) では欧米およびラテンアメリカの博物館展示場における先住民文化の意味として、古代文明の遺産、近代国家の文化的基層、古代から連続する先住民の文化伝統、現代の文化的多様性の一要素という4つの傾向を指摘した。2) ではラテンアメリカの博物館を地域別に比較した。ラテンアメリカを、メソアメリカとアンデスからなる核アメリカ地域、中間地域、南米南部、カリブ海地域の4地域に分類し、各地域における国立博物館の展示の特色を考察した。3) ではラテンアメリカの博物館を、その運営形態に応じて国立博物館、私立博物館、遺跡に併設された博物館、テーマパークの4つに分類し、各形態に応じた先住民文化の表象の特徴を考察した。

また、2019年に国立民族学博物館で開催した世界博物館学ワークショップ「刷新——展示における挑戦とイノベーション」で発表したメキシコの先住民文化展示に関する試論を以下の出版物に掲載した。

4) Laura Osorio Sunnucks, Nicola Levell, Anthony Shelton, Motoi Suzuki, Gwyneira Isaac and Diana E. Marsh 2020 “Interruptions: Challenges and Innovations in Exhibition-Making The Second World Museologies Workshop, National Museum of Ethnology (MINPAKU), Osaka, December 2019”. *Museum Worlds: Advances in Research* 8(1): 168-187.

5) Suzuki, Motoi 2020 “Interruptions: Challenges and Innovations in Exhibition Making”, *MINPAKU Anthropology Newsletter* (50): 12-12.

◎出版物による業績

[編著]

ラテンアメリカ文化事典編集委員会編（[編集委員長] 関 雄二 [編集幹事] 齋藤 晃、鈴木 紀、村上勇介、八木百合子 [編集委員] 井口欣也、岡田裕成、窪田 暁、佐々木直美、渋谷 賢、清水達也、杓谷茂樹、田島久歳、ダニエル・ダンテ・サウセド・セガミ、鼓 宗、細谷広美、山脇千賀子、若林大我）

2021 『ラテンアメリカ文化事典』東京：丸善出版。

[論文]

Sunnucks, L. O., N. Levell, A. Shelton, M. Suzuki, G. Isaac, and D. E. Marsh

2020 Interruptions: Challenges and Innovations in Exhibition-Making The Second World Museologies Workshop, National Museum of Ethnology (MINPAKU), Osaka, December 2019. *Museum Worlds: Advances in Research* 8(1): 168-187.[査読有]

[その他]

鈴木 紀

2020 「臨時休館中の展示場で——メキシコの『アレプリへ』の新着資料」『みんぱく e-news』228：巻頭コラム。

2021 「博物館でラテンアメリカの先住民文化の意味を考える」『月刊みんぱく』45(1)：10-11。

2021 「古代文明と国家形成」ラテンアメリカ文化事典編集委員会編『ラテンアメリカ文化事典』pp.18-19, 東京：丸善出版。

2021 「民族」ラテンアメリカ文化事典編集委員会編『ラテンアメリカ文化事典』p.113, 東京：丸善出版。

2021 「ネオ・インディオ」ラテンアメリカ文化事典編集委員会編『ラテンアメリカ文化事典』pp.136-137, 東京：丸善出版。

2021 「博物館における文化の見せ方」ラテンアメリカ文化事典編集委員会編『ラテンアメリカ文化事典』pp.290-291, 東京：丸善出版。

2021 「マヤの生業と農耕儀礼」ラテンアメリカ文化事典編集委員会編『ラテンアメリカ文化事典』pp.314-315, 東京：丸善出版。

2021 「メキシコおよび中米の食文化」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・櫻永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.622-623, 東京：丸善出版。

Suzuki, M.

2020 Interruptions: Challenges and Innovations in Exhibition Making. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 50: 12.

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1人）、副指導教員（3人）

◎社会活動・館外活動

・その他の社会活動・館外活動

日本ラテンアメリカ学会理事

關 雄二 [せき ゆうじ] ————— 副館長（企画調整担当）、人類文明誌研究部教授

上羽陽子 [うえば ようこ] ————— 准教授

1974年生。【学歴】大阪芸術大学芸術学部工芸学科染織コース卒（1997）、大阪芸術大学大学院芸術文化研究科博士前期課程修了（1999）、大阪芸術大学大学院芸術文化研究科博士後期課程修了（2002）【職歴】大阪芸術大学大学院芸術文化研究科研究員（2002）、大阪市立クラフトパーク織物工房非常勤指導員（2003）、大阪芸術大学通信教育部工芸学科ファイバーコース非常勤講師（2003）、京都精華大学非常勤講師（2007）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教（2008）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2013）、総合研究大学院大学准教授（2014）、国立民族学博物館人類文明誌研究部准教授（2017）【学位】博士（芸術文化学）（大阪芸術大学 2002）、修士（芸術文化学）（大阪芸術大学 1999）【専攻・専門】民族芸術学、染織研究、手工芸研究【所属学会】民族芸術学会、意匠学会、日本風俗史学会、日本南アジア学会、生き物文化誌学会

【主要業績】

[単著]

上羽陽子

2006 『インド・ラバリー社会の染織と儀礼——ラクダとともに生きる人びと』京都：昭和堂。

[分担執筆]

Ueba, Y.

2020 Strategic Choices of Techniques: Dyed and Printed Textiles for Goddess Rituals in Gujarat, Western India. In A. Nakatani (ed.) *Fashionable Traditions: Asian Handmade Textiles in Motion*, pp.235-251. Lanham: Lexington Books.

[論文]

上羽陽子

2012 「インド・グジャラート州アーメダバード市における女神儀礼用染色布の製作技術の現状」『国立民族学博物館研究報告』37(1)：1-51。

【受賞歴】

2010 意匠学会作品賞

2007 第4回木村重信民族芸術学会賞

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

手工芸文化の比較研究

・研究の目的、内容

本研究は手工芸品に焦点をあて、つくり手たちが急速に変化する自然環境や社会環境にどのように対応しながら、現代的な要素をいかに選択しているかを明らかにすることが目的である。本年度は、とくに現在の日本および世界における余暇的・趣味的仕事とその造形物に焦点をあて、通文化的な視点でそれらの特徴を比較・検

討する。

本研究は、科学研究費（基盤研究（B））「バスケットリーをめぐる植物生態と民族技術の文化人類学的研究」および、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」（研究代表者：野林厚志）による。

・成果

本年度は、日本および世界における余暇的・趣味的仕事とその造形物に焦点をあてた『現代手芸考——ものづくりの意味を問い直す』（上羽陽子・山崎明子編、フィルムアート社、2020年）を刊行した。論文は、「『手芸的なもの』を探る」（上羽陽子、山崎明子編『現代手芸考——ものづくりの意味を問い直す』、pp.9-27、フィルムアート社）を公表した。研究発表は、上記、科研新学術領域主催の研究大会等でおこなった。

◎出版物による業績

[単著]

上羽陽子・山崎明子

2020 『現代手芸考——ものづくりの意味を問い直す』東京：フィルムアート社。

[分担執筆]

金谷美和・上羽陽子・中谷文美

2021 「道具としての植物利用（3）——インドネシア北東部アッサム地域を中心に」野林厚志編『パレオアジア文化史学——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究 計画研究 B01班2020年度 研究報告』pp.5-10, 東京：文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016-2020年度計画研究 B01班（研究課題番号16H06411）。

上羽陽子

2020 「『手芸的なもの』を探る」上羽陽子・山崎明子編『現代手芸考——ものづくりの意味を問い直す』pp.9-27, 東京：フィルムアート社。

2020 「つくりたくないものは、つくりたくない」上羽陽子・山崎明子編『現代手芸考——ものづくりの意味を問い直す』pp.53-56, 東京：フィルムアート社。

2020 「隙間を埋める刺繍作業」上羽陽子・山崎明子編『現代手芸考——ものづくりの意味を問い直す』pp.223-226, 東京：フィルムアート社。

2020 「あとがきにかえて」上羽陽子・山崎明子編『現代手芸考——ものづくりの意味を問い直す』pp.287-295, 東京：フィルムアート社。

[その他]

小野林太郎・Riczar Fuentes・中谷文美・金谷美和・上羽陽子

2020 「タケ仮説再考——ウォーレシアにおける植物利用からみた石器の機能論」『パレオアジア文化史学——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究 第10回研究大会』p.10, 名古屋：名古屋大学。

中谷文美・上羽陽子・山岡拓也・金谷美和・Riczar Fuentes・小野林太郎

2020 「植物資源の多面的利用——用途に適した素材特性の理解と文化的選好をめぐって」『パレオアジア文化史学——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究 第10回研究大会』p.12, 名古屋：名古屋大学。

上羽陽子

2020 「籠だけじゃない」『月刊みんぱく』44(4)：14-15。

2020 「豊穡たるテキスタイルの国」『中央公論』134(8)：12-14。

2020 「世界を魅了するインドのテキスタイル」『中央公論』134(8)：170-177。

2021 「調理時の衣服」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.204-205, 東京：丸善出版。

2021 「植物素材のつばなし帽子」『月刊みんぱく』45(2)：14-15。

Ono, R., R. Fuentes, A. Nakatani, M. Kanetani, and Y. Ueba

2020 Bamboo Hypothesis Revisited: Lithic Technology and Use from the View of Plant Processing Practice in Wallacea. *The 10th Conference on Cultural History of PaleoAsia*, p.11. Nagoya: Nagoya University.

Nakatani, A., Y. Ueba, T. Yamaoka, M. Kanetani, R. Fuentes, and R. Ono

2020 The Multifaceted Utilization of Plant Resources: Understanding the Fit of Plant Properties to

Particular Purposes, and the Possibility of Cultural Preferences. *The 10th Conference on Cultural History of PaleoAsia*, p.13. Nagoya: Nagoya University.

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

三尾 稔・金谷美和・上羽陽子監修

2021 『みんなく映像民族誌 第41集 インドの染色職人カトリー——カッチ地方の絞り染めと更紗』（日本語・53分）

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2020年6月8日 「バスケットリー研究の可能性について」科学研究費（基盤研究（B））「バスケットリーをめぐる植物生態と民族技術の文化人類学的研究」2020年度第1回研究会、国立民族学博物館第2演習室、オンラインとのハイブリッド開催

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年12月18日 「タケ仮説再考——ウォーレスにおける植物利用からみた石器の機能論」パレオアジア文化史学第10回研究大会、国立民族学博物館、オンラインとのハイブリッド開催、小野林太郎・Riczar Fuentes・中谷文美・金谷美和との共同発表

2020年12月18日 「植物資源の多面的利用——用途に適した素材特性の理解と文化的選好をめぐる」パレオアジア文化史学第10回研究大会、国立民族学博物館、オンラインとのハイブリッド開催、中谷文美・山岡拓也・金谷美和・Riczar Fuentes・小野林太郎との共同発表

2021年3月23日 「伝統として残す素材・技術・道具——女神儀礼用染色布をめぐる伝統イメージ」国立民族学博物館共同研究会『伝統染織品の生産と消費——文化遺産化・観光化によるローカルな意味の変容をめぐる』、国立民族学博物館第6セミナー室、オンラインとのハイブリッド開催

2021年3月30日 「道具としての植物利用（3）——インド北東部アッサム地域を中心に」パレオアジア文化史学第10回研究大会、国立民族学博物館、オンラインとのハイブリッド開催、中谷文美・山岡拓也・金谷美和・Riczar Fuentes・小野林太郎との共同発表

・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

2020年9月24日 「模写実践と異文化理解——インド西部の刺繍布を読みとる①」川島テキスタイルスクール

2020年10月8日 「模写実践と異文化理解——インド西部の刺繍布を読みとる②」川島テキスタイルスクール

2020年10月22日 「模写実践と異文化理解——インド西部の刺繍布を読みとる③」川島テキスタイルスクール

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」（研究代表者：野林厚志）研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「バスケットリーをめぐる植物生態と民族技術の文化人類学的研究」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究 国立民族学博物館拠点（MINDAS）」（拠点代表者：三尾 稔）拠点構成員

◎社会活動・館外活動

・他大学の客員、非常勤講師

京都精華大学「制作演習7・クラフト1」、京都精華大学「美術工芸史1・文様史1・版画論」

卯田宗平 [うだ しゅうへい] ————— 准教授

1975年生。【学歴】立命館大学産業社会学部卒（1998）、立命館大学大学院理工学研究科修士課程修了（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程修了（2003）【職歴】日本学術振興会特別研究員 DC1（総研大、2000-2003）、日本学術振興会海外特別研究員海外PD（中央民族大学、2005-2007）、中央民族大学民族学社会学学院外籍講師（2005-2010）、日本学術振興会特別研究員PD（東京大学、2008-2010）、東京大学日本・アジアに関する教育研究ネットワーク機構特任講師（2011-2015）、東京大学東洋文化研究所汎アジア研究部門講師（兼任）（2011-2015）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2015）、総合研究大学院大学文化科学研究科准教授（2016）、国立民族学博物館人類文明誌研究部准教授（2017-）【学位】博士（文学）（総合研究大学院大学 2003）【専攻・専門】環境民俗学・東アジア地域研究【所属学会】日本民俗学会、文化人類学会、生態人類学会、The Society for Human

Ecology (SHE)、生き物文化誌学会、日本現代中国学会

【主要業績】

[単著]

卯田宗平

2014 『鵜飼いと現代中国——人と動物、国家のエスノグラフィ』東京：東京大学出版会。

[編著]

卯田宗平編

2014 『アジアの環境研究入門——東京大学で学ぶ15講』（古田元夫監修）東京：東京大学出版会。

[論文]

卯田宗平

2015 「ポスト『北方の三位一体』時代の中国エヴェンキ族の生業適応——大興安嶺におけるトナカイ飼養の事例」『アジアの生態危機と持続可能性——フィールドからのサステナビリティ論』（研究双書 No.616）pp.73-108, 千葉：アジア経済研究所。

【受賞歴】

2010 第5回日本文化人類学会奨励賞

1998 学部長コース賞

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

鵜飼文化の比較研究

・研究の目的、内容

本年度の研究では、(1)日本各地でおこなわれている鵜飼を対象に、その歴史や技術、現状に関わる広域調査を進めるとともに、(2)地域間比較の視点から各地の鵜飼の地域固有性と共通性を導きだす。そのうえで、(3)中国の鵜飼との比較から、日本の鵜飼文化の特徴を相対的に導きだす。なお、本研究は科学研究費（基盤研究（B））「動物保護時代における文化システムとしての鵜飼の全面解明と『最適継承ルート』の共創」（研究代表者：卯田宗平）にもとづいておこなう。

・成果

本年度は、おもに広島県三次市の三次鵜飼を対象とし、三次の鵜匠や広島県立歴史民俗資料館の学芸員らの協力のもと、鵜飼で使用されている鵜舟や鵜籠、竹竿、魚籠、手縄といった物質文化の測量、鵜小屋でのウミウの飼育方法の観察、江の川で生業としておこなわれていた時代の資料収集、漁日誌などの記録の整理をおこなった。そして、収集した記録を整理し、次年度以降に実施する日本列島の鵜飼に関わる地域間比較研究のための基礎資料とすることができた。

このほか、今年度はこれまで日本や中国、北マケドニア共和国で実施してきた一連の鵜飼研究の成果をまとめ、鵜飼が成りたつ原理や動物利用の論理を明らかにした単著を準備した。そのうえで、国立民族学博物館出版助成の審査を経て、2021年度出版の見通しを立てた。さらに、2020年度は鵜飼に関わる各個研究から展開した民博の共同研究「もうひとつのドメスティケーション」の成果も論集としてまとめ、『野生性と人類の論理』（東京大学出版会）として2021年5月に刊行予定である。なお、本研究は科学研究費（基盤研究（B））「動物保護時代における文化システムとしての鵜飼の全面解明と『最適継承ルート』の共創」（研究代表者：卯田宗平）にもとづいておこなった。

◎出版物による業績

[編著]

野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田省吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編

2021 『世界の食文化百科事典』東京：丸善出版。

[論文]

卯田宗平

2020 「旧ユーゴスラヴィア時代における鵜飼い漁の技術とその存立条件——北マケドニア共和国ドイラン

湖におけるマンドゥラ (Mandra) 漁の事例から」『国立民族学博物館研究報告』45(1) : 1-80。[査読有]

2020 「魚類のドメスティケーションをアクター間の力学から読み解く——福永真弓著『サケをつくる人びとと国立民族学博物館研究報告』水産増殖と資源再生』(東京大学出版会、2019年)を読む」『環境社会学研究』26 : 180-184。[査読有]

[その他]

卯田宗平

2020 「鶺鴒の運搬籠」『月刊みんぱく』44(5) : 14-15。

2020 「なぜ植物利用は多様なのか」『BIOSTORY』33 : 110。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2020年11月28日 「いま、危機対応を問うことの意義」2020年度みんぱく若手研究者奨励セミナー『危機対応をめぐる文化のデザイン——人類の知と技を問いなおす』国立民族学博物館

・共同研究会での報告

2020年11月28日 「共同研究会『日本列島の鶺鴒文化』で目指すもの」『日本列島の鶺鴒文化に関する T 字型学際共同アプローチ——野生性と権力をめぐって』国立民族学博物館

2020年11月28日 「比較対象としての中国の鶺鴒の紹介」『日本列島の鶺鴒文化に関する T 字型学際共同アプローチ——野生性と権力をめぐって』国立民族学博物館

2021年 2 月27日 「ウミウの繁殖生態と鶺鴒匠たちによる繁殖技術の収斂化——計 5 回の繁殖記録から考える」『日本列島の鶺鴒文化に関する T 字型学際共同アプローチ——野生性と権力をめぐって』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2021年 2 月11日 「異文化を鏡にした自文化理解——日本・アジア学という視座」『日本・アジア学の歩みと展望——過去・現在・未来』オンライン開催

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員 (1 人)、副指導教員 (1 人)

・博士論文審査委員 (総研大に限る)

博士論文予備審査委員 (1 件)

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費 (基盤研究 (C)) 「ポスト専門化時代における経験知のマネジメントとその限界性——農山漁業の事例から」(研究代表者: 石本敏也 (聖徳大学)) 研究分担者、科学研究費 (基盤研究 (B)) 「動物保護時代における文化システムとしての鶺鴒の全面解明と『最適継承ルート』の共創」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究拠点」(拠点代表者: 池谷和信) 拠点構成員

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

京都府宇治市宇治川の鶺鴒・放ち鶺鴒あり方検討委員会委員、生き物文化誌学会生き物文化誌学会学会誌『BIOSTORY』編集委員、生き物文化誌学会生き物文化誌学会評議委員、岐阜県岐阜市長良川鶺鴒習俗総合調査専門委員会・委員、岐阜県関市小瀬鶺鴒習俗総合調査委員会・委員、生態人類学会理事

・他大学の客員、非常勤講師

京都市立芸術大学「日本文化史」(集中講義)

小野林太郎 [おの りんたろう] ————— 准教授

【学歴】上智大学文学部史学科卒業 (1998)、上智大学外国語学研究科地域研究専攻前期博士課程修了 (2000)、上智大学外国語学研究科地域研究専攻後期博士課程単位取得退学 (2003) 【職歴】日本学術振興会特別研究員 DC 1 (2000-2003)、日本学術振興会特別研究員 PD (国立民族学博物館) (2003-2006)、総合地球環境学研究所研究プロジェクト推進支援員 (2007-2008)、日本学術振興会海外特別研究員 PD (オーストラリア国立大学) (2008-2010)、

東海大学海洋学部海洋文明学科専任講師（2010-2014）、東海大学海洋学部海洋文明学科准教授（2014-2019）、国立民族学博物館人類文明誌研究部准教授（2019）【学位】博士（地域研究）（上智大学 2006）【専攻・専門】海洋考古学、東南アジア・オセアニア研究【所属学会】東南アジア考古学会、インド太平洋先史学会、世界動物考古学会、日本オセアニア学会、日本人類学会、日本文化人類学会、日本生態人類学会、日本考古学研究会、東南アジア学会、日本動物考古学会、日本考古学協会、日本イコモス国内委員会、日本海洋政策学会

【主要業績】

[単著]

小野林太郎

2018 『海の人類史：東南アジア・オセアニア海域の考古学——増補改訂版』東京：雄山閣。

[編著]

小野林太郎・長津一史・印東道子編

2018 『海民の移動誌——西太平洋のネットワーク社会』京都：昭和堂。

[論文]

Ono, R., A. Oktaviana, M. Ririmasse, M. Takenaka, C. Katagiri, and M. Yoneda

2018 Early Metal Age interactions in Island Southeast Asia and Oceania—jar burials from Aru Manara, northern Moluccas. *Antiquity* 92(364): 1023-1039. <https://doi.org/10.15184/aqy.2018.113>

【受賞歴】

2013 第4回東南アジア考古学会奨励賞

2006 第5回井植アジア太平洋研究賞（佳作）

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

海域アジア・オセアニアにおける人類の島嶼移住・島嶼適応・海洋文化の解明

・研究の目的、内容

本研究の目的の一つは、東南アジア島嶼部や琉球列島を軸とする海域アジアからオセアニアにかけての海域世界へと移住・拡散した人類（主にホモ・サピエンス）が、いつ頃、どのように島嶼環境への移住に成功したのかを考古・人類学的手法により追究するところにある。また移住後の人類による島嶼・海洋適応のプロセスにかかわる人類学的データを、新たな発掘調査や民族考古学的手法により発見・収集していくのが二つ目の目的となる。さらに3つ目の目的として、各島嶼域で発展してきた漁撈や造船、航海術といった海洋文化を通文化史的視点から再検討する計画である。これらの目的遂行のため、科学研究費（新学術領域研究・国際共同研究強化B）を主に用いたインドネシア、およびミクロネシアでの発掘調査と出土遺物の分析調査を進めるほか、代表を務めているフォーラム型情報ミュージアムのプロジェクトでの海洋文化に関する研究を進める計画である。またその過程で新たに得られた成果については逐次、国内外の学術誌や学会等にて論文発表するほか、一般書としても公表し、成果の社会還元も目指す。

・成果

テーマにかかわる英語論文を国際的な学術誌や学術本に6本、和文論文を国内で刊行された学術本に2本公表できたほか、英語で編集した共編著本を1本、監修本1冊を刊行した。いずれも研究課題と直接・間接的関わる内容である。このほか、国内の学会や研究会での発表や講演として、本研究の成果を積極的に公表した。外部資金との関わりにおいては、コロナ禍で海外調査が全く実施できなかったが、これまでに出土した考古資料の分析や公表を進めることができた【科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））（研究代表者：門脇誠二）・科学研究費（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B）））（研究代表者：小野林太郎）】。また新たに国内調査として琉球列島をフィールドとした人類・考古学的調査を実施することができた【科学研究費（挑戦的研究（開拓・萌芽））（研究代表者：小野林太郎）・科学研究費（基盤研究（S））（研究代表者：菅 浩伸）、科学研究費（基盤研究（B））（研究代表者：長津一史）、科学研究費（基盤研究（C））（研究代表者：石原与四郎、片桐千亜紀）】。

◎出版物による業績

[編著]

Ono, R. and A. Pawlik (eds.)

2020 *Pleistocene Archaeology-Migration, Technology, and Adaptation*. London: IntechOpen Publisher. [査読有]

[分担執筆]

小野林太郎

2020 「人類史1——発掘からよみとくオセアニア移住史と海洋適応」風間計博・梅崎昌裕編『オセアニアで学ぶ人類学』pp.2-20, 京都：昭和堂。

2020 「『動く』戦略からみたオセアニアにおけるヒトの人類史」大塚柳太郎編『動く・集まる』（生態人類学は挑む）pp.95-121, 京都：京都大学学術出版会。

[論文]

Ono, R., R. Fuentes, A. Pawlik, H. O. Sofian, Sriwigati, N. Aziz, N. Alamsyah, and M. Yoneda,

2020 Island Migration and Foraging Behaviour by Anatomically Modern Humans during the Late Pleistocene to Holocene in Wallacea: New Evidence from Central Sulawesi. *Quaternary International* 554 : 90-106. [査読有]

Ono, R., A. Pawlik, and R. Fuentes

2020 Island Migration, Resource Use, and Lithic Technology by Anatomically Modern Humans in Wallacea. In Ono, R. and A. Pawlik (eds.) *Pleistocene Archaeology-Migration, Technology, and Adaptation* (Pleistocene Archaeology-Migration, Technology, and Adaptation), pp.85-111. London: IntechOpen Publisher. [査読有]

Nakanishi, Y., R. Ono, C. Katagiri, N. Sakagami, and T. Tetsu

2020 Pursuing Sustainable Preservation and Valorisation of Underwater Cultural Heritage: Okinawa's Pilot Project for an Underwater Site Museum. In J.A. Rodrigues and A. Traviglia (eds.) *IKUWA6: Shared Heritage: Proceedings of the Sixth International Congress for Underwater Archaeology: 28 November-2 December 2016, Western Australian Maritime Museum Fremantle, Western Australia* (IKUWA6: Shared Heritage: Proceedings of the Sixth International Congress for Underwater Archaeology: 28 November-2 December 2016, Western Australian Maritime Museum Fremantle, Western Australia), pp.292-300. Oxford: Oxbow Books. [査読有]

Katagiri, C., R. Ono, Y. Nakanishi, and H. Miyagi

2020 Research on the Wreck Sites, Sea Routes and the Ships in the Ryukyu Archipelago. In J.A. Rodrigues and A. Traviglia (eds.) *IKUWA6: Shared Heritage: Proceedings of the Sixth International Congress for Underwater Archaeology: 28 November-2 December 2016, Western Australian Maritime Museum Fremantle* (IKUWA6: Shared Heritage: Proceedings of the Sixth International Congress for Underwater Archaeology: 28 November-2 December 2016, Western Australian Maritime Museum Fremantle), pp.19-29. Oxford: Oxbow Books. [査読有]

Ono, R., R. Fuentes, A. Noel, O. Sofian, Sriwigati, N. Aziz, and A. Pawlik

2021 Development of Bone and Lithic Technologies by Anatomically Modern Humans during the Late Pleistocene to Holocene in Sulawesi and Wallacea. *Quaternary International*. [査読有]

Ono, R.

2021 Technological and Social Interactions between Hunter-gatherers and New Migrants in the Prehistoric (Neolithic) Islands of Southeast Asia and Oceania. In K. Ikeya and Y. Nishiaki (eds.) *Hunter-gatherers in Asia: From Prehistory to the Present* (Senri Ethnological Studies 106), pp.127-148. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

[監修]

小野林太郎

2021 テルモ・ピエバニ、バレリー・ゼトゥン著、エラリー・ジャンクリストフ、篠原範子、竹花秀春訳『人類史マップ——サピエンス誕生・危機・拡散の全記録』東京：日経ナショナルジオグラフィック社。

[その他]

小野林太郎

2020 「海の民とバスケットリー」『月刊みんぱく』44(10) : 14-15。

- 2020 「旅・いろいろ地球人 海洋考古学の世界① 石垣の海底遺跡」『毎日新聞』10月3日夕刊。
- 2020 「旅・いろいろ地球人 海洋考古学の世界② 四爪錨の謎と魅力」『毎日新聞』10月10日夕刊。
- 2020 「旅・いろいろ地球人 海洋考古学の世界③ トケラウ——環礁での発掘」『毎日新聞』10月17日夕刊。
- 2020 「旅・いろいろ地球人 海洋考古学の世界④ ポンペイ島の謎を追う」『毎日新聞』10月24日夕刊。
- 2020 「旅・いろいろ地球人 海洋考古学の世界⑤ 海を越えたサピエンス」『毎日新聞』10月31日夕刊。
- 2021 「渡海による移住に成功したウォーレシアの旧石器人」『ミルシル』14(2)：12-14。

◎口頭発表・展示・その他の業績

- ・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告
 - 2021年2月27日 「Report of Project Update and Plan 2020-2021. "Fishing and Material Culture in Maritime Asia", National Museum of Ethnology, オンライン開催
- ・共同研究会での報告
 - 2020年8月1日 「ウォーレシアにおける初期金属器時代の再葬——比較の視点から」『島世界における葬送の人類学——東南アジア・東アジア・オセアニアの時空間比較』国立民族学博物館
 - 2021年3月6日 「東インドネシアの複葬に関する考察——民族考古学的視点から」『島世界における葬送の人類学——東南アジア・東アジア・オセアニアの時空間比較』国立民族学博物館
- ・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告
 - 2020年5月16日 「サピエンスによるウォーレシアへの初期移住年代と動物・石器利用」文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020：パレオアジア文化史学第9回研究大会、オンライン開催
 - 2020年12月18日 「タケ仮説再考——ウォーレシアにおける植物利用からみた石器の機能論」文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020：パレオアジア文化史学第10回研究大会、オンライン開催
 - 2020年12月18日 「植物資源の多面的利用——用途に適した素材特性の理解と文化的選好をめぐって」文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020：パレオアジア文化史学第10回研究大会、オンライン開催
- ・研究講演
 - 2021年2月12日 「海域アジアへ移住したサピエンスの海洋・島嶼適応——日本・東南アジア・オセアニアの事例から」文化庁支援事業「ヤマト・天理の歴史文化をめぐる」プロジェクト連続講座「発見！世界の考古学」天理参考館
- ・広報・社会連携活動
 - 2020年12月5日 「海洋考古学の世界——沖縄の水中文化遺産とその魅力」第507回国立民族学博物館友の会講演会、国立民族学博物館

◎調査活動

- ・国内調査
 - 2021年3月11日～3月30日—沖縄県石垣島・沖縄島（石垣島における洞窟遺跡の発掘調査・沖縄島での遺跡踏査・資料収集）

◎大学院教育

- ・指導教員
 - 主任指導教員（1人）
- ・大学院ゼミでの活動
 - 「地域文化学演習Ⅰ」、「地域文化学演習Ⅱ」、「比較文化学演習Ⅰ」、「比較文化学演習Ⅱ」
- ・博士論文審査委員（総研大に限る）
 - 博士論文審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
 - 科学研究費（基盤研究（S））「浅海底地形学を基にした沿岸域の先進的学際研究——三次元海底地形で開くパラダイム」（研究代表者：菅 浩伸（九州大学））研究分担者、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「ホモ・サピエンスのアジア定着期における行動様式の解明」（研究代表者：門脇誠二（名古屋大学））研究分担者、科学研究費（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B）））「オセアニアの人類移住と島嶼間ネットワークに関わる考古学的研究」研究代表者、科学研究費（基盤研究（C））「琉球列島における西欧沈没船遺跡

の実態把握と水中遺跡公園化へ向けた基礎的研究」(研究代表者：片桐千亜紀(九州大学))研究分担者、国立民族学博物館基幹研究プロジェクト「海域アジアにおける人類の海洋適応と物質文化——東南アジア資料を中心に」研究代表者、国立民族学博物館共同研究「島世界における葬送の人類学——東南アジア・東アジア・オセアニアの時空間比較」研究代表者、人間文化研究機構機関拠点型「海域アジアにおける人類の海洋適応と物質文化——東南アジア資料を中心に」研究代表者、国立民族学博物館共同研究「島世界における葬送の人類学——東南アジア・東アジア・オセアニアの時空間比較」研究代表者

寺村裕史 [てらむら ひろふみ] 准教授

1977年生。【学歴】岡山大学文学部歴史文化学科(考古学履修コース)卒(2000)、岡山大学大学院文学研究科歴史文化学専攻修士課程修了(2002)、岡山大学大学院文化科学研究科人間社会文化学専攻博士課程修了(2005)【職歴】同志社大学文化情報学部実習助手(2005)、総合地球環境学研究所研究部プロジェクト研究員(2007)、国際日本文化研究センター研究部機関研究員(2011)、国際日本文化研究センター文化資料研究企画室特任准教授(2013)、国立民族学博物館文化資源研究センター助教(2015)、国立民族学博物館人類文明誌研究部助教(2017)、国立民族学博物館人類文明誌研究部准教授(2018)【学位】博士(文学)(岡山大学大学院 2005)、修士(文学)(岡山大学大学院 2002)【専攻・専門】情報考古学、文化情報学【所属学会】考古学研究会、地理情報システム学会、日本情報考古学会

【主要業績】

[単著]

寺村裕史

2014 『景観考古学の方法と実践』東京：同成社。

[共著]

Maekawa, K., E. Matsushima, H. Teramura, and S. Watanabe

2018 Brick Inscriptions in the National Museum of Iran: A Catalogue. Kyoto: Kyoto University Press.

[論文]

寺村裕史

2017 「情報考古学的手法を用いた文化資源情報のデジタル化とその活用」『国立民族学博物館研究報告』42(1): 1-47。[査読有]

【受賞歴】

2007 日本情報考古学会優秀賞(日本情報考古学会)

【2020年度の活動報告】

◎出版物による業績

◎各個研究

・研究課題

古代シルクロード都市の形成ならびに人と文化の東西交流に関する研究

・研究の目的、内容

本研究は、ユーラシア大陸における東西交流(東洋と西洋)の結節点としての古代シルクロード都市の果たした役割と、それらの都市を介しておこなわれた人や文化の交流の実態を明らかにすることを目的として実施するもので、ウズベキスタン共和国のサマルカンドに所在するウズベキスタン共和国科学アカデミーヤフヨ・グロモフ考古学研究所(以下、考古学研究所)との国際共同研究のかたちをとる。具体的には、考古学研究所と連携して実施するカフィル・カラ遺跡などの都市遺跡の発掘調査や、ザラフシャン川中流域に点在する都市遺跡の分布踏査などを通じて、古代シルクロード都市の形成・発展過程ならびに、人と文化の東西交流の動態について国際的な議論を深め、成果を共同で発信する。

・成果

2019年に学術協力に関する協定を締結したウズベキスタン共和国科学アカデミーヤフヨ・グロモフ考古学研究所(以下、考古学研究所)と協働で、カフィル・カラ遺跡での発掘調査を実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大のため海外渡航が制限され、今年度は調査を実施することができなかった。

その代わりに、考古学研究所所属の研究者や海外の研究協力者、ならびに日本国内の科研費の研究分担者とオンラインで連絡を取り合い、これまでの発掘調査成果をまとめるかたちで、共著での論文投稿や口頭発表をおこなった。

具体的には、カフィル・カラ遺跡から発見された遺物を中心に紹介しながら、遺跡の性格や当時の都市遺跡間の文化交流に関して考察した論考が、東方学会のジャーナルに掲載された（下記①）。また、2021年3月に日本西アジア考古学会主催の『第28回西アジア発掘調査報告会』において、「ウズベキスタン共和国カフィル・カラ遺跡発掘調査2020年度までの成果——出土遺物に見るカフィル・カラの文化交流」という口頭発表（オンライン開催）を日本隊・ウズベク隊の共同成果として報告し（報告者・村上智見・北海道大学）、会の報告集に論文が掲載された（下記②）。

① Alisher BEGMATOV, Amtriddin BERDIMURODOV, Gennadiy BOGOMOLOV, MURAKAMI Tomomi, TERAMURA Hirofumi, UNO Takao and USAMI Tomoyuki. (2020/08)

New Discoveries from Kafir-kala: Coins, Sealings, and Wooden Cravings. *ACTA ASIATICA* (Bulletin of the Institute of Eastern Culture) (119) : 1-20. 東京：一般財団法人 東方學會.

② ベグマトフ・アリシエル, 寺村裕史, 村上智見, 宇野隆夫, 宇佐美智之, ベルディムロドフ・アムリディン, ボゴモロフ・ゲンナディ (2021/03/28)

「ウズベキスタン共和国カフィル・カラ遺跡発掘調査2020年度までの成果——出土遺物に見るカフィル・カラの文化交流」『第28回 西アジア発掘調査報告会報告集』（令和2年度 考古学が語る古代オリエント）日本西アジア考古学会。

なお、先述の協定締結並びに発掘調査は、科学研究費（基盤研究（B））「シルクロード都市の形成ならびに人と文化の東西交流に関する考古学的研究」（研究代表者：寺村裕史）にもとづき実施したものである。

また、考古学の発掘調査の成果とは異なるが、昨年度までに考古学研究所の協力を得て撮影された取材映像を元に、ウズベク人研究者に日本語・ウズベク語の翻訳チェックを依頼し、民博の映像音響資料として『ウズベキスタンの結婚式』、『ウズベキスタンの美味しい羊料理』、『タンディルでパンを焼く』（日本語、英語）という3本のビデオテーク番組の制作・監修をおこなった。一般向けに短くかつ分かりやすく再編集した映像資料をビデオテークブースで公開することにより、展示への理解を助けるとともに、現地（オアシス都市）での人びとの暮らしぶりに関する研究成果を広く一般に知ってもらうことにもつながることが期待される。

[分担執筆]

寺村裕史

2021 「津波の記憶を刻む文化遺産——寺社・石碑データベース」日高真吾編『特別展「復興を支える地域の文化——3.11から10年」』pp.94-101, 大阪：国立民族学博物館。

2021 「地域文化の活用を支援する科学調査の可能性」日高真吾・黄 貞燕編『地域文化を活用する——地域振興、地域活性に果たす役割』pp.116-127, 大阪：日高真吾研究室。

Watanabe, S. and H. Teramura

2021 3D Modelling of the Cuneiform Tablets and Bricks Possessed by the National Museum of Iran. In K. Maekawa (ed.) *Ancient Iran-New Perspectives from Archaeology and Cuneiform Studies* (Ancient Text Studies in the National Museum of Iran 2), pp.173-179. Tehran: National Museum of Iran.

[論文]

ベグマトフ・アリシエル, 寺村裕史, 村上智見, 宇野隆夫, 宇佐美智之, ベルディムロドフ・アムリディン, ボゴモロフ・ゲンナディ

2021 「ウズベキスタン共和国カフィル・カラ遺跡発掘調査2020年度までの成果——出土遺物に見るカフィル・カラの文化交流」『第28回西アジア発掘調査報告会報告集』（令和2年度考古学が語る古代オリエント）, 東京：日本西アジア考古学会。

Teramura, H.

2020 Ecological Approach to Cultural Elements Using GIS-based Spatial Analysis. In A. Nobayashi and S. Simon (eds.) *Environmental Teachings for the Anthropocene: Indigenous Peoples and Museums in the Western Pacific* (Senri Ethnological Studies 103), pp.207-219. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

Begmatov, A., A. Berdimurodov, G. Bogomolov, T. Murakami, H. Teramura, T. Uno, and T. Usami

2020 New Discoveries from Kafir-kala: Coins, Sealings, and Wooden Cravings. *ACTA ASIATICA* (Bul-

letin of the Institute of Eastern Culture) 119: 1-20.

[その他]

寺村裕史

2021 「みんなく映像制作の裏話」『月刊みんなく』45(2): 10-11。

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

寺村裕史 監修

2021 『ウズベキスタンの結婚式』(英語・日本語・22分)

2021 『ウズベキスタンの美味しい羊料理』(英語・日本語・15分)

2021 『タンディルでパンを焼く』(英語・日本語・14分)

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2020年8月2日 「考古学のデータ処理におけるアナログとデジタル——実測図から読み解く制度・身体・感性」『感性と制度のつながり——芸術をめぐる「喚起」と「評価」のプロセスから考える』オンライン開催

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2021年3月27日 「ウズベキスタン共和国カフィル・カラ遺跡発掘調査2020年度までの成果——出土遺物に見るカフィル・カラの文化交流」第28回西アジア発掘調査報告会、オンライン開催

・研究公演

2021年3月6日 「阪神虎舞みんなく公演」国立民族学博物館

・展示

2021年3月4日～5月18日 「復興を支える地域の文化——3.11から10年」国立民族学博物館

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

「地域文化学演習Ⅰ」、「地域文化学演習Ⅱ」、「比較文化学演習Ⅰ」、「比較文化学演習Ⅱ」

・博士論文審査委員(総研大に限る)

博士論文予備審査委員(1件)

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費(新学術領域研究(研究領域提案型)『学術研究支援基盤形成』)「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」(研究代表者:吉田憲司)研究支援分担者、科学研究費(基盤研究(B))「シルクロード都市の形成ならびに人と文化の東西交流に関する考古学的研究」研究代表者、国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「中央・北アジアの物質文化に関する研究——民博収蔵の標本資料を中心に」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他大学の客員、非常勤講師

岡山大学文学部「博物館情報・メディア論 a/b」(集中講義)

藤本透子 [ふじもと とうこ] ————— 准教授

1975年生。【学歴】京都大学文学部史学科卒(1998)、京都大学大学院人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻修士課程修了(2002)、京都大学大学院人間・環境学研究科環境相関研究専攻博士課程指導認定退学(2007)【職歴】京都大学総合人間学部リサーチ・アシスタント(2002)、京都大学大学院人間・環境学研究科ティーチング・アシスタント(2005)、日本学術振興会特別研究員(2006)、京都桂看護専門学校非常勤講師(2006)、関西学院大学経済学部非常勤講師(2008)、京都大学大学院人間・環境学研究科研修員(2008)、神戸松蔭女子学院大学文学部非常勤講師(2010)、国立民族学博物館先端人類科学研究部機関研究員(2010)、国立民族学博物館民族文化研究部助教(2012)、立命館大学国際関係学部非常勤講師(2015)、国立民族学博物館民族文化研究部准教授(2016)、国立民族学博物館人類文明誌研究部准教授(2017)【学位】博士(人間・環境学)(京都大学大学院人間・環境学研究科2010)、修士(人間・環境学)(京都大学大学院人間・環境学研究科2002)【専攻・専門】文化人類学、中央アジア地域研究

【所属学会】 日本文化人類学会、日本中央アジア学会、日本中東学会、日本イスラム協会

【主要業績】

[単著]

藤本透子

2011 『よみがえる死者儀礼——現代カザフのイスラーム復興』東京：風響社。

[編著]

藤本透子編

2015 『現代アジアの宗教——社会主義を経た地域を読む』神奈川：春風社。

Yamada, T. and T. Fujimoto (eds.)

2016 *Migrations and the Remaking of Ethnic-Micro-Regional Connectedness* (Senri Ethnological Studies 93). Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

【受賞歴】

2013 人間文化研究奨励賞

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

カザフスタンにおける社会・宗教・伝統医療の人類学的研究

・研究の目的、内容

中央アジアにおける社会変容をふまえて、宗教実践とその一部としての伝統医療の実態を明らかにし、社会・宗教・身体の関係性を考察することが研究の目的である。具体的には、1) 人の移動にともなう社会の形成と変容のメカニズム、2) イスラームと伝統医療の展開に関する研究を行った。新型コロナウイルス感染症の拡大によりカザフスタンでの現地調査はできなかったため、論文執筆やオンラインでの国際ワークショップの開催などをおして、これまでの調査研究の成果をまとめることに注力した。

・成果

1) 移動にともなう社会の形成と変容のメカニズム

科研新学術領域「パレオアジア文化史学」B01班「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」の分担者として、これまでにカザフスタンで収集したデータの分析を行った。その成果の一部は、書籍収録論文「移動する人々のつながり——カザフ草原に生きる家族の事例から」にまとめた。また、研究報告「中央アジアにおける移動と接触——ものの形態に反映される人の行動パターン」を共同執筆した。この研究報告では、現生人類のユーラシアへの拡散に関する近年の遺伝学の成果をふまえて、中央アジアで歴史的に西ユーラシア集団と東ユーラシア集団の混雑が生じたことが、居住形態や墓制に及ぼしてきた影響について考察した。

2) 伝統医療とイスラームの展開

科学研究費（基盤研究（C））「カザフスタンにおける伝統医療とイスラームの人類学的研究」に基づき、8月にカザフスタンで開催された国際会議History and Culture of the Great Steppeにオンライン参加し、治療を目的とする聖者廟参詣に関して、The Transformation of Saint Veneration: A Cultural Anthropological Study of Māshhūr-Jūsip Kōpeyūli's Grave in Northeastern Kazakhstanと題して発表した。この発表に関連して、書籍収録論文「聖者になる過程——カザフスタンにおける近代化の経験とイスラーム」が3月末に刊行された。

9月には、科学研究費（基盤研究（C））と北東アジア地域研究の共同成果として、国際ワークショップSocial and Religious Dynamics of the Central Eurasian Steppe: Anthropological and Historical Approachesを開催し、The Healing of Children's Illnesses among Kazakh Women in Villages of the Steppe: Religious Practices in Social Reconfigurationというタイトルで口頭発表した。この国際ワークショップには、カザフスタンとベルギーの研究者がオンライン参加し、①中央ユーラシア草原地帯における人の移動と宗教の多元性、②伝統医療の歴史的背景と再活性化メカニズム、③イスラーム、シャマニズム、仏教などの諸宗教と伝統医療の布置などに関して議論を深めた。

◎出版物による業績

[編著]

長谷千代子・別所裕介・川口幸大・藤本透子編

2021 『宗教性的人类学——近代の果てに、人はなにを願うのか』京都：法蔵館。

[分担執筆]

藤本透子

2020 「移動する人々のつながり——カザフ草原に生きる家族の事例から」山田孝子編『人のつながりと世界の行方——コロナ後の縁を考える』pp.65-80, 京都：英明企画編集。

2021 「カザフスタンの儀礼と食」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.618-619, 東京：丸善出版。

2021 「聖者になる過程——カザフスタンにおける近代化の経験とイスラーム」長谷千代子・別所裕介・川口幸大・藤本透子編『宗教性的人类学——近代の果てに、人はなにを願うのか』pp.174-202, 京都：法蔵館。[査読有]

川口幸大・別所裕介・藤本透子

2021 「宗教性の領域で考える」長谷千代子・別所裕介・川口幸大・藤本透子編『宗教性的人类学——近代の果てに、人はなにを願うのか』pp.377-389, 京都：法蔵館。[査読有]

Fujimoto, T.

2020 The Transformation of Saint Veneration: A Cultural Anthropological Study of Mäshhür-Jüsip Köpeyüli's Grave in Northeastern Kazakhstan. In M. Kh. Abusseitova (ed.) *Istoriya i kul'tura velikoi stepi (Materialy mezhdunarodnoi nauchno-prakticheskoi konferentsii)*, pp.456-466. Almaty: Shygys pen Batys.

[その他]

藤本透子・菊田 悠・吉田世津子

2021 「中央アジアにおける移動と接触——ものの形態に反映される人の行動パターン」野林厚志編『パレオアジア文化史学——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究 計画研究B01班2020年度 研究報告』pp.15-23, 東京：文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016-2020年度計画研究 B01班（研究課題番号16H06411）。

藤本透子

2020 「父と少年の旅」『月刊みんぱく』44(9)：18-19。

2020 「ムスリム女性の装い」『月刊みんぱく』44(12)：16-17。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2020年9月21日 'Introduction.' "Social and Religious Dynamics of the Central Eurasian Steppe: Anthropological and Historical Approaches", National Museum of Ethnology

2020年9月21日 "The Healing of Children's Illnesses among Kazakh Women in Villages of the Steppe: Religious Practices in Social Reconfiguration." "Social and Religious Dynamics of the Central Eurasian Steppe: Anthropological and Historical Approaches", National Museum of Ethnology

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年8月26日 'The Transformation of Saint Veneration: A Cultural Anthropological Study of Mäshhür-Jüsip Köpeyüli's Grave in Northeastern Kazakhstan.' History and Culture of the Great Steppe, Almaty, Kazakhstan

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（2人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「カザフスタンにおける伝統医療とイスラームの人類学的研究」研究代表者、科

学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」（研究代表者：野林厚志）研究分担者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究拠点」（拠点代表者：池谷和信）拠点構成員

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

日本中央アジア学会理事、日本中央アジア学会報編集委員

グローバル現象研究部

三尾 稔 [みお みのる] ————— 部長（併）教授

1962年生。【学歴】東京大学教養学部卒（1986）、東京大学大学院社会学研究科文化人類学専攻修士課程修了（1988）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程退学（1992）【職歴】東京大学教養学部助手（1992）、東洋英和女学院大学社会科学部専任講師（1995）、東洋英和女学院大学社会科学部助教授（1999）、東洋英和女学院大学国際社会学部助教授（2001）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（2003）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2004）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2008）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2016）、国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授（2017）、国立民族学博物館グローバル現象研究部教授（2018）、国立民族学博物館グローバル現象研究部研究部長（2019）【学位】社会学修士（東京大学大学院社会学研究科 1988）【専攻・専門】社会人類学・インドの宗教と社会【所属学会】日本文化人類学会、日本南アジア学会

【主要業績】

[共編]

Mio, M. and C. Bates (eds.)

2015 Cities in South Asia. London: Routledge. [査読有・書評有・民博共同研究の成果](http://choiceconnect.org/webclipping/194400/e0bubfitramyrf7jwbc8s12r_hb62uv6swnu3wbhxn7ct2md3o)

三尾 稔・杉本良男編

2015 『現代インド6 環流する文化と宗教』東京：東京大学出版会。

[論文]

三尾 稔

2017 「モノを通じた信仰——インド・メーワール地方の神霊信仰における身体美学的な宗教実践とその変容」『国立民族学博物館研究報告』41(3)：215-281。

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

インド西部における宗教と文化の変容に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

世界市場への直接的な連結や情報テクノロジーの広範な浸透などを背景に、1990年代以降のインドの文化や宗教は地域外の動向と共振しつつ基層的な部分から大きな変容を遂げている。三尾が30年にわたってフィールド調査を継続してきたインド西部の都市や村落においても、それは例外ではない。本年度は昨年度に引き続き、特に情報テクノロジーの浸透や宗教の政治化・商品化といった全インド規模で見られる宗教や文化の変容動向が、地方のサルタンの宗教実践やローカリティのあり方をどのように変容させているかという点に注目し、特に地方都市におけるフィールド調査や文献調査をもとに、変容の諸相を実証的に解明し、これが政治・経済・社会の動向とどのように関連するのかを明らかにする。この目的のため申請していた日本学術振興会科学研究費補助金が2019年度より獲得できた（科学研究費（基盤研究（C））「インド西部の地方都市における宗教実践とローカリティ形成に関する人類学的研究」）ので、この経費を活用して研究を進める。

6年計画で進められている人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究」は今年度で5年目を迎える。三尾は、この研究プロジェクトにおいて国立民族学博物館拠点の拠点代表を引き続きつとめ、拠点

構成員や研究分担者とともに国際的な連携協力のもとでインド研究を推進する。各個研究のテーマは、この地域研究プロジェクトの内容に密接に関連するものであり、拠点予算も活用しつつ拠点の研究テーマのもとでの1つの実証的研究として各個研究を遂行する。

・成果

インドの地方都市のサバルタンの宗教実践やローカリティの変容に関する人類学的調査研究のため獲得し、2019年度から行っている科学研究費（基盤研究（C）「インド西部の地方都市における宗教実践とローカリティ形成に関する人類学的研究」）による研究は、新型コロナウイルス感染症蔓延のため計画していた現地調査が行えなかったが、現地の研究協力者と電話やメールによって連絡を取って現地の状況を把握した。

上記科研費と「南アジア地域研究」経費によって2019年4月および11月に実施した調査の成果については、「南アジア地域研究」プロジェクトの成果として2022年春に刊行を計画している論文集のための論文として執筆し、寄稿した。

「南アジア地域研究」プロジェクトが毎年実施している国際全体集会のうち、2018年1月にネパール・カトマンズで実施した研究集会の成果論文集の編集作業に筆頭編者として関わってきたが、この論文集を2020年12月に英国Routledge社より *The Dynamics of Conflict and Peace in Contemporary South Asia: The State, Democracy and Social Movements* として刊行した。

新型コロナウイルスの流行がインドの社会に及ぼした影響に関して国際ウェビナーを企画・主宰した。ウェビナーにはかつて国立民族学博物館の外国人客員教授として招聘したインドの社会学者である Abhijit Dasgupta デリー大学教授を講師として迎え、「南アジア地域研究」の国際セミナーの一環として企画した。ウェビナーは2020年6月11日に実施し、「*Spread, Control and Community Response of COVID-19 in India*」と題した講演を行ってもらった。三尾は企画を担当したほか、当日の司会とディスカッサントをつとめた。

また新型コロナウイルスの流行がインドの宗教文化に及ぼした影響について、毎日新聞夕刊の連載企画『旅・いろいろ地球人』に2020年7月の4週間にわたり計4回「コロナ禍とインド」と題したエッセイを寄稿した。

◎出版物による業績

[編著]

Mio, M., K. Nakamizo, and T. Fujikura (eds.)

2020 *The Dynamics of Conflict and Peace in Contemporary South Asia: The State, Democracy and Social Movements* (Routledge New Horizons in South Asian Studies). London: Routledge. [査読有]

[その他]

三尾 稔

2020 「現代インドの多様な宗教の葛藤と共存——現地調査からの視点」『ユタ日報研究』25：19-44。

2020 「旅・いろいろ地球人 コロナ禍とインド① 外出規制の影響」『毎日新聞』7月4日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 コロナ禍とインド② 伝染病の記憶」『毎日新聞』7月11日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 コロナ禍とインド③ 地方都市の現状」『毎日新聞』7月18日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 コロナ禍とインド④ 岐路に立つ宗教文化」『毎日新聞』7月25日夕刊。

◎大学院教育

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文審査委員（1件）、博士論文予備審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究 国立民族学博物館拠点（MIND-AS）」拠点代表者

鈴木七美 [すずき ななみ] ————— 教授

【学歴】東北大学薬学部薬学科卒（1981）、お茶の水女子大学大学院人文科学研究科修士課程修了（1992）、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士課程修了（1996）【職歴】財団法人仙台複素環化学研究所研究員（1981）、中外製薬株式会社国際開発部（1982）、財団法人相模中央化学研究所研究員（1983）、京都文教大学人間学部文化人類学専任講師（1997）、京都文教大学人間学部文化人類学専任助教授（2000）、京都文教大学大学院文化人類学研究科助

教授(2002)、マギル大学文化人類学部客員助教授(2003)、放送大学分担協力講師(2004)、京都文教大学大学院文化人類学研究科教授(2005)、京都文教大学人間学部文化人類学科専任教授(2005)、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授(2007)、放送大学客員教授(文化人類学'04主任講師)(2007)、総合研究大学院大学文化科学研究科教授併任(2009)、総合研究大学院大学比較文化学専攻長(2012)、国立民族学博物館研究戦略センター教授(2014)、国立民族学博物館研究戦略センター教授・センター長(2015)、国立民族学博物館グローバル現象研究部教授(2017)【学位】博士(学術)(お茶の水女子大学1996)、修士(人文科学)(お茶の水女子大学1992)学士(薬学)(東北大学1981)【専攻・専門】文化人類学、エイジング研究、医療社会史【所属学会】日本文化人類学会、アメリカ学会、日本アメリカ史学会 Association for Anthropology and Gerontology (AAGE)

【主要業績】

[単著]

鈴木七美

2019 『エイジングフレンドリー・コミュニティ——超高齢社会における人生最終章の暮らし方』東京：新曜社。

2002 『癒しの歴史人類学——ハーブと水のシンボリズムへ』京都：世界思想社。

1997 『出産の歴史人類学——産婆世界の解体から自然出産運動へ』東京：新曜社。

【受賞歴】

1998 第13回女性史青山なを賞

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

超高齢社会のエイジングフレンドリー・コミュニティ——エイジング・イン・プレイスと交流の重層化

・研究の目的、内容

超高齢社会において、すべての世代がどのように生活の基盤とウェルビーイングを構想できるのかに関心が集まっている。

本研究は、高齢者のニーズを契機として全ての世代の生活環境を再考・開発するエイジング(エイジ)・フレンドリー・コミュニティ(AFC)に関する研究蓄積を生かし、語り合いやモノ作りなど多世代が参加する活動実践について、研究調査・成果公開を実施する(外部資金 科学研究費(基盤研究(C))「米国での認知症高齢者を師とする人生語り・記録の多世代協働とコミュニティ教育の展開」(研究代表者:鈴木七美))。

北米の宗教移民再洗礼派アーミッシュのキルトを素材として、アーミッシュのウェルビーイングの考え方とその実践を検討する。さらに、米国のキルトメイキングの歴史のなかでアーミッシュのキルトをめぐる交流の展開について考察を加え、論考をまとめる。

モノと情報を素材として多世代・多文化に開かれた学びと交流機会の開発にかかわり、エイジングフレンドリー・コミュニティの考え方にもとづき博物館などの施設を生かした、米国の包摂的活動について研究調査資料を分析し、口頭発表を行う。

・成果

外部資金 科学研究費(基盤研究(C))「米国での認知症高齢者を師とする人生語り・記録の多世代協働とコミュニティ教育の展開」(研究代表者:鈴木七美)に関連し、高齢者をはじめとする多世代多文化の人々のエイジング・イン・プレイス(居場所を得て生活する)に関わる口頭発表を行い、論考を提示した。

米国における多世代が暮らす包摂的・持続的生活空間について、さまざまなバリエーションを提示してきた再洗礼派の人びとの実践にかかわる第一次資料を収集し、論考を執筆した。再洗礼派は、現代米国一般社会との距離の取り方の異なるいくつものグループが存在するが、いずれにおいても共通である、平和主義(非暴力・無抵抗)の歴史に関する第一次資料を収集し分析を進めた。平和主義にもとづく支援活動への参加として精神的に行われているものづくりや、多様なミーティングの機会の創出などについて、論考を提示した。

[論文]

・Suzuki, Nanami. 2020. Weaving Flexible Aging-friendly Communities Across Generations While Living with COVID-19. *Anthropology and Aging*. 41-2: 155-166. (2020.12.16)

[その他]

- ・鈴木七美 2020「エイジングフレンドリー・コミュニティにおける『いのち』」『第38回比較文明学会大会プログラム・要旨集 いのち』をめぐる文明的課題の解決に向けて』79-80頁（比較文明学会第38回大会実行委員会）（2020.11.21）
- ・鈴木七美 2021「家族が集う日の食卓——サンクスギビング・ディナー」『月刊みんぱく』（1）：8。大阪：国立民族学博物館（2021.1.1）
- ・鈴木七美 2021「ジャム」『世界の食文化百科事典』東京：丸善出版（2021.1.30）

◎口頭発表

（国際研究集会）

- ・鈴木七美 2020「エイジングフレンドリー・コミュニティにおける『いのち』」第38回比較文明学会大会 シンポジウムⅢ「社会・文明・思想から『いのち』を考える」大阪：国立民族学博物館・オンライン（2020.11.23）

◎出版物による業績

[論文]

Suzuki, N.

2020 Weaving Flexible Aging-friendly Communities Across Generations While Living with COVID-19. *Anthropology and Aging* 41(2): 155-166.

[その他]

鈴木七美

- 2020 「エイジングフレンドリー・コミュニティにおける『いのち』」『第38回比較文明学会大会プログラム・要旨集「いのち」をめぐる文明的課題の解決に向けて』 pp.79-80。
- 2021 「家族が集う日の食卓——サンクスギビング・ディナー」特集「めでたい場の食」『月刊みんぱく』45(1)：8。
- 2021 「ジャム」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・櫻永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.192-193, 東京：丸善出版。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年11月23日 「エイジングフレンドリー・コミュニティにおける『いのち』」第38回比較文明学会大会シンポジウムⅢ『社会・文明・思想から「いのち」を考える』国立民族学博物館、オンラインとのハイブリッド開催

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（2人）

・大学院ゼミでの活動

「地域文化学基礎演習Ⅰ」、「地域文化学基礎演習Ⅱ」、「比較文化学基礎演習Ⅰ」、「比較文化学基礎演習Ⅱ」「比較宗教研究演習」、「比較文化学特論Ⅱ」

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「米国での認知症高齢者を師とする人生語り・記録の多世代協働とコミュニティ教育の展開」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

公益信託澁澤民族学振興基金2020年度事業第47回澁澤賞選考委員会委員（委員長）、Anthropology & Aging (A&A): The Official Publication of the Association for Anthropology and Gerontology (AAGE) Editorial Advisory Board

西尾哲夫 [にしお てつお] ————— 教授

1958年生。【学歴】大阪外国語大学外国語学部アラビア語科卒（1981）、京都大学大学院文学研究科言語学専攻修士課程修了（1984）、京都大学大学院文学研究科言語学専攻博士後期課程満期退学（1987）【職歴】東京外国語大学ア

ジア・アフリカ言語文化研究所助手（1989）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授（1994）、国立民族学博物館第二研究部助教授（1996）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（1998）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2006）、国立民族学博物館民族文化研究部教授・部長（2008）、国立民族学博物館研究戦略センター教授・センター長（2011）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2012）、国立民族学博物館副館長（2012）、国立民族学博物館国際学術交流室室長（2012）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2013）、国立民族学博物館民族社会研究部教授・部長（2015）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2016）、国立民族学博物館副館長（2016）、国立民族学博物館グローバル現象研究部教授（2017）【学位】文学博士（京都大学大学院文学研究科 2005）、言語学修士（京都大学大学院文学研究科 1984）【専攻・専門】言語学・アラブ研究 アラブ遊牧民の言語人類学的研究、アラビアン・ナイトをめぐる比較文明学的研究【所属学会】日本言語学会、日本中東学会、日本オリент学会

【主要業績】

[単著]

西尾哲夫

- 2013 『ヴェニス商人の異人論——人肉一ポンドと他者認識の民族学』東京：みすず書房。
- 2011 『世界史の中のアラビアンナイト』（NHK ブックス）東京：NHK 出版。
- 2007 『アラビアンナイト——文明のはざまに生まれた物語』東京：岩波書店。

【受賞歴】

- 2011 第28回田邊尚雄賞（東洋音楽学会）
- 1992 オリント学会奨励賞
- 1992 新村出記念財団研究助成賞
- 1992 流沙海西奨学会賞

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

グローバル化と中東地域の民衆文化

・研究の目的、内容

「アラブの春」を主導した新興の都市部中流層が用いた「中間アラビア語」と呼ばれる新生の共通アラビア語は、新たなコミュニケーション空間を創出した。この空間では差異化された社会的アイデンティティ獲得をめぐり、グローバルな動向に感応する社会運動の場が確立しつつある。本研究では、民衆、大衆、地域住民という概念の再構築を通じて彼らがグローバル化されたコミュニケーション空間に感応している状況を具体的に分析することによって、「中間アラビア語」が創出した公共的コミュニケーション空間において民衆文化が資源化されて公共性を獲得するプロセス、および個人が生きるローカルな生活空間とグローバルな社会空間が接合し、個々の人間の社会的動員作用として働くメカニズムを解明する。また「中間アラビア語」による文学的社会位相の中で成立した、シンドバード航海記に焦点をあてて分析することによって、グローバル化の観点から多元的共創文学の可能性について考察する。

・成果

①研究成果として、『ガラン版千一夜物語』（岩波書店、全六巻）の最終巻を刊行し、本邦における最初の全訳を完了した。多くの新聞や雑誌の文化欄・書評欄で画期的な仕事として高い評価を受けた。本訳業を通して、ガラン訳テキストの底本に係る新発見を含めて形成過程に関する新知見を得ることができた。

またフランスの社会科学高等研究院（EHESS）との共同研究による国際シンポジウムの成果として国際共同編集のかたちで、『*Sur la notion de culture populaire au Moyen-Orient: Approches franco-japonaises croisées*』を刊行した。また中東地域における個人と社会の関係性に関する国際シンポジウムの成果として、『*The Personal and the Public in Literary Works of the Arab Regions*』を編集し刊行した。

②研究発表として、英国のRoyal Anthropological Instituteが主催する国際学会『Anthropology and Geography: Dialogues Past, Present and Future』でパネルを組織し、「Mediating past anthropological research data with contemporary researchers and research societies: A case study of the Info-Forum Museum Project in MINPAKU」の題で発表した。また日本中東学会第36回年次大会特別研究集会で企画セッションを

組織し、「フォーラム型ミュージアムとしての展示の可能性について」の題で発表した。

③現代的課題にかかるテーマ研究である特別研究「グローバル地域研究と地球社会の認知地図——わたしたちはいかに世界を共創するのか？」を代表として組織し、「神と人の言葉をめぐる世界認識の類型化に向けて——Olivier Hanne, L'Alcoran: Comment l'Europe a découvert le Coran. (Paris: Belin, 2019. 696頁)の紹介と井筒俊彦のコーラン(クルアーン)研究の再評価」の題で基調となる発表をおこなった。

④一般向けの成果発信として、みんぱく公開講演会『ファンタジーの挑戦——もうひとつの世界を想像しよう』において、基調講演「アラジンはなぜ世界を魅了するのか?——ファンタジーの文明誌」をするとともに、対談「妄想が世界を創る! 森見登美彦(作家)×西尾哲夫」をおこなった。また『『ガラン版 千一夜物語』(岩波書店)全六冊完結記念 西尾哲夫・深緑野分トークイベント 世界はいつもミステリアス!——作家といっしょに読む『ガラン版 千一夜物語』』をおこなった。また朝日カルチャーセンターでも「訳者と読む『ガラン版 千一夜物語』」と題して一般向けの講演をおこなった。

⑤科学研究費(基盤研究(B))(特設分野)「中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化」(研究代表者:西尾哲夫)ならびに科学研究費(基盤研究(B))(一般)「シンドバード航海記の成立過程と多面的価値共創文学の可能性に関する物語情報学的研究」(研究代表者:西尾哲夫)による調査・研究をおこなった。

◎出版物による業績

[単著]

西尾哲夫

2020 『ガラン版千一夜物語6』東京:岩波書店。

[編著]

鈴木 董・近藤二郎・赤堀雅幸・岡田保良・鎌田 繁・長沢英治・永田雄三・西尾哲夫・深見奈緒子・保坂修司・榊屋友子・水野信男・森本一夫編

2020 『中東・オリエント文化事典』東京:丸善出版。

Casajus, D., T. Nishio, F. Pouillon, and T. Saito (eds.)

2021 *Sur la notion de culture populaire au Moyen-Orient: Approches franco-japonaises croisées* (Senri Ethnological Reports 152). Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

Sumi, A. and T. Nishio (eds.)

2021 *The Personal and the Public in Literary Works of the Arab Regions*. Osaka: Center for Modern Middle East Studies at Minpaku.

[分担執筆]

西尾哲夫

2020 「アラビアンナイトとコーヒー」日本沙漠学会編『沙漠学事典』pp.220-221, 東京:丸善出版。

2020 「アラブの民衆文学」鈴木 董・近藤二郎・赤堀雅幸・岡田保良・鎌田 繁・長沢英治・永田雄三・西尾哲夫・深見奈緒子・保坂修司・榊屋友子・水野信男・森本一夫編『中東・オリエント文化事典』pp.390-391, 東京:丸善出版。

2020 「アラビアン・ナイト」鈴木 董・近藤二郎・赤堀雅幸・岡田保良・鎌田 繁・長沢英治・永田雄三・西尾哲夫・深見奈緒子・保坂修司・榊屋友子・水野信男・森本一夫編『中東・オリエント文化事典』pp.418-419, 東京:丸善出版。

2021 「西アジア地域の食文化(シナイ半島)」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.577-579, 東京:丸善出版。

[論文]

Nishio, T., N. Okamoto, and M. Sironval

2021 Joseph-Charles Mardrus and Orientalism: Re-Evaluating His Translation of the Arabian Nights in Light of New Findings from Mardrus' Personal Archives. In A. Sumi and T. Nishio (eds.) *The Personal and the Public in Literary Works of the Arab Regions*, pp.109-134. Osaka: Center for Modern Middle East Studies at Minpaku.

Nishio, T. and N. Okamoto

2021 L'Histoire de Sindbad le Marin est-elle de la littérature populaire?: Une approche nouvelle des relations entre tradition littéraire et culture populaire au Moyen-Orient. In D. Casajus, T.

Nishio, F. Pouillon and T. Saito (eds.) *Sur la notion de culture populaire au Moyen-Orient: Approches franco-japonaises croisées* (Senri Ethnological Reports 152), pp.41-55. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

[その他]

西尾哲夫・深緑野分

2020 「西尾哲夫・深緑野分トークイベント 世界はいつもミステリアス! (前編)」『たねをまく (岩波書店のWEBマガジン)』10月23日。

2020 「西尾哲夫・深緑野分トークイベント 世界はいつもミステリアス! (後編)」『たねをまく (岩波書店のWEBマガジン)』10月23日。

西尾哲夫

2021 「『ガラン版 千一夜物語』 翻訳裏話」『月刊みんぱく』45(3):20。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2020年6月5日 「神と人の言葉をめぐる世界認識の類型化に向けて——Olivier Hanne, L'Alcoran: Comment l'Europe a découvert le Coran. (Paris: Belin, 2019. 696頁) の紹介と井筒俊彦のコーラン(クルアーン)研究の再評価」第22回現代中東地域研究レクチャー・シリーズ講演会、オンライン開催

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年8月29日 「フォーラム型ミュージアムとしての展示の可能性について」日本中東学会第36回年次大会特別研究集会、オンライン開催

2020年9月18日 'Mediating Past Anthropological Research Data with Contemporary Researchers and Research Societies: A Case Study of the Info-Forum Museum Project in MINPAKU.' "Anthropology and Geography: Dialogues Past, Present and Future", オンライン開催

・広報・社会連携活動

2020年8月8日 「『ガラン版 千一夜物語』(岩波書店)全六冊完結記念 西尾哲夫・深緑野分トークイベント 世界はいつもミステリアス! ——作家といっしょに読む『ガラン版 千一夜物語』」青山ブックセンター、オンライン開催

2020年11月6日 「アラジンなぜ世界を魅了するのか? ——ファンタジーの文明誌」第21回みんぱく公開講演会『ファンタジーの挑戦——もうひとつの世界を想像しよう』国立民族学博物館/日本経済新聞社、日本経済新聞社大阪本社カンファレンスルーム、オンラインとのハイブリッド開催

2020年11月6日 「妄想が世界を創る! 森見登美彦(作家)×西尾哲夫」第21回みんぱく公開講演会『ファンタジーの挑戦——もうひとつの世界を想像しよう』国立民族学博物館/日本経済新聞社、日本経済新聞社大阪本社カンファレンスルーム、オンラインとのハイブリッド開催

2020年11月26日 「訳者と読む『ガラン版 千一夜物語』」オンライン講座、朝日カルチャーセンター(中之島教室)、オンライン開催

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費(基盤研究(B))「中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化」研究代表者、科学研究費(基盤研究(B))「シンドバード航海記の成立過程と多元的価値共創学の可能性に関する物語情報学的研究」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「国立民族学博物館現代中東地域研究拠点」拠点代表者

信田敏宏 [のぶた としひろ] ————— 教授

1968年生。【学歴】東京都立大学人文学部人文科学科社会学専攻卒(1992)、東京都立大学大学院社会科学部社会科学科社会人類学専攻修士課程修了(1995)、東京都立大学大学院社会科学部社会科学科社会人類学専攻博士課程単位取得退学(2000)【職歴】東京都立大学人文学部社会学科助手(2001)、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手(2003)、国立民族学博物館研究戦略センター助手(2004)、国立民族学博物館研究戦略センター助教授(2006)、総合研究大学院大学文化科学研究科准教授(2012)、国立民族学博物館民族文化研究部准教授(2012)、国立民族学博

博物館文化資源研究センター准教授（2013）、総合研究大学院大学文化科学研究科教授併任（2014）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2014）、国立民族学博物館グローバル現象研究部教授（2017）、国立民族学博物館グローバル現象研究部研究部長（2017）【学位】社会人類学博士（東京都立大学 2002）【専攻・専門】社会人類学、東南アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、東南アジア学会、日本マレーシア学会、東京都立大学社会人類学会

【主要業績】

[単著]

信田敏宏

2019 『家族の人類学——マレーシア先住民の親族研究から助け合いの人類史へ』 京都：臨川書店。

2013 『ドリアン王国探訪記——マレーシア先住民の生きる世界』（フィールドワーク選書1）京都：臨川書店。

Nobuta, T.

2009 Living on the Periphery: Development and Islamization among the Orang Asli in Malaysia. Subang-Jaya, Malaysia: Center for Orang Asli Concerns.

【受賞歴】

2006 第4回東南アジア史学会賞

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

- 1) マレーシア先住民に関する人類学的研究
- 2) インクルーシブ社会に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

- 1) 本研究は、主にマレーシアの先住民オラン・アスリに関わる諸現象について、先住民に関するグローバルな状況を視野に入れながら、その最新の動向を探ることを目的とする。具体的には、オラン・アスリおよびマレーシアの先住民の民族状況や親族制度、民族工芸や文化復興などの諸現象について情報の収集を行ない、オラン・アスリおよびマレーシアの先住民が置かれている状況を把握する。
- 2) 本研究は、本館の文化資源プロジェクト「知的障害者の博物館活用に関する実践的研究」を中心として、知的障害者やその保護者や介護者などへのアンケートや聞き取りなどの手法を用いて、知的障害者をめぐる教育環境や社会状況の実態を探ることを目的とする。本研究の目的には、インクルーシブ社会実現に関する具体的な提言も含まれている。

・成果

- 1) マレーシアの先住民オラン・アスリを含む世界の先住民に関する特別展「先住民の宝」を開催した。また、オラン・アスリの彫像や仮面に関する講演会（ウィークエンドサロン）を実施し、研究成果の一部を発表した。さらに、オラン・アスリが被害を受ける側になっているマレーシアの開発状況を告発する映画「斧は忘れても、木は覚えている」について、映画解説をおこない、これまでの研究成果の一部を発表した。
- 2) 「知的障害者にとっての学び——みんなく Sama-Sama 塾の試み」と題した論考を『障害者問題研究』にて発表した。

◎出版物による業績

[論文]

信田敏宏

2020 「知的障害者にとっての学び——みんなく Sama-Sama 塾の試み」『障害者問題研究』48(1)：68-73。

[その他]

信田敏宏

2020 「東南アジア学術調査——梅棹忠夫の『移動研究室』」特集「知的生産のフロンティア」『月刊みんなく』44(4)：7。

2020 「書評・新刊書紹介：長津一史著『国境を生きる——マレーシア・サバ州、海サマの動態的民族誌』」『東南アジア 歴史と文化』49：239-244。

2020 「マレーシアの光と影——『斧は忘れても、木は覚えている』」『月刊みんなく』44(8)：18-19。

2020 「暑い地域に生きる人々——マレーシアの生活」『中学社会 地理的分野』pp.28-29, 東京・大阪：

日本文教出版

2021 「東南アジア地域の食文化 島嶼部（森林地域）」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・桒永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.596-597, 東京：丸善出版。

Nobuta, T.

2021 Treasures of Indigenous Peoples. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 51: 13-14.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年12月5日 「オラン・アスリから見た Wawasan 2020の時代」2020年度日本マレーシア学会研究大会・ラウンドテーブル『Wawasan 2020とマレーシア社会の変化——複眼的視座からの検証』オンライン開催

・展示

2020年10月1日～12月15日 「先住民の宝」

・みんなくウィークエンド・サロン

2020年10月18日 「オラン・アスリと精霊」第575回みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

・広報・社会連携活動

2020年10月10日 「映画解説」みんなく映画会『斧は忘れても、木は覚えている』国立民族学博物館

2020年11月16日 「特別展『先住民の宝』」国立民族学博物館

2020年12月19日 「オラン・アスリの解説」シネ・ヌーヴォ

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1人）

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文審査委員（1件）

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

文化庁2021年度障害者等による文化芸術活動推進事業に係る企画案審査委員

・他大学の客員、非常勤講師

京都女子大学「家族の人類学」

平井京之介 [ひらい きょうのすけ]—— 副館長（研究・国際交流・IR担当）、グローバル現象研究部教授

森 明子 [もり あきこ]—— 教授

【学歴】筑波大学大学院歴史・人類学研究科博士課程単位取得退学（1989）【職歴】筑波大学歴史・人類学系文部技官（1989）、筑波大学歴史・人類学系助手（1990）、国立民族学博物館第3研究部助手（1990）、国立民族学博物館第3研究部助教授（1997）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1999）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2005）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2006）、国立民族学博物館研究戦略センター教授・センター長（2009）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2011）、国立民族学博物館グローバル現象研究部教授（2017）【学位】文学博士（筑波大学大学院歴史・人類学研究科 1997）、文学修士（筑波大学大学院歴史・人類学研究科 1984）【専攻・専門】文化人類学 ヨーロッパ人類学、ドイツ、オーストリアの民族誌研究、民族学・民俗学の歴史的展開【所属学会】日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

森 明子

1999 『土地を読みかえる家族——オーストリア・ケルンテンの歴史民族誌』東京：新曜社。

[編著]

森 明子編

2019 『ケアが生まれる場 他者ととも生きる社会のために』 京都：ナカニシヤ出版。[査読有]

Mori, A. (ed.)

2013 *The Anthropology of Europe as Seen from Japan: Considering Contemporary Forms and Meanings of the Social* (Senri Ethnological Studies 81). Osaka: National Museum of Ethnology.

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

社会的なものの意味と通文化的普遍性に関する人類学研究

・研究の目的、内容

人文社会科学の諸分野において進んでいる社会的なものを問い直すいくつかの研究は、グローバル化やネオリベリズムのなかで社会が再編成されつつあるという認識や、現代世界は不確実性をまじつつあるという人々の感覚に応答するものである。この状況下で人類学は、他者をどのようにとらえるのかということがあらためて問われる。本研究は、社会的なものの編成／再編成を、民族誌の個別性を重視する接近法によって明らかにしていくとともに、人類学の比較のパスpekティブのもとで、人間社会の普遍性について考察する。

研究は、科学研究費（基盤研究（C））「ケアから見たベルリンのネイバーフッドに関する民族誌研究」（研究代表者：森 明子）によるベルリンの調査研究、科学研究費（基盤研究（B））「変動するEU国境地域におけるエスニック集団共生の課題」（研究代表者：加賀美雅弘）によるオーストリア国境地域の調査研究、共同研究「カネとチカラの民族誌——公共性の生態学にむけて」（代表者：内藤直樹）、「心配と係り合いについての人類学的探求」（研究代表者：西 真如）、「不確実性のなかでオルタナティブなコミュニティを問う」（研究代表者：森 明子）のもとで進めた。また博物館展示における社会的なものの扱いとして、ベルリンとオーストリア、スロヴェニアでの収集を計画した。

・成果

新型コロナウイルス拡散防止のため出張をとまなう研究活動はいずれも実施することができなかった。そこで、ベルリンおよびオーストリアの科研調査と収集については、現地のカウンターパートとメールの応答によって情報を収集し、もっぱらデータの補充と整理をすすめた。

ベルリン国立博物館群ヨーロッパ諸文化博物館による *What's Missing? Collecting and Exhibiting Europe* がベルリンの出版社から刊行され、そのなかに論文を執筆した。感染症拡散予防対策のために急遽開催中止になった公開講演会の企画を、*MINPAKU Anthropology Newsletter* 50号記念号の特集として掲載した。共同研究「カネとチカラの民族誌——公共性の生態学にむけて」（研究代表者：内藤直樹）、「心配と係り合いについての人類学的探求」（研究代表者：西 真如）のふたつにおいては、成果出版に向けた議論をすすめた。年度後半から開始した共同研究「不確実性のなかでオルタナティブなコミュニティを問う」（研究代表者：森 明子）では、感染症拡散防止のために研究会はWEB開催とし、機動力を生かしてほぼ月例で研究会を開催した。2021年4月に開始予定の特別研究プロジェクトの企画・設計を進めた。

◎出版物による業績

[分担執筆]

Mori, A.

2021 Exhibiting Europe in an Ethnological Museum in Japan: Redefining the Opposition between Self and Other. In I. Edenheiser, E. Tietmeyer, and S. Boersma(eds.) *What's Missing? Collecting and Exhibiting Europe*, pp.56-63. Berlin: Dietrich Reimer Verlag.

[その他]

森 明子

2020 「モスト——オーストリア国境の村のリンゴ・ワイン」『TASC MONTHLY』534：3。

2021 「国境について考える——オーストリアの村から」『みんぱく e-news』235：巻頭コラム。

2021 「椅子——チカラの座とカラダの座」『月刊みんぱく』45(1)：16-17。

2021 「ヨーロッパ地域の食文化 食事の中心にある穀類と、味をつくる油脂」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.558-560, 東京：丸善出版。

2021 「人とモノを媒介する場所という視座」『民博通信 Online』3：20-21。

Mori, A.

2020 About 'the Transnational Family' and its Sense of Place. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 50: 2-4.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2020年11月14日 「共同研究の趣旨について」『不確実性のなかでオルタナティブなコミュニティを問う——モノ、制度、身体のからみあい』国立民族学博物館

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「変動する EU 国境地域におけるエスニック集団共生の課題」（研究代表者：加賀美雅弘（東京学芸大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（C））「ケアから見たベルリンのネイバーフッドに関する民族誌的研究」（研究代表者：森 明子）研究代表者、国立民族学博物館共同研究「カネとチカラの民族誌——公共性の生態学にむけて」（研究代表者：内藤直樹）メンバー、国立民族学博物館共同研究「心配と係り合いについての人類学的探求」（研究代表者：西 真如）メンバー、国立民族学博物館共同研究「不確実性のなかでオルタナティブなコミュニティを問う——モノ、制度、身体のからみあい」（研究代表者：森 明子）研究代表者、JSPS 研究拠点形成事業「日欧亜におけるコミュニティの再生を目指す移住・多文化・福祉政策の研究拠点形成」（研究代表者：坂井一成）メンバー

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

日本民俗学会国際交流特別委員会委員、Wissenschaftlicher Beirat von Historische anthropologie: Kultur-Gesellschaft-Alltag (Köln, Weimar, Wien) 研究顧問

相島葉月 [あいしま はつき]————— 准教授

【学歴】上智大学比較文化学部比較文化学科卒（2000）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科一貫性博士課程修士号取得退学（2002）、オクスフォード大学大学院社会文化人類学研究科社会人類学修士課程修了（2005）、オクスフォード大学大学院東洋学研究科イスラーム世界専攻博士課程修了（2011）【職歴】Zentrum Moderner Orient Visiting Research Fellow（2009）、Zentrum Moderner Orient/Graduate School Muslim Culture and Society, Free University Berlin Research Fellow（2010）、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員（2011）、マンチェスター大学人文学部 Lecturer in Modern Islam（2012）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2016）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻准教授（2017）、国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授（2017）【学位】D.Phil. in Oriental Studies（オクスフォード大学大学院東洋学研究科・セントアントニーズカレッジ 2011）、M.Sc. in Social Anthropology（オクスフォード大学大学院社会文化人類学研究科・グリーンカレッジ 2005）、修士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 2002）【専攻・専門】社会人類学、イスラーム学、中東研究【所属学会】日本中東学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

Aishima, H.

2016 *Public Culture and Islam in Modern Egypt: Media, Intellectuals and Society*. London: IB Tauris. [査読有]

[分担執筆]

Aishima, H.

2021 Chapter 1. Beyond Correspondence: Doing Anthropology of Islam in the Field and Classroom. In I. Ahmad (ed.) *Anthropology and Ethnography are not Equivalent: Reorienting Anthropology for the Future*, pp.20-35. Oxford: Berghahn Books. [査読有]

[論文]

Aishima, H.

2017 Consciously Unmodern: Situating Self in Sufi Becoming of Contemporary Egypt. *Culture and Religion: An Interdisciplinary Journal* (2): 149-164. [査読有]

【2020年度の活動報告】

◎各研究

・研究課題

現代エジプトにおける美と身体文化

・研究の目的、内容

本研究の目的は、エジプトの空手家コミュニティ（競技者、指導者、父兄）の事例より、都市中流層的な美的感覚と身体文化の関係性を再考することにある。本研究の出発点は、なぜエジプト中流層の少年・少女にとって、空手道が「ハラール（イスラーム法的に合法、倫理的）」な習い事であるのに対し、同様の身体動作を行うクラシック・バレエが「ハラーム（イスラーム法的に違法、非倫理的）」なのかという問いにある。ハラール／ハラームと言ったイスラーム法的な語彙を援用しているとはいえ、エジプトの空手人気を支える言説を分析するに際し、中流層的な倫理観になぞられた近代主義との関係性において論じる必要がある。空手道に取り組む意義を「目的」と「効果」で説明し、バレエを享乐的な行為と批判する言説は、国際政治経済の周縁に置かれたエジプトの中流層的な倫理観を如実に反映しているからである。近年、新自由主義経済の広がりにより、学歴や所得で中流層と下流層を差異化することがより困難になる中、「教養」の有無を指標とする新たな「階層観」が構築されつつある。この文脈において本研究は、空手道の稽古を、都市中流層的な倫理観と美的感覚が実践される場として考察する。

研究分担者をつとめる「人間文化機構ネットワーク型基幹プロジェクト・現代中東地域研究拠点」および科学研究費（基盤研究（B））「中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化（研究代表者：西尾哲夫）」に加え、研究代表者をつとめる科学研究費（若手研究（B））「エジプト空手家によるネイションの実践とグローバル化に関する社会人類学的研究」より研究費を捻出して研究課題を遂行した。

・成果

本年度は、新型インフルエンザの感染拡大の収束のめどがたたない上に、科学研究費（若手研究（B））の最終年度であったことから、海外調査は控え、これまで研究発表のために準備した素材を論文としてまとめる作業に重点を置いた。

Hatsuki Aishima (2021) "Locating the Popular: Sports and Social Class Ideals in Egyptian Karate", Dominique Casajus et al (eds.), *Sur la notion de culture Populaire au Moyen-Orient: Approches franco-japonaises croisées* (Senri Ethnological Reports 152), pp.157-170. [査読有]

相島葉月（近刊、2021年）「第5章グローバルスポーツとしての武道——カラテからエジプト社会を考える」西尾哲夫、東長靖（編）『中東・イスラーム世界への30の扉』ミネルヴァ書房。

相島葉月（入稿済み）「スポーツ・伝統武術（エジプト）」『イスラーム文化事典』丸善出版。

また、みんなく公開講演会にてエジプトの空手家コミュニティを主題とした講演を行い、他の登壇者とともに空手や剣道のグローバルスポーツとしての展開について話し合った。

相島葉月（2021年3月19日）「カラテから考えるエジプトのスポーツと社会」『グローバル化する武道と中東』オーバルホール及びオンライン。

2017年のNIHUの若手研究者派遣プログラムで滞在したイギリスの成果公開として、イギリスのEU離脱や大学教育についての論文やエッセーを執筆した。

相島葉月（2020）「イギリスの外食シーンにおける『多文化』をめぐるポリティクス」『Vesta』第118号、pp.36-39.

相島葉月（2021）「クリスマス狂騒曲」『月刊みんなく』第45巻第1号、p.9.

相島葉月（2021）「分断された社会の行方」『月刊みんなく』第45巻第4号、pp.5-6.

Hatsuki Aishima (2021) "Beyond Correspondence: Doing Anthropology of Islam in the Field and Classroom", Irfan Ahmad (ed.) *Anthropology and Ethnography are Different*. Oxford: Berghahn, pp.20-35.

本論文については、特別研究「グローバル地域研究と世界社会の認知地図」のオンライン研究会で7月3日に発表し、編者のIrfan Ahmadとともに人類学と民族誌の関係性について話し合った。

2019年4月25日に「人間文化機構ネットワーク型基幹プロジェクト・現代中東地域研究拠点」の事業として、*Wiley Blackwell History of Islam* (2018) の出版を記念し、編著者のアルマンド・サルヴァトーレ（マッギル大学）を招聘して、国内外のイスラーム史の専門家とともに合評会を開催し、グローバルヒストリーとしてイスラーム世界に関する歴史を書くための理論的枠組みや方法論について話し合った。その後、参加者の書評を編集し、*American Historical Review* に Review Roundtable として投稿した。査読を終了し、2021年3月号に掲載予定である。同誌は、英語圏の歴史学を代表する学会誌と目されているものの、イスラーム史やイスラーム世界について論じた投稿はなく、イスラーム史の専門家が歴史学に貢献しようとする試みも見受けられなかった。本企画は、グローバルヒストリーの枠組みを用いてイスラーム世界の事象を論じることで、イスラームに対する本質主義的な視座を脱し、グローバルな潮流に位置付けるためのアプローチを探求した。

◎出版物による業績

[分担執筆]

相島葉月

2021 「コラム4 アズハル」千葉悠志・安田慎編『現代中東における宗教・メディア・ネットワーク』pp.213-216, 横浜：春風社。

2021 「コラム2 ラジオと知識人」千葉悠志・安田慎編『現代中東における宗教・メディア・ネットワーク——イスラームのゆくえ』pp.123-125, 横浜：春風社。

Aishima, H.

2021 Chapter 1. Beyond Correspondence: Doing Anthropology of Islam in the Field and Classroom. In I. Ahmad (ed.) *Anthropology and Ethnography are not Equivalent: Reorienting Anthropology for the Future*, pp.20-35. Oxford: Berghahn Books. [査読有]

2021 Locating the Popular: Sports and Social Class Ideals in Egyptian Karate. In Dominique Casajus et al (eds.) *Sur la notion de culture Populaire au Moyen-Orient: Approches franco-japonaises croisée* (Senri Ethnological Reports 152), pp.157-170. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

[その他]

相島葉月

2020 「イギリスの外食シーンにおける『多文化』をめぐるポリテクス」『Vesta』118：36-39。

2021 「クリスマス狂騒曲」特集「めでたい場の食」『月刊みんぱく』45(1)：9。

2021 「カフェ・コーヒーハウス」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.22-23, 東京：丸善出版。

2021 「西アジアの食文化（エジプト）」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.28-29, 東京：丸善出版。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2020年11月6日 「総合司会」国立民族学博物館公開講演会『ファンタジーの挑戦——もうひとつの世界を想像しよう』日本経済新聞大阪本社カンファレンスルーム、オンラインとのハイブリッド開催

2021年3月19日 「カラテから考えるエジプトのスポーツと社会」国立民族学博物館公開講演会『グローバル化する武道と中東』オーバルホール、オンラインとのハイブリッド開催

・共同研究会での報告

2020年7月3日 'Beyond Correspondence: Doing Anthropology of Islam in the Field and Classroom.' 特別研究「グローバル地域研究と地球社会の認知地図——わたしたちはいかに世界を共創するののか」国立民族学博物館、オンライン開催

2021年1月30日 「現代エジプトにおけるムスリム知識人とメディア化するイスラーム」共同利用・共同研究課題「現代モスリム知識人の変容と交流」2020年度第2回研究会、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、オンライン開催

・研究講演

2020年12月4日 「神なき時代にスーフィーになる——ナセル社会主義とアブドゥルハリーム・マフムードのシャイフ探しの軌跡」イスラーム・セミナー、慶応義塾大学言語文化研究所、オンライン開催

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化」（研究代表者：西尾哲夫）研究分担者、科学研究費（若手研究（B））「エジプト人空手家によるネイションの実践とグローバル化に関する社会人類学的研究」研究代表者、国立民族学博物館共同研究「ネオリベラリズムのモラリティ」（研究代表者：田沼幸子（東京都立大学））メンバー、国立民族学博物館特別研究「グローバル地域研究と地球社会の認知地図——わたしたちはいかに世界を共創するのか？」（研究代表者：西尾哲夫）メンバー、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「国立民族学博物館現代中東地域研究拠点」（拠点代表者：西尾哲夫）拠点構成員

◎社会活動・館外活動

- ・他の機関から委嘱された委員など

日本文化人類学会民博連携委員

河合洋尚 [かわい ひろなお] ————— 准教授

1977年生。【学歴】関西学院大学社会学部卒（2001）、東京都立大学大学院社会科学研究科修士課程修了（2003）、東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程修了（2009）【職歴】中国嘉応大学客家研究所ビジティング・スカラー（2007）、中国嘉応大学客家研究院民族学分野専任講師（2008）、広東外語外貿大学継続学院非常勤講師（2009）、中国嘉応大学客家研究院客員准教授（2010）、中国国立中山大学社会学与人類学院助理研究员 [講師相当]（2010）、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員（2011）、流通科学大学総合政策学部非常勤講師（2012）、園田学園女子大学シニア専修コース非常勤講師（2013）、国立民族学博物館研究戦略センター助教（2013）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2016）、国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授（2017）【学位】博士（社会人類学）（東京都立大学 2009）、修士（社会人類学）（東京都立大学 2003）【専攻・専門】都市人類学、景観人類学、漢族研究【所属学会】日本文化人類学会、東京都立大学社会人類学会、日本華僑華人学会、日本華南学会、中国広東民族学会

【主要業績】

[単著]

河合洋尚

2020 『〈客家空間〉の生産——梅県における「原郷」創出の民族誌』東京：風響社。

2013 『景観人類学の課題——中国広州における都市環境の表象と再生』東京：風響社。

[編著]

河合洋尚編

2013 『日本客家研究的視角与方法——百年の軌跡』北京：社会科学文献出版社。

【受賞歴】

2001 安田三郎賞

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

- 1) ランドスケープおよびフードスケープの人類学的研究
- 2) 環太平洋における客家の移動、文化再生、景観形成にまつわる越境民族誌
- 3) 中国人類学のレビューとその再評価

・研究の目的、内容

①景観（ランドスケープ）をめぐる人類学を整理するとともに、次なるステップに進めるため、以下の3つの研究をおこなった。(A) 景観と文化遺産制度、バーチャル世界の関係性についての検討、(B) 食を対象とする五感と景観のつながりに関する検討（フードスケープ研究）、(C) 景観考古学、建築学（景観デザイン論）との対話。

②漢族、特に中国南部から世界各地に移住する客家に焦点を当て、国境を越えた社会文化的ネットワークについて文献研究やウェブ調査を実施した。具体的な研究対象は以下の3点である。(A) 中国南部における客家エスニシティの生成と華僑とのつながり、(B) オセアニア、特にハワイ、タヒチ、ニューカレドニアにおける客家の歴史と現状、(C) ペルーにおける客家の歴史と現状。

③共同研究会「社会・文化人類学における中国研究の理論的的定位」を主催した。さらに、担当である都市人類学の整理の他、客家地域などの事例から中国の親族論・宗族研究を再考した。

・成果

①景観人類学を一般向けに紹介する『景観人類学入門』を刊行した。また、中国の景観関係の権威雑誌である『風景園林』の「景観人類学特集」に参加し、論文を発表した。さらに、食の景観をめぐる研究を進め、レビュー論文「フードスケープ——「食の景観」をめぐる動向研究」を『国立民族学博物館研究報告』で発表するとともに、『世界の食文化百科事典』の刊行に編集幹事として携わり、「フードスケープ」などの項目も執筆した。景観人類学は、文化遺産研究とも密接に関係する分野である。本館特別研究「デジタル技術時代の文化遺産におけるヒューマニティとコミュニティ」(研究代表者：飯田 卓)に参加し、国際ウェブ・セミナーでも、客家建築の景観政策と文化遺産保護にまつわる口頭発表をおこなった。他方で、科研新学術研究領域「出ユーラシアの統合的人類史学」に研究分担者として参加し、景観という切り口から社会文化人類学、考古学、生物人類学の統合をめざすニッチ構築論の諸研究を整理し、その一部を同科研のシンポジウムでポスター発表するとともに、年次報告書において今後の方向性を示した。

②中国南部の客家エスニシティ生成に関する特集を組み、『国立民族学博物館研究報告』に投稿した。また、みんなくゼミナールおよびウィークエンドサロンで、タヒチ、ニューカレドニア、バヌアツ、ペルー、ハワイの客家に関する研究成果の一部を公表した。さらに、日本の客家研究に関する編著を現在編纂中であり、台湾で出版する予定となっている。

学術雑誌『中国21』54号の特集で、中国宗族論を再考する論文「祭祀する女性、祭祀される女性——「宗族」の範疇と多様性をめぐる一考」を発表したと同時に、同誌で梅県の女性祖先崇拝に関する論文「広東客家地域における女性祖先崇拝と宗族の形成」(夏 遠鳴著)を翻訳した。

◎出版物による業績

[単著]

河合洋尚

2020 『景観人類学入門』東京：風響社

[編著]

野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編

2021 『世界の食文化百科事典』東京：丸善出版。

[論文]

河合洋尚

2020 「フードスケープ——「食の景観」をめぐる動向研究」『国立民族学博物館研究報告』45(1)：82-114。

2021 「祭祀する女性、祭祀される女性——「宗族」の範疇と多様性をめぐる一考察」『中国21』(愛知大学現代中国学会) 54：103-125。

2021 「人類学如何着眼景観？——景観人類学之新課題」(辺 清音訳)『風景園林』28(3)：16-20。

[翻訳]

河合洋尚

2021 「広東省客家地域における女性祖先崇拝と宗族の形成」『中国21』(愛知大学現代中国学会) 54：83-102 [中国語→日本語]。

[その他]

河合洋尚

2021 「フードスケープ」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.24-25, 東京：丸善出版。

2021 「中国地域の食文化」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.604-609, 東京：

丸善出版。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・研究講演

2021年3月13日 ‘Landscape Politics and Heritage Practices: Comparison between Fujian Tulow and Hakka Weilongwu (遺産実践としての景観ポリティクス——福建土楼と客家団籠屋の比較から)’
“Serial Academic Webinars Cultural Transmission against Collective Amnesia: Bodies and Things in Heritage Practices (連続ウェブ研究会 文化遺産実践における身体とモノ——集合的健忘に抗するための文化伝達)” National Museum of Ethnology, Japan

・みんぱくゼミナール

2021年2月20日 「南半球の華僑華人——客家を中心として」第506回みんぱくゼミナール

・みんぱくウィークエンド・サロン

2021年3月28日 「ハワイの華人と客家」第584回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

・展示

2020年8月12日～2021年11月14日 台湾客家文化館特別展示「川流不息——台湾客家与日本国際展」への参与

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員(1人)

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

国立民族学博物館共同研究「社会・文化人類学における中国研究の理論的的定位——12のテーマをめぐる再検討と再評価」研究代表者、人間文化研究機構広領域連携型研究プロジェクト「アジアにおける『エコヘルス』研究の新展開」研究分担者、科学研究費(基盤研究(C))「中国——南太平洋島嶼国関係の変化と『オセアニア・チャイニーズ』像の表出」研究代表者、科学研究費(新学術領域研究(研究領域提案型))「民族誌調査に基づくニッチ構築メカニズムの解明」(研究代表者:大西秀之(同志社女子大学))研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

中国嘉応大学客家研究院客員准教授、京都市立芸術大学非常勤講師「アジア文化史I」、大阪経済大学非常勤講師「民俗学」、関西学院大学非常勤講師「フィールド文化特論A」「死と病の文化史」

鈴木英明 [すずき ひであき]————— 准教授

【学歴】学習院大学文学部史学科卒業(2001年)、慶応義塾大学大学院文学研究科修了(2003年)、東京大学人文社会科学系研究科単位取得退学(2010年)【職歴】日本学術振興会特別研究員、長崎大学多文化社会学部准教授(2014-2018)、国立民族学博物館グローバル現象研究部助教(2019)、国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授(2019)【学位】博士(文学)(東京大学2010)【専攻・専門】歴史学、インド洋海域史、グローバルヒストリー【所属学会】日本アフリカ学会、日本オリエント学会

【主要業績】

[単著]

Suzuki, H.

2017 *Slave Trade Profiteers in the Western Indian Ocean: Suppression and Resistance in the 19th Century*. New York: Palgrave.

[編著]

鈴木英明編

2019 『東アジア海域から眺望する世界史——ネットワークと海域』東京:明石書店。

Suzuki, H. (ed.)

2016 *Abolitions as a Global Experience*. Singapore: NUS Press.

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

インド洋を中心とした奴隷廃止のグローバルヒストリー

・研究の目的、内容

本研究では、奴隷制や奴隷交易の廃止を世界的な共通体験として捉え、そのような共通体験がどのようにして発生し、それがどのような影響を後世に残したのかを明らかにする。とりわけ、インド洋を中心にこの問題を考究する。

・成果

本年度は、海外調査ができなかったが、その分を本年度より開始した科学研究費（基盤研究（C））「20世紀前半ペルシア湾奴隷制に関する歴史民族誌的研究」などを用いて、資料の整理と充実にあてた。

10月には『解放しない人びと、解放されない人びと——奴隷廃止の世界史』を東京大学出版会より刊行した。本書は、インド洋を含み、奴隷廃止の世界史的な展開を明らかにしたものである。また、11月には歴史学会第45回大会シンポジウム「人の移動における自由と不自由のあいだ」にコメンテーターとして参加し、本研究課題の成果を盛り込んだコメントを行った。11月には比較文明学会第38回大会シンポジウム「生き物をめぐって現代文明を考える」において、特にペルシア湾の真珠採取業を事例にした「生き物とグローバルヒストリー」と題した報告を行い、その内容は『季刊民族学』175号で「貝殻に雨粒が宿れば。——20世紀前半、世界商品化する真珠とペルシア湾の採集者たち」と題して刊行された。

◎出版物による業績

[単著]

鈴木英明

2020 『解放しない人びと、解放されない人びと——奴隷廃止の世界史』東京：東京大学出版会。[査読有]

[論文]

Suzuki, H.

2020 The Birth of a Node: Nosy Be as a French Protectorate and Trade Networks. *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko* 77: 87-106. [査読有]

[その他]

鈴木英明

2020 「東アフリカの女性が纏う色彩——鮮やかなるカンガ」『中央公論』134(7)：8-10。

2020 「アフリカを彩った日本製カンガの旅——『メイド・イン・ジャパン』から立ち上がるグローバル・ヒストリー」『中央公論』134(7)：172-179。

2021 「貝殻に雨粒が宿れば。——20世紀前半、世界商品化する真珠とペルシア湾の採集者たち」『季刊民族学』175：22-29。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機構の連携研究会での報告

2020年7月31日 「19世紀後半から20世紀前半のペルシア湾における真珠採取業と拘束、奴隷制」特別研究「グローバル地域研究と地球社会の認知地図——わたしたちはいかに世界を共創するのか？」第4回研究会／現代中東地域研究レクチャーシリーズ第24回レクチャー、オンライン開催

・共同研究会での報告

2020年11月28日 「アデン湾両岸地域の可能性」『人類史における移動概念の再構築——「自由」と「不自由」の相克に注目して』国立民族学博物館、オンラインとのハイブリッド開催

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年5月22日 「世界史的共通体験としての奴隷廃止——解放されない人びと」第88回大阪大学グローバルヒストリーセミナー、大阪大学、オンライン開催

2020年5月23日 「曖昧な『ボンベイ・アフリカン』——ジェイコブ・ウエインライトの日記の分析から」日本アフリカ学会第57回学術大会、東京外国語大学、オンライン開催

2020年7月19日 「ボンベイ・アフリカンの『アフリカ』経験——19世紀インド洋西海域における救出後の元奴隷たち」「『奴隷』と隷属の世界史——地中海型奴隷制度論を中心として」研究会、オンライン開催

2020年10月30日 「The Rise of Nosy Be: Conjunction between Indian Ocean Network and Imperial Expan-

sion.' "A Statistical Study of Indian Ocean Trade: Towards a Reappraisal of Regional Trade in Modern World History", オンライン開催

2020年11月21日 「生き物とグローバルヒストリー——世界商品化する真珠とペルシア湾の採取者たち」第38回比較文明学会大会、国立民族学博物館

2020年12月20日 「コメント」歴史学会第45回大会シンポジウム『人の移動における自由と不自由のあいだ』ウェブ会議

2021年1月30日 「ネットワーク論再考——フロー＝ネットワークの観点から」シンポジウム『港市と渡海者——港を結ぶネットワーク』オンライン開催

2021年2月11日 'Development of Kaiiki-shi 海域史 studies in Japan and its Dilemma.' "South East Asia and East Asia in Studies of the Indian Ocean World: Past, Present and Future", オンライン開催

・広報・社会連携活動

2020年8月27日 'Slave Trade Profiteers in the Western Indian Ocean: Suppression and Resistance in the 19th Century.' (New Books in the Indian Ocean World) New Books Network、オンライン開催

・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

2021年1月26日 「アフリカ地域」（2020年度国際協力調査「海域交流ネットワークと文化遺産」意見交換会）文化遺産国際協力コンソーシアム、オンライン開催

◎大学院教育

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「渡海者のアイデンティティと領域国家——21世紀海域学の史的展開」（研究代表者：上田 信（立教大学）研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「インド洋交易圏の統計的研究——近代世界における地域交易像の再構築」（研究代表者：杉原 薫（総合地球環境学研究所）研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「文化遺産の『社会的ふるまい』に関する応用人類学的研究：東部アフリカを事例に」（研究代表者：飯田 卓）研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「近世海上貿易ネットワークの構造と変容——アジアの季節変動とグローバル・ヒストリー」（研究代表者：島田竜登（東京大学）研究分担者、科学研究費（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B）））「『循環』を問い直す——物質・文化・環境を繋ぐグローバルヒストリー」（研究代表者：杉浦未樹（法政大学）研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「植民地における予防と監視の比較研究——治安秩序維持と公衆衛生に焦点を当てて」（研究代表者：鬼丸武士（九州大学）研究分担者、科学研究費（基盤研究（A））「『奴隷』と隷属の世界史——地中海型奴隷制度論を中心として」（研究代表者：清水和裕（九州大学）研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「装飾文化からみたアフリカ史の再構築に関する研究」（研究代表者：池谷和信）研究分担者、科学研究費（基盤研究（C））「20世紀前半ペルシア湾奴隷制に関する歴史民族誌的研究」研究代表者、国立民族学博物館共同研究「人類史における移動概念の再構築——『自由』と『不自由』の相克に注目して」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

大同生命国際文化基金大同生命地域研究賞推薦委員、文化遺産国際協力コンソーシアム国際協力調査ワーキンググループ外部専門家

廣瀬浩二郎 [ひろせ こうじろう] ————— 准教授

【学歴】 京都大学文学部国史学科卒（1991）、京都大学大学院文学研究科日本史学専攻修士課程修了（1993）、カリフォルニア大学バークレイ校人類学部留学（1995）、京都大学大学院文学研究科日本史学専攻博士課程指導認定退学（1997）【職歴】 京都大学文学部研修員（1997）、花園大学社会福祉学部非常勤講師（1999）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（2001）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2008）、関西学院大学非常勤講師（2010）、東海大学非常勤講師（2015）、国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授（2017）【学位】 文学博士（京都大学大学

院文学研究科 2000)、文学修士(京都大学大学院文学研究科 1993)【専攻・専門】日本宗教史、民俗学(日本の新宗教、民俗宗教と障害者文化、福祉の関わりについての歴史、人類学的研究)【所属学会】日本史研究会、「宗教と社会」学会、日本武道学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

廣瀬浩二郎

2009 『さわる文化への招待——触覚でみる手学問のすすめ』京都：世界思想社。

2001 『人間解放の福祉論——出口王仁三郎と近代日本』大阪：解放出版社。

[学位論文]

廣瀬浩二郎

2000 「宗教に顕れる日本民衆の福祉意識に関する歴史的研究」京都大学大学院文学研究科。

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

「バリア・フリー」に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

今年度は秋の特別展・企画展の実施に向けて準備を進めることになる。二つの展示は私の触文化研究の集大成であるとともに、過去10年余の民博における共同研究、科学研究費プロジェクトの成果を広く一般公開する大事業と位置付けることができる。チラシ等の広報媒体でも“触”の要素を取り入れたユニークな印刷物を提案・実現したいと考えている。また、図録は単なる展覧会のカタログというのみではなく、ユニバーサル・ミュージアムの基本文献として長く読み継がれる書籍になるよう工夫したい。民博は、ユニバーサル・ミュージアム研究の国際的な拠点であるといえる。この事実を館内外に示すことが、特別展・企画展の同時開催の目的である。

今年度は3年計画で取り組んできた科学研究費プロジェクト「触察の方法論の体系化と視覚障害者の野外空間のイメージ形成に関する研究」の最終年度に当たる。特別展・企画展の成果とも連動しつつ、日本のユニバーサル・ミュージアムの現状と課題について、英文論文をまとめたい。その他、ここ数年の懸案であるユニバーサルデザインのさわる絵本『世界の感触』も刊行をめざす。

・成果

2020年度はコロナ禍のため、大幅な研究計画の変更を強いられた。2020年の秋に実施予定だった特別展・企画展は、民博着任後20年となる私の研究の集大成と位置づけ、準備を進めてきたが、1年の延期が決まった。また、企画展は中止、特別展へ一本化されることとなり、展示プランを再検討した。展示の延期は大きな痛手だったが、在宅勤務が続く2020年5月～7月に京都の出版社、小さ子社のサイトでコラム「それでも僕たちは『濃厚接触』を続ける！」(全8回)を連載できたのは、今年度の研究成果として特筆に値する。本連載コラムに民博所蔵資料の写真、解説を加え、10月に単著として刊行することができたのも有意義だった。

上述の連載コラムがきっかけとなり、コロナ関係でいくつかの論文・エッセーの寄稿依頼があった。これらの原稿を書き進める中で、あらためて特別展の趣旨、研究上の位置づけを明確にすることができた。2020年度末で終了予定だった科研費プロジェクト「触察の方法論の体系化と視覚障害者の野外空間のイメージ形成に関する研究」は総括研究会、野外での調査の実施が困難だったため、1年の延長を申請した。2021年度の特別展開催に合わせ、科研費プロジェクトでもワークショップ等を企画したい。

◎出版物による業績

[単著]

廣瀬浩二郎

2020 『それでも僕たちは「濃厚接触」を続ける!——世界の感触を取り戻すために』京都：小さ子社。

[分担執筆]

廣瀬浩二郎

2021 「『射真』という新概念」清水展・小國和子編『職場・学校で活かす現場グラフィー——ダイバーシティ時代の可能性をひらくために』pp.225-229, 東京都：明石書店。

[論文]

廣瀬浩二郎

2021 「健常者とはだれか——『耳なし芳一』を読み解く」『2020年度差別の歴史を考える連続講座講演録』pp.77-103, 京都：京都部落問題研究資料センター。

[その他]

廣瀬浩二郎

2020 「目/耳/手/をつなぐ“触る”アート 21世紀版『耳なし芳一』」『intoxicate』146：8-9。

2020 「コロナ禍の先へ——全盲の僕が発見した『六つの手』」『こころ』55：23-31。

2021 「3密の意義を見つめなおす“触”の大博覧会」『季刊紙子どもは未来 檸檬新報』p.2, 大阪：檸檬新報舎。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年9月16日 「世界をつなぐユニバーサル・ミュージアム——“触”の大博覧会から2025大阪万博へ」第89回言語・音声理解と対話処理研究会、オンライン開催

2020年11月23日 「バリア・フリー社会における『いのち』」第38回比較文明学会大会、国立民族学博物館、オンラインとのハイブリッド開催

2021年2月23日 「触発の技法と可能性」第78回身心変容技法研究会、オンライン開催

2021年3月30日 「『点字』的私論、『私』的點字論」日本発達心理学会第32回大会、オンライン開催

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「インクルーシブアート教育論及び視覚障害等のためのメディア教材・カリキュラムの開発」（研究代表者：茂木一司（群馬大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（C））「触察の方法論の体系化と視覚障害者の野外空間のイメージ形成に関する研究」研究代表者

三島禎子 [みしま ていこ] ————— 准教授

1963年生。【学歴】セネガル共和国国立応用経済学院社会コミュニケーション学部卒（1989）、パリ第5大学大学院社会科学科第2課程修了（1992）、津田塾大学大学院国際関係学研究所博士前期課程修了（1992）、パリ第5大学大学院社会科学科第3課程修了（1993）【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2003）、国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授（2017）【学位】D. E. A. Sci. Soc（パリ第5大学大学院社会科学科1993）、M. Soc.（パリ第5大学大学院社会科学科1992）【専攻・専門】文化人類学（西アフリカ研究）【所属学会】アフリカ学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[編著]

Charbit, Y. et T. Mishima (éds.)

2014 *Questions de migrations et de santé en Afrique sub-saharienne*. Paris: LHarmattan.

[論文]

Mishima, T.

2014 Anthropologie des migrations internationales des Soninké: Formation et transmission de la richesse. In Y. Charbit et T. Mishima (éds.) *Questions de migrations et de santé en Afrique subsaharienne*. Paris: LHarmattan.

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

民族文化の多元的意義に関する理論研究——商業移民の送出社会の変容から

- ・研究の目的、内容

民族文化は理解する側にとっても多面的であるとともに、その受容者にとっても一元的ではない。その時代や社会環境によってさまざまな意義が与えられ得る民族文化について、その差異を明らかにし、それぞれについて既存の研究から理論的考察をおこなう。研究対象とするのは、商業移民を歴史的に送出してきた西アフリカのソニンケ社会である。10年以上にわたって移民の出身地で開催されている「文化週間」と地域ラジオの関わりを分析し、送り出し社会についての考察を深める。

研究の方法として、みんなくプロジェクトの一環であるフォーラム型ミュージアムの資金を利用して、2017年に取材をおこなった映像をデータベース化する作業を今後2年間にわたっておこなう。このデータベースは、「文化週間」の映像を現地の人びとに翻訳してもらい、解説をつけるために利用するもので、民族文化に関する多様な解釈を収集する場となり得る。

- ・成果

フォーラム型ミュージアム（強化型）の1年目として、映像資料の整理とフランス語による情報の追加をおこなないデータベースの基盤を作成した。映像資料はセネガルの20ヶ村で行われた「文化週間」を記録したもので、ビデオテープや映像民族誌に使用したものを含め項目別におよそ250件に分割され、それぞれについて10項目の情報付加した。

このプロジェクトの構想については、アフリカ学会で発表したほか、「民博通信」に執筆した。また映像資料をつかった一般向けの映画会や民博の内外における講演会でも紹介した。

送り出し社会についての考察では、共同研究『人類史における移動概念の再構築——「自由」と「不自由」の相克に注目して』（代表：鈴木英明）において発表し、時代や立場によって異なる移動の諸相を描く試みから研究課題に取り組んだ。

- ◎出版物による業績

[分担執筆]

三島禎子

2021 「ムスリム系アフリカ移民の食」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.482-483, 東京：丸善出版。

[論文]

三島禎子

2021 「ソニンケによる『文化週間』の映像データベースの構築」『民博通信 Online』3：8-9。

[その他]

三島禎子

2020 「今と昔——セネガルの養鶏ビジネス」『みんなく e-news』227：巻頭コラム。

2020 「『アフリカプリント』は世界とつながっている」『アフリカ布見本帖』pp.13-15, 東京：玄光社。

- ◎口頭発表・展示・その他の業績

- ・共同研究会での報告

2021年2月18日 「移動する人の諸相——時間軸と空間軸の接点からみるソニンケ商人」『人類史における移動概念の再構築——「自由」と「不自由」の相克に注目して』オンライン開催

- ・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年5月23日 「ソニンケ民族の文化運動と地域ラジオ局——『文化週間』の映像取材から見えてきたもの」日本アフリカ学会第57回学術大会、オンライン開催

- ・広報・社会連携活動

2020年11月16日 「地域ラジオ局と文化運動——セネガルの農村から」大阪府高齢者大学校「国際文化交流科」

2021年1月9日 「セネガル河上流域の変容と『文化週間』——故郷に残った人びとの選択」第509回国立民族学博物館友の会講演会、国立民族学博物館、オンライン開催

2021年1月23日 「セネガルを越える人と地域ラジオ」みんなく映像民族誌シアター、国立民族学博物館、シアターセブン、オンライン開催

- ◎大学院教育

- ・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文予備審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「アフリカ資料の多言語双方向データベースの構築」(研究代表者：飯田 卓) メンバー、国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「セネガルにおける諸民族文化の映像記録を題材とする情報強化」研究代表者

◎社会活動・館外活動

- ・他の機関から委嘱された委員など

Revue Européenne des Migrations Internationales 編集委員 (アジア担当)

学術資源研究開発センター

野林厚志 [のばやし あつし] ————— センター長 (併) 教授

1967年生。【学歴】東京大学理学部生物学科卒 (1992)、東京大学大学院理学系研究科修士課程修了 (1994)、東京大学大学院理学系研究科博士課程退学 (1996) 【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手 (1996)、国立民族学博物館民族社会研究部助手 (1998)、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手 (2000)、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授 (2003)、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授 (2004)、国立民族学博物館研究戦略センター准教授 (2010)、国立民族学博物館研究戦略センター教授 (2012)、国立民族学博物館文化資源研究センター教授・センター長 (2014-2016)、国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授 (2017)、国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授・センター長 (2019-2020) 【学位】博士 (学術) (総合研究大学院大学 2003)、修士 (理学) (東京大学大学院理学系研究科 1994) 【専攻・専門】人類学、フォルモサ研究 【所属学会】日本台湾学会、日本文化人類学会、The American Anthropological Association、生き物文化誌学会

【主要業績】

[単著]

野林厚志

2008 『イノシシ狩猟の民族考古学——台湾原住民の生業文化』東京：御茶の水書房。

[編著]

野林厚志編

2018 『肉食行為の研究』東京：平凡社。

順益台湾原住民研究会・野林厚志主編

2014 『台湾原住民研究の射程——接合される過去と現在』台北：順益台湾原住民博物館。

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

生態資源獲得の技術の人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、人類が生態資源の獲得に使用してきた技術を、(1)物質文化、(2)人間の行動、(3)環境条件、という3つの側面から分析し、人類の適応行動の空間的な変異と時間的な変化を明らかにすることである。このために、(1)台湾、インドネシアで、生業行動、食生活に関する野外調査を、国立民族学博物館をはじめとする内外の博物館で、生業資源の獲得に関連する資料の熟覧調査を行い、生態資源(動物、植物、鉱物、水等)を獲得するための技術インデックスを作成する。同時に民族誌データ(Binford2001等)の定量分析を進め、環境と文化要素との相関に関する考察を行う。本年度は昨年度の調査で得られた、インドネシア・ハルマヘラ島における食事の基礎資料の分析をすすめ、1970年代後半に実施された、国立民族学博物館ハルマヘラ調査隊による現地調査データと比較しながら、文化変容と生態資源利用の変化との関係の考察を進める。民族誌データ(Binford2001等)の定量分析については、昨年度にプラットフォームを完成させたパレオアジア民族誌データベースへのデータ入力を進め、生態資源獲得技術の通文化比較を視覚的に可能にするデータベースを構築する。

以上の成果にもとづき、自然環境への適応、集団接触による文化変容を説明するための生態資源の獲得技術の人類学的モデルを提示する。

なお、本研究は、新学術領域研究「パレオアジア文化史学」の計画研究「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」の一環で実施する。

・成果

本年度は当初計画にしたがいがいながら、前年度までに得られたインドネシア・ハルマヘラ島における食事の基礎資料の分析を進め、漁撈が生業活動において重要な役割を占める島嶼社会の食生活のモデルを提示した。具体的には、通年利用可能な根菜（タロ、サツマイモ、バナナ）の栽培と海産資源との組み合わせが食生活の基本的な形態である一方で、海流による捕獲可能な魚種の季節性が生じる中低緯度島嶼（台湾）と珊瑚礁リーフを利用した通年的に安定した漁獲である低緯度島嶼（ハルマヘラ）では、農耕と漁撈の組み合わせによる生業カレンダーの差異が生じていることを明らかにした。成果は「日本民俗学会」の年次大会、「生き物文化誌学会」例会において報告した。

また、民族誌データ（Binford2001等）の分析も進め、米国トルーマン大学から公開されているオープンライセンスのEnvCalプログラムを用いて、世界の気候、植生条件にしたがった狩猟採集集団の投影（Projection）の分析を行い、ホモ・サピエンスのアジアにおける拡散ルートの検証を行なった。成果は、新学術領域研究「パレオアジア文化史学」の研究大会で発表した。

これらの研究は、新学術領域研究「パレオアジア文化史学」の計画研究「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」の一環で実施した。

◎出版物による業績

[編著]

野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編

2021 『世界の食文化百科事典』東京：丸善出版。

野林厚志編

2021 『パレオアジア文化史学 計画研究 B01班2020年度 研究報告——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究』東京：文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016-2020年度計画研究 B01班（研究課題番号16H06411）。

Nobayashi, A. and S. Simon (eds.)

2020 *Environmental Teachings for the Anthropocene: Indigenous Peoples and Museums in the Western Pacific* (Senri Ethnological Studies 103). Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

[分担執筆]

野林厚志

2021 「豆類」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.48-49, 東京：丸善出版。

2021 「ヤム・タロ」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.56-57, 東京：丸善出版。

2021 「生食と非加熱料理」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.176-177, 東京：丸善出版。

2021 「酒と信仰」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.304-305, 東京：丸善出版。

2021 「食の意味（比喩）」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.396-397, 東京：丸善出版。

2021 「日本のパン」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.492-493, 東京：丸善出版。

2021 「中国地域の食文化（少数民族とベジタリアン料理）」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.610-611, 東京：丸善出版。

2021 「拡大する人類集団の肉食——人新世の消費の行方」池谷和信編『食の文明論——ホモ・サピエンス

史から探る』 pp.303-327, 東京：農山漁村文化協会。

Nobayashi, A. and S. Simon

2020 'Introduction'. In A. Nobayashi and S. Simon (eds.) *Environmental Teachings for the Anthropocene: Indigenous Peoples and Museums in the Western Pacific* (Senri Ethnological Studies 103), pp.1-8. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

Nobayashi, A.

2020 The Diversity of Taiwanese Indigenous Culture Seen in Bead Products. In A. Nobayashi and S. Simon (eds.) *Environmental Teachings for the Anthropocene: Indigenous Peoples and Museums in the Western Pacific* (Senri Ethnological Studies 103), pp.51-63. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

Peng, Y. and A. Nobayashi

2021 Cross-Cultural Research Comparing the Hunting Tools and Techniques of Hunter-Gatherers and Hunter-Gardeners. In K. Ikeya and Y. Nishiaki (eds.) *Hunter-Gatherers in Asia: From Prehistory to the Present* (Senri Ethnological Studies 106), pp.75-92. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

[論文]

野林厚志

2021 「拡大する人類集団の肉食——人新世の消費の行方」池谷和信編『食の文明論——ホモ・サピエンス史から探る』 pp.303-327, 東京：農山漁村文化協会。

Ihara, Y., K. Ikeya, A. Nobayashi, and Y. Kaifu

2020 A Demographic Test of Accidental Versus Intentional Island Colonization by Pleistocene Humans. *Journal of Human Evolution* 145: 1-12. [査読有]

Nobayashi, A.

2020 A Milestone in the Construction of the Exhibits in National Museum of Ethnology, Japan: Japan World Exposition «Osaka 70 Expo» and its Ethnographic Collection. *Archivio per l'Antropologia e la Etnologia* (CL): 129-146. Firenze: Societa Italiana di Antropologia e Etnologia. [査読有]

[その他]

野林厚志・中村光宏

2020 「新旧技術が並存するためのニッチ条件の民族学的、数理解釈」『パレオアジア文化史学——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究 第9回研究大会』 pp.18-19, 東京：東京大学。

野林厚志

2020 「文献紹介：岩間一弘編著『中国料理と近現代日本——食と嗜好の文化交流史』」『vesta』 118：64-65。

2020 「魚皮玩具」『BIOSTORY』 33：1。

2020 「〈ことばの迷い道〉『嘉玲』が帰ってきたよ」『月刊みんぱく』 44(8)：20。

2020 「島嶼社会の魚食と生業複合——台湾蘭嶼とインドネシアハルマヘラの事例から」『日本民俗学会第72回年会』 p.6, 名古屋：日本民俗学会第72回年会実行委員会。

2020 「食が生まれる瞬間と脈絡を考える」『民博通信 Online』 2：12-13。

2020 「生態資源と観光資源のふたつの顔をもつ温泉」『月刊みんぱく』 44(11)：4-5。

2020 「生き物とミュージアム——人新世におけるいのちの表現を考える」『第38回比較文明学会大会プログラム・要旨集』 pp.16-17, 東京：比較文明学会第38回大会実行委員会。

2020 「台湾における人類集団の連続性の生態・民族誌的検証」『パレオアジア文化史学——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究 第10回研究大会』 pp.30-31, 名古屋：名古屋大学。

2021 「地球主義とミュージアム——人新世における生物多様性の理解に向けて」『季刊民族学』 45(1)：60-68。

2021 「台湾社会の甘い飲食文化——砂糖の歴史生態から考える」『砂糖類・でん粉情報』 102：69-75。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2020年9月14日 「エスニシティから見た主食——台湾原住民族の事例」『食生活から考える持続可能な社会——「主食」の形成と展開』国立民族学博物館、オンラインとのハイブリッド開催

- ・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告
 - 2020年10月3日 「島嶼社会の魚食と生業複合——台湾蘭嶼とインドネシアハルマヘラの事例から」日本民俗学会第72回年会、愛知大学
 - 2020年10月24日 「從国立民族学博物館特展『原住民之寶』來思考（国立民族学博物館特別展『先住民の宝』から考える）」第13届台日原住民族研究論壇（オンライン発表）、国立政治大學原住民族研究中心
 - 2020年10月31日 「海の先住民の生業カレンダー——台湾タオ族の魚食とイモの利用」生き物文化誌学会第79回例会（生き物と先住民）、国立民族学博物館
 - 2020年11月21日 「生き物とミュージアム——人新世におけるいのちの表現を考える」第38回比較文明学会大会シンポジウムI『生き物をめぐって現代文明を考える』国立民族学博物館
 - 2020年12月11日 「博物館を通じた台湾原住民族との協働——大学共同利用機関の視点から」地方大学における総合的な地域資料の展示公開モデルの構築研究会（オンライン発表）、東北大学
 - 2020年12月19日 「台湾における人類集団の連続性の生態・民族誌的検証」パレオアジア文化史学——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究 第10回研究大会（オンライン発表）、名古屋大学
- ・展示
 - 2020年10月1日～12月15日 「先住民の宝」国立民族学博物館
- ・みんなくウィークエンド・サロン
 - 2020年12月6日 「台湾原住民運動40年——『高山青』から移行期正義まで」第580回みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう
- ・広報・社会連携活動
 - 2020年11月1日 「地域文化の継承と復興に博物館が果たす役割」（「佐々木高明の見た焼畑——五木村から世界へ」関連企画公開セミナー）五木村歴史文化交流館、ヒストリアテラス五木谷、熊本
- ◎大学院教育
 - ・指導教員
 - 主任指導教員（3人）、副指導教員（4人）
 - ・博士論文審査委員（総研大に限る）
 - 博士論文予備審査委員（1件）
- ◎上記以外の研究活動
 - ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
 - 科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」研究代表者、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））『学術研究支援基盤形成』「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」（研究代表者：吉田憲司）研究支援分担者、科学研究費（基盤研究（B））「台湾『原住民運動』前史の生活世界の変容と実践：写真アーカイブスによる人類学的探究」（研究代表者：宮岡真央子（福岡大学））研究分担者、人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「文明社会における食の布置」研究代表者
 - ・民間の奨学金及び助成金からのプロジェクト
 - 順益台湾原住民博物館研究賛助金「台湾原住民族の文化、社会、歴史に関する総合的研究」研究代表者
- ◎社会活動・館外活動
 - ・他の機関から委嘱された委員など
 - 文部科学省審議会臨時委員、生き物文化誌学会理事、日本学術振興会国際事業委員、日本学術会議連携会員、アジア太平洋フォーラム・淡路会議アジア太平洋研究賞選考委員、味の素食の文化センター食の文化フォーラム会員、奈良県文化財保存・活用会議委員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所フィールド・サイエンス・コロキウム運営委員、北海道大学アイヌ・先住民研究センター国際編集諮問委員

岸上伸啓 [きしがみ のぶひろ] ————— 教授

1958年生。【学歴】早稲田大学第一文学部社会学科卒（1981）、早稲田大学大学院文学研究科社会学専修修士課程修了（1983）、マギル大学人類学部人類学科博士課程退学（1989）【職歴】早稲田大学文学部助手（1989）、北海道教育大学教育学部函館校専任講師（1990）、北海道教育大学教育学部函館校助教授（1992）、国立民族学博物館第一研究

部助教授（1996）、総合研究大学院大学文化科学研究科助教授（1997）、国立民族学博物館先端民族学研究部助教授（1998）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科教授（2005）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2005）、総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻長（2006）、国立民族学博物館館長補佐（2008）、国立民族学博物館先端人類科学研究部部長（2009）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2012）、国立民族学博物館研究戦略センターセンター長（2012）、国立民族学博物館副館長（2013）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授（2017）、国立民族学博物館学術資源研究開発センターセンター長（2017）、人間文化研究機構本部理事（2018）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授（併任）（2018）【学位】博士（文学）（総合研究大学院大学文化科学研究科 2006）、文学修士（早稲田大学大学院文学研究科 1983）【専攻・専門】文化人類学 カナダ・イヌイットの社会変化、都市在住のイヌイットの民族誌的研究、先住民による海洋資源の利用と管理、アラスカ先住民イヌピアットとカナダ・イヌイットの捕鯨、環北太平洋先住民文化の比較研究【所属学会】日本文化人類学会、日本カナダ学会、国際極北社会科学学会、民族藝術学会、生き物文化誌学会、函館人文学会

【主要業績】

[単著]

岸上伸啓

2007 『カナダ・イヌイットの食文化と社会変化』京都：世界思想社。

[編著]

Kishigami, N., H. Hamaguchi, and J. M. Savelle (eds.)

2013 *Anthropological Studies of Whaling* (Senri Ethnological Studies 84). Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Kishigami, N.

2004 A New Typology of Food-Sharing Practices among Hunter-Gatherers, with a Special Focus on Inuit Examples. *Journal of Anthropological Research* 60: 341-358.

【受賞歴】

2007 第18回カナダ首相出版賞

1998 第9回カナダ首相出版賞（審査員特別賞）

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

北アメリカ北西海岸先住民文化の変化に関する民族学的研究

・研究の目的、内容

北アメリカ大陸のアラスカ南部からワシントン州にかけての北西海岸地域には狩猟・漁労民でありながら複雑な社会組織や儀礼を保持しつつ定住生活をおくってきた人々が住んでいる。彼らは、ハイダヤクワクワクワ、海岸セイリッシュなど13以上の異なる民族集団からなるが、生業や居住形態、ポトラッチ儀礼の実施、トーテムポールや丸木舟等の製作、世界観、人間と動物との関係など多くの点で共通性が認められるために、北西海岸先住民と総称されてきた。

現代の北西海岸先住民文化の祖型は、約2500年前ごろに形成されたと考えられている。同地域の人びとは地元の豊富な海洋資源と森林資源を利用して、独自の文化を生み出してきた。彼らは18世紀末からラッコなどの毛皮交易によって経済的に栄え、その富を利用して伝統文化を活性化させた。しかし19世紀後半から20世紀半ばにかけてカナダ政府による同化政策のために独自の言葉や儀礼、儀礼具の製作技術の多くを失った。1950年代に政府が先住民に信仰の自由を認めると、ポトラッチ儀礼の実施やトーテムポールの製作など彼らの間で伝統文化の復興運動が活発になった。以上が北西海岸先住民の文化と歴史の概略である。

本研究の目的は、北西海岸先住民のひとつであるハイダ・グワイ（旧称クイーン・シャーロット諸島）に在住するハイダ民族に焦点をあて、彼らの文化の変化と現状について既存の文献に基づく研究と2020年8月に予定している現地調査によってデータを収集し、整理・分析して、文化変化の全体像を描き出すことである。とくに彼らの生業活動、世界観、儀礼、ダンス、社会組織、モノづくりを取り上げて、それらの文化的な側面

の変化と持続、現状について整理・分析する。また、民博収蔵の北西海岸先住民関連資料の情報についてさらなる精査を行い、フォーラム型情報ミュージアムデータベース「北米北方先住民関連文化資源データベース」の内容の高度化を行う。

本研究は2020年度科学研究費（基盤研究（A））「北米アラスカ・北西海岸地域における先住民文化の生成と現状、未来に関する比較研究」（研究代表者：岸上伸啓）の一部として実施予定である。

・成果

(1)新型コロナウイルス感染症の蔓延のために2020年8月に予定していたカナダのハイダ・グワイでの現地調査を実施することができなかった。このため、ハイダ民族の文化変化に関する新たなデータを現地で収集することができなかった。その代わりにハイダ社会の変化を伝染病の流行による影響という点から検討し、北西海岸地域では欧米人が1860年代にもたらした天然痘が、総人口の60%以上（90%という説もある）の命を奪い、カナダ政府の同化政策の推進と相まって、ハイダ民族の社会と文化、経済の崩壊的变化をもたらし、その復興には100年近い時間がかかったことを解明した。その成果を「カナダ先住民の疫病との戦い——北西海岸地域のハイダと極北地域のイヌイト」（2021年、秋道智彌・角南篤編『疫病と海』pp.61-74, 吹田：西日本出版社）として刊行した。また、2020年6月に民博の前庭に立てられたトーテムポールの制作過程に関する記録を取りまとめた結果、北西海岸先住民文化を象徴するトーテムポールの制作・建立技法において21世紀に入り新たな手法が用いられていることが判明し、文化伝統が創造的に再生産されている側面が明らかになった。その成果は、「国立民族学博物館のビル・ヘンダーソン制作のトーテムポールについて」（2021年、『国立民族学博物館研究報告』45(4)：655-680）において発表した。

(2)フォーラム型情報ミュージアム「北米北方先住民関連文化資源データベース」のハイダ民族とクワクワカワクワ民族に関する文化資源情報を確認し、修正や付加を行い、内容を更新し、同データベースを2020年12月4日に新プレート版で館外公開した。

◎出版物による業績

[編著]

岸上伸啓編

2020 『捕鯨と反捕鯨のあいだに 世界の現場と政治・倫理的問題』京都：臨川書店。[査読有]

Kishigami, N. (ed.)

2021 *World Whaling: Historical and Contemporary Studies* (Senri Ethnological Studies 104). Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

[分担執筆]

岸上伸啓

2020 「世界の捕鯨と捕鯨問題を考える」岸上伸啓編『捕鯨と反捕鯨のあいだに 世界の現場と政治・倫理的問題』pp.11-30, 京都：臨川書店。[査読有]

2020 「ホッキョククジラを守りながら食べる——北極海の先住民捕鯨」秋道智彌・岩崎 望編『絶滅危惧種を喰らう』pp.117-127, 東京：勉誠社。

2021 「カナダ先住民の疫病との戦い——北西海岸地域のハイダと極北地域のイヌイト」秋道智彌・角南篤編『疫病と海』（海とヒトの関係学）pp.61-74, 大阪：西日本出版社。

Kishigami, N.

2021 *World Whaling and Recent Whaling Research Trends*. In N. Kishigami (ed.) *World Whaling: Historical and Contemporary Studies* (Senri Ethnological Studies 104), pp.1-30. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

2021 Food Security, Food Sovereignty, Bowhead Whale Hunts among the Inupiat in Utqiagvik, Alaska, USA. In K. Nobuhiro (ed.) *World Whaling: Historical and Contemporary Studies* (Senri Ethnological Studies 104), pp.93-112. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

[論文]

岸上伸啓

2021 「狩猟採集民社会における食物分配に関する比較——アカ、アチェ、イヌイトの事例を中心に」『人文論究』90：69-88。[査読有]

2021 「国立民族学博物館のビル・ヘンダーソン制作のトーテムポールについて」『国立民族学博物館研究報告』45(4)：655-680。[査読有]

[その他]

岸上伸啓

- 2020 「書評：長谷川瑞穂著『先住・少数民族の言語保持と教育カナダ・イヌイットの現実と未来』『カナダ研究年報』40：46-50。
- 2020 「世界の捕鯨を考える（共同研究 捕鯨と環境倫理（2016-2019年度）Final report）『民博通信 Online』2：16-17。[査読有]
- 2020 「はじめに」『岸上伸啓編『捕鯨と反捕鯨のあいだに 世界の現場と政治・倫理的問題』pp.1-7, 京都：臨川書店。[査読有]
- 2020 「おわりに」『岸上伸啓編『捕鯨と反捕鯨のあいだに 世界の現場と政治・倫理的問題』pp.325-328, 京都：臨川書店。[査読有]
- 2021 「食物の分配・贈与・交換」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.414-417, 東京：丸善出版。
- 2021 「北米先住民の料理」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.620-621, 東京：丸善出版。
- 2021 「食をめぐる文化衝突」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.390-391, 東京：丸善出版。
- 2021 「友の会講演会実施報告 トーテムポール——カナダ北西海岸先住民の宝」『国立民族学博物館友の会ニュース』263：4。
- 2021 「カナダ先住民の疫病との闘い——北西海岸地域のハイダと極北地域のイヌイット」『Ocean Newsletter』491：6-7。
- 2021 「多元・多文化主義と向き合う都市」横浜国立大学都市科学部編『都市科学事典』pp.850-851, 横浜：春風社。
- 2021 「カナダの極北地域——極寒のツンドラ地帯」飯野正子・竹中 豊総監修・日本カナダ学会編『現代カナダを知るための60章（第2版）』pp.36-40, 東京：明石書店。
- 2021 「気候変動とカナダ——地球温暖化の影響」飯野正子・竹中 豊総監修・日本カナダ学会編『現代カナダを知るための60章（第2版）』pp.41-45, 東京：明石書店。
- 2021 「多様なカナダ先住民——新たな先住民社会の生成」飯野正子・竹中 豊総監修・日本カナダ学会編『現代カナダを知るための60章（第2版）』pp.80-84, 東京：明石書店。
- 2021 「カナダ先住民のアート——先住民らしさの表象」飯野正子・竹中 豊総監修・日本カナダ学会編『現代カナダを知るための60章（第2版）』pp.85-89, 東京：明石書店。
- 2021 「カナダの都市先住民——新たな先住民ネットワークと文化の生成」飯野正子・竹中 豊総監修・日本カナダ学会編『現代カナダを知るための60章（第2版）』pp.90-94, 東京：明石書店。
- 2021 「極北の誇り高きハンターたち 最北の捕鯨民 イヌピアットの世界」『時空旅人』61：78-81。
- 2021 「北太平洋先住民社会に関する比較研究構想」『民博通信 Online』3：16-17。
- 2021 「北方研究者としての津曲敏郎先生」呉 人恵・笹倉いる美・山田敦士編『津曲敏郎先生古希記念集』pp.4-5, 網走：北海道立北方民族博物館内津曲敏郎先生古稀記念集編集委員会。

Kishigami, N.

- 2021 A Totem Pole of Northwest Coast People in Canada. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 51: 1-3.
- 2021 Preface. In N. Kishigami (ed.) *World Whaling: Historical and Contemporary Studies* (Senri Ethnological Studies 104), pp.i-iv. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2020年5月31日 「『食料の主権』からみたアラスカ先住民社会における生業活動の重要性——イヌピアットの捕鯨を事例として」日本文化人類学会第54回研究大会、早稲田大学、オンライン開催
- 2020年10月31日 「北アメリカ北西海岸先住民と生き物の不思議な関係——ワタリガラスを中心に」生き物文化誌学会第79回例会、国立民族学博物館第5セミナー室

・研究講演

2020年10月3日 「トーテムポール カナダ北西海岸先住民の宝」第505回国立民族学博物館友の会講演会、国立民族学博物館

・展示

2020年10月1日～12月15日 「先住民の宝の北西海岸先住民（カナダ）コーナー」国立民族学博物館

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「北米アラスカ・北西海岸地域における先住民文化の生成と現状、未来に関する比較研究」研究代表者

◎社会活動・館外活動

- ・他の機関から委嘱された委員など

International Arctic Science Committee（国際北極科学委員会）Social and Human Working Group member（Japanese representative）社会・人間作業部会・日本代表、総合研究大学院大学博士論文審査委員、北極域研究加速プロジェクト（Arctic Challenge for Sustainability II）ArCSII 海外交流研究力強化プログラム審査委員、日本文化人類学会第29期代議員・監事、日本カナダ学会日本カナダ学会副会長、日本文化人類学会日本文化人類学会第28期評議員、Journal of Anthropological Research Editorial Board Associate Editor、北極環境研究コンソーシアム（JCAR）第4期・第5期運営委員、北海道大学北極域研究センター北極域研究共同推進拠点運営委員会委員、日本カナダ学会理事、民族芸術学会理事

笹原亮二 [ささはら りょうじ] ————— 教授

1959年生。【学歴】早稲田大学第一文学部卒（1982）、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士後期課程退学（1995）、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士前期課程修了（1995）【職歴】国立民族学博物館第一研究部助手（1996）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（2001）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2011）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授（2017）【学位】博士（歴史民俗資料学）（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 2001）、修士（歴史民俗資料学）（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 1995）【専攻・専門】民俗学、民俗芸能研究 日本の獅子舞の民俗学的研究、日本の民俗芸能の近代～現代における伝承の研究、民俗学における資料論【所属学会】日本民俗学会、民俗芸能学会、芸能史研究会

【主要業績】

[単著]

笹原亮二

2003 『三匹獅子舞の研究』京都：思文閣出版。

[編著]

笹原亮二編

2009 『口頭伝承と文字文化——文字の民俗学 声の歴史学』京都：思文閣出版。

[論文]

笹原亮二

2005 「用と美——柳田国男の民俗学と柳宗悦の民藝を巡って」熊倉功夫・吉田憲司編『柳宗悦と民藝運動』pp.273-294, 京都：思文閣出版。

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

- ・研究課題

鳥の祭や芸能の多様性の形成と鳥の歴史——奄美の島々を中心に

- ・研究の目的、内容

九州と沖縄のあいだに位置する奄美の島々には、奄美大島の豊年祭や八月踊、喜界島の島遊びや八月踊、徳之島の浜下りや節目踊、沖永良部島のグムチ（貢物）踊や獅子舞、与論島の十五夜踊など、様々な芸能や祭が伝

わり行われてきた。それらの芸能や祭には、豊年祭系統の祭など、奄美の島々全域で見られるもの、奄美大島や徳之島で見られる八月踊系統の踊や奄美大島や沖永良部島や与論島で見られる仮面芸能など、複数の島で見られるもの、徳之島の田植え歌や沖永良部島のグムチ踊など、1つの島のみで見られるものなどがあり、分布の様相は芸能や祭によって様々である。また、同系統の芸能であっても、島によって歌の音階や楽器の演奏法や形式などに違いがみられたりして、その様相は一様ではない。こうした島々の共通性や独自性が交錯し、多様性が認められる芸能や祭の様相は、この地域の島々が、九州と沖縄のあいだにあって、古来双方から様々な影響を受けてきたこととおそらく無関係ではない。更に、奄美大島の八月踊や徳之島の折目の祭の芸能など、1つの島に多数分布する芸能や祭にも集落や地域ごとに様々な違いがみられて、それをあわせて考えると、この地域の島々の芸能や祭は一層多様性に富んだ様相を呈してくる。

本研究では特に、これまで芸能や祭の現地調査や映像取材を行い、映像や文献などの多くの資料を収集し、映像番組やマルチメディア番組を作成してきた徳之島を初め奄美の島々について、島という環境における芸能や祭の多様性に富む実態とともに、そうした多様性の形成と島の歴史の関係を検討する。あわせて、これらの島々で収集した祭と芸能に関する映像などの資料の効果的な活用の可能性を探る。

・成果

本研究では、徳之島を初めとした奄美の島々における芸能や祭の種類や分布や多様性などについて、報告や論文などの文献、写真や映像や現地の人々へのインタビューなど、従来の現地調査や映像取材で収集した各種資料に基づき検討した。

その結果、この地域の島々の民俗文化に関しては、奄美大島とトカラ列島のあいだを境界線として、そこから北が九州以北の日本列島各地に繋がるヤマト文化圏、南が沖縄島以南の旧琉球国域に繋がる琉球文化圏に区分する二元的な構造の存在が従来から指摘されてきたが、各地の島々の芸能や祭の実態をみると、そうした二元的な構造のみでは理解として十分ではないことが明らかになった。

例えば、この地域の島々のシマウタは、蛇皮を張った三味線を伴奏に歌われる点は共通するが、三味線を竹の撥で弾いて律音階で歌う奄美大島・喜界島・徳之島に対し、水牛の角の撥で弾いて琉球音階で歌う沖永良部島・与論島に分かれ、境界線は徳之島と沖永良部島のあいだとなる。季節の折目などに踊手が歌い、太鼓を叩きながら踊る八月踊系統の踊は、奄美大島・喜界島・徳之島が盛んで沖永良部島でもわずかにみられ、境界線はトカラ列島と奄美大島のあいだと沖永良部島と与論島のあいだの2カ所となる。八月踊系統の踊やシマウタなどで用いられる太鼓は、胴に当てた皮に直接紐を通し、胴の周囲に一列に配した楔を叩いて締める奄美独特の楔締め太鼓が、奄美大島・喜界島・徳之島・沖永良部島・与論島で見られるが、喜界島では楔締め太鼓の使用は近年の傾向で、もともとは皮を張った鉄枠に紐を通して締める太鼓が用いられていた。従って、境界線はトカラ列島・喜界島と奄美大島のあいだと与論島と沖縄島のあいだの2カ所となる。獅子舞は、沖永良部島と与論島では植物の繊維で全身が覆われた沖縄島以南と共通する形式のものがみられるが、徳之島以北から九州南部にかけてはみられず、境界線は徳之島と沖永良部島のあいだとなる。また、田植えの際に男女掛け合いで歌われる徳之島の田植え歌、「ヤマト由来」の狂言踊と「琉球由来」の踊が交互に演じられる与論島の十五夜踊など、それぞれの島のみで見られる芸能もあり、その場合の境界線はそれぞれの島のあいだとなる。このように、芸能の実態に基づき設定される境界線は芸能によって様々で、錯綜していることがわかる。更に、綱引きや様々な芸能が行われる豊年祭、餅貫いなどの水田に関わる行事、独特の祝歌や芸能が行われる正月行事など、様々な祭や行事の島々における実態もあわせて考えると、境界線は一層錯綜してくる。

こうした奄美の島々における民俗文化の錯綜した多数の境界線の存在に関しては、いずれか1つを妥当な境界線として選択する、あるいは1つの境界線に理念的にまとめ上げることは妥当性を欠く。それは、その境界線で区切られた2つの領域が、古来不変なままで実際に存在してきた実態として理解されかねないからである。それは、そうした非歴史的な理解ではなくて、多数の境界線が錯綜した状況をそのまま把握し、九州と沖縄のあいだにあって、古来日本と沖縄の政治的権威や権力や経済力などの様々な影響の下、多様な人々や物資や情報が往来する一方で、四囲を海で囲まれたことで孤立や自律性が醸成された中で展開してきた、この地域の島々の歴史と深く関わりつつ形成された歴史的な現象として理解が試みられるべきであろう。それによって、この地域の島々の民俗文化を、不断の変化や新たな形態の生成が常態化した歴史的な過程として、より実態に即した動的なかたちで把握することが可能になると思われる。

本研究の成果を基に、徳之島とほかの奄美の島々の芸能や祭を巡る境界線の錯綜を提示するコンテンツ「徳之島と周辺地域の歌と踊りと祭り」、徳之島の芸能と祭の特徴を提示する映像番組「徳之島の歌と踊りと祭り」、徳之島独特の田植踊について、島内前野集落における復活の経緯や現況を紹介した映像番組「前野と田植え歌」を作成し、島内各地の芸能や祭の映像などを集めたマルチメディア番組「徳之島の歌と踊りと祭り」に組み

込んで、同番組の充実を図った。同番組は2021年度に民博や徳之島において公開を期している。

◎出版物による業績

[論文]

笹原亮二

2020 「演じる見物の諸相——芸能と祭における見物と演者をめぐって」丹羽典生編『応援の人類学』pp.272-296, 東京：青弓社。[査読有]

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

[マルチメディア番組]

笹原亮二・福岡正太 監修

2021 『徳之島の歌と踊りと祭り』（日本語）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「島嶼社会における芸能伝承の課題——対話と発見の場としての映像を活用したアプローチ」（研究代表者：福岡正太）研究分担者

山中由里子 [やまなか ゆりこ] ————— 教授

1966年生。【学歴】カラマズー大学フランス語美術専攻卒（1988）、東京大学大学院総合文化研究科修士課程修了（1991）、東京大学大学院総合文化研究科博士課程退学（1993）【職歴】東京大学東洋文化研究所助手（1993）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（2004）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2009）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター准教授（2017）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授（2019）【学位】学術博士（東京大学 2007）、学術修士（東京大学 1991）【専攻・専門】比較文学比較文化 西アジアにおけるアレクサンドロス伝説の比較文学的研究、「驚異」の文化史【所属学会】日本比較文学会、日本中東学会、日本オリエント学会、日本比較文明学会、国際比較文学会、International Society for Iranian Studies

【主要業績】

[単著]

山中由里子

2009 『アレクサンドロス変相——古代から中世イスラームへ』名古屋：名古屋大学出版会。[査読有]

[編著]

山中由里子・山田仁史編

2019 『この世のキワ——〈自然〉の内と外』東京：勉誠出版。

山中由里子編

2015 『〈驚異〉の文化史——中東とヨーロッパを中心に』名古屋：名古屋大学出版会。

【受賞歴】

2020 第61回全国カタログ展図録部門金賞（一般社団法人日本印刷産業連合会・フジサンケイビジネスアイ）

2020 第61回全国カタログ展図録部門経済産業省商務情報政策局長賞（一般社団法人日本印刷産業連合会・フジサンケイビジネスアイ）

2011 第7回日本学士院学術奨励賞

2011 第7回日本学術振興会賞

2010 第15回日本比較文学会賞

2010 鳥田謹二記念学藝賞

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

驚異と怪異の比較文明論——想像界と自然界の相関

・研究の目的、内容

本研究ではこれまで、常識や慣習から逸脱した「異」なるもの（異境・異界・異人・異類・異音）をめぐる人間の心理と想像力の働きを「驚異」と「怪異」をキーワードに、比較文明論的な視点から考察してきた。自然界のどのような現象が「驚異」や「怪異」として認識され、どのような言説や視覚表象物が現れたのか、その背景にはどのような自然観があるのか、知識体系に接点はあるのかといった点に注目し、ユーラシアにおける人間と自然の相関関係の歴史の変遷を多元的視点から究明するとともに、生態系と人間の想像力と表象物の相関関係を、より広い人類史的な視点からも検証する。

・成果

当初の予定から開幕が延期されたが、2020年6月23日—8月16日に巡回展「驚異と怪異——モンスターたちは告げる」が兵庫県立歴史博物館にて無事開催され、アマビエ資料の展示などが一般来館者の関心を集め、メディアでも多く取り上げられた。

2020年11月開催予定の国際研究集会「東西中世を解き放つ——『中世における文化交流』から中世学の未来へ」において、中世一神教世界におけるマンドラゴラの視覚的表象についてフランスの研究者と共同発表を行う予定であったが、海外からの研究者の来日がかなわず開催が中止になった。代わりに成果をフランス語の共著として出版する研究打ち合わせをオンラインで行った。日本中世英語英文学会第36回全国大会の枠組みにおいて12月に開かれた企画シンポジウム「ユダヤ・イスラーム・ヨーロッパ文化圏における巨人族表象の変遷」において、「中世イスラーム世界における巨人像——ペルシア・アラビア語博物誌に見るアードの民」を発表した（発表者のみ対面で集まり収録した内容を配信）。ドイツ、マールブルク大学宗教学博物館主催のオンラインコロキウム（12月4日）において、“The Museum as a Re-enchanted Forest?: Magical Thinking in Museum Space”を発表した。新学術領域「パレオアジア文化史学」全国大会（12月18日～20日）において、「想像界の生物多様性と境界性」を発表した。第1回人文知応援大会（2021年2月27日オンライン配信）において「自然界と想像界のあわいに漂うもの」を発表した。

そのほか、驚異・怪異研究の国際展開の準備のための英訳作業を進めた。中東の想像界に関する一般向け新書の執筆を進めた。

本研究は、科学研究費（基盤研究（A））「超常認識と自然観をめぐる比較心性史の構築」（研究代表者：山中由里子）の補助金、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」（研究代表者：野林厚志）および科学研究費（基盤研究（C））「ヨーロッパ中世における博物学的知識の伝承——中東および古代・近世との関わり」（研究代表者：大沼由布）と関連付けて実施した。

◎出版物による業績

[分担執筆]

山中由里子

2020 「アレクサンドロス3世（大王）」鈴木 薫・近藤二郎・赤堀雅幸編『中東・オリエント文化事典』p.68, 東京：丸善出版。

2020 「驚異譚（アジャーイブ）と想像界」鈴木 薫・近藤二郎・赤堀雅幸編『中東・オリエント文化事典』pp.416-417, 東京：丸善出版。

2021 「人はなぜモンスターを想像するのか？——疫病と幻獣」野林厚志編『パレオアジア文化史学 計画研究 B01班2020年度 研究報告——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究』（PaleoAsiaProject Series 35）pp.25-29, 東京：文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016-2020年度計画研究 B01班（研究課題番号16H06411）。

[論文]

山中由里子

2020 「マンドレイクの採取法——ヨーロッパ・中東・中国における知識の往還」『東西中世のさまざまな地平——フランスと日本の交差するまなざし』pp.157-188, 東京：知泉書館。

[その他]

山中由里子

2020 「特別展『驚異と怪異——想像界の生きものたち』関連公開座談会 自然界から想像／創造する」『季刊民族学』172：84-103。

2020 「ドイツの温泉事情——なぜわたしがバーデン・バーデンに行ったことがないか」特集「世界温泉めぐり」『月刊みんぱく』44(11)：8-9。

2020 「特別展『驚異と怪異——想像界の生きものたち』企画奮闘記」『比較文学研究』106：179-183。

2021 「見上げてごらん—みんぱくで星を巡る」『月刊みんぱく』45(2)：16-17。

Yamanaka, Y.

2020 REGNUM IMAGINARIUM: Realm of the Marvelous and Uncanny. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 50: 11.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年11月23日 「中世イスラーム世界における巨人像——ペルシア・アラビア語博物誌に見るアードの民」(日本中世英語英文学会第36回全国大会企画シンポジウム『ユダヤ・イスラーム・ヨーロッパ文化圏における巨人族表象の変遷』同志社大学、オンライン開催)

2020年12月4日 The 'Museum as a Re-enchanted Forest?: Magical Thinking in Museum Space.' REDIM (Dynamiken religiöser Dinge im Museum) Online Colloquium, オンライン開催

2020年12月20日 「想像界の生物多様性と境界性」パレオアジア文化史学第10回研究大会、オンライン開催

2021年2月27日 「自然界と想像界のあわいに漂うもの」第1回人文知応援大会、オンライン開催

・展示

2020年6月23日～8月16日 「驚異と怪異——モンスターたちは告げる」兵庫県立歴史博物館

・広報・社会連携活動

2021年2月13日 「常ならざる音——耳を通して異界とつながる」みんぱく映像民族誌シアター、国立民族学博物館、シアターセブン、オンライン開催

・その他(「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの)

2020年11月16日 「過去から紡ぎだす未来(ユーディット・シャランスキーによる朗読とトーク)」ゲーテ・インスティトゥート東京、オンライン配信

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費(新学術領域研究(研究領域提案型))「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」(研究代表者:野林厚志)研究分担者、科学研究費(基盤研究(C))「ヨーロッパ中世における博物学的知識の伝承——中東及び古代・近世との関わり」(研究代表者:大沼由布(同志社大学))研究分担者、科学研究費(基盤研究(B))「日本文化の対話的発展の比較文学的研究——世界のポップ・テキストをめぐって」(研究代表者:平石典子(筑波大学))研究分担者、科学研究費(基盤研究(A))「超常認識と自然観をめぐる比較心性史の構築」研究代表者、科学研究費(基盤研究(B))「ペルシア語歴史物語の生成、伝播、受容に関する学際的研究」(研究代表者:近藤信彰)研究分担者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「国立民族学博物館現代中東地域研究拠点」(拠点代表者:西尾哲夫)拠点構成員

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

日本学術振興会特別研究員等審査会専門委員、卓越研究員候補者選考委員会書面審査員及び国際事業委員会書面審査員・書面評価員、REDIM "Dynamiken religiöser Dinge im Museum" Advisory Board、Interlitteraria University of Tartu Press Academic Advisory Board

伊藤敦規 [いとう あつのり]——— 准教授

1976年生。【学歴】東京都立大学人文学部卒(2000)、東京都立大学大学院社会科学部研究科社会人類学修士課程修了(2003)、東京都立大学大学院社会科学部研究科博士課程単位取得退学(2009)【職歴】国立民族学博物館特別共同利用研究員(2007)、三重大学人文学部非常勤講師(2008)、北海道大学アイヌ・先住民研究センター研究員(2008)、

Visiting Researcher of the A:shiwí A:wán Museum and Heritage Center (2009)、立教大学兼任講師 (2009)、日本学術振興会特別研究員 PD (2009)、国立民族学博物館外来研究員 (2009)、三重大学人文学部非常勤講師 (2010)、東北大学東北アジア研究センター共同研究員 (2010)、北海道大学アイヌ・先住民研究センター客員研究員 (2010)、国立民族学博物館平成22年度文化資源プロジェクト共同研究員 (2010)、国立民族学博物館若手共同研究員 (2010)、国立民族学博物館文化資源研究センター助教 (2011)、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員 (2012)、国立民族学博物館研究戦略センター助教 (2012)、Research Associate of the Museum of Northern Arizona Research Associate (2015)、国立民族学博物館研究戦略センター准教授 (2016)、総合研究大学院大学文化科学研究科准教授 (2016)、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授 (2016)、国立民族学博物館学術資源研究開発センター准教授 (2017)、東北大学大学院文学研究科非常勤講師 (2019) 【学位】 博士 (社会人類学) (東京都立大学 2011)、修士 (社会人類学) (東京都立大学 2003) 【専攻・専門】 社会人類学・米国先住民研究、先住民の知的財産権問題、博物館人類学 【所属学会】 日本文化人類学会、東京都立大学社会人類学会、民族藝術学会、西洋史学会、アメリカ学会、日本知財学会、American Anthropological Association、デジタルアーカイブ学会

【主要業績】

[編著]

伊藤敦規、キャシー・ドーハーティ、ケレイ・ハイズ＝ギルピン編

2020 『北アリゾナ博物館収蔵446点の「ホピ製」銀細工および関連資料熟覧——ソースコミュニティと博物館資料との「再会」4』(国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム資料集4) 大阪：国立民族学博物館。[査読有]

Ito, A., C. Lomahaftewa, and C. Colwell (eds.)

2021 *Collections Review on 38 Silverworks Labeled “Hopi” in the Denver Museum of Nature & Science: Reconnecting Source Communities with Museum Collections 5* (Info-Forum Museum Resources 5). Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

[論文]

Hays-Gilpin, K., A. Ito, and R. Breunig

2020 Decolonizing Museum Catalogs: Defining and Exploring the Problem (Special Theme: An Approach of the Info-Forum Museum: To Create a Source Community-driven Multivocal Museum Catalog). *TRAJECTORIA* 1. Osaka: National Museum of Ethnology.

【受賞歴】

2020 地域研究コンソーシアム賞 (研究企画賞部門) (地域研究コンソーシアム (JCAS))

2019 デジタルアーカイブ学会優秀学会発表賞 (デジタルアーカイブ学会)

【2020年度の活動報告】

◎各研究

・研究課題

日本国内博物館等所蔵アメリカ先住民資料の協働管理に向けた調査研究

・研究の目的、内容

本研究は五年計画 (2016～2020年度) で実施する。その目的は、第一に日本国内の博物館等が所蔵するアメリカ先住民資料の来歴、情報管理、保存状況を総合的に把握することである。第二の目的は日本国内での調査結果をソースコミュニティと共有し、将来的な管理に向けた要望等を聞き取り調査することである。第三の目的は、先住民コミュニティから寄せられる声を博物館等と共有することによって、今後の資料管理に反映される協働の制度的な枠組みを整理・検討することである。なお、調査対象機関を、松永はきもの資料館 (広島)、柏木博物館 (長野)、豊島みみずく資料館 (東京)、猪熊源一郎現代美術館 (香川)、野外民族博物館リトルワールド (愛知)、天理大学附属天理参考館 (奈良)、国立民族学博物館 (大阪) などとする。また、資料調査対象とする民族集団はホピを中心とする。

五年度となる2020年度の計画の概要は以下である。

引き続き日本国内での博物館調査研究を進める。現在リニューアルオープンに向けて休館中の柏木博物館 (長野県) の受入体制が整い次第、収蔵資料の撮影を行う。成果出版に関しては、これまでに実施してきた資料熟覧の記録をまとめ、国立民族学博物館の刊行物としての成果公開を継続して行うとともに、ソースコミュニティ

との共有を図る。

・成果

五年計画で行ってきた本研究は本年度で最終年を迎えた。第一の目的であったアメリカ先住民資料の来歴、情報管理、保存状況は、当初想定していた松永はきもの資料館（広島）、野外民族博物館リトルワールド（愛知）、天理大学附属天理参考館（奈良）、国立民族学博物館（大阪）に加え、米国と英国の複数の機関に関しても、収蔵している「ホピ製」資料の一部についての情報を把握することができた。第二の目的であったソースコミュニティの人々との博物館資料情報の共有は、収蔵機関での触察や、保留地での画像データを用いたデジタル熟覧という形式で行った。また、ソースコミュニティの人々による熟覧の記録を整え、紙媒体およびデジタル映像として共有を図った。第三の目的であったソースコミュニティの人々からの要望を収蔵機関にフィードバックすることに関しては、例えば国立民族学博物館ではカルチュラルセンシティビティに該当すると指摘された資料について収蔵庫で他の資料と別置したり、デジタル映像アーカイブで当該資料の画像や熟覧時の映像や発言の一部を非公開にするなどの措置を講じた。また、著作物とみなされうる資料に関しては、知的財産権問題を専門とする複数の弁護士の見解を反映させながら機関内の関係部署等に適法な扱いをするよう継続的に働きかけることで、従来の資料公開等のやり方に再考をせまり、特に著作物としての民族誌資料を公衆送信する際の民博の新たな制度設計にあたって部分的に貢献した。

共編著（フォーラム型情報ミュージアム資料集5）を刊行した。民博本館展示場（アメリカ展示場「創る」、および、多機能端末室）では昨年度末に成果公開を果たしたものの、新型コロナウイルス感染症対策として休館・入室禁止が継続していたため、入館制限が解除された本年度になって初めてそれらを一般公開した。その結果も含め、2020年度の地域研究コンソーシアム賞（研究企画賞部門）を受賞した。ソースコミュニティの人々との共有に関しては、2020年4月から2021年3月末現在まで、日本郵便は米国本土宛のEMS発送サービスを止めている。今後のサービスの再開の見通しも立たないため、一部は運送期間6ヶ月ほどの船便で発送した。リニューアルオープンに向けて休館中の柏木博物館（長野県）の受入体制は本年度中に整わなかったため、収蔵資料の撮影は行えなかった。野外民族博物館リトルワールド（愛知）での補足調査も新型コロナウイルス感染症対策のため実施せず、次年度に延期することにした。

◎出版物による業績

[編著]

Ito, A., C. Lomahaftewa, and C. Colwell (eds.)

2021 *Collections Review on 38 Silverworks Labeled "Hopi" in the Denver Museum of Nature & Science: Reconnecting Source Communities with Museum Collections 5* (Info-Forum Museum Resources 5). Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

[論文]

伊藤敦規

2021 本著の概要（ソースコミュニティと博物館資料との「再会」5）。In A. Ito, C. Lomahaftewa, and C. Colwell (eds.) *Collections Review on 38 Silverworks Labeled "Hopi" in the Denver Museum of Nature & Science: Reconnecting Source Communities with Museum Collections 5* (Info-Forum Museum Resources 5), pp. 9-13. Osaka: National Museum of Ethnology.

Clifford, J., A. Ito, R. Saito, K. Yoshida, I. Hayashi, and T. Iida

2020 International Symposium 'Future of the Museum: An Anthropological Perspective'. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 45(1): 115-176. [査読有]

Ito, A.

2021 Brief Overview of this Volume (Reconnecting Source Communities with Museum Collections 5). In A. Ito, C. Lomahaftewa, and C. Colwell (eds.) *Collections Review on 38 Silverworks Labeled "Hopi" in the Denver Museum of Nature & Science: Reconnecting Source Communities with Museum Collections 5* (Info-Forum Museum Resources 5), pp.1-7. Osaka: National Museum of Ethnology.

[その他]

伊藤敦規

2020 「オンライン展示の条件」『月刊みんぱく』44(5)：16-17。

◎映像音響メディアによる業績

・その他、映像メディアによる業績（論文型映像を含む）

Ito, A. (Supervision)

- 2021 “#001 Museum of Northern Arizona, E11625, 2015/7/21.” (英語・日本語、15:19) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=601>).
- 2021 “#002 Museum of Northern Arizona, E11071, 2015/7/21.” (英語・日本語、09:39) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=602>).
- 2021 “#003 Museum of Northern Arizona, E11294, 2015/7/21.” (英語・日本語、08:59) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=603>).
- 2021 “#004 Museum of Northern Arizona, E11284, 2015/7/21.” (英語・日本語、14:20) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=604>).
- 2021 “#005 Museum of Northern Arizona, E11367, 2015/7/21.” (英語・日本語、13:05) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=605>).
- 2021 “#006 Museum of Northern Arizona, E10385, 2015/7/21.” (英語・日本語、16:06) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=606>).
- 2021 “#007 Museum of Northern Arizona, E11373, 2015/7/21.” (英語・日本語、11:32) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=607>).
- 2021 “#008 Museum of Northern Arizona, E5956, 2015/7/21.” (英語・日本語、16:20) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=608>).
- 2021 “#009 Museum of Northern Arizona, E3348, 2015/7/21.” (英語・日本語、13:21) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=609>).
- 2021 “#010 Museum of Northern Arizona, E1388, 2015/7/21.” (英語・日本語、17:50) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=610>).
- 2021 “#011 Museum of Northern Arizona, E1383, 2015/7/21.” (英語・日本語、12:07) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=611>).
- 2021 “#012 Museum of Northern Arizona, E11301, E11302, E11303, E11304A-B 2015/7/21.” (英語・日本語、17:02) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=612>).
- 2021 “#013 Museum of Northern Arizona, E9866 2015/7/21.” (英語・日本語、12:48) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=616>).
- 2021 “#014 Museum of Northern Arizona, E10157 2015/7/21.” (英語・日本語、14:27) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=617>).
- 2021 “#015 Museum of Northern Arizona, E9867 2015/7/22.” (英語・日本語、10:30) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=618>).
- 2021 “#016 Museum of Northern Arizona, E5111 2015/7/22.” (英語・日本語、12:12) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」

- (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=619>).
- 2021 “#017 Museum of Northern Arizona, E11380 2015/7/22.” (英語・日本語、16:15) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=620>).
- 2021 “#018 Museum of Northern Arizona, Silversmith kit (75 pieces) E5794, E5796, E5797, E5798, E5799, E5800, E5801, E5802, E5803, E5804, E5805, E5806, E5807, E5808, E5809, E5810, E5811, E5812, E5813, E5814, E5815, E5816, E5817, E5818, E5819, E5820, E5821, E5822, E5823, E5824, E5825, E5826, E5827, E5828, E5829, E5830, E5831, E5832, E5833, E5834, E5835a-c, E5836A-C, E5837 A-dd. 2015/7/22.” (英語・日本語、14:54) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=621>).
- 2021 “#019 Museum of Northern Arizona, E5109 2015/7/22.” (英語・日本語、09:25) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=664>).
- 2021 “#020 Museum of Northern Arizona, E2959 2015/7/22.” (英語・日本語、14:48) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=665>).
- 2021 “#021 Museum of Northern Arizona, E1490 2015/7/22.” (英語・日本語、11:15) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=666>).
- 2021 “#022 Museum of Northern Arizona, E11366 2015/7/22.” (英語・日本語、15:34) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=667>).
- 2021 “#023 Museum of Northern Arizona, E3482 2015/7/22.” (英語・日本語、10:54) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=668>).
- 2021 “#024 Museum of Northern Arizona, E1514 2015/7/22.” (英語・日本語、12:23) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=669>).
- 2021 “#025 Museum of Northern Arizona, E5101 2015/7/22.” (英語・日本語、10:42) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=670>).
- 2021 “#026 Museum of Northern Arizona, E5372 2015/7/22.” (英語・日本語、09:43) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=671>).
- 2021 “#027 Museum of Northern Arizona, E11359 2015/7/22.” (英語・日本語、14:13) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=672>).
- 2021 “#028 Museum of Northern Arizona, E8041 2015/7/22.” (英語・日本語、14:44) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=673>).
- 2021 “#029 Museum of Northern Arizona, E6010 2015/7/22.” (英語・日本語、08:08) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=674>).
- 2021 “#030 Museum of Northern Arizona, E3346 2015/7/22.” (英語・日本語、08:25) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=675>).
- 2021 “#031 Museum of Northern Arizona, E11277, 2015/7/22.” (英語・日本語、14:47) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=676>).

- 2021 “#032 Museum of Northern Arizona, E5960, 2015/7/22.” (英語・日本語、09:05) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=677>).
- 2021 “#033 Museum of Northern Arizona, E11060, 2015/7/22.” (英語・日本語、14:04) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=678>).
- 2021 “#034 Museum of Northern Arizona, E8999A-B, 2015/7/22.” (英語・日本語、09:26) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=679>).
- 2021 “#035 Museum of Northern Arizona, E11624, 2015/7/22.” (英語・日本語、10:28) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=680>).
- 2021 “#036 Museum of Northern Arizona, E3469, 2015/7/22.” (英語・日本語、12:52) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=681>).
- 2021 “#037 Museum of Northern Arizona, E11330, 2015/7/22.” (英語・日本語、28:46) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=682>).
- 2021 “#038 Museum of Northern Arizona, E960, 2015/7/23.” (英語・日本語、04:05) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=683>).
- 2021 “#039 Museum of Northern Arizona, E1398, 2015/7/23.” (英語・日本語、03:47) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=684>).
- 2021 “#040 Museum of Northern Arizona, E2213, 2015/7/23.” (英語・日本語、04:30) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=685>).
- 2021 “#041 Museum of Northern Arizona, E2955, 2015/7/23.” (英語・日本語、04:06) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=686>).
- 2021 “#042 Museum of Northern Arizona, E2956, 2015/7/23.” (英語・日本語、03:09) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=687>).
- 2021 “#043 Museum of Northern Arizona, E2957, 2015/7/23.” (英語・日本語、06:11) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=688>).
- 2021 “#044 Museum of Northern Arizona, E3062, 2015/7/23.” (英語・日本語、02:23) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=689>).
- 2021 “#045 Museum of Northern Arizona, E3063, 2015/7/23.” (英語・日本語、03:51) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=690>).
- 2021 “#046 Museum of Northern Arizona, E3064, 2015/7/23.” (英語・日本語、05:44) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=691>).
- 2021 “#047 Museum of Northern Arizona, E3553, 2015/7/23.” (英語・日本語、04:38) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=692>).
- 2021 “#048 Museum of Northern Arizona, E5441, 2015/7/23.” (英語・日本語、03:54) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」

- (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=693>).
- 2021 “#049 Museum of Northern Arizona, E5766, 2015/7/23.” (英語・日本語, 04:36) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=694>).
- 2021 “#050 Museum of Northern Arizona, E5771, 2015/7/23.” (英語・日本語, 07:48) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=695>).
- 2021 “#051 Museum of Northern Arizona, E5958, 2015/7/23.” (英語・日本語, 04:13) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=696>).
- 2021 “#052 Museum of Northern Arizona, E6122, 2015/7/23.” (英語・日本語, 05:09) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=697>).
- 2021 “#053 Museum of Northern Arizona, E6403, 2015/7/23.” (英語・日本語, 06:09) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=698>).
- 2021 “#054 Museum of Northern Arizona, E7197, 2015/7/23.” (英語・日本語, 05:05) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=699>).
- 2021 “#055 Museum of Northern Arizona, E7386, 2015/7/23.” (英語・日本語, 04:35) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=700>).
- 2021 “#056 Museum of Northern Arizona, E8426, 2015/7/23.” (英語・日本語, 02:30) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=701>).
- 2021 “#057 Museum of Northern Arizona, E9880, 2015/7/23.” (英語・日本語, 05:19) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=702>).
- 2021 “#058 Museum of Northern Arizona, E10250A-C, 2015/7/23.” (英語・日本語, 06:51) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=703>).
- 2021 “#059 Museum of Northern Arizona, E10251, 2015/7/23.” (英語・日本語, 04:28) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=706>).
- 2021 “#060 Museum of Northern Arizona, E10265, 2015/7/23.” (英語・日本語, 07:37) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=707>).
- 2021 “#061 Museum of Northern Arizona, E10276, 2015/7/23.” (英語・日本語, 04:56) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=708>).
- 2021 “#062 Museum of Northern Arizona, E10280, 2015/7/23.” (英語・日本語, 02:34) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=709>).
- 2021 “#063 Museum of Northern Arizona, E10393, 2015/7/23.” (英語・日本語, 04:34) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=710>).
- 2021 “#064 Museum of Northern Arizona, E10433, 2015/7/23.” (英語・日本語, 05:42) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=711>).
- 2021 “#065 Museum of Northern Arizona, E11058, 2015/7/23.” (英語・日本語, 03:49) RECONNECT-

- ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=712>).
- 2021 “#066 Museum of Northern Arizona, E5770, 2015/7/23.” (英語・日本語, 05:53) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=713>).
- 2021 “#067 Museum of Northern Arizona, E1513, 2015/7/23.” (英語・日本語, 03:59) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=714>).
- 2021 “#068 Museum of Northern Arizona, E11059, 2015/7/23.” (英語・日本語, 03:39) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=715>).
- 2021 “#069 Museum of Northern Arizona, E11326, 2015/7/23.” (英語・日本語, 08:12) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=716>).
- 2021 “#070 Museum of Northern Arizona, E11310, 2015/7/23.” (英語・日本語, 05:39) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=717>).
- 2021 “#071 Museum of Northern Arizona, E11320A-B, 2015/7/23.” (英語・日本語, 04:33) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=718>).
- 2021 “#072 Museum of Northern Arizona, E11289, 2015/7/23.” (英語・日本語, 07:02) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=719>).
- 2021 “#073 Museum of Northern Arizona, E11323A-B, 2015/7/23.” (英語・日本語, 07:27) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=720>).
- 2021 “#074 Museum of Northern Arizona, E11305, 2015/7/23.” (英語・日本語, 05:26) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=721>).
- 2021 “#075 Museum of Northern Arizona, E11279, 2015/7/23.” (英語・日本語, 03:18) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=722>).
- 2021 “#076 Museum of Northern Arizona, E8230A-B, 2015/7/23.” (英語・日本語, 04:16) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=723>).
- 2021 “#077 Museum of Northern Arizona, E11061, 2015/7/23.” (英語・日本語, 04:11) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=724>).
- 2021 “#078 Museum of Northern Arizona, E6402, 2015/7/23.” (英語・日本語, 07:21) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=725>).
- 2021 “#079 Museum of Northern Arizona, E8620, 2015/7/23.” (英語・日本語, 04:43) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=726>).
- 2021 “#080 Museum of Northern Arizona, E2961, 2015/7/23.” (英語・日本語, 03:52) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=727>).
- 2021 “#081 Museum of Northern Arizona, E11293, 2015/7/23.” (英語・日本語, 03:55) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=728>).

- 2021 “#082 Museum of Northern Arizona, E6124, 2015/7/23.” (英語・日本語, 04:59) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=729>).
- 2021 “#083 Museum of Northern Arizona, E9850, 2015/7/23.” (英語・日本語, 05:51) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=730>).
- 2021 “#084 Museum of Northern Arizona, E11063, 2015/7/23.” (英語・日本語, 03:19) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=731>).
- 2021 “#085 Museum of Northern Arizona, E11057, 2015/7/23.” (英語・日本語, 03:20) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=732>).
- 2021 “#086 Museum of Northern Arizona, E11319, 2015/7/23.” (英語・日本語, 04:19) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=733>).
- 2021 “#087 Museum of Northern Arizona, E11321A-B, 2015/7/23.” (英語・日本語, 04:20) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=734>).
- 2021 “#088 Museum of Northern Arizona, E11338, 2015/7/23.” (英語・日本語, 04:23) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=735>).
- 2021 “#089 Museum of Northern Arizona, E11379, 2015/7/23.” (英語・日本語, 04:09) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=736>).
- 2021 “#090 Museum of Northern Arizona, E11053, 2015/7/23.” (英語・日本語, 04:59) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=737>).
- 2021 “#091 Museum of Northern Arizona, E11288, 2015/7/23.” (英語・日本語, 03:52) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=738>).
- 2021 “#092 Museum of Northern Arizona, E6390, 2015/7/23.” (英語・日本語, 03:45) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=739>).
- 2021 “#093 Museum of Northern Arizona, E1186, 2015/7/24.” (英語・日本語, 06:02) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=740>).
- 2021 “#094 Museum of Northern Arizona, E8801, 2015/7/24.” (英語・日本語, 04:19) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=741>).
- 2021 “#095 Museum of Northern Arizona, E5439, 2015/7/24.” (英語・日本語, 05:34) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=742>).
- 2021 “#096 Museum of Northern Arizona, E5105, 2015/7/24.” (英語・日本語, 03:44) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=743>).
- 2021 “#097 Museum of Northern Arizona, E11336, 2015/7/24.” (英語・日本語, 07:40) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=744>).
- 2021 “#098 Museum of Northern Arizona, E4174, 2015/7/24.” (英語・日本語, 19:57) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」

- (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=745>).
- 2021 “#099 Museum of Northern Arizona, E3710, 2015/7/24.” (英語・日本語、03:13) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=746>).
- 2021 “#100 Museum of Northern Arizona, E11633A-B, 2015/7/24.” (英語・日本語、04:38) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=747>).
- 2021 “#101 Museum of Northern Arizona, E5440, 2015/7/24.” (英語・日本語、13:21) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=748>).
- 2021 “#102 Museum of Northern Arizona, E11658A-B, 2015/7/24.” (英語・日本語、03:34) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=749>).
- 2021 “#103 Museum of Northern Arizona, E6127, 2015/7/24.” (英語・日本語、06:59) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=750>).
- 2021 “#104 Museum of Northern Arizona, E2379A-B, 2015/7/24.” (英語・日本語、04:05) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=751>).
- 2021 “#105 Museum of Northern Arizona, E13491, 2015/7/24.” (英語・日本語、06:18) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=752>).
- 2021 “#106 Museum of Northern Arizona, E13509, 2015/7/24.” (英語・日本語、07:26) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=753>).
- 2021 “#107 Museum of Northern Arizona, E13502, 2015/7/24.” (英語・日本語、04:23) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=754>).
- 2021 “#108 Museum of Northern Arizona, E13507, 2015/7/24.” (英語・日本語、10:39) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=755>).
- 2021 “#109 Museum of Northern Arizona, E13493, 2015/7/24.” (英語・日本語、05:17) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=756>).
- 2021 “#110 Museum of Northern Arizona, E11378, 2015/7/24.” (英語・日本語、05:36) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=757>).
- 2021 “#111 Museum of Northern Arizona, E11365, 2015/7/24.” (英語・日本語、02:44) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=758>).
- 2021 “#112 Museum of Northern Arizona, E11329, 2015/7/24.” (英語・日本語、06:12) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=759>).
- 2021 “#113 Museum of Northern Arizona, E9849, 2015/7/24.” (英語・日本語、03:47) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=760>).
- 2021 “#114 Museum of Northern Arizona, E11823, 2015/7/24.” (英語・日本語、04:57) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=761>).
- 2021 “#115 Museum of Northern Arizona, E6126A-B, 2015/7/24.” (英語・日本語、07:23) RECON-

- NECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=762>).
- 2021 “#116 Museum of Northern Arizona, E11076A-B, 2015/7/24.” (英語・日本語、04:37) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=763>).
- 2021 “#117 Museum of Northern Arizona, E11295A-B, 2015/7/24.” (英語・日本語、04:39) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=764>).
- 2021 “#118 Museum of Northern Arizona, E11287A-B, 2015/7/24.” (英語・日本語、03:41) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=765>).
- 2021 “#119 Museum of Northern Arizona, E4175, 2015/7/24.” (英語・日本語、04:03) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=766>).
- 2021 “#120 Museum of Northern Arizona, E2616A-B, 2015/7/24.” (英語・日本語、06:45) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=767>).
- 2021 “#121 Museum of Northern Arizona, E11887, 2015/7/24.” (英語・日本語、07:14) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=768>).
- 2021 “#122 Museum of Northern Arizona, E11066A-B, 2015/7/24.” (英語・日本語、03:51) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=769>).
- 2021 “#123 Museum of Northern Arizona, E1944, 2015/7/24.” (英語・日本語、05:57) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=770>).
- 2021 “#124 Museum of Northern Arizona, E6187, 2015/7/24.” (英語・日本語、08:49) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=771>).
- 2021 “#125 Museum of Northern Arizona, E11596, 2015/7/24.” (英語・日本語、20:06) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=772>).
- 2021 “#126 Museum of Northern Arizona, E3710 Round2, 2015/12/09.” (英語・日本語、16:38) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=773>).
- 2021 “#127 Museum of Northern Arizona, E3711, 2015/12/09.” (英語・日本語、12:50) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=774>).
- 2021 “#128 Museum of Northern Arizona, E6007A-B, 2015/12/09.” (英語・日本語、12:24) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=775>).
- 2021 “#129 Museum of Northern Arizona, E5949, 2015/12/09.” (英語・日本語、14:17) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=776>).
- 2021 “#130 Museum of Northern Arizona, E3712, 2015/12/09.” (英語・日本語、16:52) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=777>).
- 2021 “#131 Museum of Northern Arizona, E11333, 2015/12/09.” (英語・日本語、10:05) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=778>).

- 2021 “#132 Museum of Northern Arizona, E11331, 2015/12/09.” (英語・日本語、19:34) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=779>).
- 2021 “#133 Museum of Northern Arizona, E11332, 2015/12/09.” (英語・日本語、08:22) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=780>).
- 2021 “#134 Museum of Northern Arizona, E11949A-B, 2015/12/09.” (英語・日本語、08:47) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=781>).
- 2021 “#135 Museum of Northern Arizona, E10379, 2015/12/09.” (英語・日本語、14:15) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=782>).
- 2021 “#136 Museum of Northern Arizona, E13489, 2015/12/09.” (英語・日本語、22:14) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=783>).
- 2021 “#137 Museum of Northern Arizona, E11374A-B, 2015/12/10.” (英語・日本語、17:47) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=784>).
- 2021 “#138 Museum of Northern Arizona, E11660, 2015/12/10.” (英語・日本語、12:32) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=785>).
- 2021 “#139 Museum of Northern Arizona, E11286A-B, 2015/12/10.” (英語・日本語、14:27) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=786>).
- 2021 “#140 Museum of Northern Arizona, E5842, 2015/12/10.” (英語・日本語、11:30) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=787>).
- 2021 “#141 Museum of Northern Arizona, E8236A, 2015/12/10.” (英語・日本語、08:35) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=788>).
- 2021 “#142 Museum of Northern Arizona, E5967, 2015/12/10.” (英語・日本語、12:03) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=789>).
- 2021 “#143 Museum of Northern Arizona, E2380A-B, 2015/12/10.” (英語・日本語、13:59) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=790>).
- 2021 “#144 Museum of Northern Arizona, E961, 2015/12/11.” (英語・日本語、08:58) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=791>).
- 2021 “#145 Museum of Northern Arizona, E1389, 2015/12/11.” (英語・日本語、07:49) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=792>).
- 2021 “#146 Museum of Northern Arizona, E1390, 2015/12/11.” (英語・日本語、08:09) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=793>).
- 2021 “#147 Museum of Northern Arizona, E5477A-F, 2015/12/11.” (英語・日本語、09:52) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html?id=794>).
- 2021 “#148 Museum of Northern Arizona, E3385A-B, 2015/12/11.” (英語・日本語、14:24) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との

- 「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=795>).
- 2021 “#149 Museum of Northern Arizona, E6268 and E6269, 2015/12/11.” (英語・日本語, 08:46) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=796>).
- 2021 “#150 Museum of Northern Arizona, E6413, 2015/12/11.” (英語・日本語, 07:55) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=798>).
- 2021 “#151 Museum of Northern Arizona, E7556, 2015/12/11.” (英語・日本語, 08:10) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=799>).
- 2021 “#152 Museum of Northern Arizona, E7557, 2015/12/11.” (英語・日本語, 07:10) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=800>).
- 2021 “#153 Museum of Northern Arizona, E7597, 2015/12/11.” (英語・日本語, 10:06) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=801>).
- 2021 “#154 Museum of Northern Arizona, E7768, 2015/12/11.” (英語・日本語, 09:11) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=802>).
- 2021 “#155 Museum of Northern Arizona, E7766, 2015/12/11.” (英語・日本語, 06:57) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=803>).
- 2021 “#156 Museum of Northern Arizona, E1386, 2015/12/14.” (英語・日本語, 02:51) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=804>).
- 2021 “#157 Museum of Northern Arizona, E1391, 2015/12/14.” (英語・日本語, 03:54) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=805>).
- 2021 “#158 Museum of Northern Arizona, E1392, 2015/12/14.” (英語・日本語, 02:52) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=806>).
- 2021 “#159 Museum of Northern Arizona, E1397, 2015/12/14.” (英語・日本語, 03:34) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=807>).
- 2021 “#160 Museum of Northern Arizona, E1393, 2015/12/14.” (英語・日本語, 03:48) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=808>).
- 2021 “#161 Museum of Northern Arizona, E1394, 2015/12/14.” (英語・日本語, 01:43) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=809>).
- 2021 “#162 Museum of Northern Arizona, E1395, 2015/12/14.” (英語・日本語, 02:38) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=810>).
- 2021 “#163 Museum of Northern Arizona, E1396, 2015/12/14.” (英語・日本語, 05:20) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=811>).
- 2021 “#164 Museum of Northern Arizona, E2351, 2015/12/14.” (英語・日本語, 03:08) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=812>).
- 2021 “#165 Museum of Northern Arizona, E2211, 2015/12/14.” (英語・日本語, 03:50) RECONNECT-

- ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=813>).
- 2021 “#166 Museum of Northern Arizona, E2963, 2015/12/14.” (英語・日本語、02:48) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=814>).
- 2021 “#167 Museum of Northern Arizona, E2964, 2015/12/14.” (英語・日本語、02:18) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=815>).
- 2021 “#168 Museum of Northern Arizona, E5107, 2015/12/14.” (英語・日本語、06:09) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=816>).
- 2021 “#169 Museum of Northern Arizona, E5954, 2015/12/14.” (英語・日本語、02:40) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=817>).
- 2021 “#170 Museum of Northern Arizona, E5955, 2015/12/14.” (英語・日本語、03:49) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=818>).
- 2021 “#171 Museum of Northern Arizona, E8680, 2015/12/14.” (英語・日本語、05:04) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=819>).
- 2021 “#172 Museum of Northern Arizona, E9000, 2015/12/14.” (英語・日本語、03:49) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=820>).
- 2021 “#173 Museum of Northern Arizona, E9001, 2015/12/14.” (英語・日本語、02:58) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=821>).
- 2021 “#174 Museum of Northern Arizona, E9002, 2015/12/14.” (英語・日本語、04:14) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=822>).
- 2021 “#175 Museum of Northern Arizona, E11067, 2015/12/14.” (英語・日本語、04:02) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=823>).
- 2021 “#176 Museum of Northern Arizona, E11072, 2015/12/14.” (英語・日本語、04:52) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=824>).
- 2021 “#177 Museum of Northern Arizona, E11278, 2015/12/14.” (英語・日本語、04:16) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=825>).
- 2021 “#178 Museum of Northern Arizona, E11280, 2015/12/14.” (英語・日本語、02:55) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=826>).
- 2021 “#179 Museum of Northern Arizona, E11285, 2015/12/14.” (英語・日本語、02:34) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=827>).
- 2021 “#180 Museum of Northern Arizona, E11311, 2015/12/14.” (英語・日本語、03:16) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=828>).
- 2021 “#181 Museum of Northern Arizona, E11334, 2015/12/15.” (英語・日本語、05:26) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=829>).

- 2021 “#182 Museum of Northern Arizona, E11335, 2015/12/15.” (英語・日本語, 05:47) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoqi/reviewDetail.html#id=830>).
- 2021 “#183 Museum of Northern Arizona, E11337A-B, 2015/12/15.” (英語・日本語, 07:00) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoqi/reviewDetail.html#id=831>).
- 2021 “#184 Museum of Northern Arizona, E11361, 2015/12/15.” (英語・日本語, 07:20) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoqi/reviewDetail.html#id=832>).
- 2021 “#185 Museum of Northern Arizona, E11364A-B, 2015/12/15.” (英語・日本語, 05:55) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoqi/reviewDetail.html#id=833>).
- 2021 “#186 Museum of Northern Arizona, E11368, 2015/12/15.” (英語・日本語, 08:06) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoqi/reviewDetail.html#id=834>).
- 2021 “#187 Museum of Northern Arizona, E2962A-B, 2015/12/15.” (英語・日本語, 06:49) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoqi/reviewDetail.html#id=835>).
- 2021 “#188 Museum of Northern Arizona, E3065, 2015/12/15.” (英語・日本語, 06:31) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoqi/reviewDetail.html#id=836>).
- 2021 “#189 Museum of Northern Arizona, E3066, 2015/12/15.” (英語・日本語, 06:33) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoqi/reviewDetail.html#id=837>).
- 2021 “#190 Museum of Northern Arizona, E3386A-B, 2015/12/15.” (英語・日本語, 07:47) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoqi/reviewDetail.html#id=838>).
- 2021 “#191 Museum of Northern Arizona, E5102, 2015/12/15.” (英語・日本語, 06:20) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoqi/reviewDetail.html#id=839>).
- 2021 “#192 Museum of Northern Arizona, E6392A-B, 2015/12/15.” (英語・日本語, 24:37) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoqi/reviewDetail.html#id=840>).
- 2021 “#193 Museum of Northern Arizona, E8802A-B, 2015/12/15.” (英語・日本語, 10:35) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoqi/reviewDetail.html#id=841>).
- 2021 “#194 Museum of Northern Arizona, E8803A-B, 2015/12/15.” (英語・日本語, 06:09) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoqi/reviewDetail.html#id=842>).
- 2021 “#195 Museum of Northern Arizona, E11054A-B, 2015/12/15.” (英語・日本語, 08:17) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoqi/reviewDetail.html#id=843>).
- 2021 “#196 Museum of Northern Arizona, E11055A-B, 2015/12/15.” (英語・日本語, 07:37) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoqi/reviewDetail.html#id=844>).
- 2021 “#197 Museum of Northern Arizona, E11291A-B, 2015/12/15.” (英語・日本語, 08:36) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoqi/reviewDetail.html#id=845>).
- 2021 “#198 Museum of Northern Arizona, E11369, 2015/12/15.” (英語・日本語, 05:52) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」

- (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=846>).
- 2021 “#199 Museum of Northern Arizona, E11370, 2015/12/15.” (英語・日本語, 08:59) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=847>).
- 2021 “#200 Museum of Northern Arizona, E1387, 2015/12/16.” (英語・日本語, 05:55) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=848>).
- 2021 “#201 Museum of Northern Arizona, E1399, 2015/12/16.” (英語・日本語, 05:25) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=849>).
- 2021 “#202 Museum of Northern Arizona, E1512, 2015/12/16.” (英語・日本語, 09:04) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=850>).
- 2021 “#203 Museum of Northern Arizona, E1401, 2015/12/16.” (英語・日本語, 06:52) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=851>).
- 2021 “#204 Museum of Northern Arizona, E3023, 2015/12/16.” (英語・日本語, 13:02) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=852>).
- 2021 “#205 Museum of Northern Arizona, E3024, 2015/12/16.” (英語・日本語, 12:08) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=853>).
- 2021 “#206 Museum of Northern Arizona, E3025, 2015/12/16.” (英語・日本語, 11:29) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=854>).
- 2021 “#207 Museum of Northern Arizona, E3026, 2015/12/16.” (英語・日本語, 04:36) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=855>).
- 2021 “#208 Museum of Northern Arizona, E3027, 2015/12/16.” (英語・日本語, 06:08) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=856>).
- 2021 “#209 Museum of Northern Arizona, E3028, 2015/12/16.” (英語・日本語, 04:53) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=857>).
- 2021 “#210 Museum of Northern Arizona, E3349, 2015/12/16.” (英語・日本語, 08:22) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=858>).
- 2021 “#211 Museum of Northern Arizona, E5104, 2015/12/16.” (英語・日本語, 09:32) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=859>).
- 2021 “#212 Museum of Northern Arizona, E5108, 2015/12/16.” (英語・日本語, 09:48) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=860>).
- 2021 “#213 Museum of Northern Arizona, E5434, 2015/12/16.” (英語・日本語, 10:03) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=861>).
- 2021 “#214 Museum of Northern Arizona, E5436, 2015/12/16.” (英語・日本語, 11:34) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=862>).
- 2021 “#215 Museum of Northern Arizona, E5962, 2015/12/16.” (英語・日本語, 15:23) RECONNECT-

- ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoji/reviewDetail.html#id=863>).
- 2021 “#216 Museum of Northern Arizona, E6009, 2015/12/16.” (英語・日本語、13:14) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoji/reviewDetail.html#id=864>).
- 2021 “#217 Museum of Northern Arizona, E6128, 2015/12/16.” (英語・日本語、05:31) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoji/reviewDetail.html#id=865>).
- 2021 “#218 Museum of Northern Arizona, E6151, 2015/12/16.” (英語・日本語、12:08) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoji/reviewDetail.html#id=866>).
- 2021 “#219 Museum of Northern Arizona, E6152, 2015/12/16.” (英語・日本語、04:04) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoji/reviewDetail.html#id=867>).
- 2021 “#220 Museum of Northern Arizona, E6207, 2015/12/16.” (英語・日本語、09:35) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoji/reviewDetail.html#id=868>).
- 2021 “#221 Museum of Northern Arizona, E6391, 2015/12/16.” (英語・日本語、05:07) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoji/reviewDetail.html#id=869>).
- 2021 “#222 Museum of Northern Arizona, E8238, 2015/12/16.” (英語・日本語、06:40) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoji/reviewDetail.html#id=870>).
- 2021 “#223 Museum of Northern Arizona, E8409, 2015/12/16.” (英語・日本語、07:19) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoji/reviewDetail.html#id=871>).
- 2021 “#224 Museum of Northern Arizona, E8532, 2015/12/16.” (英語・日本語、04:29) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoji/reviewDetail.html#id=872>).
- 2021 “#225 Museum of Northern Arizona, E8800, 2015/12/16.” (英語・日本語、06:32) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoji/reviewDetail.html#id=873>).
- 2021 “#226 Museum of Northern Arizona, E11056, 2015/12/16.” (英語・日本語、04:31) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoji/reviewDetail.html#id=874>).
- 2021 “#227 Museum of Northern Arizona, E5959, 2015/12/16.” (英語・日本語、18:59) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoji/reviewDetail.html#id=875>).
- 2021 “#228 Museum of Northern Arizona, E3045, 2015/12/17.” (英語・日本語、06:48) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoji/reviewDetail.html#id=876>).
- 2021 “#229 Museum of Northern Arizona, E3363, 2015/12/17.” (英語・日本語、06:31) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoji/reviewDetail.html#id=877>).
- 2021 “#230 Museum of Northern Arizona, E7549, 2015/12/17.” (英語・日本語、06:35) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoji/reviewDetail.html#id=878>).
- 2021 “#231 Museum of Northern Arizona, E7550, 2015/12/17.” (英語・日本語、03:46) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoji/reviewDetail.html#id=879>).

- 2021 “#232 Museum of Northern Arizona, E7551, 2015/12/17.” (英語・日本語、03:33) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=880>).
- 2021 “#233 Museum of Northern Arizona, E7552, 2015/12/17.” (英語・日本語、04:36) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=881>).
- 2021 “#234 Museum of Northern Arizona, E7553, 2015/12/17.” (英語・日本語、03:53) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=882>).
- 2021 “#235 Museum of Northern Arizona, E7554, 2015/12/17.” (英語・日本語、03:30) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=883>).
- 2021 “#236 Museum of Northern Arizona, E7555, 2015/12/17.” (英語・日本語、04:28) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=884>).
- 2021 “#237 Museum of Northern Arizona, E8826, 2015/12/17.” (英語・日本語、17:45) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=885>).
- 2021 “#238 Museum of Northern Arizona, E10252, 2015/12/17.” (英語・日本語、08:10) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=886>).
- 2021 “#239 Museum of Northern Arizona, E10648, 2015/12/17.” (英語・日本語、06:48) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=887>).
- 2021 “#240 Museum of Northern Arizona, E10649, 2015/12/17.” (英語・日本語、07:00) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=888>).
- 2021 “#241 Museum of Northern Arizona, E11065, 2015/12/17.” (英語・日本語、05:14) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=889>).
- 2021 “#242 Museum of Northern Arizona, E11068A-B, 2015/12/17.” (英語・日本語、10:45) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=890>).
- 2021 “#243 Museum of Northern Arizona, E11069, 2015/12/17.” (英語・日本語、04:57) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=891>).
- 2021 “#244 Museum of Northern Arizona, E11070, 2015/12/17.” (英語・日本語、04:34) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=892>).
- 2021 “#245 Museum of Northern Arizona, E11073A-B, 2015/12/17.” (英語・日本語、06:31) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=893>).
- 2021 “#246 Museum of Northern Arizona, E11074, 2015/12/17.” (英語・日本語、07:13) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=894>).
- 2021 “#247 Museum of Northern Arizona, E11075, 2015/12/17.” (英語・日本語、03:43) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=895>).
- 2021 “#248 Museum of Northern Arizona, E11281, 2015/12/17.” (英語・日本語、05:48) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」

- (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=896>).
- 2021 “#249 Museum of Northern Arizona, E11283, 2015/12/17.” (英語・日本語, 05:26) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=897>).
- 2021 “#250 Museum of Northern Arizona, E11282, 2015/12/17.” (英語・日本語, 04:01) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=898>).
- 2021 “#251 Museum of Northern Arizona, E11290, 2015/12/17.” (英語・日本語, 06:24) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=899>).
- 2021 “#252 Museum of Northern Arizona, E11292A-B, 2015/12/17.” (英語・日本語, 06:04) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=900>).
- 2021 “#253 Museum of Northern Arizona, E11324A-B, 2015/12/17.” (英語・日本語, 08:48) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=901>).
- 2021 “#254 Museum of Northern Arizona, E11325A-B, 2015/12/17.” (英語・日本語, 06:49) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=902>).
- 2021 “#255 Museum of Northern Arizona, E11327, 2015/12/17.” (英語・日本語, 05:39) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=903>).
- 2021 “#256 Museum of Northern Arizona, E11328, 2015/12/17.” (英語・日本語, 09:37) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=904>).
- 2021 “#257 Museum of Northern Arizona, E11360, 2015/12/17.” (英語・日本語, 06:18) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=905>).
- 2021 “#258 Museum of Northern Arizona, E11362, 2015/12/17.” (英語・日本語, 03:49) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=906>).
- 2021 “#259 Museum of Northern Arizona, E11372, 2015/12/17.” (英語・日本語, 03:24) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=907>).
- 2021 “#260 Museum of Northern Arizona, E11371, 2015/12/17.” (英語・日本語, 05:06) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=908>).
- 2021 “#261 Museum of Northern Arizona, E11377A-B, 2015/12/17.” (英語・日本語, 05:07) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=909>).
- 2021 “#262 Museum of Northern Arizona, E11381, 2015/12/17.” (英語・日本語, 08:27) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=910>).
- 2021 “#263 Museum of Northern Arizona, E11444, 2015/12/17.” (英語・日本語, 04:02) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=911>).
- 2021 “#264 Museum of Northern Arizona, E11557, 2015/12/17.” (英語・日本語, 07:02) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=912>).
- 2021 “#265 Museum of Northern Arizona, E11296, 2015/12/17.” (英語・日本語, 04:48) RECONNECT-

- ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=913>).
- 2021 “#266 Museum of Northern Arizona, E11560, 2015/12/17.” (英語・日本語、06:48) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=914>).
- 2021 “#267 Museum of Northern Arizona, E11375A-B, 2015/12/17.” (英語・日本語、04:43) RECON-
NECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との
「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=915>).
- 2021 “#268 Museum of Northern Arizona, E11376A-B, 2015/12/17.” (英語・日本語、03:57) RECON-
NECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との
「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=916>).
- 2021 “#269 Museum of Northern Arizona, E13368, 2015/12/18.” (英語・日本語、04:52) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=917>).
- 2021 “#270 Museum of Northern Arizona, E13490, 2015/12/18.” (英語・日本語、04:51) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=918>).
- 2021 “#271 Museum of Northern Arizona, E13492, 2015/12/18.” (英語・日本語、06:30) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=919>).
- 2021 “#272 Museum of Northern Arizona, E13494, 2015/12/18.” (英語・日本語、02:58) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=920>).
- 2021 “#273 Museum of Northern Arizona, E13495, 2015/12/18.” (英語・日本語、02:55) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=921>).
- 2021 “#274 Museum of Northern Arizona, E13496, 2015/12/18.” (英語・日本語、04:30) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=922>).
- 2021 “#275 Museum of Northern Arizona, E13497, 2015/12/18.” (英語・日本語、04:17) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=923>).
- 2021 “#276 Museum of Northern Arizona, E13498, 2015/12/18.” (英語・日本語、07:42) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=924>).
- 2021 “#277 Museum of Northern Arizona, E13501, 2015/12/18.” (英語・日本語、07:07) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=925>).
- 2021 “#278 Museum of Northern Arizona, E13503, 2015/12/18.” (英語・日本語、06:13) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=926>).
- 2021 “#279 Museum of Northern Arizona, E13504, 2015/12/18.” (英語・日本語、07:53) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=927>).
- 2021 “#280 Museum of Northern Arizona, E13505, 2015/12/18.” (英語・日本語、05:07) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=928>).
- 2021 “#281 Museum of Northern Arizona, E13506, 2015/12/18.” (英語・日本語、06:59) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=929>).

- 2021 “#282 Museum of Northern Arizona, E13508, 2015/12/18.” (英語・日本語、06:10) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoqi/reviewDetail.html#id=930>).
- 2021 “#283 Museum of Northern Arizona, E13675A-J, 2015/12/18.” (英語・日本語、06:51) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoqi/reviewDetail.html#id=931>).
- 2021 “#284 Museum of Northern Arizona, E13676A-B, 2015/12/18.” (英語・日本語、07:11) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoqi/reviewDetail.html#id=932>).
- 2021 “#285 Museum of Northern Arizona, E11684A-B, 2015/12/18.” (英語・日本語、08:09) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoqi/reviewDetail.html#id=933>).
- 2021 “#286 Museum of Northern Arizona, E13678, 2015/12/18.” (英語・日本語、08:49) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoqi/reviewDetail.html#id=934>).
- 2021 “#287 Museum of Northern Arizona, E13499, 2015/12/18.” (英語・日本語、02:03) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoqi/reviewDetail.html#id=935>).
- 2021 “#288 Museum of Northern Arizona, E13500, 2015/12/18.” (英語・日本語、07:28) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoqi/reviewDetail.html#id=936>).
- 2021 “#289 Museum of Northern Arizona, E11719, 2015/12/18.” (英語・日本語、03:57) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoqi/reviewDetail.html#id=937>).
- 2021 “#290 Museum of Northern Arizona, E11730, 2015/12/18.” (英語・日本語、03:30) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoqi/reviewDetail.html#id=938>).
- 2021 “#291 Museum of Northern Arizona, E11741, 2015/12/18.” (英語・日本語、03:41) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoqi/reviewDetail.html#id=939>).
- 2021 “#292 Museum of Northern Arizona, E11749, 2015/12/18.” (英語・日本語、01:50) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoqi/reviewDetail.html#id=940>).
- 2021 “#293 Museum of Northern Arizona, E11760A-C, 2015/12/18.” (英語・日本語、07:26) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoqi/reviewDetail.html#id=941>).
- 2021 “#294 Museum of Northern Arizona, E11761, 2015/12/18.” (英語・日本語、01:56) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoqi/reviewDetail.html#id=942>).
- 2021 “#295 Museum of Northern Arizona, E11770, 2015/12/18.” (英語・日本語、02:54) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoqi/reviewDetail.html#id=943>).
- 2021 “#296 Museum of Northern Arizona, E11770B-C, 2015/12/18.” (英語・日本語、05:02) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoqi/reviewDetail.html#id=944>).
- 2021 “#297 Museum of Northern Arizona, E11800, 2015/12/18.” (英語・日本語、05:43) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoqi/reviewDetail.html#id=945>).
- 2021 “#298 Museum of Northern Arizona, E11842, 2015/12/18.” (英語・日本語、04:45) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」

- (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=946>).
- 2021 “#299 Museum of Northern Arizona, E11858, 2015/12/18.” (英語・日本語, 03:09) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=947>).
- 2021 “#300 Museum of Northern Arizona, E13679, 2015/12/18.” (英語・日本語, 06:14) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=948>).
- 2021 “#301 Museum of Northern Arizona, E13511A-B, 2015/12/18.” (英語・日本語, 04:50) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=949>).
- 2021 “#302 Museum of Northern Arizona, E13680A-B, 2015/12/18.” (英語・日本語, 09:13) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=950>).
- 2021 “#303 Museum of Northern Arizona, E13510, 2015/12/18.” (英語・日本語, 09:48) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=951>).
- 2021 “#304 Museum of Northern Arizona, E11950, 2015/12/18.” (英語・日本語, 04:03) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=952>).
- 2021 “#305 Museum of Northern Arizona, E11953, 2015/12/18.” (英語・日本語, 07:53) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=953>).
- 2021 “#306 Museum of Northern Arizona, E11972, 2015/12/18.” (英語・日本語, 03:02) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=954>).
- 2021 “#307 Museum of Northern Arizona, E13677, 2015/12/18.” (英語・日本語, 05:08) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=955>).
- 2021 “#308 Museum of Northern Arizona, E1910, 2015/12/18.” (英語・日本語, 02:19) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=956>).
- 2021 “#309 Museum of Northern Arizona, E1381, 2015/12/21.” (英語・日本語, 05:08) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=957>).
- 2021 “#310 Museum of Northern Arizona, E1382, 2015/12/21.” (英語・日本語, 02:56) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=958>).
- 2021 “#311 Museum of Northern Arizona, E1384, 2015/12/21.” (英語・日本語, 03:09) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=959>).
- 2021 “#312 Museum of Northern Arizona, E1385, 2015/12/21.” (英語・日本語, 03:38) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=960>).
- 2021 “#313 Museum of Northern Arizona, E1400, 2015/12/21.” (英語・日本語, 03:29) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=961>).
- 2021 “#314 Museum of Northern Arizona, E2612, 2015/12/21.” (英語・日本語, 06:00) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=962>).
- 2021 “#315 Museum of Northern Arizona, E2951, 2015/12/21.” (英語・日本語, 05:57) RECONNECT-

- ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoji/reviewDetail.html#id=963>).
- 2021 “#316 Museum of Northern Arizona, E2958, 2015/12/21.” (英語・日本語、03:13) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoji/reviewDetail.html#id=964>).
- 2021 “#317 Museum of Northern Arizona, E2960, 2015/12/21.” (英語・日本語、07:01) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoji/reviewDetail.html#id=965>).
- 2021 “#318 Museum of Northern Arizona, E3256A-B, 2015/12/21.” (英語・日本語、02:14) RECON-
NECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との
「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoji/reviewDetail.html#id=966>).
- 2021 “#319 Museum of Northern Arizona, E3347, 2015/12/21.” (英語・日本語、03:38) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoji/reviewDetail.html#id=967>).
- 2021 “#320 Museum of Northern Arizona, E3387, 2015/12/21.” (英語・日本語、02:44) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoji/reviewDetail.html#id=968>).
- 2021 “#321 Museum of Northern Arizona, E3481, 2015/12/21.” (英語・日本語、03:42) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoji/reviewDetail.html#id=969>).
- 2021 “#322 Museum of Northern Arizona, E3709, 2015/12/21.” (英語・日本語、04:50) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoji/reviewDetail.html#id=970>).
- 2021 “#323 Museum of Northern Arizona, E4150, 2015/12/21.” (英語・日本語、04:13) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoji/reviewDetail.html#id=971>).
- 2021 “#324 Museum of Northern Arizona, E5103, 2015/12/21.” (英語・日本語、02:23) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoji/reviewDetail.html#id=972>).
- 2021 “#325 Museum of Northern Arizona, E5106, 2015/12/21.” (英語・日本語、01:43) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoji/reviewDetail.html#id=973>).
- 2021 “#326 Museum of Northern Arizona, E5110, 2015/12/21.” (英語・日本語、03:59) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoji/reviewDetail.html#id=974>).
- 2021 “#327 Museum of Northern Arizona, E5373A-B, 2015/12/21.” (英語・日本語、05:33) RECON-
NECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との
「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoji/reviewDetail.html#id=975>).
- 2021 “#328 Museum of Northern Arizona, E5435, 2015/12/21.” (英語・日本語、03:01) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoji/reviewDetail.html#id=976>).
- 2021 “#329 Museum of Northern Arizona, E5765, 2015/12/21.” (英語・日本語、04:15) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoji/reviewDetail.html#id=977>).
- 2021 “#330 Museum of Northern Arizona, E5767, 2015/12/21.” (英語・日本語、06:26) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoji/reviewDetail.html#id=978>).
- 2021 “#331 Museum of Northern Arizona, E5873, 2015/12/21.” (英語・日本語、05:08) RECONNECT-
ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoji/reviewDetail.html#id=979>).

- 2021 “#332 Museum of Northern Arizona, E5953, 2015/12/21.” (英語・日本語、04:53) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=980>).
- 2021 “#333 Museum of Northern Arizona, E5957, 2015/12/21.” (英語・日本語、04:19) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=981>).
- 2021 “#334 Museum of Northern Arizona, E5961, 2015/12/21.” (英語・日本語、04:57) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=982>).
- 2021 “#335 Museum of Northern Arizona, E6006, 2015/12/21.” (英語・日本語、04:50) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=983>).
- 2021 “#336 Museum of Northern Arizona, E6123, 2015/12/21.” (英語・日本語、06:32) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=984>).
- 2021 “#337 Museum of Northern Arizona, E6125, 2015/12/21.” (英語・日本語、02:12) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=985>).
- 2021 “#338 Museum of Northern Arizona, E6188, E6189, E6190A-B, 2015/12/21.” (英語・日本語、07:13) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=986>).
- 2021 “#339 Museum of Northern Arizona, E6191A-B, 2015/12/21.” (英語・日本語、02:02) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=989>).
- 2021 “#340 Museum of Northern Arizona, E6198, 2015/12/21.” (英語・日本語、03:19) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=990>).
- 2021 “#341 Museum of Northern Arizona, E6205, 2015/12/21.” (英語・日本語、03:35) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=991>).
- 2021 “#342 Museum of Northern Arizona, E6258, 2015/12/21.” (英語・日本語、02:07) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=992>).
- 2021 “#343 Museum of Northern Arizona, E6401, 2015/12/21.” (英語・日本語、03:03) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=993>).
- 2021 “#344 Museum of Northern Arizona, E7014A-B, 2015/12/21.” (英語・日本語、02:06) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=994>).
- 2021 “#345 Museum of Northern Arizona, E7596, 2015/12/21.” (英語・日本語、02:15) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=995>).
- 2021 “#346 Museum of Northern Arizona, E8084, 2015/12/21.” (英語・日本語、02:19) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=996>).
- 2021 “#347 Museum of Northern Arizona, E8183, 2015/12/21.” (英語・日本語、02:55) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」 (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=997>).
- 2021 “#348 Museum of Northern Arizona, E8234, 2015/12/21.” (英語・日本語、04:54) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」

- (<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=998>).
- 2021 “#349 Museum of Northern Arizona, E8235, 2015/12/21.” (英語・日本語、06:46) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=999>).
- 2021 “#350 Museum of Northern Arizona, E8371, 2015/12/21.” (英語・日本語、02:20) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=1000>).
- 2021 “#351 Museum of Northern Arizona, E8425, 2015/12/21.” (英語・日本語、02:14) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=1001>).
- 2021 “#352 Museum of Northern Arizona, E8427, 2015/12/21.” (英語・日本語、01:04) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=1002>).
- 2021 “#353 Museum of Northern Arizona, E8493, 2015/12/21.” (英語・日本語、06:32) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=1003>).
- 2021 “#354 Museum of Northern Arizona, E8534, 2015/12/21.” (英語・日本語、03:19) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=1004>).
- 2021 “#355 Museum of Northern Arizona, E8678, 2015/12/21.” (英語・日本語、03:54) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=1005>).
- 2021 “#356 Museum of Northern Arizona, E8679, 2015/12/21.” (英語・日本語、03:40) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=1006>).
- 2021 “#357 Museum of Northern Arizona, E8754, 2015/12/21.” (英語・日本語、02:45) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=1007>).
- 2021 “#358 Museum of Northern Arizona, E8992, 2015/12/21.” (英語・日本語、01:47) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=1008>).
- 2021 “#359 Museum of Northern Arizona, E11685, 2015/12/21.” (英語・日本語、07:02) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=1009>).
- 2021 “#360 Museum of Northern Arizona, E13782, 2018/11/13.” (英語・日本語、05:58) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=1010>).
- 2021 “#361 Museum of Northern Arizona, E13781, 2018/11/13.” (英語・日本語、02:56) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=1011>).
- 2021 “#362 Museum of Northern Arizona, E13783A-B, 2018/11/13.” (英語・日本語、02:35) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=1012>).
- 2021 “#363 Museum of Northern Arizona, E13778, 2018/11/13.” (英語・日本語、03:52) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=1013>).
- 2021 “#364 Museum of Northern Arizona, E13779, 2018/11/13.” (英語・日本語、02:25) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoi/reviewDetail.html#id=1014>).
- 2021 “#365 Museum of Northern Arizona, E13785, 2018/11/13.” (英語・日本語、02:50) RECONNECT-

- ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=1015>).
- 2021 “#366 Museum of Northern Arizona, E13780, 2018/11/13.” (英語・日本語、02:38) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」
(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=1016>).
- 2021 “#367 Museum of Northern Arizona, Gerald Lomaventema, Reviewers’ Self-introduction and Remarks, 2015/07/22.” (英語・日本語、03:25) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/>).
- 2021 “#368 Museum of Northern Arizona, Merle Namoki, Reviewers’ Self-introduction and Remarks, 2015/07/22 and 2015/12/21.” (英語・日本語、06:29) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/>).
- 2021 “#369 Museum of Northern Arizona, Yvette Talaswaima, Reviewers’ Self-introduction and Remarks, 2015/07/22.” (英語・日本語、01:11) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/>).
- 2021 “#370 Museum of Northern Arizona, Clinessia Lucas, Reviewers’ Self-introduction and Remarks, 2015/07/22.” (英語・日本語、01:03) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/>).
- 2021 “#371 Museum of Northern Arizona, Jerolyn Honwyteva, Reviewers’ Self-introduction and Remarks, 2015/07/22.” (英語・日本語、01:01) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/>).
- 2021 “#372 Museum of Northern Arizona, Tobias Lomayestewa, Reviewers’ Self-introduction and Remarks, 2015/07/22.” (英語・日本語、01:16) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/>).
- 2021 “#373 Museum of Northern Arizona, Verma “Sonwai” Nequatewa, Reviewers’ Self-introduction and Remarks, 2015/12/09.” (英語・日本語、08:24) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/>).
- 2021 “#374 Museum of Northern Arizona, Robert Rhodes, Self-Introduction and Remarks on the “Reconnecting Project” 2019/06/23.” (英語・日本語、01:46) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/>).
- 2021 “#375 Museum of Northern Arizona, Jerry Honwyteva Whagado, Self-Introduction and Remarks on the “Reconnecting Project” 2015/12/18.” (英語・日本語、10:38) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/>).
- 2021 “#376 Museum of Northern Arizona, Ed Kabotie, Self-Introduction and Remarks on the “Reconnecting Project” 2019/06/29.” (英語・日本語、05:21) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/>).
- 2021 “Denver Museum of Nature & Science, #01, A1351.514, 2017/01/18.” (英語・日本語、12:49) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=1101>).
- 2021 “Denver Museum of Nature & Science, #02, A1351.593A, 2017/01/18.” (英語・日本語、17:37) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=1102>).
- 2021 “Denver Museum of Nature & Science, #03, A1351.593B, 2017/01/18.” (英語・日本語、13:50) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=1103>).
- 2021 “Denver Museum of Nature & Science, #04, A1351.593C, 2017/01/18.” (英語・日本語、15:08) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoپی/reviewDetail.html#id=1104>).

- 料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1104>).
- 2021 “Denver Museum of Nature & Science, #05, AC.5178, 2017/01/18.” (英語・日本語、19:48) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1105>).
- 2021 “Denver Museum of Nature & Science, #06, AC.11194, 2017/01/18.” (英語・日本語、13:09) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1106>).
- 2021 “Denver Museum of Nature & Science, #07, AC.11195, 2017/01/18.” (英語・日本語、16:16) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1107>).
- 2021 “Denver Museum of Nature & Science, #08, AC.11196, 2017/01/18.” (英語・日本語、15:29) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1108>).
- 2021 “Denver Museum of Nature & Science, #09, A1713.26, 2017/01/18.” (英語・日本語、17:03) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1109>).
- 2021 “Denver Museum of Nature & Science, #10, A921.1, 2017/01/18.” (英語・日本語、15:37) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1110>).
- 2021 “Denver Museum of Nature & Science, #11, AN-2010-186.12, 2017/01/18.” (英語・日本語、13:59) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1111>).
- 2021 “Denver Museum of Nature & Science, #12, AN-2010-186.13, 2017/01/18.” (英語・日本語、11:11) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1112>).
- 2021 “Denver Museum of Nature & Science, #13, A1351.155A, 2017/01/18.” (英語・日本語、13:21) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1113>).
- 2021 “Denver Museum of Nature & Science, #14, AN-2010-186.15, 2017/01/19.” (英語・日本語、11:30) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1114>).
- 2021 “Denver Museum of Nature & Science, #15, A1351.155B-J, 2017/01/19.” (英語・日本語、14:20) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1115>).
- 2021 “Denver Museum of Nature & Science, #16, AC.6427, 2017/01/19.” (英語・日本語、09:24) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1124>).
- 2021 “Denver Museum of Nature & Science, #17, AN-2010-186.14A-B, 2017/01/19.” (英語・日本語、08:17) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1125>).
- 2021 “Denver Museum of Nature & Science, #18, AN-2010-186.18A-B, 2017/01/19.” (英語・日本語、14:52) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1126>).
- 2021 “Denver Museum of Nature & Science, #19, AN-2010-186.19A-B, 2017/01/19.” (英語・日本語、11:23) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1127>).
- 2021 “Denver Museum of Nature & Science, #20, AN-2010-186.20A-B, 2017/01/19.” (英語・日本語、10:43) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1128>).
- 2021 “Denver Museum of Nature & Science, #21, AN-2010-186.21A-B, 2017/01/19.” (英語・日本語、

- 12:47) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1129>).
- 2021 “Denver Museum of Nature & Science, #22, AN-2010-186.23A-B, 2017/01/19.” (英語・日本語、11:33) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1130>).
- 2021 “Denver Museum of Nature & Science, #23, A1351.406A-B, 2017/01/19.” (英語・日本語、14:38) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1131>).
- 2021 “Denver Museum of Nature & Science, #24, AC.6492, 2017/01/19.” (英語・日本語、08:37) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1132>).
- 2021 “Denver Museum of Nature & Science, #25, AC.8988, 2017/01/19.” (英語・日本語、11:18) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1133>).
- 2021 “Denver Museum of Nature & Science, #26, AN-2010-186.16, 2017/01/19.” (英語・日本語、12:53) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1134>).
- 2021 “Denver Museum of Nature & Science, #27, AN-2010-186.22, 2017/01/19.” (英語・日本語、11:26) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1135>).
- 2021 “Denver Museum of Nature & Science, #28, A1351.176, 2017/01/19.” (英語・日本語、03:41) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1136>).
- 2021 “Denver Museum of Nature & Science, #29, AN-2003-139.1, 2017/01/19.” (英語・日本語、08:38) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1137>).
- 2021 “Denver Museum of Nature & Science, #30, AN-2010-186-17, 2017/01/19.” (英語・日本語、10:13) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1138>).
- 2021 “Denver Museum of Nature & Science, #31, Gerald Lomaventema, Self-Introduction and Remarks on the “Reconnecting Project” 2017/01/19.” (英語・日本語、03:03) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/>).
- 2021 “Denver Museum of Nature & Science, #32, Merle Namoki, Self-Introduction and Remarks on the “Reconnecting Project” 2017/01/19.” (英語・日本語、00:43) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/>).
- 2021 “Denver Museum of Nature & Science, #33, Candice Lomahaftewa, Self-Introduction and Remarks on the “Reconnecting Project” 2017/01/19.” (英語・日本語、02:31) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/>).
- 2021 “Denver Museum of Nature & Science, #34, Delwyn “Spyder” Tawvaya, Self-Introduction and Remarks on the “Reconnecting Project” 2017/01/19.” (英語・日本語、02:46) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/>).
- 2021 “Denver Museum of Nature & Science, #35, Cordell Sakeva, Self-Introduction and Remarks on the “Reconnecting Project” 2017/01/19.” (英語・日本語、02:29) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/>).
- 2021 “Denver Museum of Nature & Science, #36, Darrin Kuwanhongva, Self-Introduction and Remarks

on the “Reconnecting Project” 2017/01/19.”（英語・日本語、03:04）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/>）.

2021 “Denver Museum of Nature & Science, #37, Yvette Talaswaima, Self-Introduction and Remarks on the “Reconnecting Project” 2017/01/19.”（英語・日本語、01:27）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（<https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/>）.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・展示

2019年3月17日～2020年9月9日 「本館展示場アメリカ展示新構築」国立民族学博物館

・みんぱくウィークエンド・サロン

2020年8月23日 「オンライン展示の条件——民族誌資料、著作権、公開適正化」第570回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

・広報・社会連携活動

2020年11月6日 「仕事について考えよう」茨木市立中津小学校

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

「地域文化学演習Ⅰ」、「地域文化学演習Ⅱ」、「比較文化学演習Ⅰ」、「比較文化学演習Ⅱ」

齋藤玲子 [さいとう れいこ] ————— 准教授

1966年生。【学歴】北海道大学文学部行動科学科卒（1989）【職歴】北海道教育委員会社会教育課学芸員（1989）、北海道立北方民族博物館学芸員（1990）、北海道立北方民族博物館主任学芸員（2005）、北海道立北方民族博物館学芸員（2010）、国立民族学博物館民族文化研究部助教（2011）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2016）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター准教授（2017）【専攻・専門】文化人類学・アイヌの文化変容と表象、北アメリカ北西海岸先住民の美術工芸【所属学会】日本文化人類学会、北海道民族学会

【主要業績】

[編著]

齋藤玲子編

2015 『カナダ先住民芸術の歴史的展開と現代的課題——国立民族学博物館所蔵のイヌイトおよび北西海岸先住民の版画コレクションをとおして』（国立民族学博物館調査報告131）大阪：国立民族学博物館。

齋藤玲子・大村敬一・岸上伸啓編

2010 『極北と森林の記憶——イヌイトと北西海岸インディアンの版画』京都：昭和堂。

[論文]

齋藤玲子

2012 「アイヌ工芸の200年——その歴史概観」山崎幸治・伊藤敦規編『世界のなかのアイヌ・アート（先住民アート・プロジェクト報告書）』pp.45-60, 札幌：北海道大学アイヌ・先住民研究センター。

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アイヌおよび隣接する民族における物と人の移動と交流

・研究の目的、内容

本研究は、アイヌと隣接する地域、とくに東北地方および日本海側の北前船寄港地に残る衣類などの調査を中心に、近世後期から近現代にいたるまでの交易や人の往來の構造と変遷を明らかにすることをめざす。また、民博に所蔵されている資料のなかで、本州で収集された可能性のあるものとの比較研究をおこない、同定に努める。これは、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクトの国立民族学博物館拠点北東アジア地域研究のテーマに位置づけられる。現地調査が可能になれば、東北や新潟での資料調査をおこなうが、困難な場合は、文献調査と2014～2016年度および2017～2019年度に加わった科研費の調査資料を見直し、研究を進める。

・成果

本州で収集されたアイヌの衣類については、文献の収集と精読を中心に進めた。とくに、当館で所蔵する故・田中忠三郎氏の旧蔵資料のなかにアイヌの衣類・布製品とされたものが約40点含まれていることから、田中氏の著作や関連する展示図録等を集めて精読するとともに、他館が所蔵する田中氏旧蔵資料の所在確認をおこない、研究準備を進めた。津軽・下北では、和入女性がアイヌのアットウシ（樹皮繊維製衣）に似た衣服を麻で織って製作したことや、木綿衣にもアイヌの文様に似た刺繍をしたことが記録に残されており、田中氏旧蔵資料の中には、同地で和入が製作したものが含まれている可能性が高いことがわかった。

- ・当館所蔵のアイヌおよび樺太先住民資料の情報の精査をおこない、フォーラム型情報ミュージアム・プロジェクトで館内公開中の「民博所蔵アイヌ民族資料データベース」の修正を進めた。また、その成果の一部を活用して、徳島県立鳥居龍蔵記念博物館・鳥居龍蔵を語る会編『鳥居龍蔵の学問と世界』（2020年、思文閣出版）に「千島・樺太調査」を寄稿し、シンポジウムで発表した。
- ・共同研究「現代「手芸」文化に関する研究」（上羽陽子代表、2014～2017年度）の成果本、上羽陽子・山崎明子編『現代手芸考 ものづくりの意味を問い直す』（2020年、フィルムアート社）に寄せたコラム「“アイヌ文様刺繍”を教える」および「座談会2 教える×伝承」が刊行された。

◎出版物による業績

[分担執筆]

齋藤玲子

- 2020 「“アイヌ文様刺繍”を教える」上羽陽子・山崎明子編『現代手芸考 ものづくりの意味を問い直す』pp.92-94, 東京：フィルムアート社。
- 2020 「千島・樺太調査」徳島県立鳥居龍蔵記念博物館・鳥居龍蔵を語る会編『鳥居龍蔵の学問と世界』pp.65-86, 京都：思文閣出版。
- 2021 「アイヌの料理」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.632-633, 東京：丸善出版。

杉本星子・新本万里子・齋藤玲子・ひろいのおこ

- 2020 「座談会2 教える×伝承」上羽陽子・山崎明子編『現代手芸考 ものづくりの意味を問い直す』pp.99-109, 東京：フィルムアート社。

[論文]

Clifford, J., A. Ito, R. Saito, and K. Yoshida

- 2020 Panel Discussion (Research Resource: International Symposium “Future of the Museum: An Anthropological Perspective”). *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 45(1): 170-176. [査読有]

Saito, R.

- 2020 Ethnography and Agency: Collaboration with the Ainu People in Museums. (Research Resource: International Symposium “Future of the Museum: An Anthropological Perspective”). *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 45(1): 161-169. [査読有]

[その他]

齋藤玲子

- 2020 「旅・いろいろ地球人 アイヌ文化と植物① 流行病を追い払う神」『毎日新聞』5月2日夕刊。
- 2020 「旅・いろいろ地球人 アイヌ文化と植物② 茅葺きの茅とは」『毎日新聞』5月9日夕刊。
- 2020 「旅・いろいろ地球人 アイヌ文化と植物③ 樹皮から作る布」『毎日新聞』5月16日夕刊。
- 2020 「旅・いろいろ地球人 アイヌ文化と植物④ ユリ根は食料の要」『毎日新聞』5月23日夕刊。
- 2020 「旅・いろいろ地球人 アイヌ文化と植物⑤ 夏の年＝女の年」『毎日新聞』5月30日夕刊。
- 2020 「毛皮、必需品から見栄え重視?へ」『月刊みんぱく』44(8): 16-17。
- 2020 「データベース公開がはじまりの一步」『民博通信 Online』2: 4-5。
- 2020 「首飾り（タマサイ）、魚皮製衣服（カヤ）、木偶（セワ）」『2021年国立民族学博物館オリジナルカレンダー』大阪：国立民族学博物館。
- 2020 「博物館が伝える先住民文化」（ソフィア 京都新聞文化会議）『京都新聞』10月2日。
- 2020 「書評『問いかけるアイヌ・アート』」『北海道新聞』11月29日。
- 2020 「アイヌのテンキとそのひろがり」『月刊みんぱく』44(12): 14-15。

2021 「鳥居龍蔵が残した千島と樺太の先住民関連資料——100年後のいま、できること」『鳥居龍蔵生誕150周年記念国際シンポジウム「鳥居龍蔵と現代社会」講演要旨集』pp.14-19, 徳島：徳島県立鳥居龍蔵記念博物館。

Saito, R.

2021 Motifs of Totem Poles. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 51: 5-7.

◎映像音響メディアによる業績

- ・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

[ビデオテーク]

齋藤玲子 監修

2021 『民博でのカムイノミ——2016年度ミンパク オッタ カムイノミの記録』（日本語・20分）

◎口頭発表・展示・その他の業績

- ・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年10月31日 「アイヌ民族の植物利用——継承のいまとこれから」生き物文化誌学会例会、国立民族学博物館

2021年3月21日 「鳥居龍蔵が残した千島と樺太の先住民関連資料」鳥居龍蔵生誕150周年記念国際シンポジウム『鳥居龍蔵と現代社会』徳島県立21世紀館文化の森イベントホール

- ・みんぱくゼミナール

2020年10月17日 「アイヌ文学の世界——韓・日との比較」（北原モコットウナシ（北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授）と共に登壇）第503回みんぱくゼミナール

- ・展示

2020年10月1日～12月15日 「先住民の宝」国立民族学博物館

- ・みんぱくウィークエンド・サロン

2020年11月1日 「100年前のアイヌのくらしと現代の文化」第577回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

- ・広報・社会連携活動

2020年8月12日 「毎日放送（MBS）『ミント』特集『トナカイ』『ラッコ』『ノンノ』は実は『アイヌ語』『日本の民族として伝えたい』“大阪アイヌ”が思うこと』録画取材」

2020年10月27日 「講義『アイヌ民族の歴史と文化』」智辯学園中学校、国立民族学博物館講堂

2020年11月14日 「アイヌ民族とのコラボ——隣の文化を知るために」（千里コラボ大学校）千里文化センター市民実行委員会、豊中市千里文化センター

2020年11月20日 「アイヌの宝とは何か」（民博夜話）特定非営利活動法人吹田歴史文化まちづくり協会、吹田歴史文化まちづくりセンター浜屋敷

◎調査活動

- ・国内調査

2020年10月9日～10月10日—北海道白老町（アイヌ文化展示、およびアイヌ文化普及啓発事業に関する調査）

◎大学院教育

- ・指導教員

副指導教員（2人）、特別共同利用研究員の研究指導教員（1人）

- ・大学院ゼミでの活動

「地域文化学基礎演習 I」、「地域文化学基礎演習 II」、「比較文化学基礎演習 I」、「比較文化学基礎演習 II」、テーマシリーズ講義「アイヌ民族と博物館」

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

国立民族学博物館特別研究「パフォーミング・アーツと積極的共生」（研究代表者：寺田吉孝・福岡正太）メンバー、国立民族学博物館共同研究「沙流川調査を中心とする泉靖一資料の再検討」（研究代表者：大西秀之（同志社女子大学））メンバー、国立民族学博物館共同研究「環北太平洋地域の先住民社会の変化、現状、未来に関する学際的比較研究——人類史的視点から」（研究代表者：岸上伸啓）メンバー、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査研究・活用——日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築」（研究代表者：日高 薫（国立歴史民俗博物館））メンバー、人間文化研究機構

ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究拠点」(拠点代表者:池谷和信) 拠点構成員

◎社会活動・館外活動

・その他の社会活動・館外活動

国立アイヌ民族博物館運営会議構成員、吹田市立博物館協議会委員、公益財団法人アイヌ民族文化財団評議員、北海道立北方民族博物館研究協力員

丹羽典生 [にわ のりお]

准教授

【学歴】 慶應義塾大学文学部卒 (1996)、東京都立大学大学院社会科学部研究科修士課程修了 (1999)、東京都立大学大学院社会科学部研究科博士課程単位取得退学 (2005) **【職歴】** 法政大学経済学部教育補助員 (2004)、法政大学社会学部兼任教員 (2005)、日本学術振興会特別研究員 PD (2005)、国立東京工業高等専門学校非常勤講師 (2006)、首都大学東京非常勤講師 (2006)、ハワイ大学マノア校人類学科客員研究員 (2006)、筑波大学非常勤講師 (2007)、法政大学非常勤講師 (2008)、国際基督教大学非常勤講師 (2008)、国立民族学博物館研究戦略センター助教 (2008)、国立民族学博物館民族文化研究部准教授 (2012)、国立民族学博物館研究戦略センター准教授 (2013)、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部准教授 (2017) **【学位】** 博士 (社会人類学) (東京都立大学 2006)、修士 (社会人類学) (東京都立大学 1999) **【専攻・専門】** 社会人類学、オセアニア地域研究 **【所属学会】** 日本文化人類学会、日本オセアニア学会、東京都立大学社会人類学会、早稲田文化人類学会、Association for Social Anthropology in Oceania、The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences

【主要業績】

[単著]

丹羽典生

2009 『脱伝統としての開発——フィジー・ラミ運動の歴史人類学』 東京: 明石書店。[査読有]

[編著]

丹羽典生編

2020 『応援の人類学』 東京: 青弓社。[査読有]

2016 『〈紛争〉の比較民族誌——グローバル化におけるオセアニアの暴力・民族対立・政治的混乱』 横浜: 春風社。[査読有]

【受賞歴】

2010 第9回オセアニア学会賞

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

応援の人類学

・研究の目的、内容

本研究は、応援という視角から人類の諸文化を通文化的に比較しながら、文化人類学的に考察することを目的とする。調査手法としては、関連資料や文献の収集を中心に、適宜聞き取りを行う。応援の下位項目として、政治、スポーツ、ファン文化をさしあたり設定し、世界の事例を取り上げ検討する。主たる事例としては、日本の大学を中心とする応援団の諸活動を具体的な民族誌的研究の対象とする。

・成果

編著『応援の人類学』(青弓社、2020年)を刊行した。当該書籍には論考を2本掲載している。論集では「応援」を学問的に取り扱うための概念整理を行い、日本文化として済ませられてきた現象を、文化比較の視点から包括的に考察する枠組みを提示した。関連する英語論文を投稿中であり、また新聞記事データベースの資料をもとに、「応援」がどのように扱われてきたのか戦前から現在までの時間軸で言説分析する論文の執筆を進めている。

◎出版物による業績

[編著]

丹羽典生編

2020 『応援の人類学』 東京：青弓社。[査読有]

[分担執筆]

丹羽典生

2020 「野次、喝采そして応援——応援の人類学的研究に向けて」 丹羽典生編『応援の人類学』 pp.13-37, 東京：青弓社。[査読有]

2020 「日本の大学応援団の原型——その変容と組織秩序が示唆する論点を考える」 丹羽典生編『応援の人類学』 pp.63-83, 東京：青弓社。[査読有]

2020 「あとがき」 丹羽典生編『応援の人類学』 pp.325-327, 東京：青弓社。[査読有]

2020 「植民地——ヨーロッパ諸社会による支配と先住民フィジー人の自律」 梅崎昌裕・風間計博編『オセアニアで学ぶ人類学』 pp.213-225, 京都：昭和堂。

[論文]

丹羽典生

2021 「探検家朝枝利男の後半生——アメリカ日系人収容所での生活から博物館での活躍まで」『経済志林』 88(3)：21-42。

[その他]

丹羽典生

2020 「海と生きる人びとの生活と独立期のパプアニューギニア——大島襄二写真コレクション」 特集「拡がる写真データベース」『月刊みんぱく』 44(7)：8-9。

2020 「データベース『朝枝利男コレクション』の特徴と残された課題」『民博通信 Online』 2：6-7。

2021 「オセアニアの嗜好品」 野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』 pp.555-556, 東京：丸善出版。

2021 「人生儀礼と食」 野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』 pp.322-325, 東京：丸善出版。

◎映像音響メディアによる業績

・DVD・CDなどの制作・監修

山田 亨・佐久間寛・丹羽典生・吉田ゆか子 監修

2020 『Circle of life = 人生の節目の儀礼』(Rituals = 世界の祭・儀礼 1) (英語・日本語・50分) 東京：丸善出版。

2020 『Great gatherings = 大規模な集団で行う儀礼』(Rituals = 世界の祭・儀礼 4) (英語・日本語・50分) 東京：丸善出版。

2020 『Initiation = はじまりの儀礼』(Rituals = 世界の祭・儀礼2) (英語・日本語・50分) 東京：丸善出版。

2020 『The power of nature = 自然を敬う儀礼』(Rituals = 世界の祭・儀礼 3) (英語・日本語・50分) 東京：丸善出版。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2020年11月28日 「民族誌的資料からみるフィジーの葬儀の変化」 国立民族学博物館共同研究「島世界における葬送の人類学——東南アジア・東アジア・オセアニアの時空間比較」第7セミナー室、オンラインとのハイブリッド開催

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年12月12日 「〈複数のアイデンティティを潜在的に抱えた集合体〉の民族誌——フィジー・レヴカの少数民族の事例から考える」 科学研究費補助金「紛争後社会のレジリエンス——オセアニア少数民族の社会関係資本と移民ネットワーク分析」研究会、オンライン開催

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「紛争後社会のレジリエンス——オセアニア少数民族の社会関係資本と移民ネットワーク分析」研究代表者

◎社会活動・館外活動

- ・他の機関から委嘱された委員など

日本オセアニア学会理事

- ・他大学の客員、非常勤講師

同志社大学「アジア・オセアニア地域の文化16」

南 真木人 [みなみ まきと] ————— 准教授

1961年生。【学歴】弘前大学人文学部人文学科卒（1985）、筑波大学大学院環境科学研究科修士課程修了（1989）、筑波大学大学院歴史・人類学研究科博士課程退学（1991）【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手（1991）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2003）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2005）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2007）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2011）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2015）、国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授（2017）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター准教授（2019）【学位】学術修士（筑波大学大学院環境科学研究科 1989）【専攻・専門】人類学、南アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、日本南アジア学会、生態人類学会

【主要業績】

[共編]

南 真木人・石井 溥編

2015 『現代ネパールの政治と社会——民主化とマオイストの影響の拡大』（世界人権問題叢書92）東京：明石書店。

Yamashita, S., M. Minami, D. W. Haines, and J. S. Eades (eds.)

2008 *Transnational Migration in East Asia: Japan in a Comparative Focus* (Senri Ethnological Reports 77). Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Minami, M.

2007 From Tika to Kata?: Ethnic Movements among the Magars in an Age of Globalization. In H. Ishii, D. N. Gellner, and K. Nawa (eds.) *Social Dynamics in Northern South Asia Vol.1: Nepal Inside and Outside Nepal*, pp. 443-466. New Delhi: Manohar.

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

- ・研究課題

ネパールにおける移住労働の常態化と新型コロナウイルス感染拡大後の地域像

- ・研究の目的、内容

本研究の目的は、ネパールの調査村を事例として、移住労働が常態化していたネパールの村において新型コロナウイルス感染拡大は何をもたらしているのかを明らかにするものである。具体的には、1) 移住労働の常態化を、調査村のある仲介者が海外に送った54人（2003～14年）のその後を更新することで裏づける。その内の数名（帰国者）に対して移住への過程、現地の生活、帰国後の生活や変化について聞き取り調査し、経済的変化（送金、農業の女性化、焼畑の縮小等）、社会的・文化的変化（社会的送付、通過儀礼的なライブイベント化、旧SLC前の学校中退、男女の役割、「伝統」的な価値観の変容〔歌垣の衰退など〕等）を把握する。さらに、2) 新型コロナウイルス感染拡大後の移住労働の現状、帰国できなくなった労働者の状況、渡航できなくなった若者の選択、村の生活の変化等について明らかにする。

・成果

科学研究費（基盤研究（B））「移動・移民による地域像の再構築——ネパールを越えるネパール地域研究の試み」（研究分担者）の一環としてネパールにおいて現地調査を行なう計画だったが、コロナ下で渡航不可能となり、日本におけるネパール人移住労働者の調査に切り替えた。対面の聞き取り調査に際し初対面の人は避け、既知の知人を調査対象とした。具体的には、東関東と石川県のインド・ネパール料理店に2人の知人を訪ね、新型コロナウイルス感染拡大後の営業状況や労働の現状を調べた。立地にもよるが、日本人が経営する店とネパール人が経営する店とでは、前者がコロナ対応や営業の工夫で対処しているのに対し、後者の経営の厳しさが見てとれた。とはいえ後者にしても、各種の公的給付金や協力金を、その存在を伝え申請書作成をビジネスとする日本人行政書士を介して得ており、加えて篤志家的な日本人に支えられ営業を継続していた。成果の一部は、論文としてMINDASの成果論文集に寄稿中である。

◎出版物による業績

[分担執筆]

南 真木人

2020 「モノから探るネパールの『手芸』」上羽陽子・山崎明子編『現代手芸考——ものづくりの意味を問い直す』pp.125-128, 東京：フィルムアート社。

2020 「ネパールの食事」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.588-589, 東京：丸善出版。

2021 「マガールの『歌垣』的歌舞」江口一久編、八木祐子・手塚恵子編集編『儀礼と口頭伝承』pp.321-346, 東京：風響社。

[その他]

南 真木人

2020 「1980年代のサーランギ音楽の共有化」『民博通信 Online』2：8-9。

2020 「世界の温泉にわけいる」特集「世界温泉めぐり」『月刊みんぱく』44(11)：2-3。

2021 「鹿野勝彦著『ヒマラヤ縦走——「鉄の時代」のヒマラヤ登山』」『山』908：5-6。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2021年2月13日 ‘Collaboration between Museums and the Source Community: Sharing Audio Materials of the Sarangi Music of the ‘80s in Nepal.’ “Cultural Transmission against Collective Amnesia: Bodies and Things in Heritage Practices”, First Session: Transmission of Records and Media, オンライン開催

・共同研究会での報告

2021年3月18日 「民博ネパール関連データベースの来し方行く末」2020年度研究成果公開促進費（データベース）打ち合わせおよび身装文化デジタルアーカイブ研究会、国立民族学博物館、オンラインとのハイブリッド開催

・みんぱくウィークエンド・サロン

2020年10月11日 「ネパールの先住民運動」第574回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

・広報・社会連携活動

2021年1月30日 「ネパールのサーランギ音楽解説」みんぱく映像民族誌シアター、国立民族学博物館、淀川文化創造館シアターセブン、オンライン開催

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1人）

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文予備審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（研究成果公開促進費（データベース））「服装・身装文化デジタルアーカイブ」（研究代表者：高橋晴子（大阪樟蔭女子大学））研究協力者、科学研究費（基盤研究（B））「移動・移民による地域像の再構築——

ネパールを越えるネパール地域研究の試み」(研究代表者:森本 泉(明治学院大学))研究分担者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究 国立民族学博物館拠点(MINDAS)」(拠点代表者:三尾 稔)拠点構成員

諸 昭喜 [チェ ソヒ]——— 助教

1979年生。【学歴】大韓民国ソウル大学師範学部地理教育学科卒(2005)、大韓民国ソウル大学社会科学大学院人類学科修士課程修了(2011)、奈良女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程修了(2019)【職歴】大韓民国東アジア財団事務局幹事(2005)、大韓民国ソウル大学日本研究所補助研究員(2007)、大韓民国ソウル大学奎章閣韓国学研究院研究補助員(2008)、大韓民国ソウル大学言語教育院外国語教育センター職員(2011)、大韓民国東アジア財団出版プロジェクトプロジェクト研究員(2011)、大韓民国ソウル大学教育研修院英語研修チームチーム長(2012)、大韓民国ソウル大学病院医生命研究院治験コーディネーター(2014)、奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究センター協力研究員(2019)、奈良県韓国教育院会話講座非常勤講師(2019)、奈良市立看護専門学校文化人類学非常勤講師(2019)、国立民族学博物館学術資源研究開発センター助教(2020)【学位】学術博士(奈良女子大学大学院 2019)、修士(人類学)(大韓民国ソウル大学社会科学大学院 2011)【専攻・専門】医療人類学 朝鮮半島地域、民俗特有の病い、産後養生と産後儀礼、民間医療とケア【所属学会】日本文化人類学会、日本ジェンダー学会

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

社会の変化と民間にみられる産後病の変容

・研究の目的、内容

本研究は、文化特有の病いと社会・文化との関係を、患者の語りに焦点を当てて分析することを主たる目的としている。

①研究対象は韓国の産後の女性に特有の「産後風」といわれる症状であり、本年度は、韓国の若い世代に対する調査を行い、社会の近代化と病いの変容に焦点を当てた。産後ケアを大事にするようになった現在の韓国でも産後の症状を訴える患者たちは常に存在するが、その語りの内容は世代によって異なる。そこで、伝統医学における病いが時代とともに変容するさまを、患者自身の症状に対する解釈の変化も含めて明らかにする。

②今年度の韓国調査では、新しいコロナ禍に対応するヘルスケア形態の変化がみられ、そのメタファーに注目した。COVID-19に関し韓国と日本は危機状況をどのように直観的認識、いかなるメタファーを使って、類似性を結びつけて認識し、また、行動するかを調べた。

③バングラデシュにも産後の女性と赤ん坊が脆弱な状態と見なし、日常から分離して保護する慣習がありながら、産後の民俗特有の病いが存在することで、2020年3月にバングラデシュでの調査を行った。本年度はその結果を分析し、民俗特有の病い、民間薬草や儀礼より、国の政策的による製薬産業の発達によって、非常に多い医薬品が妊娠中の女性に使われている事へ着目するに至った。

・成果

①韓国での調査は科学研究費(研究活動スタート支援)「社会変化と民俗特有の病いの変容:韓国と台湾の産後の病いに対する比較研究」による外部資金を用いて実施した。博士論文の内容と今年度の調査結果を発展させ、民俗病の歴史と近代化、病いのイデオロムから見る妊娠と産後の体、共有されている病いの語りと時代の反映、漢方の中で構築される民間の病いというそれぞれのテーマで、学術図書の執筆、編集をすすめ、韓国の韓国学中央研究院の2021年度の出版助成により、刊行を予定している。

②韓国文化人類学会、AJJ,そして、比較文明学会で発表では、病のメタファー研究一環として、COVID-19というウイルスとその感染症を巡って韓国と日本で主に使われる「戦争」と「災害」という表現に着目し、状況がどのような記述され、対応を作り出しているかを扱ってみた。ウイルスが外部からの侵入としてイメージ化され「打ち勝つ」対象に、防疫は国家の安全を守護する「戦争」となる韓国の対応と、新しいウイルスは人類歴史上常に存在したのものとして認識し、人々が冷静さ、理性を保つために現状を「禍」や自然災害の比喩が使われる日本と比較した。

③に関しては、科学研究費(基盤研究(B))「MDG5(ミレニアム開発目標)達成に向けたアジアのマタニティ政策の検証——脱医療化とポジティブな出産経験」(研究代表者:松岡悦子)の分担研究者として、外部資金を用いて実施した。共同研究会で「バングラデシュ農村部での妊娠中の薬の使用」のタイトルで研究報告を

実施し、母子保健の向上のために、政府機関から国内、海外の NGO 団体まで多くの医療従事者が現場で乱立している現状と、母性死亡率を国際保健基準の目標まで達成するため、国際 NGO 団体からの無償薬品や国内ジェネリック薬が妊婦に過度に提供、または販売されている側面を指摘した。具体的に、産婦によく見られるつわり、めまい、腰痛などの症状に、どんな薬が誰から処方され、どの程度服用されているかについて調査し、妊娠期間中の医療化に関して問題を提起した。報告書は2021年度に出版予定である。

◎出版物による業績

[分担執筆]

제소희

2020 「'버티기'가 아닌 '적소 만들기」 인류학연구소 『언어를 따라간 인류학자』 pp.179-197, Seoul: Minsokwon.

[その他]

諸 昭喜

2020 「出産を守ってくれるサン神——韓国」『みんなく e-news』 233: 巻頭コラム。

2020 「モムサル薬をお願いします」『月刊みんなく』 44(12): 20。

2021 「旅・いろいろ地球人 韓国の出産準備物① おくるみと『驚気』」『毎日新聞』 3月6日夕刊。

2021 「旅・いろいろ地球人 韓国の出産準備物② 産着——ペネッチョゴリ」『毎日新聞』 3月13日夕刊。

2021 「旅・いろいろ地球人 韓国の出産準備物③ へその緒の保管」『毎日新聞』 3月27日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2020年12月15日 「バングラデシュ農村部での妊娠中の薬の使用」『MDG 5 達成に向けたアジアのマタニティ政策の検証』 オンライン開催

・民博研究懇談会

2020年10月28日 「産後の民俗病に関する人類学的研究——韓国のサムブンを中心に」

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年9月27日 'Social Change and the Transformation of Folk illness: A Comparative Study of Postpartum illnesses in Korea and Taiwan.' 臺灣人類學與民族學學會2020年會, National Chi Nan University, Taiwan, オンライン開催

2020年11月7日 「의료적 로컬 지식의 형성과 건강 관련 행동: 일본 (긴키지역) 의 Covid-19 상황을 사례로」 2020 한국문화인류학회, オンライン開催

2020年12月5日 "Disaster" and "Battle": Two different metaphors of COVID-19 among South Korea and Japan.' 2020 Annual Meeting of Anthropology of Japan in Japan, オンライン開催

2021年2月21日 「Covid-19に対する2つのメタファー‘災害’と‘戦争’——日本と韓国の事例を中心に」比較文明学会関西支部第48回例会、国立民族学博物館、オンライン開催

◎調査活動

・海外調査

2020年12月18日～2021年1月8日——韓国（韓国のCOVID-19状況でも漢方と民間医療変化調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「MDG 5 達成に向けたアジアのマタニティ政策の検証-脱医療化とポジティブな出産経験」（研究代表者：松岡悦子（奈良女子大学））研究分担者、科学研究費（研究活動スタート支援）「社会変化と民俗特有の病いの変容——韓国と台湾の産後の病いに対する比較研究」研究代表者、国立民族学博物館共同研究「戦争・帝国主義と食の変容——食と国家の関係を再考する」（研究代表者：宇田川妙子）メンバー、国立民族学博物館共同研究「月経をめぐる国際開発の影響の比較研究——ジェンダーおよび医療化の視点から」（研究代表者：新本万里子）メンバー、国立民族学博物館特別研究「コロナ禍における文化の免疫系としてのローカル文化の検証——東アジアを中心に」（研究代表者：島村一平）メンバー

・民間の奨学金及び助成金からのプロジェクト

Korean Studies Grant 2021: Scholarly Book Publication「産後の風、その望み——民俗病の語りからみる韓国女性と出産」研究代表者

◎社会活動・館外活動

- ・他大学の客員、非常勤講師
奈良市立看護専門学校「文化人類学」

八木百合子 [やぎ ゆりこ] ————— 助教

【学歴】天理大学国際文化学部イスパニア学科卒（2001）、三重大学大学院人文社会科学研究科修士課程修了（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程単位取得退学（2011）【職歴】在ペルー日本国大使館専門調査員（2012）、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員（2015）、国立民族学博物館助教（2018）【学位】博士（文学）（総合研究大学院大学 2012）、修士（人文科学）（三重大学 2004）【専攻・専門】文化人類学、アンデス民族学、ラテンアメリカ地域研究【所属学会】日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会

【主要業績】

[単著]

八木百合子

2015 『アンデスの聖人信仰——人の移動が織りなす文化のダイナミズム』京都：臨川書店。

[論文]

八木百合子

2012 「聖女に捧げられた大聖堂——近代ペルーの都市建設に埋め込まれたコンフリクト」染田秀藤・關 雄二・網野徹哉編『アンデス世界——交渉と創造の力学』pp.243-267, 京都：世界思想社。

2009 「サンタ・ロサ信仰の形成と発展——20世紀ペルー社会における展開を中心に」『総研大文化科学研究』5：5-28。

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

現代アンデスにおける寄進と宗教性に関する研究

・研究の目的、内容

本研究はアンデス地域における宗教実践の一つとして、寄進に着目し、聖人信仰をめぐって展開される人びとの宗教性について検討をおこなうものである。これまでアンデスの聖人信仰に関する研究では、聖人祭礼の主催者と役職者との関係や聖人に奉納する民俗舞踊グループの動向をはじめ、聖人をとりまく諸集団に主眼をおいた分析が中心であったが、本研究は寄進をおこなう個々の人びとの様態に着目していく。

具体的には、近年、寄進の増加が著しく観察されるペルー南部クスコ市の教会を対象に、これまでに納められた奉納品についての調査を実施し、どのような人が、いかなる寄進をおこなっているのかを明らかにする。対象となるのは、同じクスコ市の3つの教区教会であるが、それぞれ教区住民の構成や歴史的な背景が異なる地区に位置する。これにより、多様な民族や社会集団から構成されるアンデス地域の人びとの宗教性をさまざまな角度から分析・考察するのがねらいである。

研究の遂行にあたっては、科学研究費（若手研究）「現代アンデス地域における寄進と宗教性に関する研究——奉納品と教会記録の分析を中心に」の計画にしたがい、ペルー南部クスコ市の3つの教会を対象に調査分析をすすめる。

・成果

本年度は調査対象となる3つの教区教会のうち、農村からの移住者の拡大によって地区住民が大きく増加しているA教区の主要な奉納品としてケープについて、前年度までの予備調査で収集したデータの検討をおこない、特に1990年代以降、奉納品の数やデザインに大きな変化がみられる点が明らかになった。これらの点を含め、同教区で収集した奉納品に関する情報を整理して、スペイン語の報告書 *Catálogo de las Capas y Vestimentas de la Virgen de Natividad del Templo de Almudena* (全113頁) を作成し、クスコ大司教府文化財管理局に提出した。

また、これまで取り組んできたアンデス地域の宗教の展開におけるモノの役割に関して、「受け継がれるアンデスの聖像」と題する論考を『季刊民族学』に発表したほか、2020年3月に終了した民博（若手）共同研究「モノをとらえてみる宗教的世界の諸相」の成果刊行の一環として、連載企画「モノからみた宗教の世界」を同季

刊誌において7月からスタートさせた。このほか、研究成果の社会還元の一つとして、上記共同研究会で検討したモノや関連する民博の標本資料を身近なツール（カレンダー）をつうじて紹介する企画・編集をフロッグス株式会社と共同でおこない、万年型カレンダー『モノとイトナミ365——世界の暮らしと文化』を作成した（2021年6月発行予定）。

◎出版物による業績

[共編]

ラテンアメリカ文化事典編集委員会編（[編集委員長] 関 雄二 [編集幹事] 齋藤 晃・鈴木 紀・村上勇介・八木百合子 [編集委員] 井口欣也・岡田裕成・窪田 暁・佐々木直美・浜下 賢・清水達也・杓谷茂樹・田島久歳・ダニエル・ダンテ・サウセド・セガミ・鼓 宗・細谷広美・山脇千賀子・若林大我）

2021 『ラテンアメリカ文化事典』東京：丸善出版。

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（若手研究）「現代アンデスにおける寄進と宗教性に関する研究——奉納品と教会記録の分析を中心に」研究代表者、国立民族学博物館共同研究「ネオリベラリズムのモラルリティ」（研究代表者：田沼幸子）メンバー、国立民族学博物館共同研究「モビリティと物質性の人類学」（研究代表者：古川不可知）メンバー

国際研究統括室

平井京之介 [ひらい きょうのすけ]——室長(併)、副館長(研究・国際交流・IR担当)、グローバル現象研究部教授

齋藤 晃 [さいとう あきら]——兼：人類文明誌研究部教授

韓 敏 [ハン ミン]——兼：超域フィールド科学研究部教授

福岡正太 [ふくおか しょうた]——兼：人類基礎理論研究部教授

卯田宗平 [うだ しゅうへい]——兼：人類文明誌研究部准教授

鈴木英明 [すずき ひであき]——兼：グローバル現象研究部准教授

丹羽典生 [にわ のりお]——兼：学術資源研究開発センター准教授

IR室

平井京之介 [ひらい きょうのすけ]——室長(併)、副館長(研究・国際交流・IR担当)、グローバル現象研究部教授

寺村裕史 [てらむら ひろふみ]——兼：人類文明誌研究部准教授

吉岡 乾 [よしおか のぼる]——兼：人類基礎理論研究部准教授

末森 薫 [すえもり かおる]——兼：人類基礎理論研究部助教

上畑 史 [うえはた ふみ]——兼：グローバル現象研究部機関研究員

梅棹資料室

飯田 卓 [いいだ たく]——併：人類文明誌研究部教授

機関研究員

上畑 史 [うえはた ふみ]——機関研究員

【学歴】大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻・音楽学博士後期課程単位取得退学（2017）【職歴】日本学術振興会特別研究員 DC（2015）、日本学術振興会特別研究員 PD（2017）、国立民族学博物館グローバル現象研究部機関研究員（2020）【学位】博士（文学）（大阪大学 2020）【専攻・専門】音楽学、民俗音楽研究、ポピュラー音楽研究、セルビア／旧ユーゴスラヴィア／バルカンの音楽文化研究【所属学会】民族藝術学会、東洋音楽学会、待兼山芸術学会

【主要業績】

[分担執筆]

上畑 史

- 2019 「第50章 伝統音楽セヴダリンカ——古（いにしえ）の古都の音風景」柴宜 弘・山崎信一編『ボスニア・ヘルツェゴヴィナを知るための60章』pp.302-306, 東京：明石書店。
- 2015 「第52章 クラシック音楽と大衆音楽——『オリエント』の受容と拒絶」柴宜 弘・山崎信一編『セルビアを知るための60章』pp.287-291, 東京：明石書店。

[論文]

上畑 史

- 2011 「セルビアにおけるロマのプラス——民俗文化からの逸脱」『民族藝術』27：130-139。

【2020年度の活動報告】

◎出版物による業績

[論文]

上畑 史

- 2021 「(令和元年度博士論文(課程)要旨)セルビアのポピュラー音楽『ターボフォーク』における民族的アイデンティティの表出とその文化的実践」『大阪大学大学院文学研究科紀要』61：191-192。
- 2021 「音楽と民族的アイデンティティ——セルビアの民俗調ポピュラー音楽『ターボフォーク』の言説と実態」『民族藝術学会誌 arts/』37：38-49。

[その他]

上畑 史

- 2020 「歌姫 JK のコンサート——『新しい生活様式』のオンラインライヴ（関西の音と人）『大阪日日新聞』8月18日。
- 2021 「愛すべき『のんべえ』」『月刊みんぱく』45(1)：20。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・民博研究懇談会

2021年2月4日 「ポピュラー音楽と民族的アイデンティティ——セルビアのターボフォークを例に」

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2020年7月6日 「ポピュラー音楽と民族性——セルビアにおけるターボフォークの言説と実態」民族藝術学会大会シンポジウム『2010年代のポップフォーク（東欧演歌）』オンライン開催
- 2020年10月11日 「セルビアのポピュラー音楽『ターボフォーク』における民族的アイデンティティの表出とその文化的実践」東洋音楽学会西日本支部第287回定例研究会、オンライン開催

・研究講演

2020年5月19日 「セルビアのポピュラー音楽『ターボフォーク』における民族的アイデンティティの表出とその文化的実践」(大阪大学文学部文学研究科開講科目「音楽学演習」ゲスト講義)大阪大学文学部文学研究科音楽学研究室、オンライン開催

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費(国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B)))「東欧の音楽文化に関する民俗学的調査と編曲作品研究」(研究代表者:伊東信宏(大阪大学))研究分担者

大澤由実 [おおさわ よしみ]————— 機関研究員

【学歴】 ケント大学大学院人類学部修士課程修了(2005)、ケント大学大学院人類学・保全学研究科博士課程修了(2011) 【職歴】 欧州大学院大学歴史・文明学研究科研究員(2012)、チェンマイ大学社会科学部・社会科学と持続可能な開発のための地域センター特別研究員(2013)、京都大学学術研究支援室URA(2014)、国立民族学博物館学術資源研究開発センター機関研究員(2018) 【学位】 Ph.D.(民族生物学)(ケント大学 2012)、M. Sc.(民族植物学)(ケント大学 2005) 【専攻・専門】 食の人類学、民族植物学 味の文化的認識と表象、味のグローバル化

【主要業績】

[分担執筆]

Osawa, Y.

2018 “We Can Taste but Others Cannot”: Umami as an Exclusively Japanese Concept. In N. K. Stalker (ed.) *Devouring Japan: Global Perspectives on Japanese Culinary Identity*, pp.118-132. Oxford: Oxford University Press.

【2020年度の活動報告】

◎出版物による業績

[その他]

大澤由実

2020 「台所」『月刊みんぱく』44(4):16-17

2020 「タイの日本食文化」『Vesta』119:38-41

◎口頭発表・展示・その他の業績

- ・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年5月31日 「タイにおけるMSG(グルタミン酸ナトリウム)の受容と拒絶」日本文化人類学会第54回研究大会、早稲田大学、オンライン開催

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費(研究活動スタート支援)「食の認識体系とその変容——タイにおけるMSG(グルタミン酸ナトリウム)の消費と拒絶」研究代表者、人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「アジアにおける「エコヘルス」研究の新展開」民博ユニット「文明社会における食の布置」(研究代表者:野林厚志)研究分担者

◎社会活動・館外活動等

- ・他大学の客員、非常勤講師

龍谷大学農学部非常勤講師「栽培植物と農耕の起源」、立命館大学非常勤講師「世界と日本の食文化」

金 悠進 [キム ユジン]————— 機関研究員

1990年生。【学歴】同志社大学法学部政治学科卒業(2014)、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程修了(2020) 【職歴】京都大学東南アジア地域研究研究所連携研究員(2020)、国立民族学博物館機関研究員(2020) 【学位】博士(地域研究)(京都大学大学院 2020) 【専攻・専門】インドネシアのポピュラー音楽、若者のイ

ンディペンデントな文化実践や、都市型ポップの歴史的な形成過程、ロック音楽産業と政治権力の相互依存関係などについての研究【所属学会】東南アジア学会、日本ポピュラー音楽学会、カルチュラル・スタディーズ学会、アジア政経学会、関西社会学会、東洋音楽学会

【主要業績】

[単著]

金 悠進

2020 『越境する〈発火点〉——インドネシア・ミュージシャンの表現世界』東京：風響社。

[分担執筆]

金 悠進

2018 「インドネシア・インディーズ音楽の夜明けと成熟」福岡まどか・福岡正太編『東南アジアのポピュラーカルチャー——アイデンティティ・国家・グローバル化』pp.330-355, 東京：スタイルノート。

[論文]

金 悠進

2020 「『シティポップ』なきポップス——ジャカルタ都会派音楽の実像」『ポピュラー音楽研究』24：35-51。
[査読有]

【2020年度の活動報告】

◎出版物による業績

[単著]

金 悠進

2020 『越境する〈発火点〉——インドネシア・ミュージシャンの表現世界』東京：風響社。

[論文]

金 悠進

2020 「『シティポップ』なきポップス——ジャカルタ都会派音楽の実像」『ポピュラー音楽研究』24：35-51。[査読有]

[その他]

金 悠進

2021 「在日は『ひどすぎる]?」『月刊みんぱく』45(2)：20。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・民博研究懇談会

2021年1月14日 「異国趣味を超えて——“インドネシア（らしい）音楽”とは何か」

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年6月6日 「非民主的法案の創造——インドネシアにおける創造経済と文化実践の相互依存に着目して」2020年度アジア政経学会春季大会、ウェブでの書面開催

2020年9月20日 「〈タバコとロック〉の民主性——インドネシアの音楽産業における華人と軍の役割に着目して」第18回嗜好品文化フォーラム、オンライン開催

2020年10月10日 「すれちがう『表現の自由』——インドネシアの音楽ライブ空間における権力作用」第71回関西社会学会大会、オンライン開催

2021年3月6日 「『ワールド・ミュージック』のなかのインドネシア音楽——日本の音楽評論家たちの言説空間」東洋音楽学会西日本支部第288回定例研究会、オンライン開催

プロジェクト研究員

石原 和 [いしはら やまと]——プロジェクト研究員

【学歴】立命館大学文学部人文学科日本史学専攻卒（2011）、立命館大学大学院文学研究科人文学専攻日本史学専修博士課程前期課程修了（2012）、立命館大学大学院文学研究科人文学専攻日本史学専修博士課程後期課程修了（2017）【職歴】日本学術振興会特別研究員 DC 2（2014）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部プロジェクト研究

員（2017）、立命館大学授業担当講師（2018）【学位】博士（文学）（立命館大学大学院 2017）【専攻・専門】日本史学 思想史、宗教史、宗教学【所属学会】歴史学研究会、日本歴史学会、日本史研究会、「宗教と社会」学会、日本思想史学会、日本宗教学会、RA 協議会

【主要業績】

[単著]

石原 和

2020 『「ぞめき」の時空間と如来教 近世後期の救済論的転回』京都：法藏館。

[編著]

石原 和・吉永進一・並木英子編

2020 『月見里神社史料・宮城島家史料目録——近代清水の神職たちと鎮魂婦神』（日本新宗教史像の再構築——アーカイブと研究者ネットワーク整備）。

[論文]

石原 和

2018 「民衆宗教」大谷栄一・菊地 暁・永岡 崇編『日本宗教史のキーワード 近代主義を超えて』pp.229-235, 東京：慶應義塾大学出版会。

【2020年度の活動報告】

◎出版物による業績

[単著]

石原 和

2020 『「ぞめき」の時空間と如来教 近世後期の救済論的転回』京都：法藏館。

[編著]

石原 和・吉永進一・並木英子編

2020 『月見里神社史料・宮城島家史料目録——近代清水の神職たちと鎮魂婦神』（日本新宗教史像の再構築——アーカイブと研究者ネットワーク整備）。

[論文]

石原 和

2020 「月見里神社・稲荷講社関係史料と明治期の民間宗教者の活動・公認」石原 和・吉永進一・並木英子編『『月見里神社史料・宮城島家史料目録——近代清水の神職たちと鎮魂婦神』（日本新宗教史像の再構築——アーカイブと研究者ネットワーク整備）pp.20-29。

[その他]

石原 和

2020 「如来教の時代の救済論——身体から心へ 上」『中日新聞』11月10日。

2020 「如来教の時代の救済論——身体から心へ 上」『東京新聞』11月16日。

2020 「如来教の時代の救済論——身体から心へ 下」『中日新聞』11月17日。

2020 「如来教の時代の救済論——身体から心へ 下」『東京新聞』11月23日。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年7月26日 「月見里神社・稲荷講社史料と大本に関する新発見」『大本七十年史』研究会×新宗教科学研究会『新資料と新たな大本研究』オンライン開催

2021年1月21日 「1800年前後の名古屋城下の宗教と如来教——民衆宗教の境界領域に注目して」奈良歴史研究会、オンライン開催

2021年3月20日 「近世後期名古屋の宗教動向と如来教——宗派越境的研究の試み」歴史学研究会日本近世史部会第1回準備報告会、オンライン開催

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（若手研究）「近世近代移行期における教団未満の宗教者と新宗教をめぐる史的研究」研究代表者

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

立命館大学「キャンパスアジア日本研究Ⅱ (LA)」、立命館大学「キャンパスアジア日本研究Ⅱ (LB)」、立命館大学「日本史特殊講義 (LD)」、立命館大学「日本史Ⅱ (L)」、大阪大学「手話の世界と世界の手話言語入門 (リレー講義)」

石山 俊 [いしやま しゅん] ————— プロジェクト研究員

【学歴】名古屋大学大学院文学研究科満期退学 (2006) 【職歴】大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球環境学研究所プロジェクト研究員 (2008)、大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球環境学研究所外来研究員 (2014)、大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球環境学研究所プロジェクト研究員 (2015)、大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球環境学研究所外来研究員 (2017)、大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球環境学研究所プロジェクト研究員 (2017) 【学位】博士 (文学) (名古屋大学大学院 2015) 【専攻・専門】文化人類学、環境人類学、アフリカ、中東乾燥地文化研究、農耕社会研究 【所属学会】日本アフリカ学会、日本中東学会、日本文化人類学会、日本沙漠学会

【主要業績】

[編著]

石山 俊編

2017 『サーヘル内陸国チャドの環境人類学——貧困・紛争・「砂漠化」の構造』名古屋：名古屋大学大学院。

[共編]

石山 俊・縄田浩志編

2013 『ポスト石油時代の人づくり・モノづくり——日本と産油国の未来像を求めて地球研叢書16』京都：昭和三堂。

2013 『ナツメヤシ アラブなりわい生態系シリーズ2』京都：臨川書店。

【2020年度の活動報告】

◎出版物による業績

[分担執筆]

石山 俊

2020 「サハラ交易」日本沙漠学会編『沙漠学事典』 pp.190-191, 東京：丸善出版。

2020 「植民地支配と独立」日本沙漠学会編『沙漠学事典』 pp.192-193, 東京：丸善出版。

2020 「オアシス アフリカ」日本沙漠学会編『沙漠学事典』 pp.200-201, 東京：丸善出版。

2020 「食 ナツメヤシ」日本沙漠学会編『沙漠学事典』 pp.216-217, 東京：丸善出版。

2020 「食 オアシス——アフリカ」日本沙漠学会編『沙漠学事典』 pp.226-227, 東京：丸善出版。

2021 「西アジアの食生活——マグリブ」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』 pp.27-28, 東京：丸善出版。

2021 「オアシスと甘さ」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』 pp.34-35, 東京：丸善出版。

[その他]

2020 「何にでも使える砂漠の植物」『BIOSTORY』 34：1。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年5月31日 (石山 俊・渡邊三津子・遠藤 仁・縄田浩志と共同発表) 「ワーディ・ファーティマオアシスにおける最近50年の生業の変化、サウジアラビア」日本沙漠学会第31回学術大会、岡山大学

2020年9月18日 (Ishiyama, S., H. Nawata, H. Mikuni, Y. Nishiaki) "Using Scientific Results to Benefit Local People by Working Together at In Belbel Oasis, Algeria: In Accordance with the Will of

the Late Professor Iwao Kobori, the Japanese Human Geographer.' RAI2020: Anthropology and Geography: Dialogues Past, Present and Future (Wec Conference), Royal Anthropological Institute, London, United Kingdom

・研究講演

2020年12月1日 「アフリカ乾燥地の暮らしと文化」一般財団法人社会保険協会生涯学習事業『えびす大学』小山台会館

◎調査活動

・国内調査

2020年10月10日～11日 高知県（山間集落における地域活性化のための調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明の近代動態分析——『近代世界システム』との相克」（研究代表者：嶋田義仁（中部大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「アフリカ食文化研究の新展開——食料主権論のために」（研究代表者：藤本 武（富山大学））研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

京都府立大学非常勤講師「現代の食糧問題」（15回中1回分を担当）

・社会活動

日本沙漠学会沙漠誌分科会運営委員、一般財団法人片倉もとこ記念沙漠文化財団理事、特定非営利活動法人緑のサヘル理事、特定非営利活動法人森のエネルギーフォーラム理事

河村友佳子 [かわむら ゆかこ] ————— プロジェクト研究員

【学歴】京都造形芸術大学芸術学部卒（2003）【職歴】国立民族学博物館情報管理施設情報企画課技術補佐員（2003）、財団法人元興寺文化財研究所伝世資料修復室研究補佐員（2007）、国立民族学博物館情報管理施設共同利用型科学分析プロジェクト研究員（2018）【専攻・専門】保存科学【所属学会】文化財保存修復学会、日本文化財科学会、日本民具学会

【2020年度の活動報告】

◎出版物による業績

[分担執筆]

河村友佳子

2021 「山内景行家写真資料から読みとく十日町の織物と人びとのかかわり」日高真吾編『復興を支える地域の文化——3.11から10年』pp.85-90, 大阪：国立民族学博物館。

2021 「重要文化財『涅槃釈迦像』の3D複製品の取り組み事例」日高真吾・黄貞燕編『地域文化を活用する——地域振興、地域活性に果たす役割』pp.128-142, 大阪：大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立民族学博物館日高真吾研究室。

2021 「三次元計測技術を応用した民俗文化財の活用の可能性」日高真吾編『継承される地域文化——災害復興から地域創発へ』pp.318-333, 京都：臨川書店。[査読有]

[その他]

河村友佳子・日高真吾・園田直子・末森 薫・橋本沙知・和高智美・桂田峰男

2020 「滋賀県米原市所在の壽山組山倉における温湿度環境の調査」『文化財保存修復学会第42回大会研究発表集』pp.446-449。[査読有]

橋本沙知・園田直子・日高真吾・末森 薫・河村友佳子・柴切弥生・西澤昌樹・和高智美

2020 「性能や調湿条件の異なる展示ケース内の温湿度環境——国立民族学博物館の事例より」『文化財保存修復学会第42回大会研究発表集』pp.256-259。[査読有]

日高真吾・園田直子・末森 薫・河村友佳子・橋本沙知・和高智美

2020 「3Dスキャナーで制作した複製品の活用事例——ユニヴァーサル・ミュージアムの実現を目指して」『文化財保存修復学会第42回大会研究発表集』pp.266-269。[査読有]

園田直子・日高真吾・末森 薫・河村友佳子・橋本沙知・西澤昌樹・和高智美

2020 「国立民族学博物館における収蔵庫の防災・減災対策——2018年の大阪北部地震を受けて」『文化財保存修復学会第42回大会研究発表集』 pp.298-301。[査読有]

和高智美・日高真吾・園田直子・河村友佳子・橋本沙知・中村晋也・早川晃示・石樽康彦・和田光生・柿本博美

2020 「大津祭曳山『郭巨山』の妻人形、童子人形の修理事例」『文化財保存修復学会第42回大会研究発表集』 pp.182-185。[査読有]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2020年12月24日 「太陽熱を用いた高温処理の条件確立に向けて——アフリカヒラタキクイムシを用いた高温繰り返し実験について」『博物館における持続可能な資料管理および環境整備——保存科学の視点から』国立民族学博物館

小林直明 [こばやし なおあき]——プロジェクト研究員

1971年生。【学歴】大阪外国語大学外国語学部日本語学科卒（1994）、大阪外国語大学大学院外国語学研究科西アジア語学専攻修士課程修了（1998）、東京外国語大学大学院地域文化研究科地域文化専攻博士後期課程単位取得退学（2002）【職歴】東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所日本学術振興会特別研究員（PD・文化人類学）（2002）、国立民族学博物館文化資源研究センター外来研究員／日本学術振興会特別研究員（PD・文化人類学）（2003）、大阪大学世界言語研究センター特任研究員（2008）、龍谷大学社会学部実習助手（2011）、国立民族学博物館人類文明誌研究部プロジェクト研究員（2016）【学位】修士（大阪外国語大学大学院 1998）【専攻・専門】文化人類学・民俗学 民族誌映像、図書館情報学・人文社会情報学 デジタルアーカイブ、地域研究 アフリカ【所属学会】日本アフリカ学会、日本映像民俗学の会、デジタルアーカイブ学会

【2020年度の活動報告】

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

新学術領域研究（研究領域提案型）『学術研究支援基盤形成』研究基盤リソース支援プログラム「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」（研究支援代表者：吉田憲司）において技術支援員として写真資料のデジタルアーカイブ化（フィルムの整理やデジタル化・データベース化、権利処理などの諸業務）を効果的・効率的にすすめる手法を研究・考案し、実践した。

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

近畿大学非常勤講師「博物館情報・メディア論」、近畿大学非常勤講師「情報処理専門演習Ⅰ・Ⅱ」、龍谷大学非常勤講師「異文化研究B」、同志社女子大学嘱託講師「デジタルアーカイブス」、同志社女子大学大学院嘱託講師「メディアリテラシー特論」

橋本沙知 [はしもと さち]——プロジェクト研究員

【学歴】同志社大学文学部文化学科・美学及び芸術学専攻卒（2004）【職歴】国立民族学博物館情報管理施設情報企画課技術補佐員（2004）、公益財団法人元興寺文化財研究所伝世資料修復室研究補佐員（2007）、国立民族学博物館情報管理施設共同利用型科学分析室プロジェクト研究員（2018）【専攻・専門】保存科学【所属学会】文化財保存修復学会、日本文化財科学会

【2020年度の活動報告】

◎出版物による業績

[分担執筆]

橋本沙知

2021 「柳染色加工所染め見本の保存と技術の記録保存」日高真吾編『復興を支える地域の文化——3.11か

ら10年』 pp.82-83, 大阪：国立民族学博物館。

- 2021 「保存と活用の両立を目指した博物館資料の収納方法」日高真吾編『継承される地域文化——災害復興から地域創発へ』 pp.224-238, 京都：臨川書店。[査読有]

[その他]

河村友佳子・日高真吾・園田直子・末森 薫・橋本沙知・和高智美・桂田峰男

- 2020 「滋賀県米原市所在の壽山組山倉における温湿度環境の調査」『文化財保存修復学会第42回大会研究発表集』 pp.446-449。[査読有]

橋本沙知・園田直子・日高真吾・末森 薫・河村友佳子・柴切弥生・西澤昌樹・和高智美

- 2020 「性能や調湿条件の異なる展示ケース内の温湿度環境——国立民族学博物館の事例より」『文化財保存修復学会第42回大会研究発表集』 pp.256-259。[査読有]

日高真吾・園田直子・末森 薫・河村友佳子・橋本沙知・和高智美

- 2020 「3D スキャナーで制作した複製品の活用事例——ユニヴァーサル・ミュージアムの実現を目指して」『文化財保存修復学会第42回大会研究発表集』 pp.266-269。[査読有]

園田直子・日高真吾・末森 薫・河村友佳子・橋本沙知・西澤昌樹・和高智美

- 2020 「国立民族学博物館における収蔵庫の防災・減災対策——2018年の大阪北部地震を受けて」『文化財保存修復学会第42回大会研究発表集』 pp.298-301。[査読有]

和高智美・日高真吾・園田直子・河村友佳子・橋本沙知・中村晋也・早川晃示・石樽康彦・和田光生・柿本博美

- 2020 「大津祭曳山『郭巨山』の妻人形、童子人形の修理事例」『大津祭曳山「郭巨山」の妻人形、童子人形の修理事例』 pp.182-185。[査読有]

彭 宇潔^[ハウ ウケツ]——プロジェクト研究員

【学歴】 北京外国語大学日本語学部卒（2008）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科アフリカ地域研究専攻5年一貫制博士課程修了（2016）**【職歴】** 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科研究員（2016）、国立民族学博物館学術資源研究開発センタープロジェクト研究員（2017）**【学位】** 博士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 2016）、修士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 2012）**【専攻・専門】** 文化人類学、狩猟採集民研究、アフリカ地域研究**【所属学会】** 日本アフリカ学会、生態人類学会、日本文化人類学会、国際狩猟採集民学会、米国通文化研究学会、国際民族生物学会

【主要業績】

[単著]

Peng, Y.

- 2017 *Inscribing the Body: An Anthropological Study on the Tattoo Practice among the Baka Hunter Gatherers in Southeastern Cameroon*. Kyoto: Shokado.

[論文]

彭 宇潔

- 2021 「個人の移住歴からみる定住化した狩猟採集民の居住形態——カメルーン東南部のバカを事例に」『国立民族学博物館研究報告』45(3)：441-469。[査読有]

Peng, Y.

- 2016 The Evidence of Proximity: Tattoo Practices of the Baka in Southeastern Cameroon. *Hunter Gatherer Research* 2(1): 63-95.

【受賞歴】

- 2017 中国民族生態学会第2回全国大会「優秀論文賞」
2012 英国王立人類学協会主催 Body Canvas Photography Competition「Runner-up 賞」

【2020年度の活動報告】

◎出版物による業績

[論文]

彭 宇潔

2021 「個人の移住歴からみる定住化した狩猟採集民の居住形態——カメルーン東南部のバカを事例に」『国立民族学博物館研究報告』45(3)：441-469。[査読有]

Peng, Y. and A. Nobayashi

2021 Cross-Cultural Research of the Hunting Tools and Technique between Hunter-Gatherers and Hunter-Gardeners. *Hunter-Gatherers in Asia: From Prehistory to the Present* (Senri Ethnological Studies 106), pp. 75-92. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年5月16日 「小規模居住集団の居住形態——アフリカとアジアの民族事例から」文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020：パレオアジア文化史学第9回研究大会、国立民族学博物館、オンライン開催

2020年5月23日～5月24日 「カメルーン東南部における地域住民の居住形態——狩猟採集民バカと焼畑農耕民コナンベンベ、農耕民ンジメを事例に」日本アフリカ学会第57回学術大会、東京外国語大学、ウェブ上公開

2020年10月23日 'Rhythmical Life: Cases of Cutting Activity among the Baka.' Techniques & Culture International Meetings "Waza on the Move: Ineffable Arts of Learning", Marseille, Kyoto, オンライン開催

2020年12月18日 「狩猟採集民集団の通文化研究——熱帯湿潤地域を中心に」パレオアジア文化史学第10回研究大会、国立民族学博物館、オンライン開催

2021年2月22日 「アフリカ狩猟採集民バカのイレズミと社会関係」タトゥー研究会、オンライン開催

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（若手研究）「アフリカ熱帯雨林における狩猟採集民の生態資源獲得の行動に関する人類学的研究」研究代表者、科学研究費（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））「トイレを必要とする条件とは——狩猟採集民、農耕民、都市生活者の排泄と衛生条件の比較」（研究代表者：山内太郎（総合地球環境学研究所））研究分担者、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型）「パレオアジア文化史学——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究」計画研究B01班「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」研究協力者

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

国際狩猟採集民学会第13回狩猟採集社会国際会議（CHaGS13）Scientific Committee

・他大学の客員、非常勤講師

京都外国語大学非常勤講師、龍谷大学非常勤講師、京都大学アフリカ地域研究資料センター特任研究員

拠点研究員

■人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター・「北東アジア地域研究」国立民族学博物館拠点

辛嶋博善 [からしま ひろよし]——特任助教

1974年生。【学歴】慶應義塾大学文学部史学科民族学考古学専攻卒業（1998）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程アジア第一専攻地域研究コース修了（2001）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程単位取得退学（2008）【職歴】東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所ジュニア・フェロー（2008-2013）、北海道大学スラブ研究センター非常勤研究員（2013-2014）、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター非常勤研究員

員（2014-2015）、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター地域比較共同研究員（2015-）【学位】博士（学術）（東京外国語大学 2011）【専攻・専門】日本文化人類学会、日本モンゴル学会、生き物文化誌学会、IUAES（International Union of Anthropological and Ethnological Sciences）

【主要業績】

[論文]

辛嶋博善

2017 「家業を起業する——モンゴル牧畜社会における牧夫の自立」（特集：市場化・脱生業化時代の生業論——牧畜戦略の多様化を例に）『文化人類学』82(1)：35-49。

2016 「拡張する柔軟性——モンゴル国現代牧畜社会における居住単位のサイズと構成の変遷」『文化人類学』81(1)：44-61。

[学位論文]

辛嶋博善

2010 「衝突する未来——ポスト社会主義期におけるモンゴル国ヘンティール県ムルン郡の牧畜社会を事例として」東京外国語大学。

【2020年度の活動報告】

◎出版物による業績

[その他]

辛嶋博善

2020 「モンゴル国の牧畜における小さな変化と大きな変化」『BIOSTORY』33：64-65。

2020 「牧畜民のテントをめぐる」『月刊みんぱく』44(11)：16-17。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2021年2月25日 「北東アジアの『一昔前』を考える」第36回北東アジア地域研究会@民博拠点（月例会）、国立民族学博物館

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究拠点」（拠点代表者：池谷和信）拠点構成員

■人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター・「現代中東地域研究」国立民族学博物館拠点

黒田賢治 [くろだ けんじ]————— 特任助教

1982年生。【学歴】北海道大学文学部人文科学科卒（2005）、北海道大学文学研究科修士課程退学（2006）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程（五年一貫制）修了（2011）【職歴】日本学術振興会特別研究員（DC）（2008-2011）、京都大学科学研究員（2011-2012）、京都大学東南アジア研究所特別研究員（2011-2012）、カリフォルニア大学中近東研究所客員研究員（2011-2012）、日本学術振興会特別研究員（PD）（2012-2015）、広島大学総合科学研究科研究員（2015-2016）、人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター研究員（2016）【学位】博士（地域研究）（京都大学大学院 2011）【専攻・専門】中東地域研究、イスラーム研究【所属学会】宗教と社会学会、日本文化人類学会、日本中東学会、IUAES

【主要業績】

[単著]

黒田賢治

2015 『イランにおける宗教と国家——現代シーア派の実相』京都：ナカニシヤ出版。

[論文]

Kuroda, K.

2017 Pioneering Iranian Studies in Meiji Japan: Between Modern Academia and International Strategy. *Iranian Studies* 50(5): 651-670.

[学位論文]

黒田賢治

2011 『現代イランにおけるイスラーム国家と法学界の研究——イスラーム指導体制下の宗教と政治をめぐって』京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科。

【2020年度の活動報告】

◎出版物による業績

[論文]

Kuroda, K.

2020 Finding 'Ali as a Heroic Figure From Import of Knowledge on Islam to Customization in Modern Japan. *Historical studies bayt AL hikma* 50: 1-9.

2021 Embodying Islamic Thought through Karate: A Reconsideration of Modern Sports and Indigenization in Iran. *Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies* 14: 73-86.

[その他]

黒田賢治

2020 「悩ましい夜」『月刊みんぱく』44(6): 20。

2020 「第6回 イラン流ジハードの流儀——コロナウイルスとの格闘」『アジアと日本は、今』。(http://www.ritsumei.ac.jp/research/aji/publication/essay/number06/)

2021 「西アジア地域の食文化（イラン）」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・榎永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化事典』pp.580-581, 東京：丸善出版。

Kuroda, K.

2020 A New Mode of Jihad and Martyrdom in Iran: The Battle against Covid-19. *Asia-Japan Today: Researchers' Essays*. (http://en.ritsumei.ac.jp/research/aji/publication/essay/number06/)

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年5月4日 「近代日本と中東関係をめぐる試論——大正3年巡礼船事業をめぐる海洋覇権と植民地運営を中心に」現代中東地域研究レクチャー・シリーズ第21回レクチャー／特別研究「グローバル地域研究と地球社会の認知地図——わたしたちはいかに世界を共創するのか？」第1回研究会、国立民族学博物館、オンライン開催

2020年8月29日 (西尾哲夫・黒田賢治と共同発表)「フォーラム型情報ミュージアムとしての展示の可能性について」第36回日本中東学会年次大会、日本中東学会、オンライン開催

2020年8月30日 「現代イランにおける記憶の歴史化と忘却の政治——ある帰還志願兵を中心に」第36回日本中東学会年次大会、日本中東学会、オンライン開催

2020年9月18日 「コメント③『イラン政治の観点から』」イラン・イラク戦争から40年・湾岸危機／湾岸戦争から30年・公開シンポジウム『変動する湾岸情勢と日本——危機の時代を展望する』日本エネルギー経済研究所中東研究センター、立命館大学アジア・日本研究所、立命館大学中東・イスラーム研究センター、オンライン開催

2020年9月18日 (Kuroda, K. and T. Nishio) 'Mediating Past Anthropological Research Data with Contemporary Researchers and Research Societies: A Case Study of the Info-Forum Museum Project in MINPAKU.' "The Anthropology and Geography: Dialogues Past, Present and Future", The Royal Anthropological Institute, オンライン開催

2021年3月28日 「明治期日本におけるアリー表象の変遷」第39回イラン研究会、イラン研究会、オンラインとのハイブリッド開催

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（若手研究）「現代イランにおける長期的紛争介入構造をめぐる殉教概念の変容と政治言説化の研究」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「国立民族学博物館現代中東地域研究拠点」（拠点代表者：西尾哲夫）拠点構成員

◎社会活動・館外活動等

- ・他大学の客員、非常勤講師

関西大学非常勤講師「イスラム社会を考える」

■人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター・「南アジア地域研究」国立民族学博物館拠点

田中鉄也 [たなか てつや] ————— 特任助教

1979年生。【学歴】 関西大学文学部哲学科卒業（2004）、関西大学大学院文学研究科博士課程前期課程修了（2006）、関西大学大学院文学研究科博士課程後期課程修了（2014）【職歴】 関西大学マイノリティ研究センターリサーチアシスタント（2009-2010, 2012-2013）、日本学術振興会特別研究員（DC）（2013-2014）、日本学術振興会（PD）（2014-2016）、アジア太平洋無形文化遺産研究センターアソシエイトフェロー（2016-2017）、日本学術振興会海外特別研究員（2017-2018）、デリー大学社会科学部臨時研究員（2017-2018）、ロンドン大学東洋アフリカ研究所客員研究員（2018）、人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター研究員／国立民族学博物館南アジア研究拠点特任助教（2018-）【学位】 博士（文学）（関西大学大学院 2014）

【主要業績】

[単著]

田中鉄也

2014 『インド人ビジネスマンとヒンドゥー寺院運営——マールワリーーにとっての慈善・喜捨・実利』東京：風響社。

[論文]

田中鉄也

2018 「コミュニティの実体化と女神巡行——インド・カルカッタのカースト団体を事例に」『宗教と社会』24：33-47。

Tanaka, T.

2020 Trustee, State and Stakeholder: Hindu Temple Management in Contemporary India, 1957-2012. *Journal of Interdisciplinary Economics* 32(1): 75-94.

◎口頭発表・展示・その他の業績

- ・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年11月26日 「現代インドのカーストの諸相——カースト的帰属と社会関係資本」アジア太平洋研究所「インド／アジアの人材活用」第4回研究会、オンライン開催

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

関西大学研究拠点形成支援費「法の支配と法多元主義」（研究代表者：西澤希久男（関西大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（B）「宗教組織の経営プロセスについての文化人類学的研究」（研究代表者：藏本龍介（東京大学））研究分担者、国立民族学博物館共同研究「人類史における移動概念の再構築——『自由』と『不自由』の相克に注目して」（研究代表者：鈴木英明）メンバー、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究 国立民族学博物館拠点（MINDAS）」（拠点代表者：三尾 稔）研究分担者

◎社会活動・館外活動等

- ・他大学の客員、非常勤講師

関西大学国際部非常勤講師「Area Studies (India)」(2020年度春学期)、関西大学文学部非常勤講師「南アジア・内陸アジア論1」(2020年度春学期)、関西大学文学部非常勤講師「南アジア・内陸アジア論2」(2020年度

秋学期)、関西大学大学院文学研究科非常勤講師「M 宗教人類学研究 A 講義」(2020年度春学期)、関西大学大学院文学研究科非常勤講師「M 宗教学研究 B 講義」(2020年度秋学期)、関西大学政策創造学部非常勤講師「専門導入ゼミ 2」(2020年度秋学期)

茶谷智之 [ちやや ともゆき] ————— 特任助教

【学歴】北海道大学法学部卒業(2010)、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程(5年一貫制)修了(2017) 【職歴】日本学術振興会特別研究員(DC)(2016-2017)、びわこ成蹊スポーツ大学スポーツ学部非常勤講師(2017)、日本学術振興会特別研究員(PD)(2017-2018)、帯広大谷短期大学社会福祉科助教(2018-2019)、松本短期大学幼児保育学科助教(2019-2020)、名古屋商科大学国際学部非常勤講師(2019-)、人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター研究員/国立民族学博物館南アジア研究拠点特任助教(2020-) 【学位】修士(地域研究)(京都大学大学院 2014)、博士(地域研究)(京都大学大学院 2017) 【専攻・専門】文化人類学・南アジア地域研究

【主要業績】

[単著]

茶谷智之

2020 『依存からひろがる人生機会——インド・スラム地域の人間開発と「子育ての民主化」』横浜：春風社。

[論文]

茶谷智之

2020 「教育——高まる教育熱の行方」石坂晋哉・宇根義己・舟橋健太編『ようこそ南アジア世界へ』pp.201-216, 京都：昭和堂。

2018 「貧困児童の教育機会をめぐる排除と包摂——デリー・スラム地域における希望と学校をつなぐ「協同」に着目して」『社会福祉学』59(2)：79-91。

【2020年度の活動報告】

◎出版物による業績

[論文]

茶谷智之

2020 「教育——高まる教育熱の行方」石坂晋哉・宇根義己・舟橋健太編『ようこそ南アジア世界へ』pp.201-216, 京都：昭和堂。

[その他]

茶谷智之

2020 「インドのホーリー祭を彩る」特集「めでたい場の食」『月刊みんぱく』45(1)：7。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年6月16日 「デリーにおける都市の「市民性」——スラムの若年女性と外出」2020年度 MINDAS「社会変動と親密圏」班第1回研究会、オンライン開催

・研究講演(授業内講演)

2020年5月18日 「スラムと人間開発——貧困層にひらかれた都市とは」東京大学大学院総合文化研究科、南アジア地域文化研究/専門英語、オンライン開催

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究 国立民族学博物館拠点(MIND-AS)」(拠点代表者：三尾 稔)拠点構成員、科学研究費(若手研究)「中等教育脱落者の青少年少女と社会参加——インド・スラムにおける仲介者の働きに着目して」研究代表者

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

名古屋商科大学非常勤講師「国際ボランティア論」、名古屋商科大学非常勤講師「南アジア社会論」(集中講義)

■人間文化研究機構総合情報発信センター・「人文知コミュニケーター」

大石侑香 [おおいし ゆか] 特任助教

【学歴】 首都大学東京大学院人文科学研究科社会行動学専攻社会人類学教室博士前期課程修了（2009）、首都大学東京大学院人文科学研究科社会行動学専攻社会人類学教室博士後期課程単位取得退学（2016）【職歴】 日本学術振興会——特別研究員 DC 1（2009）、日本学術振興会——特別研究員 PD（2016）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター特任助教（2018）、人間文化研究機構総合情報発信センター特任研究員（2018）、神戸大学大学院国際文化学研究科講師（2020）【学位】 博士（社会人類学）（首都大学東京大学院 2018）【専攻・専門】 社会人類学、文化人類学、シベリア北方少数民族の生業、北極域研究、毛皮のグローバルヒストリー【所属学会】 日本文化人類学会、日本シベリア学会、東京都立大学・首都大学東京社会人類学会、生態人類学会、北極環境研究コンソーシアム

【主要業績】

[分担執筆]

Юка Оиси

2019 Глава3 История человека в Арктике. In Хироки Такакура, Ёсихиро Иидзима, Ванда Игнатъева, Александр Фёдоров, Масанори Гого and Тосикадзу Танака (eds.) *Вечная мерзлота и культура: Глобальное потепление и Республика Саха (Якутия), Российская Федерация* (Center for Northeast Asian Studies report 24), pp.18-19. Sendai: Center for Northeast Asian Studies, Tohoku University.

[論文]

藤岡悠一郎・大石侑香・田中利和・ヴィノクロヴァ・N

2020 「サハ共和国・ゴルヌイ郡におけるサハの野生ベリー類採集」『北海道立北方民族博物館研究紀要』29：31-51。[査読有]

Д. Бйамбаджав, Т. В.Литвиненко, Ю. Ойши, М. Сиотани and Х. Такакура

2019 Трансформация горнодобывающего предприятия и ее влияние на окружающую территорию: опыт Японии и уроки для России. *Староосвоенные районы: генезис, исторические судьбы, современные тренды развития. Отв. редактор В.Н. Стрелецкий. Материалы сессий экономико-географической секции* 35: 280-290. [査読有]

【2020年度の活動報告】

◎出版物による業績

[論文]

大石侑香

2021 「トナカイがはぐれたらどうする？——自立と互助」シンジルト・地田徹朗編『牧畜を人文学する』pp.168-184, 名古屋：名古屋大学出版会。

2021 「シベリア内陸森林地帯：ハンティの生業複合と食」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・檜永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.612-614, 東京：丸善出版。

[その他]

大石侑香

2020 「森で焼くパン——シベリア」『みんぱく e-news』232：巻頭コラム。

2021 「雪で凍傷を予防する」特集「逆転の雪」『月刊みんぱく』45(2)：8-9。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年7月2日 「ボードゲーム『The Arctic』で学ぶ・考える北極環境変化と社会」東北大学 COI 拠点主催『第3回 COI 学術交流会』ポスター発表、オンライン開催

2020年9月20日 「人文知コミュニケーターによる北極環境学習ツール『The Arctic』の活用実践と評価」『第2回 若手研究シンポジウム 場ら化らのフィールド』2020度一般財団法人永井エヌ・エス知覚科学振興財開発助成（研究代表者：板垣順平）「オンラインミーティングアプリを用いた

- 『臨場感』の再現による議論の活性化を試みる検証研究」主催、オンライン開催
 2020年10月21日 'Beringia - The Future of the Bering Strait Region.' "2020 North Pacific Arctic Conference", East-West Center, Hawaii, United States, オンライン開催 [招待有]
 2021年 3月 4日 「キツネの飼いや、増やし方」『アカデミックトーク』東北大学、オンライン開催
 2021年 3月24日 'Domestication of Mink in the Arctic: Hunting to Fur Farming.' "Arctic Science Summit Week 2021", IASC, Portugal, オンライン開催 [査読有]

・研究講演

- 2021年 2月10日 「好きな毛皮は何ですか？——西シベリア・ハンティの毛皮利用の変容と現在」 ArCSII 沿岸環境課題主催『北方先住民の狩猟と毛皮』オンライン配信
 2021年 3月30日 「北極域の人々の暮らしと環境変化」京都・まちじゅうアートフェスティバル実行委員会（構成：京都市等）主催『光冠茶会——国際人類観測年』オンライン配信

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（若手研究）「肉食性動物のドメスティケーション——毛皮産業近代化における人と動物の関係の変化」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト北東アジア地域研究推進事業東北大学東北アジア研究センター拠点「北東アジア地域の環境・資源に関する研究連携ユニット」（研究代表者：高倉浩（東北大学）メンバー、北極域研究推進プロジェクト「ArCSII: Arctic Challenge for Sustainability II」（研究代表者：榎本浩之（国立極地研究所）メンバー

◎社会活動・館外活動等

- ・他大学の客員、非常勤講師
 関西大学「社会システムデザイン実習」、筑波大学「人文知コミュニケーション」

神野知恵 [かみの ちえ]————— 特任助教

【学歴】国際基督教大学教養学部人文科学科卒（2008）、東京藝術大学大学院音楽文化研究科音楽学専攻修士課程修了（2011）、東京藝術大学大学院音楽研究科音楽学専攻博士課程修了（2016）【職歴】東京藝術大学音楽学部楽理科教育研究助手（2016）、東京文化財研究所無形文化遺産部客員研究員（2017）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター機関研究員（2018）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター特任助教（2020）、人間文化研究機構総合情報発信センター特任研究員（2020）【学位】博士（音楽学）（東京藝術大学大学院音楽研究科 2016）、修士（音楽学）（東京藝術大学大学院音楽文化研究科 2011）【専攻・専門】音楽学（民族音楽学）、民俗学 近現代の日本と韓国における門付け芸能の変遷——伊勢大神楽と韓国農楽を中心に【所属学会】東洋音楽学会、民俗芸能学会、韓国朝鮮文化研究会、映像民俗学の会、南道民俗研究会（韓国）

【主要業績】

[単著]

神野知恵
 2016 『韓国農楽と羅錦秋——女流名人の人生と近現代農楽史』（アジアを学ぼうブックレットシリーズ）東京：風響社。

[論文]

神野知恵
 2018 「韓国音楽学者李輔亨による湖南右道農楽録音資料の比較考察」『国立民族学博物館研究報告』43(3)：443-483。[査読有]

[学位論文]

神野知恵
 2016 「韓国農楽における個人演奏者論——羅錦秋名人の芸術世界とその継承」東京：東京藝術大学大学院音楽研究科。

【2020年度の活動報告】

◎出版物による業績

[分担執筆]

神野知恵

- 2021 「音と味」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田 卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.532-533, 東京：丸善出版。

[論文]

神野知恵

- 2020 「農楽と能楽——国立能楽堂における2020年交流公演の記録」韓国・朝鮮文化研究会編『韓国朝鮮の文化と社会』19：192-198。
- 2021 「それでも、獅子は旅を続ける——伊勢大神楽の回檀の記録」『季刊民族学』45(1)：83-93。

[翻訳]

神野知恵

- 2020 金 善子著「中国少数民族の女神神話と凶像叙事」『歴史と民俗』36：95-120。
- 2021 全 京秀著「洪沢敬三の「全体」と「自民族誌」——アチック学派の提言」『歴史と民俗』37：95-120。

[その他]

神野知恵

- 2020 「『みんぱく村に神楽がやって来る！』ワークショップの軌跡」『月刊みんぱく』44(6)：10-11。
- 2020 「旅・いろいろ地球人 韓国農楽の追憶① 夏休みの後遺症」『毎日新聞』9月5日夕刊。
- 2020 「旅・いろいろ地球人 韓国農楽の追憶② 全羅道の食と芸能」『毎日新聞』9月12日夕刊。
- 2020 「旅・いろいろ地球人 韓国農楽の追憶③ 羅先生の家」『毎日新聞』9月19日夕刊。
- 2020 「旅・いろいろ地球人 韓国農楽の追憶④ 秋夕の墓参り」『毎日新聞』9月26日夕刊。
- 2020 「郷土芸能探訪⑦伊勢大神楽——「人付き合い」の仕事をする旅の芸能者たち」『文部科学 教育通信』498：22-23。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2020年11月8日 「大正・昭和の旅する神楽師たちの暮らし——伊勢大神楽講社森本忠太夫社中の出納帳の分析研究」東洋音楽学会第71回大会、オンライン参加
- 2020年12月12日 「民俗芸能をつなぐ／民俗芸能研究をつなぐ」2020年度民俗芸能学会大会、グループセッション、オンラインとのハイブリッド開催
- 2020年12月14日～2月1日 「くらしと祈りと芸能——家を廻る民俗芸能から学んだこと」音楽鑑賞振興財団講演会、招聘講演（動画配信）

・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

- 2020年10月3日 東京音楽大学主催『オンライン芸能村——青ヶ島・韓国とつなぐリモート村祭りワークショップ』（日本とアジアの伝統音楽・芸能のためのアートマネジメント人材育成 実践セミナー実施行事）、企画・演奏、オンラインとのハイブリッド開催
- 2020年10月11日 『旅する異人たちの秋の大芸能祭——おわりを越えてめぐる命のはじまりのうた』映像作品上映・演奏、カフェ周
- 2020年11月10日 「사람을 만나기 위한 음악학 (人に出会うための音楽学)」韓国総合芸術大学校、特別講義、オンラインとのハイブリッド開催
- 2020年11月14日 「躍動する韓国仮面芸能の世界」堺市博物館無形文化遺産シリーズ展関連イベント『アジアの伝統演劇』展示協力（国立民族学博物館所蔵資料演示）・講演・演奏、堺市博物館
- 2020年11月18日 「사람을 만나기 위한 음악학 (人に出会うための音楽学)」ソウル大学校芸術大学国楽科、特別講義、オンラインとのハイブリッド開催
- 2020年11月29日 大阪府主催『ビッグ・アイ アーツセミナー オンライン展覧会 about me 4～“わたし”を知って——言語化できないコトバ』障害のある作家による美術作品の選出、考察、トークセッション登壇、国際障害者交流センター（ビッグ・アイ）
- 2020年12月1日 「韓国農楽実技」宮城教育大学、特別講義、オンラインとのハイブリッド開催
- 2020年12月9日 「伊勢大神楽の映像収録」科学研究費助成事業、コーディネート・企画、国立民族学博物館

[映像番組上映]

2020年10月11日 『悪魔を払う伊勢大神楽』(2017年制作) カフェ周

◎調査活動

・国内調査

2020年7月24日～28日 岡山県(瀬戸内市・倉敷市・伊勢大神楽森本忠太夫社中回檀)

2020年8月25日～26日 兵庫県(兵庫県立図書館資料調査)

2020年9月1日～7日 香川県(丸亀市・坂出市・伊勢大神楽森本忠太夫社中回檀)

2020年9月27日～28日 大阪府(羽曳野市・伊勢大神楽山本源太夫社中回檀)

2020年9月30日～10月1日 大阪府(松原市・伊勢大神楽山本源太夫社中回檀)

2020年10月9日～10日 大阪府(羽曳野市・伊勢大神楽山本源太夫社中回檀)

2020年10月16日～17日 大阪府(羽曳野市・伊勢大神楽山本源太夫社中回檀)

2020年11月3日 大阪府(藤井寺市・伊勢大神楽山本源太夫社中回檀)

2020年12月22日～23日 三重県(桑名市・伊勢大神楽講社神講および神楽師インタビュー)

2020年12月31日～2021年1月3日 滋賀県(愛知郡・東近江市・伊勢大神楽山本源太夫社中回檀)

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費(若手研究)「近現代の日本と韓国における門付け芸能の変遷——伊勢大神楽と韓国農楽を中心に」研究代表者、科学研究費(学術変革領域(A))「生涯学の創出——超高齢社会における発達・加齢観の刷新」(研究代表者:月浦 崇)研究協力者、科学研究費(学術変革領域(A))「技能・熟練・暗黙知の習得・発達過程に関する人類学的研究」(研究代表者:金子守恵)研究協力者

◎社会活動・館外活動等

- ・他大学の客員、非常勤講師

2020年5月14日～8月13日 神戸学院大学文学部非常勤講師(一般教養「日本と世界の民族音楽」担当)

2020年7月1日～2021年3月31日 東京音楽大学非常勤講師(一般人向けオンライン講座「日本とアジアの伝統音楽・芸能のためのアートマネジメント人材育成」担当)

客員教員

■人類基礎理論研究部・日本財団助成手話言語学研究部門(附置)

原 大介 [はら だいすけ] ————— 教授

1965年生。【学歴】早稲田大学第一文学部卒業(1989)、国際基督教大学大学院教育学研究科修了(1991)、シカゴ大学大学院言語学科修了(2003)【職歴】愛知医科大学看護学部専任講師(2000)、愛知医科大学看護学部助教授(2004)、愛知医科大学看護学部教授(2007)、豊田工業大学工学部教授(2010)、国立民族学博物館先端人類科学研究部客員教員(2016)、国立民族学博物館人類基礎理論研究部客員教員(2017-2020)【学位】博士(言語学)(シカゴ大学大学院、2003)【専攻・専門】音韻論、形態論、手話言語学【所属学会】日本言語学会、日本手話学会、日本特殊教育学会、日本英語学会

【主要業績】

[論文]

Hara, D. and M. Miwa

2020 The well-formedness and the ill-formedness of the JSL type-III syllable. In Ö. Eren, et al. (eds.) *Proceedings of the Fifty-fifth Annual Meeting of the Chicago Linguistic Society*, pp.205-220. Chicago, IL: Chicago Linguistic Society.

Hara, D.

2016 An Information-based Approach to the Syllable Formation of Japanese Sign Language. In M. Minami (ed.) *Handbook of Japanese Applied Linguistics*, pp.457-482. Boston, MA: GRUYTER MOUTON.

原 大介

2009 「手話」中島平三監修・今井邦彦編『言語学の領域II』（シリーズ朝倉「言語の可能性」2）pp.72-98, 東京：朝倉書店。

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

手話言語における音節構造の成り立ちとその適格性条件に関する研究

・研究の目的、内容

日本手話では、「手型」、「手の位置」、「手の動き」の3つのカテゴリに属する要素と「掌の向き」、「指先の方
向」、「利き手の接触」等のいくつかのマイナーな要素が音節構成素として関与している。各カテゴリにはそれ
ぞれ有限個の要素が存在するが、カテゴリ間の要素結合は自由ではなく数学的に可能な組み合わせの多くが不
適格な音節と判定される。本研究では、どのような要素結合が適格な日本手話音節形成を可能にし、どのよう
な要素結合が日本手話音節の不適格性の原因となるのかを明らかにすることを目的とする。目的達成のため、
適格音節・不適格音節のそれぞれを収録したデータベース（以下DB）を作成している。2020年度は、(1)タイ
プ3と呼ばれる音節にみられる韻律外性（extrametricality）の検討、(2)適格音節DBの精緻化・拡充化作業、
(3)日本手話の手型連鎖制約を見出すための手型変化パターン調査、(4)「手の構え」を構成する手型、掌の向
き、中手骨の方向の3つの要素の組合せ可能性に関する調査、(5)日本における手型音素の抽出・確定および各
手型音素の異音の調査を行った。

・成果

1) タイプ3音節における韻律外性（extrametricality）の検討

タイプ3音節を構成する位置音素はA-zone（手話話者の胴体およびニュートラルスペースを含むエリア：高
さにより規定されている）内になければならないが、調査の結果、A-zone内の位置音素とA-zone外の位置音
素の2つの位置音素をもつ音節が存在することが分かった。これらの音節ではA-zone外の位置音素は音節始め
に現れており、音節形成において音節始めの位置は韻律外として扱われていることが明らかとなった。

2) 適格音節DBの精緻化・拡充化作業

2019年現在で、適格音節DBに約3,000個、不適格音節DBに約2,500個が登録されている。2020年度は、こ
れらのDBに登録されている手型要素の一部見直し作業を行った。DBは音素表記を原則としているが、手型に
関して、音声表記と音素表記が混在しているため、精緻化作業を行った。また、適格音節DBに登録されてい
る音節のうち、動き要素として手首関節の動き（orientation change movement: orと表記）や指関節の動き
（handshape change movement: hs）をもつ音節の見直し作業を行った。その結果、動き要素として、orやhs
だけをもつと思われていた音節の多くが、軌跡運動（path movement: p）、動きの繰り返し（repeat: r）、動き
に付随する接触（contact）等を伴っていることが判明し、動き要素としてhsだけを持つ適格音節は存在しな
い可能性が示された。

3) 手型変化のパターンの調査

手型変化を含む音節には、変化前手型と変化後手型の2種類の手型を含む。アメリカ手話の研究では、手型
変化に現れる2種類の手型には一定の関係があることが分かっている（手型連鎖制約）。2020年度の研究では、
日本手話音節の手型変化に現れる2種類の手型にどのような関係があるかを調べた。その結果、音素レベルで
は、理論的に可能な12種類のうち、以下のような5種類の手型変化パターンが存在することが分かった。①開
→閉、②閉→開、③開→曲、④開→折、⑤折→開。音声レベルでは、①～⑤以外にいくつかの手型変化パター
ンが認められたが、それらすべては、同化等により説明可能であることが分かった。

4) 「手の構え」（手型、掌の向きと中手骨の方向の組み合わせ）について調査

「手の構え」について、タイプ0、1、3を調べた。掌の向きと中手骨の方向の組み合わせは理論的には複数
存在するが、適格音節DBに登録された音節では、理論的に可能な組み合わせの一部しか存在が認められなかつ
た。一般に、タイプ0は、「手の構え」の構成に関与する「手型」・「掌の向き」・「中手骨の方向」の組み合わせ
に関する制限は強くないと思われているが、実際には、タイプ0で許されるこれら3要素の組み合わせの可能性は、
他のタイプと大きく変わらないことが明らかとなった。

5) 日本における手型音素の抽出・確定を行うため、異音を音素にまとめる作業

日本手話における手型音素の抽出・確定作業を行った。日本手話には50余りの異なった手型が存在するこ
とが今までの研究で分かっているが、これらは音声的手型であり、手型音素の数は50個よりも少ないと想定され

る。日本手話の手型音素を確定するため、異音を音素にまとめる作業に着手した。たとえば、これまでO（オー）手型は音素手型として存在すると一般的に考えられてきた。しかし、O手型とS手型の分布を調べたところ、両手型はお互いに対立の関係にないケースが多く、両者は同一音素の異音である可能性が明らかとなった。

上記の研究成果（またはその一部）は、以下の研究費助成を受けている。

1. 科学研究費（基盤研究（B））「音節構成要素の組み合わせに基づいた日本手話音節の適格性について」（研究代表者：原 大介）
2. 科学研究費（基盤研究（S））「多用途型日本手話言語データベース構築に関する研究」（研究代表者：長嶋祐二教授（工学院大学））
3. 科学研究費（挑戦的研究（萌芽））「手話言語版 MLAT（現代言語適正テスト）の開発と活用」（研究代表者：中野聡子講師（大阪大学））
4. 科学研究費（基盤研究（C））「日本手話、台湾手話、韓国手話における語と意味の歴史変化の解明」（研究代表者：相良啓子特任助教（国立民族学博物館））
5. 科学研究費（基盤研究（B））「学術手話通訳者を対象とした日本手話習得再教育プログラムの開発」（研究代表者：中野聡子講師（大阪大学））

◎出版物による業績

[論文]

Hara, D. and M. Miwa

2020 The well-formedness and the ill-formedness of the JSL type-III syllable. In Eren, ö. et al. (eds.) *Proceedings of the Fifty-fifth Annual Meeting of the Chicago Linguistic Society*, pp.205-220. Chicago, IL: Chicago Linguistic Society.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年9月11日 (Hara, D., M. Miwa, and I. Yuhara) 'Extrametricality of the Initial Location in the Type-III Syllable of Japanese Sign Language.' 28th Japanese/Korean Linguistics Virtual Conference (JK28), Online

2020年9月25日～10月2日 「日本手話の音素配列論——音節の適格性・不適格性」『手話言語と音声言語に関する民博フェスタ2020/SSLL2020』オンデマンド講演配信

2020年10月4日 「日本手話の音素配列論——音節の適格性・不適格性」『手話言語と音声言語に関する民博フェスタ2020/SSLL2020』オンライン質疑応答セッション

2021年3月1日 (西牧樹生・堀内靖雄・原 大介・黒岩真吾と共同発表)「日本手話における手の位置の音素に関するモーションキャプチャによる分析」第91回言語・音声理解と対話処理研究会、オンライン開催

2021年3月30日 「日本手話における手型音素とその異音」電子情報通信学会リアルタイムコミュニケーション言語（LARC）第3種研究会第16回研究会、オンライン開催

■人類文明誌研究部

小長谷有紀 [こながや ゆき]————— 教授

1957年生。【学歴】京都大学文学部史学科卒（1981）、京都大学大学院文学研究科修士課程修了（1983）、京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学（1986）【職歴】京都大学文学部助手（1986）、国立民族学博物館第1研究部助手（1987）、国立民族学博物館第1研究部助教授（1993）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1993）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授（2000）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2003）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2004）、総合研究大学院大学地域文化学専攻長（2005）、国立民族学博物館研究戦略センターセンター長（2007）、国立民族学博物館民族社会研究部長（2009-2011）、人間文化研究機構理事（2014）、国立民族学博物館客員教授（2019）【学位】文学修士（京都大学大学院文学研究科 1983）【専攻・専門】文化人類学【所属学会】国際モンゴル学会、日本文化人類学会、日本モンゴル学会、人文地理学会、生き物文化誌学会

【主要業績】

[単著]

小長谷有紀

2014 『人類学者は草原に育つ——変貌するモンゴルとともに』（フィールドワーク選書9）京都：臨川書店。

[編著]

小長谷有紀・シンジルト・中尾正義編

2005 『中国の環境政策「生態移民」——緑の大地、内モンゴルの砂漠化を防げるか？』京都：昭和堂。

小長谷有紀編

2004 『モンゴルの二十世紀——社会主義を生きた人びとの証言』（中公叢書）東京：中央公論新社。

【受賞歴】

2016 第3回ゆとろぎ賞

2015 モンゴル国科学アカデミー 名誉博士

2013 紫綬褒章

2013 教育研究に関する感謝状ならびに優秀学術研究者徽章（モンゴル国教育文化科学省）

2009 大同生命地域研究奨励賞

2007 モンゴル国ナイラムダルメダル（友好勲章）

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

モンゴル、中央・北アジアの遊牧文化の人類学的研究

・研究の目的、内容

これまで「社会主義的近代化とはなんであったか？」という問いを立てて行ってきた研究を継承しつつ、「社会主義的近代化」以前の映像記録を用いて、グローバルな関係性の束を復元し、より多角的に地域像を描くことを目的とした。具体的には、19世紀から20世紀にかけて実施された、布教・軍事・商業・学術など多様なエクスペディションの記録写真を整理し、デジタル地図によるルートの統合を試みた。

・成果

科学研究費（基盤研究（A））「モンゴルに関する画像記録を用いた地域像の再構築」により、ハンガリー、ポーランド、ロシア、モンゴル、スウェーデンなどで資料整備にあたっている研究者たちの協力を得た。また、鳥取大学乾燥地研究所の共同研究を申請し、古い写真から環境変化を読み解くという資料分析も行った。具体的な業績としては、論文2件、書籍2件。

◎出版物による業績

[単著]

Konagaya, Y.

2020 *Mongolian Propaganda Posters(1920s-1980s)*. (in Mongolian and English) Tokyo: Texnai.

[編著]

Konagaya, Y.(ed.)

2020 *Cultural Treasures related to the History of Mongolia in Japan*. (in Mongolian and English) Ulaanbaatar: International Association for Mongol Studies.

Юки Конаяга, Наталия Симукова (eds.)

2021 *Исследователь Монголии А. Д. Симуков: письма, дневники, документы* (Senri Ethnological Reports 151). Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

小長谷有紀

2021 「モンゴルにおける木材利用——19世紀末から20世紀初頭にかけての写真記録から」『日本とモンゴル』141：76-101。

2020 「モンゴルで撮影された写真の歴史（1880-1930）」『国立民族学博物館研究紀要』45(3)：517-567。

Konagaya, Y.

2020 (同上論文の英訳) *Expedition Photographs of Mongolia (1880-1930)*.

https://historicimages.mn/sites/default/files/2021-02/Y_Konagaya_Expedition%20Photographs%20of%20Mongolia%20%281880-1930%29_1.pdf

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年11月14日 「モンゴル写真コレクションの横断分析——犬と葬儀」草原考古学研究会

2020年12月5日 「古写真を用いた環境問題研究」鳥取大学乾燥地研究センター共同研究年次報告会

・みんぱくゼミナール

2020年9月19日 「梅棹忠夫に学んだ知的生産の技術」第502回みんぱくゼミナール

・展示

2020年9月3日～12月1日 梅棹忠夫生誕100年記念企画展「知的生産のフロンティア」実行委員長、国立民族学博物館

2021年1月13日～3月14日 京都大学／特別展 梅棹忠夫生誕100年記念「知的生産のフロンティア」実行委員

◎調査活動

・国内調査

2020年11月17日～11月23日—徳島県徳島市（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館にて、鳥居龍蔵による内モンゴル調査に関する写真ならびに資料について、整理作業を行った）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「モンゴルに関する画像記録を用いた地域像の再構築」研究代表者、科学研究費（基盤研究（C））「スウェーデンモンゴルミッションの研究」（研究代表者：都馬バイカル（桜美林大学））研究分担者、鳥取大学乾燥地研究センター共同研究「古写真を用いた環境問題研究」研究代表者

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

2021年1月25日～28日 東北大学環境科学研究科「環境文明論Ⅱ」集中講義

・他の機関から委嘱された委員など

NPO 法人モンゴルパートナーシップ研究所理事長

特別客員教員

■人類基礎理論研究部

辻 邦浩 [つじ くにひろ]——教授

1965年生。【学歴】京都大学大学院理学研究科博士後期課程修了（1994）【職歴】Kunihiro Tsuji Design 代表（1996—現在）、未来社会をデザインする会（2025年万国博を考える会）代表（2018—現在）、東京大学空間情報科学研究センター協力研究員（2018—現在）、国立民族学博物館特別客員教授（2018—現在）【学位】博士（理学）【専攻・専門】サービスデザイン、音響空間デザイン、環境デザイン、デザイン人類学【所属学会】ヒューマンインターフェイス学会

【主要業績】

2010 上海万博大阪館（Water Speaker 展示）

2008 スペイン・サラゴサ万博日本政府館（音響デザイン・Water Speaker 展示）

2007 ミラノサローネ Water Speaker 個展

2006 ミラノサローネ MODAL Speaker 個展

2002 フランス・ビエンナーレ「Biennale Internationale Design Saint-Etienne」（日本代表選出）

【受賞歴】

2016 ヒューマンインターフェイス学会研究会賞

【2020年度の活動報告】

◎各個人研究

・研究課題

次世代型展示案内システムの構築とサービス研究

・研究の目的、内容

応用可能なプラットフォームに関する研究をおこなう。

内容として

- ・運用開始初期の検証とシステム動作安定に向けての修正箇所の抽出を行い、システム動作のブラッシュアップを行う。
- ・システム動作の安定化を進めると共に、初期実装サービス各項目の体験プロセスにおける検証を行い、よりスムーズでストレスのない体験プロセスの修正を検討する。
- ・初期実装サービスに加えて、今後の新しい機能や使いやすさをユニバーサルデザインの観点から検討する。
- ・電子ガイド（館内）→ビデオテーク（館内）→家庭内学習（PCなど）→電子ガイド（館内）の学習サイクルの教育工学とサービスに関する研究を行う。
- ・次世代型展示案内システムの館外エリア・施設連携に向けてのプラットフォーム化に関する研究を行う。

・成果

次世代型展示案内システムの初期実装サービスを検証する中で、実装されていなかった、視覚障害者や高齢者向けのインクルーシブなユニバーサルデザイン観点からのサービスを検討した。

このことにより全ての利用者に、より使いやすい機能を実現するためにパナソニックと共同で研究を進め、ユニバーサルミュージアム実現のための次世代展示案内システムと連携する次世代小型モビリティでのスムーズな館内移動案内や、館外エリア連携サービスを実現するための共同研究を具体的な実証も含めての推進体制を構築した。

■人類基礎理論研究部・日本財団助成手話言語学研究部門（附置）

武居 渡 [たけい わたる]————— 教授

1971年生【学歴】筑波大学第二学群人間学類卒（1994）、筑波大学大学院心身障害学研究科中途退学（1999）【職歴】金沢大学教育学部講師（1999）、金沢大学教育学部助教授（2002）、金沢大学教育学部准教授（2007）、金沢大学人間社会研究域学校教育系准教授（2008）、金沢大学人間社会研究域学校教育系（2014-現在）、国立民族学博物館特別客員教授（2017-現在）【学位】博士（心身障害学）（筑波大学2004年）【専攻・専門】発達心理学・聴覚障害心理学【所属学会】日本特殊教育学会、日本発達心理学会、日本手話学会、日本コミュニケーション障害学会、日本聴覚言語障害学会

【主要業績】

[論文]

武居 渡

- 2016 「聴覚障害児教育をめぐる環境の変化とろう学校の課題（特集 特別支援学校における現状と教育要求）」『障害者問題研究』44(1)：26-31。
- 2012 「言語を作り出す力——ホームサイン研究・手話研究を通じて見えてくるもの」『ENERGEIA』37：1-15。
- 2008 「手話研究の現状と展望——手話研究が言語獲得研究に貢献できること」『認知科学』15(2)：289-301。

【受賞歴】

- 2010 博報児童教育振興会第4回ことばと教育 研究助成事業 優秀賞
- 2002 日本発達心理学会第11回論文賞
- 2001 日本特殊教育学会研究奨励賞

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

高等教育機関・学術機関における学術手話通訳者養成のしくみの研究

・研究の目的、内容

本研究は、学会や大学の講義など高度な専門的知識を日本語から手話、または手話から日本語へと通訳できる手話通訳者の養成プログラムを開発し、実施することを通してそのプログラムの妥当性を検証するものである。その中でも、通訳者の手話能力を客観的に測定するテストは現在我が国に存在していない。そこで、昨年度に引き続き今年度も、学術手話通訳者養成のスクリーニングや手話学習者の手話能力を客観的に測定できる方法を開発するための基礎資料を得ることを目的とし、手話語彙力を評価する日本手話版 WFT 課題 (Word Fluency Test: 語彙流暢性課題) と日本手話文の模倣課題を実施し、その関連性について検討を行った。

・成果

昨年度実施した日本手話を日常的に使用している成人ろう者7名に加え、新たに手話学習者7名に対して、研究実施者が作成した日本手話版 WFT 課題を実施した。カテゴリー流暢性課題が5問と音韻流暢性課題5問を7名の被験者に実施し、各問1分間に表出できた手話語彙数をカウントし、その合計をその被験者の語彙力得点とした。またあわせて、様々な文法マーカを含む10から16語からなる日本手話文を提示し、被験者に即時模倣をさせ、刺激文と模倣した文の比較を行った。また、WFT 課題と日本手話文即時模倣課題の成績を比較し、手話力を測定する課題としての妥当性について検証を行った。その結果、WFT 課題と日本手話即時模倣課題の成績間でやや相関があると判断された。ただし、被験者の年齢が40を超えると、記憶や処理速度が下がってくるのが考えられ、これらの成績には手話力のみならず、認知能力の影響についても今後検証していくことが課題として挙げられた。

本研究で得られた研究成果について、2020年9月に行われた日本特殊教育学会第58回大会で発表を行った。また2020年7月にオーストラリア・ブリスベンで行われる予定であった International Congress on the Education of the Deaf が1年延期となり、2021年7月にオンラインで開催されることとなり、そこで研究成果について発表を行う予定である。

なお、本研究は、科学研究費(基盤研究(C))「聴覚障害児の手話力を評価する総合的アセスメントパッケージの開発」(研究代表者:武居 渡)の助成を得て行われた。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年9月19~10月20日 「日本手話版語彙流暢性検査の開発(3)——欧米の手話語彙流暢性課題の結果との比較から」日本特殊教育学会第58回大会、オンライン開催

■人類基礎理論研究部

亀井哲也 [かめい てつや] ————— 教授

1964年生。【学歴】金沢大学文学部卒業(1988)、埼玉大学大学院文化科学研究科修了(1992)【職歴】野外民族博物館リトルワールド学芸研究員(1993)、中京大学現代社会学部教授(2013)【学位】文化科学修士(埼玉大学大学院文化科学研究科 1992)【専攻・専門】文化人類学、【所属学会】日本文化人類学会、日本アフリカ学会、民族芸術学会、日本展示学会

【主要業績】

[論文]

亀井哲也

2020 「ンデベレの娘たち——南アフリカの成女儀礼と恋愛、そして……」和崎春日編『響き合うフィールド、躍動する世界』pp.552-569, 東京:刀水書房。

2018 「ンデベレ壁絵文化の海外発信」『民族芸術』34:163-170。

2016 「アフリカの博物館——南アフリカの野外博物館を中心に」稲村哲也編『新訂 博物館展示論(放送大学教材)』pp.270-287, 東京:放送大学教育振興会。

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アフリカにおける文化資源と民族意識に関する文化人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、国民国家、民族、地域共同体などさまざまな集団の「われわれ」意識醸成のために、そのアイデンティティを育み、文化資源とされる諸文化事象を選択・表象している様相を、アフリカの事例を通じて文化人類学的に明らかにしようとするものである。具体的には、壁絵をはじめとする装飾文化を自らのシンボルとしている南アフリカ共和国のンデベレ社会を研究対象とする。ンデベレが政治経済的状况のもとアイデンティティを醸成する過程を文化運動として動的にとらえ、ンデベレの物質文化のもつ力を、近年議論が活発な物質文化研究がもたらしたアプローチから検証し、新たな視座を見いだそうとする目的をもつ。

・成果

新型コロナウイルス感染症の影響で、計画していた南アフリカのンデベレでのフィールドワークは実施できなかった。そのため、これまで本務校の中京大学の学部教育カリキュラムの中で実施してきたンデベレ文化に関する学びと、そのアウトプットとしての大規模なンデベレ文化の常設展示を有する野外民族博物館リトルワールドに対する成果還元に関して、「大学教育と博物館展示の協働——ンデベレ文化を教材として」という論稿をまとめ、中京大学先端共同研究機構文化科学研究所博物館研究プロジェクト（編）『中京大学文化科学研究叢書22 大学教育と博物館』として、2021年3月30日に出版した。また同書においては「大学博物館の役割——Beyond 'Town and Gown」という論稿を執筆し、南アフリカのヨハネスブルグにあるウィットウォーターズランド大学付属美術博物館の事例を取り上げている。

外部資金に関しては、2020年10月に採択された国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））「人類学における芸術研究の刷新——イメージ人類学の創成に向けた国際共同研究基盤の強化」の研究分担者となった。本科研究ではンデベレの事例からイメージが生み出す社会関係の研究を進めるが、それは本研究の主眼とする文化資源と民族意識の研究に合致するものである。

◎出版物による業績

[論文]

亀井哲也

2021 「大学教育と博物館展示の協働——ンデベレ文化を教材として」中京大学先端共同研究機構文化科学研究所博物館研究プロジェクト編『大学教育と博物館』pp.21-67, 名古屋：ユニテ。

2021 「大学博物館の役割——Beyond 'Town and Gown」中京大学先端共同研究機構文化科学研究所博物館研究プロジェクト編『大学教育と博物館』pp.131-162, 名古屋：ユニテ。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・広報・社会連携活動

2021年3月7日 「世界をつなぐオンラインチャレンジ 1920 アントワープオリンピック物語」長久手市国際交流協会

2021年3月21日 「公開座談会“おそれ”をめぐる人類学 アフリカの“おそれ”」野外民族博物館リトルワールド

・展示

2020年9月29日～2021年1月19日 中京大学スポーツミュージアム特別企画展「多様性に向けたオリンピックの歩み」中京大学スポーツミュージアム

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費・国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））「人類学における芸術研究の刷新——イメージ人類学の創成に向けた国際共同研究基盤の強化」（研究代表者：吉田憲司）研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

文化遺産国際協力コンソーシアムアフリカ分科会委員、野外民族博物館リトルワールド学芸顧問、中京大学スポーツミュージアムアドバイザー

■学術資源研究開発センター

大坂 拓 [おおさか たく] 准教授

1983年生。【学歴】 明治大学文学部史学地理学科考古学専攻卒業（2006）、明治大学大学院文学研究科博士前期課程修了（2008）、明治大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学（2011）【職歴】 宮城県教育庁文化財保護課（2011）、北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究職員（2015）【学位】 修士（考古学）（明治大学大学院 2008）【専攻・専門】 考古学【所属学会】 日本考古学協会、考古学研究会、北海道考古学会

【主要業績】

[論文]

大坂 拓

- 2020 渡島半島のアイヌ社会と民具資料収集者の視野——旧開拓使函館支庁管轄地域を中心として『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』5：47-80。
- 2020 北海道アイヌの葬送用広紐に関する基礎的検討——製作技術の地域差と日高東部地域における東方系・西方系出自集団との関係『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』5：23-46。
- 2018 「アイヌ民族の編袋——地域差と年代差、及び「土産物」・「伝統工芸品」としての継承」4：25-60。

【受賞歴】

- 2015 北海道考古学会奨励賞

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

近現代におけるアイヌの物質文化の変容に関する研究

・研究の目的、内容

日本国内各地の博物館等に所蔵されるアイヌ民具資料について、収集された品目の傾向を地域・年代毎に検討することにより、急速な和人の流入の中で生じた文化変容の進展過程に内在した地域的変異を明らかにできるとの見通しを持っている。

本年度は、伝統的に高い価値付けがなされ、富の象徴として蓄積されていた漆器に着目し、背景情報を伴う資料群の集成と分類を行い、各地域の資料群の組成から資料群の形成過程、流通ルートの変遷を明らかにすることを目指した。しかし、新型コロナウイルス感染症の拡大により、北海道全域を対象とする調査の実施が困難となったため、対象を北海道南部後志地域に限定し、品目を限定せずに民具資料を集成し、品目の通時的な傾向を明らかにすることとした。

・成果

後志地域については、前年度までに各地に収蔵されている民具資料の調査がほぼ終了していた。本年度は補足的な調査に加え、資料のバックデータを補うための文献調査を実施したほか、民具資料収集時のアイヌ民族の生業を復元するため、北海道立文書館が所蔵する開拓使札幌本庁及び札幌県、北海道庁の公文書を渉猟した。

その結果、第一に、収集された民具資料の大部分が kikeuspasuy（有翼酒箸）、inaw（木幣）、ciros（花矢）等の特定の品目に著しい偏りを示すことが確かめられた。この点は、後志地方のアイヌ民族が近世後半期以来の和人の流入により、和人社会から「同化」の進行度が比較的高いものと見なされていたため、1930年代に名取武光らにより全道的に網羅的な収集が試みられた品目を除けば、積極的な資料収集の対象とされていなかったことに起因するものと考えられる。第二に、生業関係資料は、弓矢猟を示す矢筒、海獣狩猟を示す銛先が含まれていたが、公文書の調査からは、この地域では明治期に毒矢猟が禁止され、大正期には狩猟具の中心は銃銃に移り変わっていたこと、生業の中心は一貫して鯨漁であったことが明らかになった。この齟齬については、和人の技術を大きく取り入れた銃銃や鯨漁は研究者の埒外にあったことに由来するものと判断された。

以上の成果は、研究論文「後志地方の近代アイヌ社会と民具資料収集の射程——旧開拓使札幌本庁管下後志国9郡を対象として」（『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』第6号）としてまとめた。

関連資料の調査にあたっては、科学研究費（若手研究）（18K12558）「考古学的分析手法を導入した博物館収蔵アイヌ民具資料の基礎的研究」を使用した。

◎出版物による業績

[論文]

大坂 拓

2021 「後志地方の近代アイヌ社会と民具資料収集の射程——旧開拓使札幌本庁管下後志国9郡を対象として」『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』6: 1-49。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年10月14日 「製作技術から探るアイヌの編物——刀帯と荷縄」釧路市立博物館企画展「織る×編む シタ イキ・オシケ・テセ——釧路地方に伝わるアイヌ女性の手仕事」関連講演会

2020年10月17日 「岩宇地域のアイヌ文化誌」木田金次郎美術館企画展「アイヌ語地名と木田金次郎」関連行事

◎調査活動

・国内調査

2020年6月3日 北海道厚真町教育委員会所蔵アイヌ民具資料調査

2020年7月7～8日 北海道根室市歴史と自然の資料館所蔵アイヌ民具資料調査

2020年7月19日 北海道浦幌町立博物館所蔵アイヌ民具資料調査

2020年8月28日 小樽市総合博物館所蔵文書史料調査

外国人研究員

RAVINDRAN, Gopalan [ラヴィンドラン ゴーパーラン]——教授

任期：2020年1月31日～2020年4月15日

研究課題：民族音楽学におけるマイノリティ研究の再想像

【学歴・学位】 パッチャイヤッパ大学植物学部 (1980)、マドラス大学ジャーナリズム・コミュニケーション学部修士課程終了 (1982)、マドラス大学ジャーナリズム・コミュニケーション学部哲学修士課程終了 (1984)、マドラス大学ジャーナリズム・コミュニケーション学部博士課程終了 (1991) **【職歴】** マドラス大学ジャーナリズム・コミュニケーション学部講師 (1984)、名古屋大学大学院国際開発研究科外国人客員研究員 (1993)、マノンマニウム・スندگانラナル大学コミュニケーション学部准教授 (1995)、マレーシア大学コミュニケーション学部講師 (2002)、マドラス大学ジャーナリズム・コミュニケーション学部教授 (2008)、マドラス大学ジャーナリズム・コミュニケーション学部学部長 (2008) **【学位】** 博士 (マドラス大学ジャーナリズム・コミュニケーション学部 1991)、哲学修士 (マドラス大学ジャーナリズム・コミュニケーション学部 1984)、修士 (マドラス大学ジャーナリズム・コミュニケーション学部 1982) **【専攻・専門】** コミュニケーション学

【主要業績】

[論文]

RAVINDRAN, G.

2018 Human Rights and Contemporary Indian Journalism: Towards a “Journalism for People.” *Human Rights Education in Asia-Pacific* 8(1): 181-196.

2017 Philosophical and Anthropological Explorations of Digital/New Media Materialities, *Mizoram University Journal of Humanities and Social Sciences* 3(2): 1-7.

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

民族音楽学におけるマイノリティ研究の再想像

・研究の目的、内容

ゴーパーラン・ラヴィンドラン教授は、「民衆のためのジャーナリズム」journalism for the peopleの取組みの一つとして、ダリット（不可触民）の伝統的な太鼓をもとに創られた新しい音楽ジャンル（タッパータム）の調査研究を進めるとともに、この演奏を学生パフォーマンスグループの活動に取り入れ、カーストによるイ

ンド社会の分断を乗り越えるための挑戦的な活動を継続している。民博での招聘期間中、比較研究を目的として、大阪の被差別部落で結成された和太鼓集団の活動の調査を行った。両者は、偏見や差別の対象となった楽器を戦略的に用いて創られた新しい表現形式である点や、解放に向けた政治運動と一定の距離を保ちながらも、音楽を媒介とした新しい社会運動の形を模索している点などで共通している。ラヴィンドラン教授は両者の類似点と差異を、コミュニケーション学の観点から検討し、その成果を延期となった特別研究の国際シンポジウムに反映させる計画である。なお、新型コロナウイルス感染症の流行にともなうインドのロックダウンにより、当初の予定通りに帰国することができず、2020年6月22日まで日本に滞在した。

・成果

同教授は、民博特別研究「パフォーミング・アーツと積極的共生」の国際研究協力者として、2020年3月開催の国際シンポジウム Performing Arts and Conviviality で研究発表を行う予定であった。民博滞在中は、受入教員および特別研究代表者の寺田吉孝教授、特別研究の国際研究協力者であるサミュエル・アラウジョ教授とともに、特別研究プロジェクトのテーマや研究の進め方について議論を重ね、特に太鼓音楽と共生というテーマにかかわるセッションの組織に大きく貢献した。延期された国際シンポジウムが実現した際には、再度コーディネーターとして中心的な役割を果たすことが期待される。

阮 雲星 [ゲン ウンセイ] ————— 教授

任期：2021年2月1日～2021年11月20日

研究課題：AI時代の文化遺産とコミュニティ——日本と中国における文化遺産の比較研究

【学歴】 福建師範大学政治教育学部卒（1984）、北京大学哲学学部（西洋哲学史・助教研修班）准修士課程修了（1986）、京都大学大学院法学研究科修士課程修了（1995）、京都大学大学院法学研究科博士課程終了（2004）【職歴】 福建師範大学政治教育学部助教（1984）、平安女学院大学国際コミュニケーション学科非常勤講師（2000）、天理大学国際文化学部非常勤講師（2002）、浙江大学公共管理学院政治学学部准教授（2004）、国立民族学博物館外国人研究員（2010）、浙江大学政治学学部/社会学学部教授（2010）【学位】 法学博士（京都大学大学院法学研究科 2004）【専攻・専門】 文化人類学（政治・文化遺産・サイボーグ人類学）

【主要業績】

[単著]

Ruan, Y.

2005 *Chinese Lineage and Political Culture: A Political-Anthropology Monograph of Contemporary Yixu Village in Eastern Fujian, 1930-2000.* (in Japanese) Tokyo: Sobunsha.

[編著]

RUAN, Y. and M. Han (eds.)

2011 *Political anthropology: Fieldwork and writing culture in Asia.* (in Chinese) Hangzhou: Zhejiang University Press.

[論文]

RUAN, Y. and G. Yingce

2005 *Cyborg Anthropology: The Metaphor of Cybernetic Organism and Intellectual Knowledge Production in the Information Age.* (in Chinese) *Open Times* 289: 162-175.

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

AI時代の文化遺産とコミュニティ——日本と中国における文化遺産の比較研究

・研究の目的、内容

AIやゲノム編集などが象徴するデジタル技術は、人間の社会と文化を根底的に再構造化しつつある。本研究は、目下の民博特別研究の問題意識と共有し、人類学的文化遺産の担い手の価値観を重視する当代の文化遺産論を批判的に継承しながら、今日の科学技術社会化の新現象に潜むサイバネチクス原理を洞察し、ポスト・ヒューマリティを視野にパラダイムシフトをも探究するサイボーク人類学的な研究の試みを目的とする。東アジアにおけるデジタル文化遺産について事例研究をおこない、文化遺産論のパラダイムシフト構想をも理論的

に検証する。

具体的に言えば、日中のデジタル博物館（「民博フォーラム型情報ミュージアム」と「杭州工芸美術博物館のデジタル博物館」）実践及びデジタルコミュニティの新現象（「阿寒アイヌコタン」と「浙江省景寧シヨオ族村」）をフィールドワークして、その実態を明らかにしながら、それぞれの事例の論理をも比較検証する。さらに、サイバーク人類学的な理論構想及びその省察的な知的生産における「本質的緊張」の同定をも検討する。

SHI, Yingxi [シエイシン] ————— 准教授

任期：2020年4月1日～2020年9月1日

研究課題：法会計制度移転における文化問題

【学歴】西安建築科技大学（中国）機械工学部（1990）、大阪府立大学社会福祉学部研究生（1997）、大阪大学国際公共政策研究科修士課程修了（1999）、大阪大学国際公共政策研究科博士課程修了（2002）【職歴】西安建築科技大学（中国）機械工学部助手（1990）、大連民族大学（中国）経済管理学部講師（2003）、大連民族大学経済管理学部（中国）副教授（2013）【学位】博士（公共政策 2002年）【専攻・専門】公共政策

【主要業績】

[分担執筆]

師 穎新・丁穎・韓 松花

2016 「中国の医療改革」本間正明監修『医療と経済』pp.407-422, 大阪：大阪大学出版会。

[論文]

Shi, Y. and M. Fukushige

2015 Long-Run Fiscal Multiplier for Autonomous Prefectures in China. *Pacific Economic Review* 20(5): 687-695.

師 穎新・竊柄

2014 「中国風力発電産業の規模と効率性について——内モンゴル自治区を例として」(中国語)『大連民族大学学報』16(2)：122-125。

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

法会計制度移転における文化問題

・研究の目的、内容

来日から新型コロナウイルスの影響で、研究の手法を完全にオンラインに依存しながら、政策や経営に係る民博共同研究の「会計学と人類学の融合」、「聖空間の経営人類学的研究」研究レビューとフォローアップを実施した。さらに、国際シンポジウム「東アジアの非営利組織をめぐる法・会計・文化——普遍性と個性」の企画通じ、中国台湾の研究者とウェブ会議アプリなどを駆使して準備を行った。

国際シンポジウムは、当初、リアルで実施する予定であったが、新型コロナウイルスの影響でオンラインに切り替えた。さらに、実施直前に、中国でのウェブ会議アプリ使用に制限がかかったことから、急遽、当初予定の半分のパネリストでの実施となったが、全体の企画を行いえた。

また、当初予定していた、中国展示チームの展示高度化については、新型コロナウイルスの影響で実施できなかった。

・成果

2020年8月28日に国際シンポジウムを行い、「Invoiceの文化性」と題する報告が行われました。報告では、中国の付加価値税のインボイスを主な調査対象とした。中国における請求書の歴史的進展の分析を通じて、請求書の背後にある法的、会計、文化的要因の包括的な研究が行われました。EUのVATと日本の消費税請求書管理とその最新の動向と比較して、請求書関連の犯罪と非営利組織に対する請求書管理システムの影響も分析します。最後に、eコマースやブロックチェーンなどの新技術の台頭がインボイス・システムに与える可能性ある影響を分析し、世界中のほとんどの国とは異なり、中国のインボイスは取引証明書であるだけでなく、国の税務管理の重要な責任も負っていることがわかった。そのうえでインボイス管理における管理手段の強化は、一方では税務管理を強化し、他方では「不正取引」の脅威に直面している。

このように各国に導入されている付加価値税・消費税などのツールに中国の管理国家としての文化性が表れていることを明らかにした。